公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(1)

> 南九州西回り自動車道建設(出水阿久根道路)に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

> > 中郡遺跡群

(出水市野田町)

遺跡

鹿児島県

埋蔵文化財調査センター 公益財団法人鹿児島県文化振興財団 鹿 児 島 県 教 育 委 員 会

2014年3月

鹿児島県教育委員会 公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター



中郡遺跡群全景(西から)





序 文

近年増加する国事業に係る発掘調査を円滑かつ効率的に実施するため、平成25年4月1日に、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(以下「調査センター」)が発足いたしました。

当調査センターの役割は、これまで鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施してきた発掘調査のうち、国事業に係る調査を引き継ぐことと、新規の国事業に係る発掘調査を実施することであります。

この中郡遺跡群については、鹿児島県立埋蔵文化財センターが記録保存調査と一部の 整理作業を行いましたが、報告書刊行については当埋文調査センターが引き継ぎました。

中郡遺跡群では、旧石器時代から近世までの遺構や遺物が見つかっております。特に、中国から渡来した貴重な青白磁の龍首水注が見つかるなど、本県の中世史を考える上で、非常に貴重な遺跡であります。本報告書が今後の研究に資することと期待している次第です。

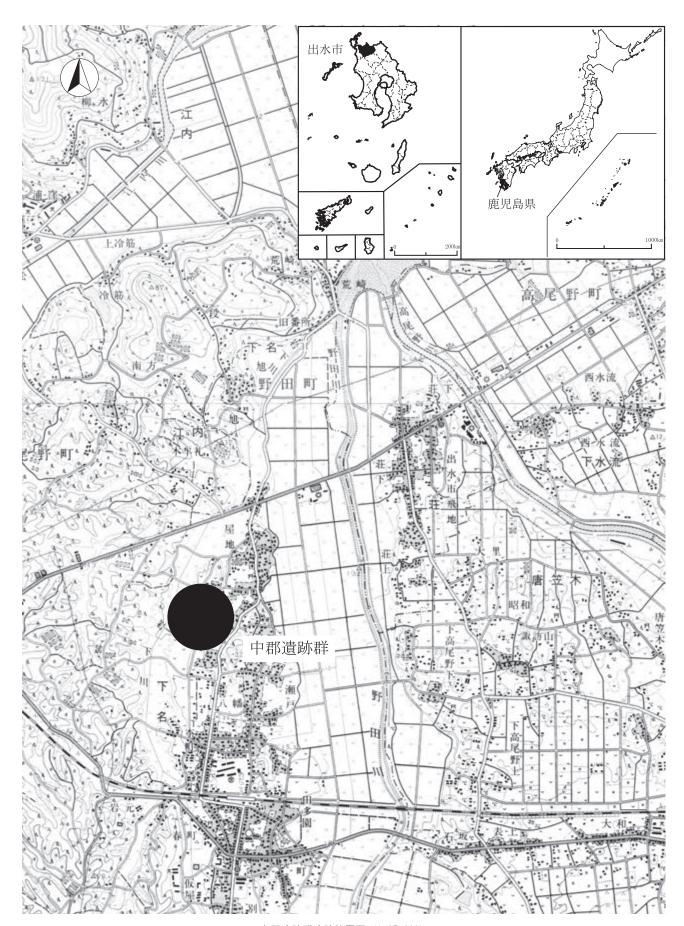
最後になりましたが、本報告書の刊行に当たり、本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所及び鹿児島県立埋蔵文化財センター並びに調査において御指導いただいた先生方、発掘作業員の方、整理作業員の方、その他関係者の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター長 冨田逸郎

報告 書 抄 録

				報:	告書	<u>抄</u>	録			
ふりがな	なかごお	りいせきく	゛ん							
書 名	中郡遺跡	群			_					
副書名	南九州西	回り自動車	互道建設(出水阿久村	退道路) に	伴う坦	蔵文化	財発掘調査報告書	事	
シリーズ名	公益財団	法人鹿児島		興財団埋福	蔵文化財調	査セン	ター発	掘調査報告書		
シリーズ番号	第1集									
編集者名	長野眞一			幸一郎	黒木梨					
編集機関					嚴文化財調				.==.	
所 在 地	⊤ 899 −	4318 鹿り	凡島県霧島	市国分上	野原縄又の) 森 2 7		TEL 0995 - 70 FAX 0995 - 70		
発行年月	2014年3									
ふりがな	1	がな 生地		- ド 遺跡番号	北緯		東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名			甲女们	退跡笛万				本調査	m²	
中郡遺跡群	いず。 出力 の 野E	LEBUR LEBUR THE SETT OF SETT	462080	48 – 1	130° 16″ 15′		32° 04″ 09′	2009.05.08 ~ 2010.03.19 2012.07.02 ~ 2012.12.21	4,810	南九州西回り自動 車道建設に伴う記 録保存調査
所収遺跡名	種別	主な	時代		 主要な遺	 t構		主要な		特記事項
	散布地	旧石器時	代	礫群1基				ナイフ形石器, チップほか	台形石器,	
	散布地	縄文時代 早期		1				石坂式土器,中 押型文土器,塞 石鏃,磨製石斧 石斧未製品,磨 石皿ほか	ノ神式土器, , 打製石斧,	
	散布地	縄文時代 前期~晩						轟式土器,沈练佐式土器,黒川		
	散布地	弥生時代 古墳時代						弥生土器,成川 式土師器,須恵		
中郡遺跡群	散布地	古代		土坑 1	基			土師器, 楠葉型 須恵器, 布目瓦		
	集落	中世		竪穴状 20 土坑 20 土坑状土 立 大堀跡 遺 杭列跡	掘立柱建物跡 5 基 竪穴建物跡 5 基 竪穴状遺構 1 基 土坑 20 基 土坑状遺構 7 基 大型土坑状遺構 3 基 堀跡 2 条 溝状遺構 12 条 杭列跡 1 条 道状遺構 1 条			土師器, 須恵器, 瓦質土器, 瓦, 白磁, 青磁, 青白磁, 青白磁龍首水注, 中国陶器, 国産陶器, 滑石製石鍋, 滑 石製品, 鞴羽口, 砥石, 鉄 製品, 木製品, 杭ほか		
	散布地	近世		帯状硬化 溝状遺構				陶磁器類,寛永	:通寶ほか	
要約	神郡遺跡群は、旧石器時代〜近世にかけての複合遺跡である。特に中世では、島津氏初代忠久の居館跡とされる「屋地の館跡」に比定される遺跡である。発掘調査では、旧石器〜近世にかけての遺構・遺物が検出された。旧石器時代は、石器製作の痕跡が認められないことから、短期間の猟場として、何度かこの地が利用されたと思われる。縄文時代は、早期を中心とする土器が認められ、主に八代海沿岸や中九州地域に分布圏を持つ中原式土器や押型文土器群で構成される。また、集石遺構や土坑、落とし穴状遺構が検出されている。弥生・古墳時代では、在地土器のほか、肥後地域の弥生終末期土器や古式土師器が出土している。古代では、土師器の甕・坏・埦が一括して埋納された土坑が出土している。また、在地系の土師器・須恵器のほかに畿内系の楠葉型黒色土器や瓦等が出土している。中世では、堀跡や掘立柱建物跡、竪穴建物跡等の遺構が検出されている。出土した貿易陶磁器の中には、青白磁の龍首水注等の稀少な資料もあり、遺構を含めて、本遺跡の性格を示す重要な成果品として注目される。また、低湿地では、杭列が検出され、木製品も多く出土している。									



中郡遺跡群遺跡位置図(1:25,000)

例 言

- 1 本書は、南九州西回り自動車道出水阿久根道路建設に伴う中郡遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県出水市野田町に所在する。
- 3 中郡遺跡群は、平成18年度に鹿児島県文化財課が実施した分布調査で発見された遺跡である。
- 4 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化 財センター(以下「埋文センター」)が実施した。
- 5 発掘調査事業は、平成 21 年度と平成 24 年度に実施し、平成 21 年度は埋文センターが実施し、平成 24 年度は民間 へ委託し、発掘調査を実施した。
- 6 整理・報告書作成事業は、平成23~24年に埋文センターで実施し、平成25年は公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 7 掲載遺物番号は通し番号であり、本文、挿図、表、図版の遺物番号は一致する。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 9 本書で用いたレベル数値は、「水準点 KBM. 3」を基準とした。「KBM. 3」の標高は H = 21.085m である。
- 10 物注記等で用いた遺跡記号は「ナカゴ」である。
- 11 本書で使用した方位は、全て世界測地系に基づく座標北である。
- 12 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。また、空中写真撮影は平成21年度調査では(有) ふじたに委託し、平成24年度調査では新和技術コンサルタント株式会社が行った。
- 13 遺構図、遺物分布図の作成及びトレースは、森幸一郎がデータ処理班及びデジタルトレース班の協力を得て行った。
- 14 出土遺物の実測・トレースは、長野眞一、寺原 徹、黒木梨絵、森が整理作業員の協力を得て行った。また、遺物 実測の一部を(株)九州文化財研究所に委託し、長野が監修した。
- 15 出土遺物の写真撮影は、埋文センターの協力を得て吉岡康弘が行った。
- 16 本報告書に係る自然科学分析は, 放射性炭素年代測定を(株) 加速器分析研究所・(株) パリノ・サーヴェイ, 樹種同定・ 種実同定を(株) パリノ・サーヴェイ, 花粉分析・植物珪酸体分析を(株) 古環境研究所に委託した。
- 17 金属器の保存処理は、中村幸一郎が整理作業員の協力を得て行った。
- 18 本書の編集は森・黒木が担当し、執筆者は以下のとおりである。
 - 第1章 長野・森
 - 第2章 長野・森
 - 第3章 第一節 1 長野
 - 2 長野・森・寺原
 - 3 黒木
 - 4 寺原・黒木
 - 5 森・寺原・黒木
 - 6 黒木
 - 第4章 (株)加速器分析研究所・(株)パリノ・サーヴェイ・(株)古環境研究所
 - 第5章 長野・黒木
- 19 出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

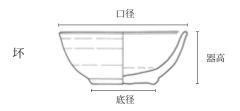
凡例

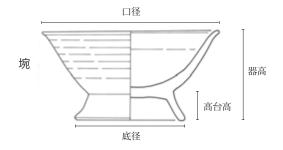
1 遺構名については、平成21年度調査と平成24年度調査成果との混同を避けるため、便宜的に新たな遺構名を付与し、掲載番号とした。下記の対照表を参照されたい。なお、図面、遺物、写真等の注記には、調査時の旧遺構名で記載されている。

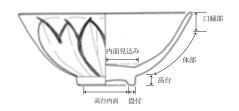
遺構名新旧対照表

	医博力剂[[[内]] 流纹							
掲載名	旧遺構名	調査年度	掲載名	旧遺構名	調査年度	掲載名	旧遺構名	調査年度
礫群	SX008	H24	土坑11号	SK006	H21	掘立柱建物跡2号	掘立柱建物1号	H21
集石1号	SS001	H21	土坑12号	SK010	H21	掘立柱建物跡3号	掘立柱建物2号	H21
集石2号	SS002	H21	土坑13号	SK011	H21	掘立柱建物跡4号	掘立柱建物3号	H21
集石3号	SS003	H21	土坑14号	SK012	H21	掘立柱建物跡5号	掘立柱建物	H21
集石4号	SS004	H21	土坑15号	SK013	H21	竪穴建物跡1号	竪穴建物1号	H21
集石5号	SS005	H21	土坑16号	SK014	H21	竪穴建物跡2号	竪穴建物2号	H21
集石6号	SS007	H21	土坑17号	土坑01	H21	竪穴建物跡3号	竪穴建物3号	H21
集石7号	集石01	H21	土坑18号	土坑02	H21	竪穴建物跡4号	竪穴建物4号	H21
集石8号	集石02	H21	土坑19号	土坑03-1	H21	竪穴建物跡5号	竪穴建物5号	H21
集石9号	SX002	H24	土坑20号	土坑04	H21	竪穴状遺構	竪穴建物6号	H21
集石10号	SX003	H24	土坑21号	土坑05	H21	堀跡1号	掘1	H21
集石11号	SX005	H24	土坑22号	土坑07	H21	堀跡2号	掘2	H21
落とし穴状遺構1号	縄文落とし穴1号	H21	土坑23号	SK001	H24	溝状遺構1号	溝1	H21
落とし穴状遺構2号	縄文落とし穴2号	H21	土坑24号	SK008	H24	溝状遺構2号	溝2	H21
落とし穴状遺構3号	縄文落とし穴3号	H21	土坑25号	SK009	H24	溝状遺構3号	溝3	H21
落とし穴状遺構4号	縄文落とし穴4号	H21	土坑26号	SK010	H24	溝状遺構4号	小溝2	H21
落とし穴状遺構5号	縄文落とし穴5号	H21	土坑27号	SK011	H24	溝状遺構5号	SD01	H24
横転内礫集中1号	SX004	H24	土坑状遺構1号	SK012	H24	溝状遺構6号	SD02	H24
横転内礫集中2号	SX009	H24	土坑状遺構2号	SK013	H24	溝状遺構7号	SD03	H24
横転内礫集中3号	SX010	H24	土坑状遺構3号	SK014	H24	溝状遺構8号	SD06	H24
土坑1号	SK001	H21	土坑状遺構4号	SK015	H24	溝状遺構9号	SD07	H24
土坑2号	SK002	H21	土坑状遺構5号	SK016	H24	溝状遺構10号	SD09	H24
土坑3号	SK002	H24	土坑状遺構6号	SK017	H24	溝状遺構11号	SD08	H24
土坑4号	SK003	H24	土坑状遺構7号	SK018	H24	溝状遺構12号	-	H21
土坑5号	SK005	H24	大型土坑状遺構1号	落ち込み2	H21	溝状遺構13号	SD04	H24
土坑6号	SK007	H24	大型土坑状遺構2号	落ち込み1	H21	溝状遺構14号	SD05	H24
土坑7号	埋納01	H21	大型土坑状遺構3号	大型土坑	H21	溝状遺構15号	SD11	H24
土坑8号	SK001	H21	柱穴跡1号	P60	H21	道状遺構	SF1	H24
土坑9号	SK002	H21	柱穴跡2号	P116	H21	杭列跡	SA001	H24
土坑10号	SK003	H21	掘立柱建物跡1号	掘立柱建物跡	H21	木材出土状況	木材出土状況	H24

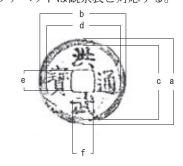
- 2 陶磁器の分類および編年は、以下の文献を参考にした。
 - 上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2, pp.55-70.
 - 小野正敏 1982「15~16 世紀の染付碗,皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2, pp.71-87.
 - 太宰府市教育委員会編 2000 『太宰府条坊跡 XV―陶磁器分類編-』太宰府市の文化財第 49 集.
 - 森田 勉 1982「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2, pp.10-33.
- 3 土師器の法量は以下のように計測した。
- 4 本書で用いる陶磁器の部位名称は以下の通りである。







5 古銭は以下の箇所を計測した。 アルファベットは観察表と対応する。



目 次

巻頭カラ	_	第3章	調査の方法と成果10
序	文	第1節	5 調査の方法10
報告書抄	録	第2節	5 層序11
例言・凡	例	第3節	5 調査の成果18
		1	旧石器時代の調査18
第1章	発掘調査の経過	2	縄文時代の調査21
第1節	調査に至るまでの経過 1	3	弥生・古墳時代の調査63
第2節	分布調査	4	古代の調査66
第3節	本調査	5	中世の調査71
第4節	調査の経過	6	近世の調査 145
第5節	整理・報告書作成業務2		観察表
第2章	遺跡の位置と環境 4	第4章	自然科学分析 164
第1節	地理的環境 4	第5章	総括······ 191
第2節	歴史的環境4	写真図版	
	插[図目次	
<i>k</i> / c 1 □			#1) 点形事件 1
第1図	周辺遺跡位置図 7		落とし穴状遺構 1~5号34
第2図	木牟礼城跡採集遺物(1) 8		横転内礫集中1・3号35
第3図	木牟礼城跡採集遺物(2) 9		縄文時代の土器 (1)37
第4図	グリッド配置図・トレンチ配置図10		縄文時代の土器 (2)38
第5図	基本層序12		縄文時代の土器 (3)40
第6図	土層断面図(1)12		縄文時代の土器 (4)
第7図	土層断面図(2)13		縄文時代の土器 (5)42
第8図	土層断面図(3)14		縄文時代の土器 (6)
第 9 図	土層断面図(4)15		縄文時代の土器 (7)45
第 10 図	土層断面図 (5)16		縄文時代の土器 (8)46
第 11 図	土層断面図 (6)17		縄文時代遺物分布図(A~E-22~28 区周辺) ·····47
第 12 図	旧石器時代遺構配置図・遺物分布図18		旧石器時代の石器47
第 13 図	礫群18		縄文時代の石器 (1)48
第 14 図	旧石器時代出土遺物20		縄文時代の石器 (2)49
第 15 図	縄文時代遺構配置図 (C~E-14~16区)······21	第 42 図	縄文時代の石器 (3)50
第 16 図	縄文時代遺構配置図 (B~E-23~28区)······22	第 43 図	縄文時代の石器 (4)51
第 17 図	集石 10 号23		縄文時代の石器 (5)52
第 18 図	集石 9 号 (1)24		縄文時代の石器 (6)53
第 19 図	集石 9 号 (2)25		縄文時代の石器 (7)54
第 20 図	集石1号・4号26		縄文時代の石器 (8)55
第 21 図	集石 2 号27		縄文時代の石器 (9)56
第 22 図	集石 3 号・6 号・11 号28	第 49 図	縄文時代の石器 (10)57
第 23 図	集石 7号29	第 50 図	縄文時代の石器 (11)58
第 24 図	集石 5 号・8 号30	第 51 図	縄文時代の石器 (12)59
第 25 図	土坑 3 号・ 2 号30	第 52 図	縄文時代の石器 (13)60
第 26 図	土坑1・4・5号32	第 53 図	縄文時代の石器 (14)61
第 27 図	土坑 6 号及び出土遺物33	第 54 図	弥生・古墳時代の遺物63

第 55 図	古墳時代の遺物 (1)	.64	第102図	木材出土状況	118
第 56 図	古墳時代の遺物 (2)	.65	第103図	低湿地 出土木製品 (1)	120
第 57 図	古代遺構配置図	.66	第 104 図	低湿地 出土木製品 (2)	121
第 58 図	土坑7号・埋納土器	.67	第105図	低湿地 出土木製品 (3)	122
第 59 図	古代の遺物 (1)	-69	第 106 図	D·E-4·5区出土遺物 (1)	124
第 60 図	古代の遺物 (2)	.70	第 107 図	D·E-4·5区出土遺物 (2)	125
第 61 図	D・E-4・5区遺構配置図	.72	第108図	D·E-4·5区出土遺物 (3)	126
第 62 図	D・E-4・5区出土遺物	.72	第 109 図	D·E-4·5区出土遺物 (4)	127
第 63 図	掘立柱建物跡 1 号	.73	第110図	D·E-4·5区出土遺物 (5)	128
第 64 図	土坑8・10・11号	.73	第 111 図	D·E-4·5区出土遺物 (6)	129
第 65 図	土坑 9 号及び出土遺物	.74	第 112 図	D·E-4·5区出土遺物 (7)	130
第 66 図	土坑 15・16 号及び出土遺物	.75	第 113 図	D·E-4·5区出土遺物 (8)	131
第 67 図	土坑 12・13・14 号	.76	第 114 図	B~E-11~17 区出土遺物 (1)········	131
第 68 図	竪穴建物跡1号及び出土遺物	.78	第 115 図	B~E-11~17区出土遺物 (2)········	132
第 69 図	C~E-12~16区遺構配置図 ··············	.79	第116図	B~E-11~17区出土遺物 (3)········	133
第 70 図	竪穴建物跡 2 号及び出土遺物	·81	第 117 図	B~E-11~17 区出土遺物 (4)········	134
第 71 図	竪穴建物跡 3 号	·82	第 118 図	B~E-11~17区出土遺物 (5)········	135
第 72 図	竪穴建物跡 3 号出土遺物	.83	第119図	C~E-18~25 区出土遺物 (1)········	137
第 73 図	竪穴建物跡 4 号及び出土遺物	.84	第 120 図	C~E-18~25 区出土遺物 (2)········	138
第 74 図	竪穴建物跡 5 号及び出土遺物	·85	第 121 図	C~E-18~25 区出土遺物 (3)········	139
第 75 図	竪穴状遺構及び出土遺物	-86	第 122 図	C~E-18~25 区出土遺物 (4)········	140
第 76 図	掘立柱建物跡4・3号	·87	第 123 図	C~E-18~25区出土遺物 (5)········	142
第 77 図	掘立柱建物跡2・5号及び出土遺物	-88	第 124 図	B ⋅ C − 26 ~ 28 区出土遺物	143
第 78 図	中世の柱穴跡位置図	-89	第 125 図	その他出土遺物	143
第 79 図	柱穴跡1・2号及び出土遺物	-89	第126図	鉄製品	144
第 80 図	土坑 19・18・17・20 号及び出土遺物	·91	第 127 図	近世出土遺物 (1)	145
第 81 図	土坑 22・21 号及び出土遺物	-92	第 128 図	近世出土遺物 (2)	146
第 82 図	大型土坑状遺構 1 ・ 2 号及び出土遺物	.93	第129図	年代測定結果	165
第 83 図	大型土坑状遺構 3 号及び出土遺物	.94	第130図	年代測定結果	167
第 84 図	堀跡 1 号土層断面図	-96	第131図	樹種同定 木材 (1)	170
第 85 図	堀跡1号出土遺物	.97	第132図	樹種同定 木材 (2)	171
第 86 図	堀跡2号土層断面図	-98	第133図	種実遺体	174
第 87 図	堀跡2号出土遺物(1)	-99	第134図	D-21 区における花粉ダイヤグラム ·······	178
第 88 図	堀跡2号出土遺物 (2)	100	第 135 図	D-21区における花粉分類解析ダイヤグラム·····	178
第 89 図	溝状遺構1・2号及び出土遺物	102	第136図	C - 23 区における花粉ダイヤグラム ·······	179
第 90 図	B∼E-22∼25区遺構配置図 ··········	105	第137図	中郡遺跡群における植生・環境・農耕	179
第 91 図	土坑 23 ~ 27 号	107	第138図	中郡遺跡群の花粉・寄生虫卵	180
第 92 図	溝 5 · 6 · 8 号および出土遺物	108	第 139 図	D-21 区における植物珪酸体分析結果	184
第 93 図	溝7・9・13・15 号及び出土遺物	109	第 140 図	C - 23 区における植物珪酸体分析結果	184
第 94 図	溝状遺構断面図	110	第141図	中郡遺跡群の植物珪酸体 (プラント・オパール)・・・・・	185
第 95 図	低湿地遺構配置図	111	第 142 図	中郡遺跡群の種実 (1)	189
第 96 図	杭列跡		第 143 図	中郡遺跡群の種実 (2)	
第 97 図	杭列跡出土木製品 (1)		第 144 図	中郡遺跡群と堀跡との関係	
第 98 図	杭列跡出土木製品 (2)			屋地屋形略図との対応関係	
第 99 図	土坑状遺構 1 号				
第 100 図	土坑状遺構 2 号及び出土木製品				

第 101 図 土坑状遺構 $3 \sim 7$ 号 … 117

表 目 次

第 1	表 周辺遺跡地名	第 17 表	中世の遺物観察表 (5) 162
第 2	表 旧石器時代の遺物観察表 147	第 18 表	中世の遺物観察表 (6) 162
第 3	表 縄文時代の遺物観察表 147	第 19 表	中世の遺物観察表 (7) 163
第 4	表 弥生・古墳時代の遺物観察表 149	第20表	中世の遺物観察表 (8) 163
第 5	表 古代の遺構内出土遺物観察表 149	第21表	近世の遺物観察表 163
第 6	表 古代の遺物観察表	第 22 表	放射性炭素年代測定結果 (1) 164
第 7	表 中世の遺構内出土遺物観察表(1) 150	第23表	放射性炭素年代測定結果 (2) 165
第 8	表 中世の遺構内出土遺物観察表 (2) 152	第24表	放射性炭素年代測定結果 166
第 9	表 中世の遺構内出土遺物観察表 (3) 152	第 25 表	樹種同定結果 · · · · · 167
第 10	表 中世の遺構内出土遺物観察表 (4) 152	第 26 表	種実同定結果 (1) 168
第 11	表 中世の遺構内出土遺物観察表 (5) 152	第 27 表	種実同定結果 (2) 169
第 12	表 中世の遺構内出土遺物観察表 (6) 153	第28表	中郡遺跡群における花粉分析結果 177
第 13	表 中世の遺物観察表 (1) 153	第29表	中郡遺跡群における植物珪酸体分析結果 … 183
第 14	表 中世の遺物観察表 (2) 154	第30表	中郡遺跡群における種実同定結果 186
第 15	表 中世の遺物観察表 (3) 157	第31表	中郡遺跡群出土オオムギ炭化果実の計測値 187
第 16	表 中世の遺物観察表 (4) 162		
	図 版	目 次	
図版1	中郡遺跡群遠景	図版18 道	状遺構,C−22区谷状地形,WI層上面横転の様子
図版2	土層堆積状況,VI層遺物出土状況,礫群	図版19 低	湿地近景,調査区近景
図版3	集石10・9号検出状況, 集石10号掘り込み, 集石9号掘り込み,	図版20 低	湿地の調査状況
	集石9号と横転	図版21 杭	列跡,杭出土状況
図版4	集石1号,集石2号,集石6号,集石11号,土坑3号,土坑2号	図版22 土	坑状遺構2号,土坑状遺構2号·1号,自然遺物出土状況,土
図版5	土坑4号, 土坑6号, 土坑5号, 落とし穴状遺構1号, 落とし穴	坑	状遺構6・7号, 竹を用いた遺構, 木製椀出土状況
	状遺構2号, 落とし穴状遺構3号, 落とし穴状遺構4号	図版23 旧	石器・縄文時代の遺物
図版6	横転内礫集中、谷地形の基盤礫、調査終了	図版24 縄	文時代の遺物 (1)
図版7	調査区と周辺地形,土坑7号	図版25 縄	文時代の遺物 (2)
図版8	中世の造成,掘立柱建物跡1号,土坑10号,土坑9号	図版26 縄	文時代の遺物 (3)
図版9	土坑 12 · 13 · 14 号,土坑 9 号 · 8 号,土坑 15 号土師器出土状况,	図版27 弥	生・古墳時代,古代の遺物
	調査風景,C~E-12~16区近景	図版28 古	代・中世の遺物
図版10	C~E−12~16区中世の遺構,C・D−15・16区中世遺構検出状	図版29 中	世の遺物 (1)
	況, 竪穴建物跡1号	図版30 中	世の遺物 (2)
図版11	竪穴建物跡2号・3号	図版31 中	世の遺物 (3)
図版12	竪穴建物跡4号・5号	図版32 中	世の遺物 (4)
図版13	竪穴状遺構, 中世の調査状況, 掘立柱建物跡3号, 掘立柱建物跡	図版33 中	世の遺物 (5)
	2号, 土坑17号, 土坑22号	図版34 中	世・近世の遺物
図版14	大型土坑状遺構2号,大型土坑状遺構1号,大型土坑状遺構3号,		
	堀跡1号, 堀跡2号, 溝状遺構1号, 溝状遺構3号		
図版15	土坑23号, 土坑26号, 土坑24号, 土坑27号, 土坑28号		
図版16	溝状遺構13号・7号, 溝状遺構7号埋土堆積状況		

図版17 溝状遺構5号・6号・8号・9号・10号・11号

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所(以下, 「鹿児島国道事務所」)は、「南九州西回り自動車道出水 阿久根道路建設」の施工計画に基づき、事業区内におけ る埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課 (以下,「県文化財課」)に照合した。

これを受けて、県文化財課は平成18年度に阿久根~野田IC間の分布調査を実施し、中郡遺跡群等6遺跡の存在を確認した。

この分布調査の結果を受けて, 鹿児島国道事務所, 県文化財課, 鹿児島県立埋蔵文化財センター(以下, 「埋文センター」) で協議を行い, 埋蔵文化財の保護と事業推進を図ることとなり, 中郡遺跡群の発掘調査を実施することとした。

本遺跡の調査対象面積は21,000㎡であるが、用地取得等の関係から平成21年度に16,100㎡、平成24年度に4810㎡を調査をすることとした。

平成21年度と平成24年度の本調査は、埋文センターが実施した。平成24年度の本調査では、作業の効率化等を目的として、「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査(民間委託)実施要項」に基づき、新和技術コンサルタント株式会社へ発掘業務委託を行っている。

各年度の本調査期間は、平成 21 年 5 月 8 日~平成 22 年 3 月 19 日 (179 日)、平成 24 年 7 月 2 日~ 12 月 21 日 (95 日) である。

報告書作成作業は,平成23年度~平成25年度に実施した。平成23年度・平成24年度は,埋文センターが実施した。平成25年度は,県文化財課から委託を受けた公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(以下,「埋文調査センター」)が実施した。

第2節 分布調査

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

課 長 中尾 理

主任文化財主事兼

埋蔵文化財係長 青崎 和憲

調 査 担 当 鹿児島県教育庁文化財課

文 化 財 主 事 堂込 秀人

鹿児島県立埋蔵文化財センター

主任文化財主事 宮田 栄二

立 会 者 九州地方整備局鹿児島国道事務所

調査課計画係 祝迫 龍一

第3節 本調査

本調査は平成21年5月8日~平成22年3月19日と、 平成24年7月2日~12月21日の期間に実施した。調 査組織については、以下のとおりである。

調査体制

平成21年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局

鹿児島国道事務所

調 査 主 体 鹿児島県教育委員会

調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 山下 吉美 調査企画者 次長兼総務課長 斉藤 守重 次長兼南の縄文調査室長 青崎 和憲 調査第二課長 彌榮 久志

主任文化財主事兼

調査第二課第二調査係長 冨田 逸郎

調 査 担 当 文 化 財 主 事 中原 一成

 文化財主事
 富山 孝一

 文化財調査員
 花田 寛典

調査事務総務係長 紙屋伸一

主 査 鳥越 寛晴

調 査 指 導 鹿児島国際大学短期大学部

教 授 三木 靖

黎明館

主任学芸員兼学芸調査係長 栗林 文夫

平成 24 年度

調查企画者

事業主体 国土交通省九州地方整備局

鹿児島国道事務所

調 査 主 体 鹿児島県教育委員会

調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長兼総務課長

所 長 寺田 仁志

次長兼南の縄文調査室長 井ノ上秀文

調查第二課長 富田 逸郎

新小田 穣

主任文化財主事兼

調査第二課第二調査係長 鶴田 靜彦

 調査担当者
 文 化 財 研 究 員
 森 幸一郎

 調 査 事 務
 主幹兼総務係長
 大園 祥子

主 事 池之上勝太

発掘調査業務委託

発掘調査の実施にあたり、埋文センターは「鹿児島県 埋蔵文化財発掘調査(民間委託)実施要項」に基づき、 新和技術コンサルタント株式会社へ発掘調査の委託を 行った。委託の内容は以下のとおりである。

委 託 先 新和技術コンサルタント株式会社

委託期間 平成24年6月8日~平成25年1月31日 委託内容 発掘調査業務1式

測量業務 1式

土工業務 1式

検 査 中間検査 平成24年10月12日

完成検査 平成 25 年 1 月 15 日 (実地検査) 平成 25 年 1 月 16 日 (成果物検査)

なお、調査委託期間中は埋文センター職員が常駐監理 して、発掘調査の統括及び指揮・運営を行った。

第4節 調査の経過

調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記載する。

平成 21 年度

- 5月 先行トレンチ調査 8日 調査開始, ガイダンス
- 6月 先行トレンチ調査
- 7月 先行トレンチ調査, C~E-13~17区包含層掘削, 土坑・竪穴建物跡・溝状遺構・柱穴の調査
- 8月 D-5・6区の包含層掘削及び遺構調査, C~E -13~17区包含層掘削及び遺構精査, 土坑・土坑墓・ 竪穴建物跡・溝状遺構・柱穴の調査

20日 臨時職員健康診断

- 9月 C~E-13~17区包含層掘削及び遺構精査,土 坑・土坑墓・竪穴建物跡・溝状遺構・柱穴の調査 2~7日 調査事務所等移設
- 10月 C~E-13~17区包含層掘削及び遺構精査,土坑・土坑墓・竪穴建物跡・溝状遺構・堀跡・柱穴・集石の調査
- 11月 C~E-13~16区・B・C-26~28区包含層掘削及び遺構精査,土坑・土坑墓・竪穴建物跡・溝状遺構・堀跡・掘立柱建物跡・柱穴・集石の調査

7日 現地説明会実施(参加者265名)

20日 阿久根市郷土会来跡

- 12月 C~E-13~16区・B・C-26~28区包含層掘削及び遺構精査, C-26区・E-18・19区・B・C-28~30区先行トレンチ調査, 土坑・土坑墓・竪穴建物跡・溝状遺構・堀跡・掘立柱建物跡・柱穴・集石の調査
- 1月 C~E-13~16区・E-18・19区・B・C-26~28区包含層掘削及び遺構精査, B・C-28~30区先行トレンチ調査, 土坑・土坑墓・竪穴建物跡・溝状遺構・堀跡・掘立柱建物跡・柱穴・集石の調査

8日 東和幸氏来跡(黎明館)

20日 中村和美文化財主事指導(県文化財課)

2月 C~E-13~16区包含層掘削及び遺構精査, B・ C-20~22区低湿地の調査, 土坑・竪穴建物跡・溝状 遺構・堀跡・掘立柱建物跡・柱穴・集石の調査 2~3日 県外調査(東京・千葉・神奈川)

3日 三木靖氏調査指導

18日 空中写真撮影

3月 B·C-20~22区低湿地の調査

10日 栗林文夫氏調査指導

19日 調査終了

平成 24 年度

6月 発掘調査業務委託入札

12日 発掘調査業務委託業務開始

27日 着工前測量

7月 C・D-23~25区の包含層掘削及び遺構精査, 溝 状遺構調査

2日 発掘調査開始,ガイダンス

20~23日 立木伐採 (D-24·25区, D·E-20·21 区)

8月 C・D-23~25区, D・E-20~22区の包含層掘削及び遺構精査,集石・溝状遺構の調査,地形測量, 土層実測,遺物点上げ

7日 文化財課長他2名現地視察

10日 救急救命講習実施

- 9月 C・D-22~24区, E-21・22区の包含層掘削及 び遺構精査, 集石・土坑の調査, 地形測量, 土層実 測, 遺物点上げ
- 10月 C-25区、C・D-23・24区の包含層掘削及び遺構精査、D・E-20~23区の低湿地の調査、溝状遺構・土坑の調査、地形測量、遺物点上げ

12日 発掘調査業務委託に係る中間検査実施23日 ツル飛来

- 11月 D・E-20・21区低湿地の調査, D-24区旧石器 時代ナイフ形石器文化期のブロックの調査, C-20~ 22区・B-23~25区の包含層掘削及び遺構精査, 土 坑・溝状遺構の調査, 地形測量
- 12月 D・E-20・21区低湿地の調査, D-24区旧石器時代ナイフ形石器文化期のブロックの調査, C・D-22区・B-25・26区の包含層掘削及び遺構精査,集石・土坑・杭列・道路状遺構の調査,地形測量,土層実測,遺物点上げ 17・19日 岩﨑新輔氏来跡(出水市教育委員会)

21日 発掘調査終了

1月15日・16日 発掘調査業務委託に係る完成検査実施

第5節 整理・報告書作成業務

1 整理・報告書作成作業の組織

本報告書作成に伴う整理・報告書作成作業は,平成23年度から平成25年度にかけて実施した。平成23年度及び平成24年度の整理作業では,主に平成21年度の本調査で出土した遺物の洗浄・注記・接合,実測作業及び図面整理等を埋文センター西回り整理作業所で実施した。

平成25年度の整理作業は、埋文センターの国事業に係 る発掘調査業務が、埋文調査センターへ移管されたこと に伴い、県文化財課からの委託を受けた埋文調査センタ ーが実施した。期間は、平成25年4月~平成26年3月 で、埋文調査センター第二整理作業所で行った。

整理・報告書作成に係る組織は、以下のとおりである。

平成23年度(平成23年8月~平成24年3月)

調 査 主 体 鹿児島県教育委員会

作業 統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所 長		寺田	仁志
作成企画	次長兼総務課長		田中	明成
	次長兼南の縄文調査室上	Ē	井ノ」	上秀文
	調査第二課長		冨田	逸郎
	主任文化財主事兼			

鶴田 静彦 調査第二課第二調査係長 作成担当 文化財主事 吉岡 康弘 総務係長 事務担当 大園 祥子 È. 岡村 信吾 査

平成 24 年度 (平成 24 年4月~平成 25 年3月)

調 査 主 体 鹿児島県教育委員会

所

作業統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

作成企画	次長兼総務課長	田中 明成
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第二課長	冨田 逸郎
	主任文化財主事兼	
	調査第二課第二調査係長	鶴田 靜彦
作成担当	調査第二課長	冨田 逸郎
	文化財研究員	森 幸一郎
	文化財調查員	黒木 梨絵
事務担当	総 務 係 長	大園 祥子
	主 査	池之上勝太

長

寺田 仁志

平成 25 年度 (平成 25 年4月~平成 26 年3月)

調 査 主 体 鹿児島県教育委員会

整 理 指 導 青山学院大学教授

作業統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター

	センター長	冨田	逸郎
作成企画	総務課長兼総務係長	山方	直幸
	調査課長	鶴田	靜彦
	調査第二係長	寺原	徹
作成担当	調査第二係長	寺原	徹
	文化財専門員	長野	眞一
	文化財調查員	黒木	梨絵
事務担当	総務課長兼総務係長	山方	直幸
	主	岡村	信吾
	事業推進員	川﨑	麻衣
企画委員	文化財専門員	森幸	至一郎

報告書作成指導委員会

平成25年11月27日(水) 調査課長ほか6名 報告書作成検討委員会

平成25年11月29日(金) センター長ほか5名

2 整理作業の経過

整理作業の経過は以下のとおりである。

平成 23 年度

- 8月 原稿執筆, 図面整理, 遺物洗浄・注記
- 9月 原稿執筆, 図面整理, 遺物選別
- 10月 原稿執筆, 図面整理, 遺物洗浄・注記
- 11月 原稿執筆, 図面整理, 遺物洗浄・注記・接合
- 12月 遺物接合, 土器実測
- 1月 遺物注記,遺物実測
- 2月 遺物注記,遺物実測,土器拓本
- 3月 遺物トレース

平成 24 年度

- 4月 遺物注記, 図面整理
- 5月 遺物洗浄・注記, 図面整理
- 6月 図面整理, データ整理
- 7月 図面整理, データ整理, 遺物分類・選別
- 8月 図面整理 データ整理 石器分類
- 9月 図面整理, データ整理, 石器分類
- 10月 遺物分類. 遺物接合
- 11月 遺物接合, 自然科学分析委託
- 12月 遺物接合, 土器実測
- 1月 土器実測・拓本,遺物洗浄
- 2月 遺物洗浄・注記・接合
- 3月 土器実測・拓本

平成 25 年度

- 4月 遺物選別、図面整理、遺構図トレース、原稿執筆
- 5月 遺物接合・復元, 図面整理, 遺構図トレース, 分 布図作成, 原稿執筆, 石器実測委託,
- 6月 遺物選別・接合・復元、図面整理、遺構図トレー ス. 原稿執筆
- 7月 遺物実測・拓本、遺構図トレース、原稿執筆 年代測定及び樹種及び種実同定分析委託
- 8月 遺物実測・拓本、遺構図トレース、原稿執筆、 樹種及び種実同定分析再委託
- 9月 遺物実測・拓本・トレース、遺構図トレース、 レイアウト, 原稿執筆
- 10月 遺物実測・トレース,遺構図トレース,レイアウ ト, 原稿執筆
- 11月 遺物実測・トレース、レイアウト、原稿執筆、観 察表作成
- 12月 遺物レイアウト, 原稿執筆, 観察表作成, 写真撮影. 入札
- 1月 校正、遺物・図面等の整理、収納作業

手塚 直樹

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

中郡遺跡群は、鹿児島県出水市野田町下名に所在し、東側を流れる野田川と西側を流れる岩下川(西目川)に挟まれた標高 20m 程の台地先端部に立地している。その野田町は出水市の西端にあり、町の中央部を東西に走る国道 504 号を境に南側を上名地区、北側を下名地区と区分される。特に上名地区は、島津藩の外城支配構造を示す、麓景観を良く残している。

現野田町は、平成18年旧出水市と旧高尾野町の合併に より、出水市に編入された市の西端の町である。出水市 は、八代海に北面する出水平野とそれを取り囲む矢筈岳 と紫尾山で構成し、東に矢筈岳、南には紫尾山の山並み が並ぶ。その矢筈岳は熊本県との県境及び伊佐市と、紫 尾山はさつま町や阿久根市と行政区画をなす。なお、矢 筈岳は標高 687m の旧期火山で、頂上は雌岳と雄岳に分 かれ、この雄岳の頂上が箭の筈のように見えることが命 名の由来とされる。九州山地に属す紫尾山は標高 1067m. 山肌に懸かる紫雲がその由来とされ、頂上には上宮権現 社が、山麓には紫尾山祁答院神輿寺と紫尾山三所権現が 建立され、別名上宮山とも呼ばれている。そして、矢筈 岳には輝石安山岩, 紫尾山には花崗閃緑岩とホルンフェ ルスが露出し、これらが石器の石材として供給されてい る。また、出水平野は紫尾山を起点とした扇状地で、そ こを流れる米ノ津川や高尾野川, 野田川は上流域では段 丘を下流域では沖積平野が形成される。そして、豊富な 伏流水は、扇端部各所で豊かな湧水として露出し、集落 形成を促してきた。また、河口周辺では八代海の遠浅の 地勢を活かし、藩政時代から干拓事業が盛んに行われて きた。なお、この一帯は、国の天然記念物のツル越冬地 でもあるとともに、冬の干潟の海苔養殖棚、クマ海老漁 のカタウタセ船の帆を張る姿は、冬の風物詩として知ら れている。また、海に面した緩斜面は、柑橘ブランドの "出水ミカン"の生産地として発展してきている。

第2節 歴史的環境

出水市の基礎的遺跡台帳は、昭和36年の鹿児島県教育委員会の遺跡地名表作成事業を担当した池水寛治によって作成された。

野田町では、大畠遺跡、亀井山城、新城と発掘調査事例は少ないが、本遺跡の周辺すなわち、野田川流域の遺跡分布からは、台地や流域沿いに広がる水田が重要な生産地であり、それを取り囲むように生活が展開したことが看取される。一方、八代海に直結する丘陵先端部には江内貝塚、高尾野川下流域の台地端部には荘貝塚と縄文時代の希少な生活痕跡も残されている。

特に、本遺跡は『野田町郷土史』に記す「屋地は鎌倉 時代の初期、島津氏の始祖忠久が薩摩大隅の守護職に任 じられたとき, その統治の根拠地として, 木牟礼城を築 き、ここに館を置き以後数代の居宅としたところ」の"屋 地の居館跡"に該当すること、即ち、島津家発祥の地論 争の有力な候補地であることから, 注目を集める調査と なった。この"屋地"について、三国名勝図絵では「木 ノ牟礼城址の辰巳, 五町半にあり, 周囲十八町四十六間, 南北五町余、東西二から三町余に亘って広狭あり、平地 より高きこと丈余にして、外面は今昔田地に接するとい えども、その形成木牟礼城に続き云々」と、その詳細を 記述している。さらに郷土史では、屋形跡やその一角に ある島津家初代忠久を祀る竜尾神社等は、応永二十九年 の島津総州家の滅亡以後、大いに荒廃が進んだこと、さ らに農地化や生活道路整備、宅地造成、特に近年の土砂 採掘によって、その栄華の址や地勢の変化が急速に進ん だことを記録している。

また、郷土史の「屋地屋形略図」からは、現存する竜 尾神社や熊野神社、屋形内外や神社周辺を取り囲む堀跡 が鳥瞰でき、また、金剛寺跡、東門、西門、水之手口、 西前寺跡の伝承地も記される。そして,今回の調査範囲, すなわち路線は、東から金剛園、岡畑、大園の小字を通 過している。なお、竜尾神社の他、近くに熊野神社があり、 その神社の南側には、建久五年(1194年)、栄西禅師を 開山の祖とする感応禅寺の五廟社には、島津家初代から 五代が祀られている。なお、木牟礼城については、本遺 跡の北側に独立丘陵が想定されていたが、シラス採取に よりそのほとんどが破壊され消滅されるに至っている。 この木牟礼城跡をはじめ、周辺には最初期の城跡とされ る亀ヶ岡城や亀井山城が残されている。なお、昭和49年、 この木牟礼城跡から吉留秀敏により大量の遺物が採取さ れ保管されていたことから、それらを資料化し、掲載す ることにより本遺跡群の解明の手がかりとすることとし

野田町に於ける旧石器時代の石器群としては、本遺跡が初見となる。出水市上場遺跡は、旧石器時代の標識遺跡で、周辺には大久保遺跡、狸山遺跡、郷田遺跡等の遺跡群が密集する。隣接する伊佐市日東は黒曜石の原産地遺跡で、旧石器時代から縄文時代を通じて大量の黒曜石が供給され、県境の水俣市石坂川には石飛分校遺跡も所在する。この上場遺跡は、池水寛治が出水高校考古学部を指揮して調査を行った本県初の旧石器時代の遺跡であり、その調査は昭和40年の1次調査から昭和50年の5次調査まで行われた。第2層にアカホヤ火山灰、第5層にATが堆積し、その間に爪形文土器や細石刃文化、ナ

イフ形石器文化が重複して残され、最下層石器群は後期 旧石器時代初頭の可能性が指摘され、近年改めて再評価 されている。

縄文時代以降は平野部の利用が高くなる傾向が見ら れ、江内貝塚もその一つで、江内中学校裏手の丘陵先端 部にある縄文時代中~後期の貝塚で、昭和36年の池水の 調査と平成3年の調査からは,春日式土器や阿高式土器, 骨製釣針や鯨の椎間板が出土している。また、タマキガ イ製貝輪は製品として持ち込まれ、良質の黒曜石は西北 九州から運ばれており、海を介して遠隔地との深い関わ りを見てとることができる。荘貝塚は轟式土器の貝塚で、 昭和43年の池水の調査から昭和63年までの間に4次の 調査が行われている。第1次調査では、貝塚の北端と轟 式土器を主体とすることを明らかにし、BP5.496 ± 60 の 放射性炭素年代測定値を得ている。第2次調査は台地の 東側を調査し、第3次・第4次調査では、第1次調査と 重複する地点の調査を行い、緩斜面に点在する貝層から なる貝塚であることを明らかとし、貝層からはイノシシ、 シカ、キジなどの動物骨とともに、有明海沿岸特有の双 角状石器をはじめ、楔形石器等が多量に出土している。

出水貝塚は出水市上知識尾崎に所在し、海岸から約4km内陸の台地の縁辺部に立地する。大正9年、山崎五十麿が調査結果を『考古学雑誌』に発表し、同年、長谷部言人・濵田耕作、昭和29年には山内清男ほかが調査している。それらの結果、縄文時代中期の埋葬人骨が発見され、河口は出水式土器の存在を指摘して縄文時代後期とした。平成8年~11年、出水市教育委員会は範囲確認調査を行い、長さ100m、幅30m、面積3,000㎡程であることを明らかにした。

沖田岩戸遺跡は昭和 48年と 49年,隣接する大坪遺跡は平成 10年と 11年,前者は岩戸川河川改修,後者は九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って発掘調査が行われた。縄文時代後期から晩期の遺跡で,いずれも米ノ津川右岸の沖積地に立地している。大坪遺跡の上加世田式土器と入佐式土器から成る 37基の埋甕は特徴的で,管玉や小玉等の玉造跡が確認され,両土器群は分布域が異なり且つ玉類の石材及び仕上げ技術に差が認められるとされる。ちなみに,上加世田式土器の玉類は透明感のある良質な石材を使用し薄手で規格性があるのに対し,入佐式土器の玉類は濃い緑色の石材を使用し大きさや形にバリエーションを持つとされる。

近くでは、縄文時代晩期から弥生時代初頭の下柊迫遺跡や中里遺跡、柿内遺跡、沖田岩戸遺跡等が知られる。 下柊迫遺跡では、大量の組織痕文土器が出土しており、 その高度な編み技術に着目した、尾関清子による編布の 復元も注目される。

弥生時代の調査や古墳時代の大規模集落の調査は行われていないが、古墳時代になると地下式板石積石室墓の

分布域であり、短甲や金環を出土した溝下古墳群や堂前 古墳群が知られる。

8世紀になると、「出水」は文字資料の中に出現する。 『薩麻国正税帳』の残書に、出水郡の酒や穀物などの収納や支出に関することや国司に関わるとされる記述が確認されている。出水が明記されているのは、平安時代初期の『続日本記』で、宝亀9年(778年)11月の条に、遣唐使が薩摩国出水郡に漂着したとされる。

10世紀の『和名類聚抄』では、薩摩国が13郡35郷から構成され、和泉郡は5郷で構成されることを記している。その中の山内郷が、現在の野田や高尾野に当たるとされる。平安時代には山門院が設置され、山内郷は和泉郡から独立し荘園となる。12世紀には、鎌倉幕府により島津荘が成立し山門院は消滅する。

建久8年(1197年)の『薩摩国図田帳』に記される大宰府天満宮の別当寺の安楽寺領老松荘は、荘地区に所在していたとされ、他の薩摩国内の安楽寺領と異なり、地頭が置かれておらず、在地領主が居ない安楽寺の一円支配であったと考えられている。なお、2012年に報告した外島遺跡からは、中世の方形竪穴建物や掘立柱建物跡が発見されていることから、老松荘の一部もしくは隣接地として関連の深い遺跡である。

1392 年に南北朝の統一後、島津氏は薩摩総州家と大隅奥州家の間で内部抗争が起き、1430 年に総州家の久林を殺害した忠国は、弟の用久に薩州家を興させ出水地方を支配させる。その後、戦国期を通して、出水地方では豊臣秀吉による薩州家改易まで薩州島津家の支配が続くこととなる。秀吉の死後、出水は島津本家の領地となり、江戸幕府が崩壊するまで島津藩の外城としてその支配が継続した。それらは、「麓」と称され、出水の「麓」は最大規模であり、麓を構成する武家集落は現在も引き継がれ、平成7年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

昭和18年には、大野原の台地に出水基地飛行場が建設され、海軍航空隊が設置された。出水基地はその後、昭和20年に特攻隊の基地となり、200名以上の隊員が出撃したが、同年の空襲により基地は壊滅する。雲の墓標は、その悲しい歴史を伝えている。

木牟礼城跡採集資料(第2·3図)

昨年3月逝去した吉留秀敏氏が採集し、保管している 木牟礼城跡関連資料が存在することが判明した。

木牟礼城跡については、本遺跡群及び創生期の島津氏と密接に関わる城跡で、国道3号を境に、南に本遺跡群を含む屋地屋形跡があり、北に木牟礼城跡が位置している。しかし、現状は、「木牟礼城址」の石碑とそれらを伝える案内板が、その城跡の一部とされる土壇状に取り残された高台に残るのみである。

第1表 周辺遺跡地名

35 D Marst 64							
番号 遺跡名 所在地	地形	時代	番号	遺跡名	所在地	地形	時代
1 竹林城跡 高尾野町江内木牟		中世	40	荘上	出水市荘下	台地	中世
2 川骨 高尾野町江内	台地	縄文, 古墳	41	荘上Ⅱ	出水市荘下	台地	古代
3 木牟礼 高尾野町木牟礼	台地	弥生	42	田淵	出水市荘下	扇状地縁辺	縄文、古墳
4 木牟礼城跡 高尾野町江内尾崎	台地	中世	43	堀ノ内	出水市荘下	扇状地	平安, 中世
5 東笠掛 野田町下名屋地	台地	古墳~中世	44	下高尾野	高尾野町下高尾野	台地	弥生
6 中林 野田町下名中林	丘陵地	中世	45	外畠	出水市荘下	台地	古墳~中世
7 北山田 野田町下名	台地	近世	46	宮田	出水市荘下	扇状地縁辺	平安, 中世
8 六枝 野田町下名六枝	丘陵地	中世・近世	47	松ヶ角	高尾野町唐笠木笠木	台地	古代
9 中郡 野田町下名中郡	台地	弥生	48	小村	荘上	扇状地	平安, 中世
10 木牟礼城屋形跡 野田町下名屋地ほ	か 丘陵地	中世	49	松ヶ野	高尾野町下高尾野	台地	縄文,古墳,中世
11 大園 野田町下名大園	台地	中世	50	出し道	高尾野町唐笠木	台地	縄文,中世
12 山内寺跡 野田町下名中郡	台地	建久7年	51	諏訪下	高尾野町唐笠木	台地	縄文,中世
13 木ノ上城跡 野田町下名中郡	丘陵地	中世	52	放光寺	高尾野町下高尾野放光寺	扇状地	縄文~古墳,中世
14 崩上城跡 野田町下名中郡	丘陵地	中世	53	新城跡(高尾野)	高尾野町下高尾野新城	河岸段丘	中世
15 感応寺跡 野田町下名八幡	台地	中世	54	船迫	高尾野町下高尾野高松	台地	縄文~弥生
16 大畠 野田町下名瀬戸大	畠 台地	縄文,中世	55	諏訪	高尾野町唐笠木	台地	縄文~弥生
17 袰之城跡 野田町下名袰之城	丘陵地	中世	56	横馬場	高尾野町柴引・唐笠木	台地	縄文~弥生
18 松ヶ迫A 野田町上名松ヶ迫	丘陵地	縄文,近世	57	上石坂	高尾野町下高尾野上石坂	丘陵地	近世
19 野田畠 野田町下名田多園	台地	縄文~中世	58	柴引遺跡群a	高尾野町下高尾野・柴引	台地	縄文~弥生
20 春 野田町下名下田多	園 台地	古墳~中世	59	芥田	高尾野町下高尾野芥田	台地	古代, 近世
21 松ヶ迫B 野田町上名松ヶ迫	丘陵地	中世, 近世	60	本迫	高尾野町下高尾野本迫	台地	縄文,古墳,近世
22 桜ヶ城跡 野田町下名桜ヶ城	丘陵地	中世	61	道上	高尾野町下高尾野道上	台地	近世
23 茅迫 野田町下名茅迫	丘陵地	縄文	62	水天原	高尾野町下高尾野水天原	台地	古墳,近世
24 城内貝塚 野田町上名城内	山麓緩斜面	縄文,中世	63	本城跡	高尾野町下高尾野高城	台地	中世
25 亀井山城跡 野田町上名本城	丘陵地	中世	64	高尾野焼窯跡	高尾野町下高尾野内野ノ下	山麓緩斜面	近世
26 新城跡(野田) 野田町上名新城	丘陵地	中世	65	建具堀	高尾野町下高尾野建具堀	台地	古墳, 近世
27 上名遺跡群 野田町上名	低地	中世	66	段の原	高尾野町下高尾野段の原	山腹緩斜面	縄文,近世
28 下名遺跡群 野田町下名	低地	縄文~中世	67	青木	野田町上名青木	沖積地	縄文,古代,近世
29 湯之谷 野田町上名湯之谷	丘陵地	縄文,古墳	68	上平田	野田町上名上平田	沖積地	古代, 中世, 近世
30 藤原 野田町上名藤原	台地	縄文,近世	69	受口A	野田町上名	丘陵地	縄文
31 荘貝塚 出水市荘下	台地	縄文(前), 古代, 中世	70	受口壇	野田町上名	丘陵地	縄文,近世
32 荘下 出水市荘下	台地	縄文,古代,中世	71	大角鹿倉	野田町上名	丘陵地	近世
33 西下 出水市荘下	扇状地縁辺	古代, 中世	72	田神丸	野田町下名	丘陵地	縄文
34 寺ノ下 出水市荘下	扇状地縁辺	古代, 中世	73	野田川骨	野田町下名	丘陵地	古墳, 中世
35 京牟礼 野田町下名	丘陵地	古代~中世	74	槢木	高尾野町江内	台地	古墳
36 六田多 野田町下名六田多	丘陵地	古墳,中世	75	諏訪迫	高尾野町江内	丘陵地	縄文
37 涼松 野田町上名涼松	台地	江戸	76	諏訪山	高尾野町江角南方		古墳
38 丸尾 出水市荘下	扇状地縁辺	縄文,中世	77	上冷筋	高尾野町上冷筋	山腹緩斜面	縄文
39 桑水流 出水市荘下	扇状地縁辺	古代, 中世	78	上段	高尾野町江内	山腹緩斜面	中世

昭和62年刊行の『鹿児島県の中世城館跡』では、木牟 礼城跡は島津初代守護職の忠久の家臣の本田貞親が築城 し、守護所としたとされる。その存続期間は文治二(1186) 年~永享二(1430)年とされる。その間、文永十一(1274) 年異国警固で下向した三代久経は、当地を居城として領 国支配を行ったとされる。その後五代貞久、六代師久と 敵対する和泉一族との攻防や、薩摩国の守護職の総州家 師久と大隅国守護職奥州家氏久の長い勢力争いが続く事 となり、その間木牟礼城が中心的舞台として存在したと される。

吉留氏による採取は昭和49年と記録されていることから、それ以前から木牟礼城跡の破壊行為は始まっていたこととなる。城の破壊がどこまで遡るか現状では明らかでないが、総州家の衰退以後荒廃が進み、戦後の食糧難を乗り越えるための農地の拡大や農地整備事業の推進、延いては近年の宅地開発に伴い、城の破壊が進んだものと思われる。

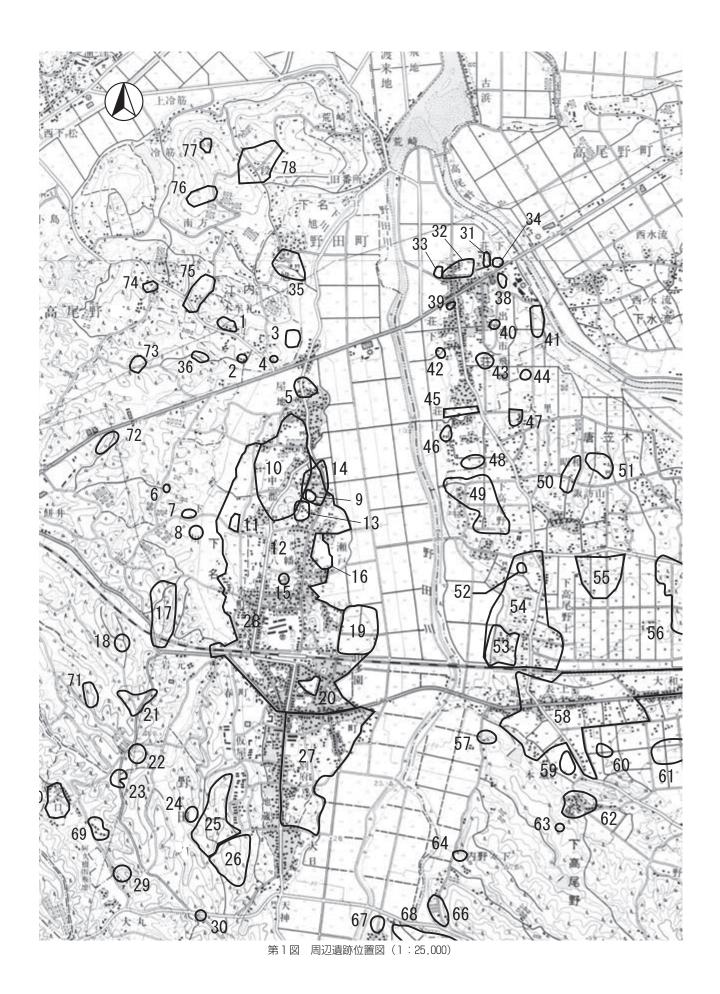
吉留氏の採取していた遺物の水洗いを行い,遺物へ「吉ドメキノムレ1974」と注記し、遺物の散逸防止に対処した。その後、復元接合を試み、必要に応じて図化に努

め、第2・3図に示した。以下、資料を紹介する。

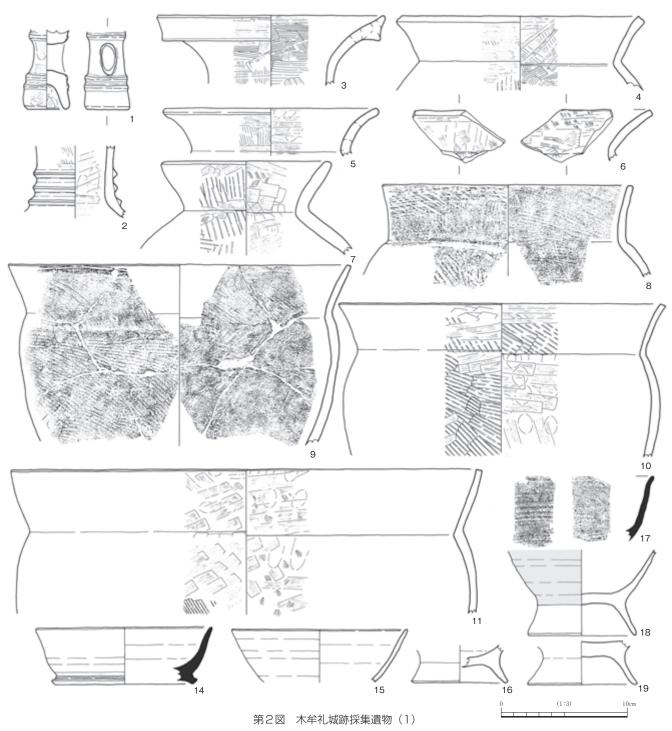
1 は筒状で楕円形の窓と接地面中央部がドーム状に抉られた脚台で、円形に仕上げた接地面の径は 3.5cm で、縄文時代後期に比定される熊本県菊池市天城遺跡の出土品に酷似する。

2は弥生時代中期の袋状口縁壺の頸部の突帯部と見られ、内外面ともに丁寧にナデて仕上げている。外面の三角突帯の接合の横ナデは最終段階で行い、輝石や石英等に加え黒色鉱物が特徴的な胎土である。3は肥後系弥生土器の口縁部で、復元口径17.8cmで、内面は横方向のハケメ、外面はナデ仕上げで、胎土粒子は細かく輝石の混入が目立つ。なお、類似品が中郡遺跡群で出土している。4・5・7は内面の屈折が明瞭に残るもので、古墳時代の長胴壺の口縁部で、中津野式土器段階に該当する。

5の口縁部外面は縦方向にハケメで調整した後、横方向にナデて仕上げる。7の復元口径13.0cmで、総じて器壁は厚く、口唇部は尖り気味に丸く仕上げる。外面は縦方向のハケメ仕上げで、にぶい黄橙の色調に極わずかであるが金雲母を含む。4の復元口径19.7cmで、器壁は薄く、内面にはハケメを残すが、外面は横にナデて仕上



− 7 *−*

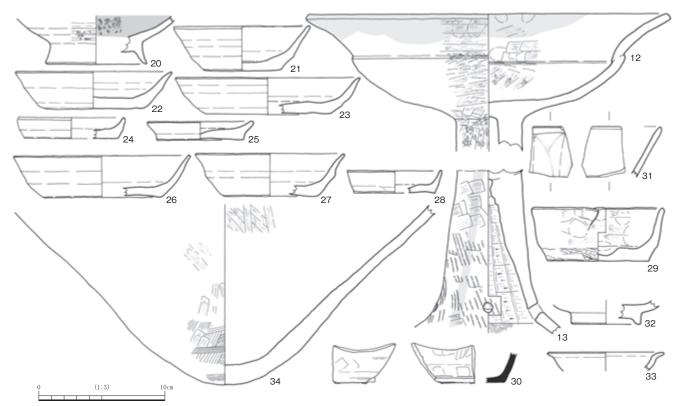


げる。4も6に酷似する資料であるが、内面調整が特に 丁寧で、横にナデて仕上げ、器壁もより薄い。頸部の屈 折や口唇部の平坦な作りも酷似している。

8の復元口径は20.0cmで、口縁部が直に立ち上がり、 頸部に明瞭な段を有し、壺の最大幅が胴部に設けられる。 なお、口縁部内面はハケメ調整されるが、器面には叩き 痕らしき痕跡が残される器壁の薄い仕上がりを成す。

9・10 はいずれも口唇部は狭いが平坦面を成し、器壁 は薄く、内面の屈折を明瞭に残す甕で、これらの特徴か ら中津野式土器(中村直子編年甕5型式、芝原遺跡4: 要1類)に該当する。10では26.0cm, 9では27.2cmの口径が復元される。11は淡黄色, 9・10は浅黄橙色を呈し, 10の口縁部内面は斜め方向のハケメそれ以下はナデ調整, 外面では緩やかな弧状の短いハケメ調整を重ね,口縁部はナデて仕上げる。9はハケメ調整痕を明瞭に残す。11は,胎土及び焼成等の類似性から,34と同一個体と判断される。

12 と 13 は同時期の特徴を備えた高坏で、中村直子編年の高坏 2 型式で、復元口径 28.8cm で坏部は途中で大きく屈折し外反する。内面は丁寧なナデ仕上げが残され



第3図 木牟礼城跡採集遺物(2)

るが、外面は粗いヘラケズリで残される。13の裾部には円形の透かしも見られる。

14 は復元口径 14.0cm, 底径 11.0cm, 高さ 4.5cm の須恵器坏で,高台接地面と口唇部が摩耗し,特に高台部が著しい。製作時期は8世紀後半~9世紀前半と判断される。17 は9世紀前半の須恵器埦で,傾きについては疑問も残る。

16 は底径 7.6cm の土師器埦で9世紀代と判断される。 底径 8.4cm の 18 は、胴部と高台部の縊れ部に煤状炭化物 が残される。なお、18 は逆台形の坏部と、総じて造り がシャープであることや直線的に立ち上がる形状から、 底径 8.6cm の 19 も高い高台の特徴から9世紀中頃~後半 と判断される。

21 は口径 10.8cm, 底径 6.2cm, 高さ 3.6cm のヘラ切りで、口径が大きくない特徴から 10 世紀頃、20 は内外ともミガキで, 内面は黒色に仕上げたいわゆる内黒土師器埦で、高台径 8.0cm で、高く丁寧な作りから 10 世紀代、23 の切り離しは糸切りで、口径 14.6cm、底径 10.0cm、高さ2.9cmで、口径が大きい特徴から 12 世紀後半と判断される。22 は口径 12.9cm、底径 8.0cm、高さ3.0cmと、口径が大きく13 世紀代の特徴を有し、24 の口径も13 世紀と見られ、底部が厚く、体部が直に立ち上がる特徴が見られる。なお、口径 8.4cm、底径 7.2cm、高さ1.7cmとなる。

26 は口径 14.0cm, 底径 9.2cm, 高さ 3.3cm, 25 は口径 8.4m, 底径 7.0cm, 高さ 1.5cm で, その口径の比率から 13 世紀と判断される。27 は口径 11.8cm, 底径 7.6cm, 高

さ 3.4cm から 13 世紀後半から 14 世紀前半に,29 は全体的にひずむことから断定はしにくいが,口径等は 14 世紀的な特徴と言える。なお,口径 10.5cm,底径 8.0cm,高さ 4.3cm となる。28 も体部が直に立ち上がることや口径から 14 世紀で,口径 7.4cm,底径 6.4cm,高さ 1.8cm となる。

30 は内側にも釉がかかっており、自然釉であれば須恵器と認定できるが、陶器の可能性も残される。

31・32 は龍泉窯系碗Ⅱ類で、31 はオリーブがかった灰色で、32 の内底から畳付は露胎する。

以上が、今回資料化したもので、本遺跡の屋地屋形跡 との関連資料としては、 $22 \sim 26$ 等が 12 世紀後半から 13世紀に帰属する可能性があることから、それらの関係性 を示す該当資料として検討できそうである。

古くは縄文時代後期に始まり、弥生時代中期頃には北部九州との関連性が読み取れ、古墳時代には在地土器の遺物量が増加し、丸底甕からは肥後地域との交流の痕跡が読み取れる。その後、9世紀から10世紀の土師器も確実に存在することから、野田川の下流域のこの一帯が、新たな時代のそして北薩摩の拠点として、木牟礼城築城に繋がる素地が徐々に整備され、中世武士団の基地としてこの地が存在した可能性は高い。

遺物の回収に努めた、吉留氏に心から謝意を表する。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法(第4図)

平成 21 年度 調査グリッドは、センター杭 No353(X=-202,378.664、Y=-69,153.856)と センター杭 No354(X=-102,386.489、Y=-69,172.262)を結ぶ線を基準として、南側から北側へA~F、東側から西側へ1~30の $20 \text{ m} \times 20 \text{ m}$ のグリッドを設定した。

調査は、任意に設定した先行トレンチによる調査から開始し、遺構・遺物が存在し、それらの広がりが予測される部分については、これを拡張する方法を採用した。その結果、D-5区を中心とする 500m³ (小字金剛園)、C~E-13~17区及びB~E-18~25区の 4、772m³ (小字岡畑)、B·C-26~28区の 838m³ (小字大園)に遺構及び遺物包含層が存在することが確認された。また、調査時には、便宜的に各調査区の小字名を用い、D-5区周辺を「金剛園地区」、C~E-13~17区及びB~E-18~25区の 4,772m³ を「岡畑地区」、B·C-26~28区の 838m³ を「大園地区」と呼称した。

表土除去等は重機(バックホウ)を使用し、遺物・遺構等の検出や精査は人力で行った。なお、本調査は、 Ⅱ層(中世)及びIV層・V層(縄文時代早期)を対象とした。また第2節で詳述するが、層堆積は全体的に 不安定であり、さらに調査区内に小規模な谷や低湿地、 堀跡などが存在し、地形が起伏に富んでいたため、地 点によって土層堆積状況の異なる様相が確認された。

包含層から出土した遺物の取り上げは、遺構に関わらないと判断されるものについては、層ごとのグリッドごとに一括で取り上げることを基本とした。B・C-26~28区のIV層・V層出土の遺物については、平板または、トータルステーションによる点上げを行った。

包含層掘削後、層堆積の状況に応じて、IV~VI層の上

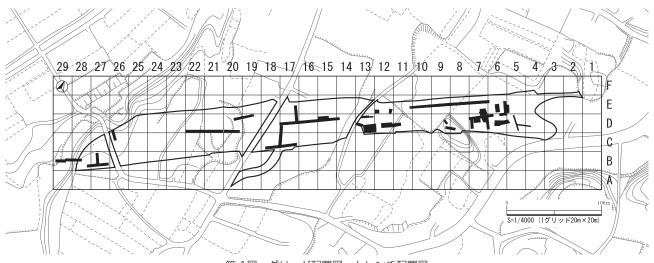
面において遺構の精査を実施した。一部包含層(Ⅱ層・ Ⅳ層・Ⅴ層)の残存しない地点でも遺構の残存が確認 された。したがって、シラス(Ⅷ層)まで削平を受け ている地点においても遺構の検出を試みた。

また、 $C-20\sim 22$ 区の低湿地の調査では、中世に該当すると想定される II 層(平成 24 年度調査の低 II 層に相当)が検出されるぎりぎりまで重機(バックホウ)での掘削を行った。 II 層の掘削は入力で行い、シラス(II 層)上面での測量を実施した。

旧石器時代の遺物包含層の有無を確認するために、 層堆積が比較的良好な地点を選んでトレンチを設定し、 「四~四層まで掘り下げを行ったが、包含層及び遺物は 確認されなかった。

平成 24 年度 B-23・24 区、C-23~26 区、D-20~25 区及びE-20~24 区を対象とし、平成 21 年度に設定したグリッドを踏襲し調査を行った。B~E-23 区より西側の丘陵部の調査では、重機による表土除去後に、人力による縄文時代早期の包含層 \mathbb{N} ・ \mathbb{V} 層の掘削及び遺構の精査を行った。また、C・D-24 区では、旧石器時代のナイフ形石器文化期に該当する遺物が \mathbb{N} 層中より出土した。傾斜地の底付近では、中世に該当する \mathbb{N} 層の堆積が確認された。

遺物の取り上げ方法は、IV層、V層及びVI層出土の遺物については、トータルステーションによる点上げを基本とした。D-20~22区を中心とする低湿地の調査では、平成21年度の調査と同じく、低 II層の上面ぎりぎりまで重機による掘削を行った。低 II層の調査は、1グリッドを2m×2mの小グリッドに細分し、小グリッドごとの人力による掘削を行った。出土した遺物は、層位別に小グリッドごとに取り上げた。また、低 II層の1m×1mを1箇所、50cm×50cmを3ヵ所、



第4図 グリッド配置図・トレンチ配置図

上から5cmごとにサンプリングを行い,フローテーションで,微細な有機遺物の検出を試みた。なお,低湿地で出土した自然遺物については現地での洗浄を行い,人為的な加工痕等の有無を判断し,選別を行った。

2 遺構の認定と調査方法

平成21年度 検出された遺構については、遺構の種類ごとに検出された順で遺構名と遺構番号を付与した。また、調査の過程で遺構ではないと判断されたものについては欠番とした。

遺構は、概ね2m四方以上のもので、床面が平坦なものを竪穴建物跡・竪穴状遺構と認定した。概ね2mに満たないものや、2mを超えるものであっても床面が平坦では無いものについては土坑として取扱った。なお、土坑のなかで土坑墓と判断されるものもある。50cmに満たないものについては柱穴と判断した。掘立柱建物跡の柱穴については、構成する柱穴には建物ごとに柱穴番号を与えた。礫がまとまって検出されたものについては、集石とした。堀跡と溝状遺構については、深さ及び幅で区別した。

平成24年度 検出された遺構については、遺構の種類ごとに検出された順で遺構略号と遺構番号を付与し、 その組み合わせを遺構名とした。

遺構は、土坑及び低湿地で検出された土坑状の凹みについてはSKの略号を用いた。礫がまとまって検出されたものについては、礫群若しくは集石としSXの略号を用いた。なお、地層の横転内に礫がまとまって検出される事例が見られたが、それについてもSXとした。幅50cm~150cm程度で、細長く帯状に検出されたもので、特に硬化面等が認められたものについては道路状遺構としてSFとした。それ以外のものについては、溝状遺構としSDの略号を用いた。杭列はSAとした。

調査方法 遺構は、検出状況の写真撮影・実測を実施した後に、土坑については半截、竪穴建物跡・竪穴状遺構については土層観察用のベルトを十字に設定し、4分の1区画ずつ掘り下げた。遺構の性格・状況に応じて出土遺物の記録作成や取り上げ、土層堆積状況の記録等を行った。遺構の認定については、埋土の状況や床面の状態、遺物出土状況等を基に判断した。

遺物の取り上げは、各時代を共通して行い、土器の小破片については、掘り下げ時に、グリッドごとに一括で取り上げた。大型の土器片や石器類については検出面での遺物出土状況を観察し、遺構の検出を行った後、遺構に関係の無いと判断されるものについてはグリッドごとに一括で取り上げを行った。

3 整理作業の方法

遺物の水洗いは平成23年度及び平成24年度に行い, 土器や陶磁器,礫石器に関してはブラシで水洗いを行い、剥片石器は超音波洗浄機を用いた。

注記は、注記記号「ナカゴ」を頭に、「区」、「層」、「取り上げ番号」の順番で記入し、遺構出土の遺物については、「ナカゴ」に続いて「遺構名称」、「取り上げ番号」を記入した。なお、土器の爪先大の小破片や摩滅の激しいものは注記を省略した。

遺物の接合は、土器類、陶磁器類を中心に行った。 まず、土器類と陶磁器類の抽出・分類を行い、各種類 ごとに同一遺構内、同一調査区内での接合作業を行い、 徐々に接合範囲を広げ、文様や胎土が特徴的なものに 関しては適宜抽出して接合を行った。

4 出土遺物の分類

中郡遺跡群では、現地で大まかな分類を行い、整理作業の段階で詳細な時代・時期の判断を行った。分類は各時代・時期に選別した後に行った。分類の視点・基準は時代・時期ごとに異なり、各節に詳しい。

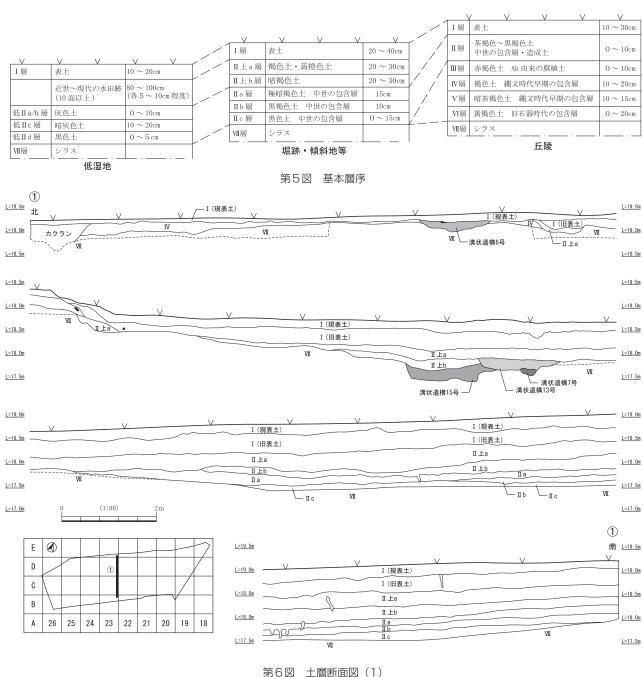
第2節 層序(第5~11図)

基本層序は第5図のように整理した。遺跡が扇状地に立地するという地形的特徴や、島津総州家の滅亡以後、屋形の荒廃が多いに進んだこと、さらに近年の農地転用や生活道路整備、宅地造成、特に近年の土砂採掘によって、土層の堆積は悪い。また、遺跡内での地形に起伏が多く、一部には湧水のある低湿地も存在することから、調査区内での層堆積は一様ではない。

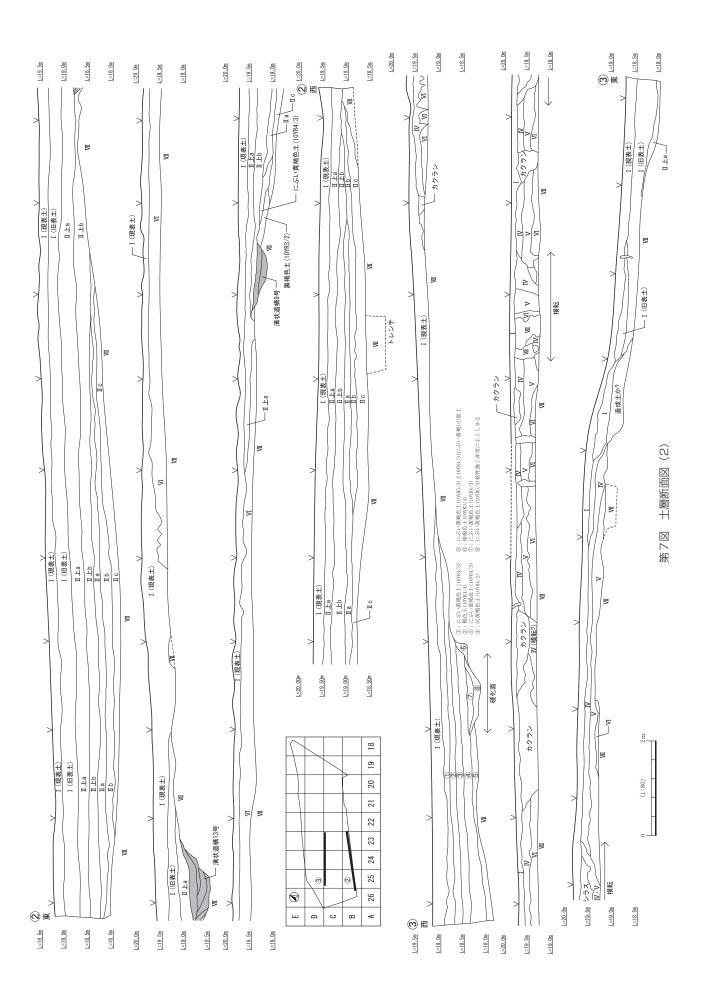
丘陵部の基本層序 表土は、丘陵部では 10 ~ 30cm 程度の堆積だが、堀跡や傾斜地では 20 ~ 40cm 程度の堆積が認められた。Ⅱ層は茶褐色~黒褐色で、中世の遺物包含層もしくは造成土である。丘陵部での残存状態は悪く、堀跡や傾斜地の底付近に良好に堆積していた。丘陵部の比較的平坦な場所では、極暗褐色の砂質土(Ⅱ a層)であるのに対し、堀跡等の低い場所では色調が濃くなるとともに粒子が細かくなり、Ⅱ b 層は黒褐色、Ⅱ c 層は黒色でシルト質を呈する。なお、この差異における時期差は確認できなかった。

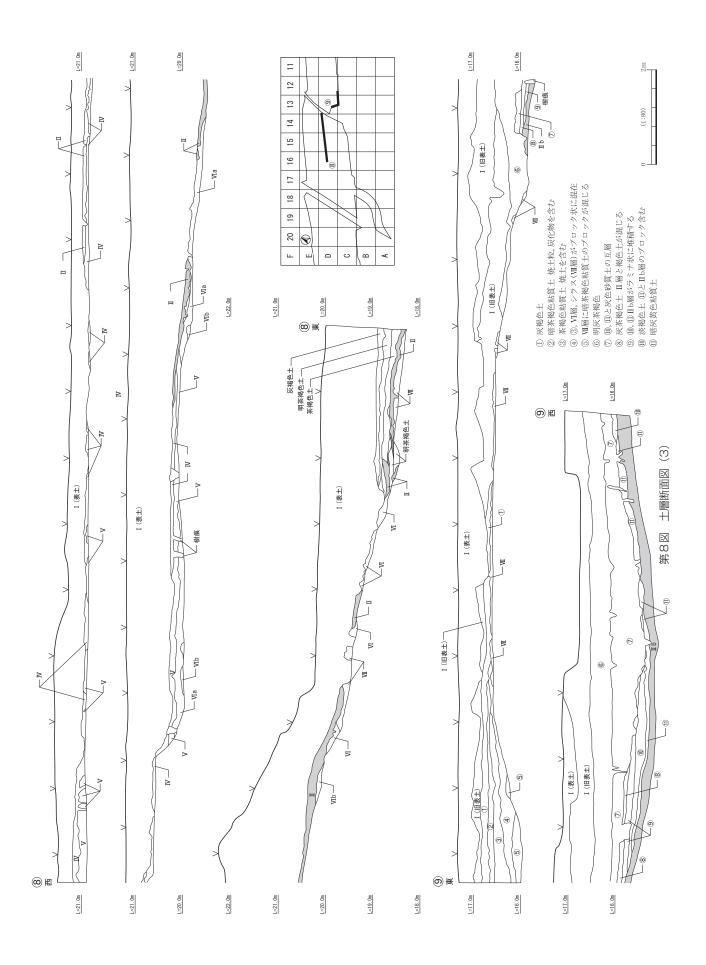
Ⅱ上層は、傾斜地での堆積が認められた。表土又は Ⅱ層と区別するために平成24年度調査時にⅡ上層と新 たに設定した。色調は褐色~暗褐色で、やや粗粒な砂 質土である。層中の遺物や礫などの混入物は少なく、 水平に近い堆積を示す。近世から近代にかけての畑跡 (造成)と考えられる。Ⅲ層は赤褐色土で乾燥性の高い 土質で、点在する黄橙色のパミスはアカホヤ火山灰起 源の可能性が高い。 IV層は褐色土で、ローム質でⅢ層からの漸位性も認められる。縄文時代早期の遺物包含層である。V層は暗茶褐色土で粘性が強く、乾燥に伴い硬化する傾向が見られた。台地中央部では比較的安定した堆積が見られたが、縁辺部では希薄な堆積状態や粘性が弱くなる傾向や、IV層との色調区分が難しい場面もあった。同じく、縄文時代早期の遺物包含層である。VI層は黄褐色土で、入戸火砕流堆積物の再堆積層である。性質がV層と類似しており、区別が難しい。一部で旧石器時代のナイフ形石器文化期の遺物が出土した。Ⅷ層はシラスである。

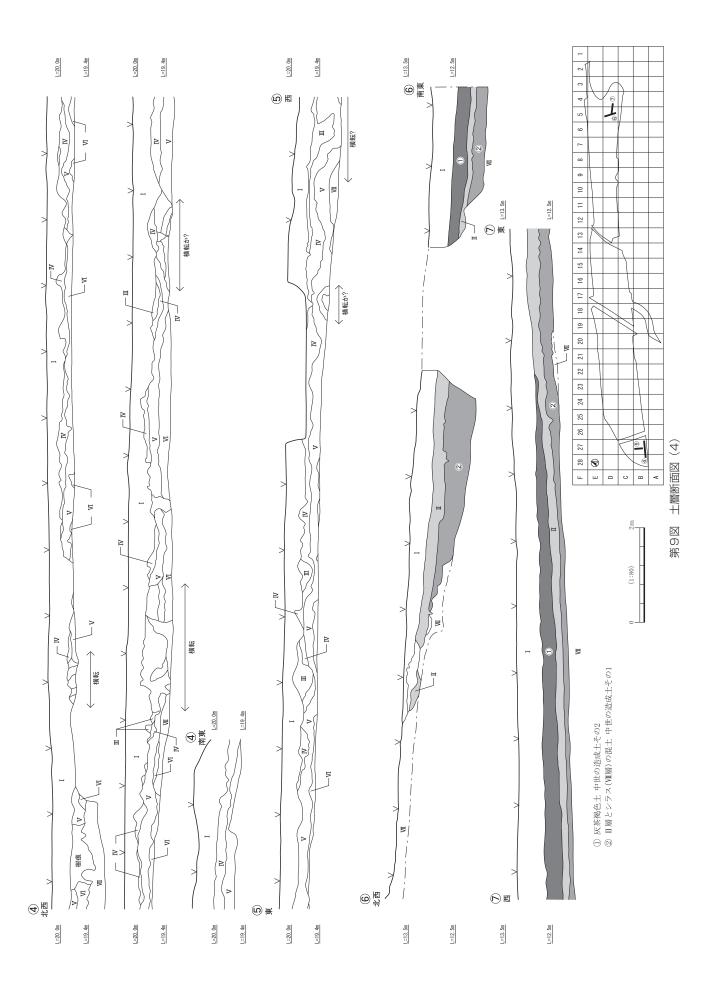
低湿地の基本層序 表土から深さ $100 \sim 120 \,\mathrm{cm}$ 程度にかけて,近世から現代に至るまでの水田跡が,10 面以上確認された。低 Π 層は古代から中世にかけて堆積した土壌である。基本的に Π 層と成因を同じにすると考えられる。粘性が強く,しまりが良く,下層になるほどグライ化が進行している。色調をもとに上層から Π を 個層に細分した。低 Π a 層は灰色を呈する。低 Π b 層はやや暗い灰色を呈する。低 Π c 層は暗灰色を呈する。低 Π d 層は黒色で,グライ化が進んでいる。すり鉢状の地形の底の一部に堆積する。 Π 層と低 Π 層と低 Π 層を Π 層 Π 層 Π の Π 層 Π の Π 所列 Π 表示が見られた。

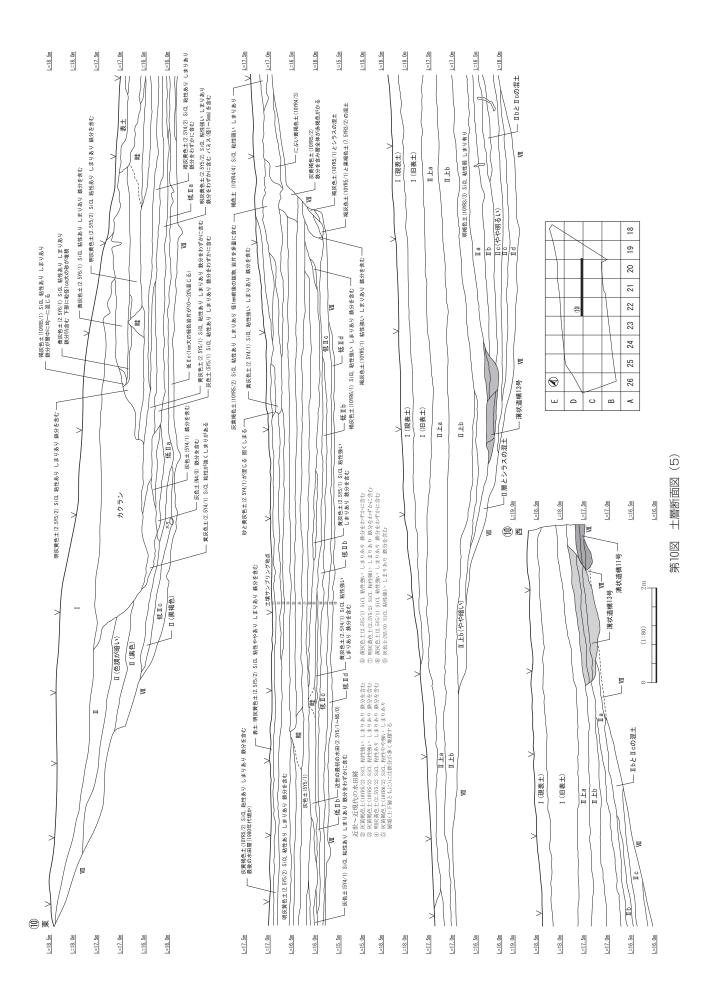


第0凶 上眉剛圓凶 (I)









9

土層断面図

第11図

− 17 **−**

L=16.0m

L=18.5m L=18.0m L=17.5m

L=18.0m

L=17.5m L=17_0m L=16.5m

L=18, 5m

L=19.0m

L=16.5m

L=16.00m

L=17.5m L=17.0m

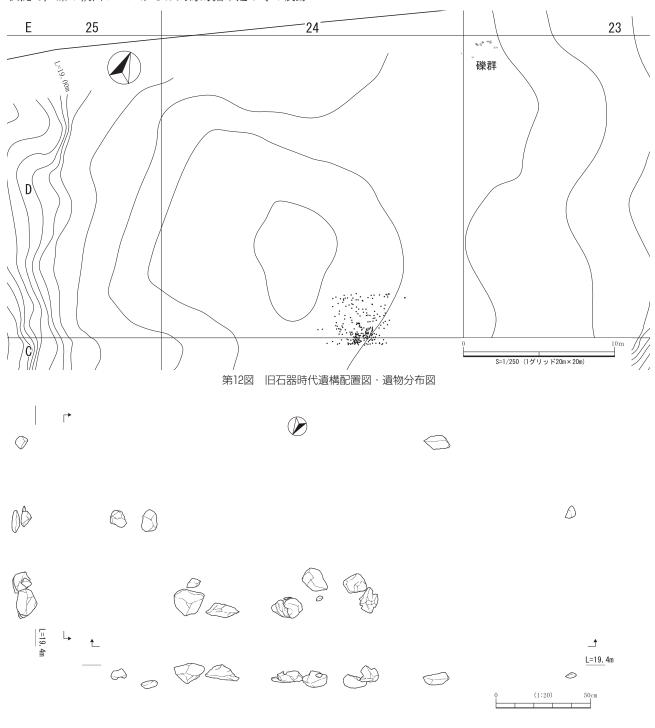
第3節 調査の成果

1 旧石器時代の調査

(1) 遺構(第12図・13図)

礫群はD-24区と接するD-23区の西側隅で検出されたものである。この一帯は、西側が南北方向のグリッド線に、東側が南西から北東方向に大きく傾斜する台地面を形成している。

礫群は, 第13 図で示したように, 10cm ~ 20cm 程の 10 点程の礫が100cm × 150cm 程の範囲に散在している 状況で, 礫の検出レベルからは人為的掘り込み等の痕跡 は確認されていない。礫は砂岩が中心で、被熱痕等はなく、周囲からの炭化物等の出土も確認できなかった。なお、これまで知られている礫群の形態と比較すると集中度に欠け、礫群としての中心的位置の把握が明確でない等の課題が残されるが、元来これらを包含する層に礫が存在しないことも一因とし、礫群として取り扱うこととした。また、本報告書で旧石器時代の石器として取り扱った13点の2点がC-24区とD-24区から出土していることも補強要因である。



第13図 礫群

(2) 旧石器時代の遺物 (第14図1~12. 第39図13)

W層, V層, W層, II層及び表土からの採取品から抽出した石器で、遺跡内での石器製作痕や意図的な製品の集中等は把握されていない。

1 は掻器である。D-24 区 圏出土で、ほぼ全周に 腹面方向からの急角度の刃部を持つ。腹面右側縁と打点 方向には、逆方向の角度の浅い剥離痕も残される。日東 産黒曜石が使用される。

2はB-27区IV層出土で、やや厚手の剥片の先端部に腹面方向からの急角度の刃部を持つことから掻器と認定した。しかし、両側縁の形状及び二次加工から小型二側縁加工ナイフ形石器のリダクションの可能性も想定できる。使用される黒曜石は、3同様不純物を含まない良質なもので、産地は腰岳と推定される。なお、腹面には擦痕と見られる線状痕が観察される。

3は切出型ナイフ形石器である。V層出土で、小型の不定形剥片を素材とする。両側縁に急峻な角度の二次加工が見られる。また、先端部腹面に使用によると見られる刃こぼれ痕も確認できる。使用される黒曜石は不純物を含まない良質なもので、色調等から産地は桑ノ木津留と推定される。

4は角錐状石器である。C-24区出土で、中央部が 稜の高い断面三角形を成し、腹面から急角度の剥離加工 等から角錐状石器の中央部と判断したもので、先端部と 基部を欠損する。なお、稜上方向からの調整剥離も確認 できる。日東産黒曜石を使用する。

5はナイフ形石器である。B-27区の表層採集品で、8と同種と見られ、刃部は主軸に対し直行することから狭義の狸谷型ナイフ形石器からは外れるが、素材剥片が横長であることや短辺側の基部を内湾状に成形することから、基本的には同時期の石器と判断される。刃部右側の先端部を一部欠損し、両側縁の刃潰し加工は腹面側からを基本とするが、左側縁では背面からも実施している。また、腹面にも3回の細かな平坦加工が見られる。使用石材は、灰黒色の黒曜石で、上牛鼻産の可能性が高い。

6・7は台形石器である。6はB-25区で採取されたもので長さ3.5cm, 刃部幅2.2cmである。左側縁には腹面からの刃潰し加工が集中する。なお,右側縁は素材剥片の打面である先行する剥離面をそのまま使用するが,背面を薄くするための横方向からの平坦な調整剥離を加えている。刃部の微細剥離痕は使用痕の可能性もある。基部の破損は新しいもので,上牛鼻産黒曜石を使用する。

7は、C-26区Ⅱ層出土の黒色で扁平なチャートを素材としている。左側縁は打面部を除去するようやや大きめの腹面からの剥離が見られ、右側縁は背面の稜線に沿って微細且つ平坦剥離が見られる。なお、刃部の小剥離は使用による刃こぼれ痕と見られる。

8・9は切出型ナイフ形石器である。8は、B-27区IV層出土で、刃部は欠損するが切出型ナイフ形石器の基部と見られ、両側縁に腹面方向からの急峻な角度の二次加工が見られる。なお、背面方向とは打点方向が異なるが、最終的には分厚な横長剥片を使用している。刃部は大きく欠損するが、左側縁は直線的に伸び、右側基部は深く抉られることから、背部長軸と刃部が斜めに4交差する特徴からは、切出型状の基部加工ナイフ形石器の可能性が高い。黒曜石は透明性のない漆黒で、上牛鼻産を使用する。

9はD-15区IV層出土で、基本形状は切出型ナイフ 形石器である。左側縁の背部には急峻な背潰しの二次加 工が認められ、基部から右側縁は先行する剥離面と数回 の二次加工が認められる。なお、刃部両先端部に腹面か らの二次加工は、尖頭部の強化を意識したものと判断し ている。素材剥片は分厚い打面部を持つ横長の不定形剥 片で、使用された黒曜石は不純物等の特徴から日東産と 見られる。

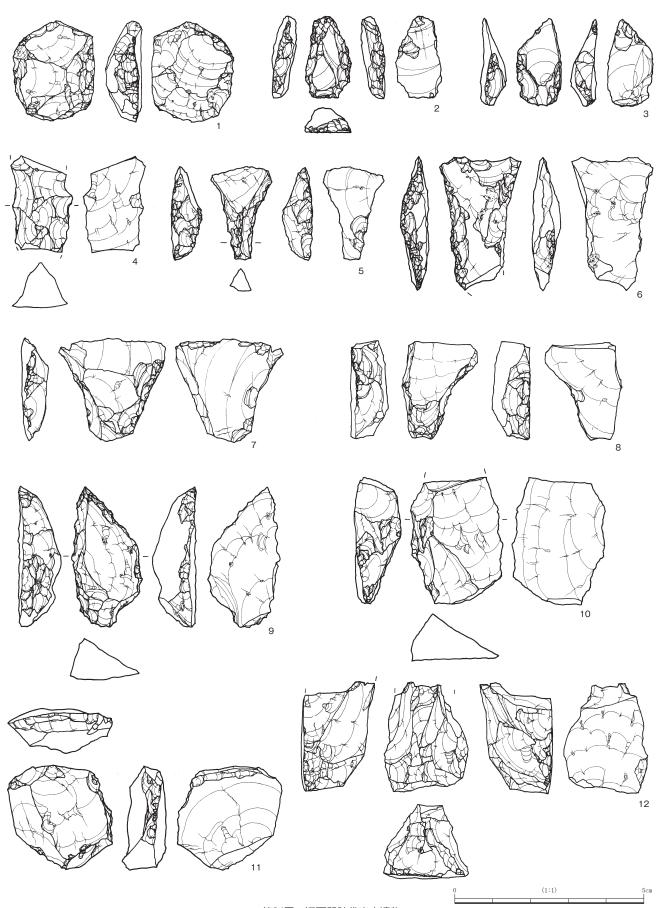
10~12 は剥片である。10 は,B-27 区 V 層出土で, 横長の不定形剥片の打面部に腹面方向から二次加工を施 した剥片で,素材剥片の打点部は除去される。先端部が 欠損することから,一側縁加工ナイフ形石器の可能性も 検討される。剥片の形状からは翼状剥片の感もあり,先 の9と類似した剥離の存在が予測される。なお,黒曜石 は不純物及び縞状紋等の特徴から日東産と見られる。

11 はB-28 区 V 層出土で、不定形剥片の端部に 3 枚の樋状剥離痕を持つもので、彫器の可能性が示唆される。なお、樋状剥離と交差する右側縁には腹面方向からの二次加工が多数見られる。使用石材は濃灰色のチャートである。

12 はC-27 区IV層出土で、角錐状石器や三稜尖頭器を意識して図化したが、腹面からの剥離角度が深いことや加撃回数が少ないことから、器種認定が難しい。なお、打面は全て除去されていると判断している。使用石材は日東産黒曜石と見られる。

13 は B - 27 区 V 層出土で、最終剥離面が明確でないが、不定形剥片剥出目的の石核と見られる。なお、図示していないが右側縁部中央と裏面下半が先行する大剥離面に相当することから、素材礫を 4 分割以上して使用している。黒曜石は不純物等の特徴から日東産と見られる。

なお、本遺跡内で採取されている石器の大部分がC・D-24 区EB-27・C-27 区の2 ヵ所に集中することとなる。加えて、それぞれの石器が完成した石器に限られること、剥片・砕片等の石器製作を示す痕跡が確認されていないことから、短時間の野営地として利用されたと解釈される。また、V 層で示した 175 (第 41 図) もこの時期のナイフ形石器の先端部の可能性もある。



第14図 旧石器時代出土遺物

2 縄文時代の調査

(1) 遺構調査の概要

縄文時代の調査は、 $C \sim E - 14 \sim 16$ 区周辺と $B \sim D - 23 \sim 28$ 区周辺で行った。調査は、平成 21 年度に $C \sim E - 14 \sim 16$ 区と $B \cdot C - 27 \cdot 28$ 区を行い、平成 24 年度に $B \sim D - 23 \sim 26$ 区を行った。

 $C \sim E - 14 \sim 16$ 区周辺では、縄文時代の遺物包含層である IV 層及び V 層の堆積は確認されなかったが、集石 2 基及び落とし穴状遺構 5 基が検出された。

 $B \sim D-23 \sim 28$ 区周辺では、 $B \cdot C-25 \cdot 26$ 区の谷地形を挟んだ東西の丘陵部にIV層及びV層が比較的良好に残存しており、縄文時代早期の遺構・遺物が検出された。検出された遺構は集石 9 基、土坑 6 基である。また、 $B \sim D-23 \sim 26$ 区では、地層の横転が多く確認されたが、その横転内に礫を伴う事例が数例みられた。遺構ではないが、併せて本節で報告したい。

(2) 集石

検出面において複数の礫がある程度のまとまりをもって散布しているものを集石とした。集石は、礫検出後、記録作成及び礫の観察を行い、掘り込みの有無の確認を行った。必要に応じて断ち割り等を行い、掘り込みの確認や掘り込みと礫の関係の観察を行った。

掘り込みを伴うと想定されるものが5基検出されたが、掘り込み内に礫を伴わない、あるいは伴っても数個程度というものばかりであった。

また、B・ $C-25\cdot26$ 区の谷状地形では、地山に礫が混入しており、傾斜に沿ってある程度のまとまりを持って検出された。それらの礫とB・ $C-27\cdot28$ 区の集石は、礫の材質・形状・焼成痕の有無により区別を行っている。なお、平成 21 年度調査の集石については、立面図は 1 面の作成とした。また、一部記録に不備があったため、立面図を掲載していないものもある。

集石 10号(第17図)

検出状況 集石 10 号は、D-24 区のIV 層をやや掘り下げた面で、100cm × 80cm 程度の範囲に礫が密集し、その周辺 250cm 四方に礫が散在する状況で検出された。

構成礫 集石の構成礫は、砂岩、凝灰岩、安山岩及び頁岩等である。一部に赤色化しているものが見られるが被熱痕跡の無いものが大半を占める。重量250~500グラム程度の他の集石と比較して大型の礫が多く、特に主体部の礫は大型の凝灰岩や頁岩が多く、大きいもので重量が2,000グラムを超えるものも存在する。

掘り込み 検出状況の記録作成後,北東側 1/4 を断ち割り,掘り込みの確認を行った。その結果,Ⅳ層からⅥ・ Ⅷ層の漸移層に至るすり鉢状の掘り込みが確認された。 埋土はⅣ層よりもやや明るいシルト質の褐色土であった。 掘り込み内に礫は見られず、また、焼けた痕跡も確認で きなかった。

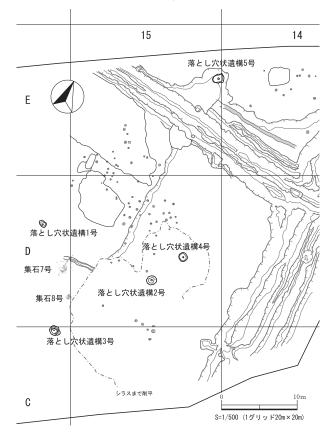
集石9号(第18.19図)

検出状況 D-24 区で、集石10号と同じくIV層をやや掘り下げた面で検出された。300cm×270cm程度の範囲に礫が散在する。集石9号の東側には地層横転が見られ、集石9号も一部横転に巻き込まれている。

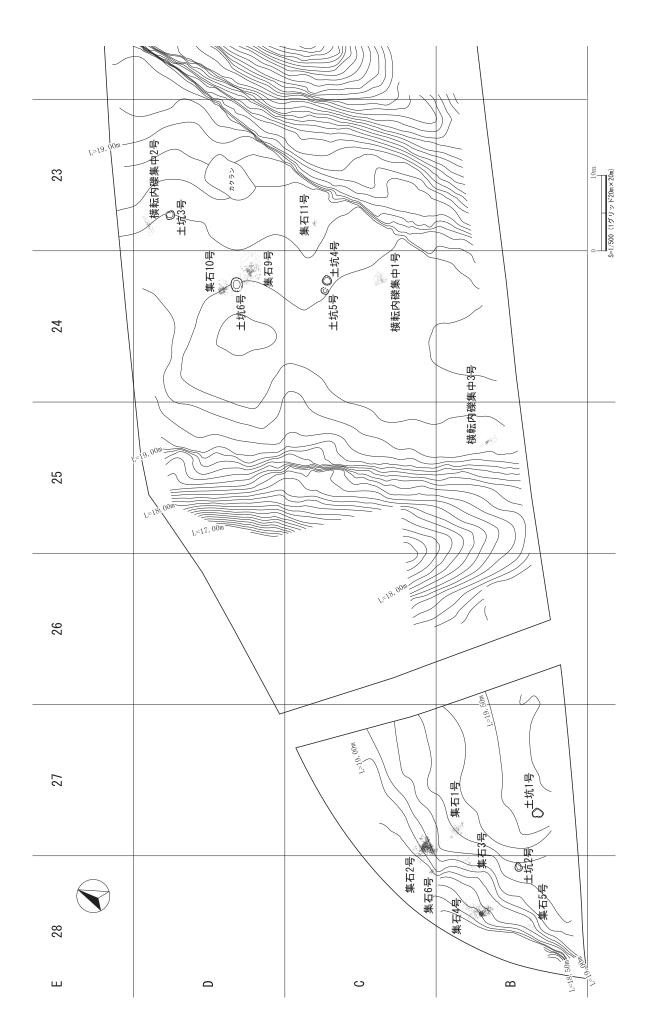
構成礫 集石の構成礫は、安山岩が多く、他に砂岩や頁岩等が見られた。集石 10 号で多く見られた凝灰岩は少ない。また、集石 10 号と比較して構成礫は小さく、重量 100 グラム以下のものが大半を占め、大きなものでも重量 1,000 グラム程度である。被熱痕跡が観察され、破砕しているものも多い。

地層横転との関係 検出状況の記録作成後,掘り込みの有無及び東側の地層横転との関係を確認するために,北東側 1/4 の断ち割りを行った。その結果,集石 9 号形成後に地層の横転があり,それに集石 9 号の東側の礫が巻き込まれていることが想定された。

掘り込み 断面の観察の結果,すり鉢状の掘り込みと考えられる堆積状況が見られたため,床面及び壁面を追いかけ掘り込みの検出を行った。掘り込みの平面形は円形で,断面形はすり鉢状を呈する。ただし,上述の地層横転や樹痕が見られることから,集石9号に本来的に伴う



第15図 縄文時代遺構配置図 (C~E-14~16区)





第17図 集石 10号

ものではない可能性も存在する。

集石1号(第20図)

検出状況 B-27区、Ⅲ層上面で検出された。

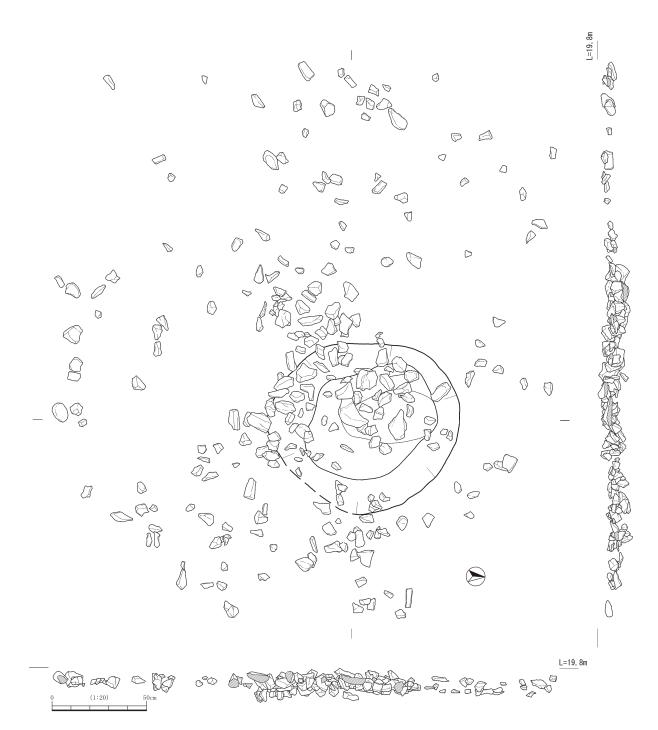
形状・規模 280cm×210cmの範囲に礫が散布する。なお, 集石に伴う遺物は出土していない。

掘り込み 礫取り上げ後、掘り込みの確認を行ったところ、中央部に周辺よりやや黒褐色を呈する埋土を有する

径 100cm の円形で、検出面からの深さ 20cmの掘り込みを検出した。なお、礫は掘り込みの床面より浮いた状態で出土している。

集石4号 (第20図)

検出状況 B-28区の地形が西側へ傾斜するW層上面で検出された。礫も,地形の傾斜に沿って検出された。 形状・規模 405cm×300cmの範囲に礫が散布し,掘り



第18図 集石9号(1)

込みが確認された範囲にはやや集中する。遺物は出土していない。立面図は掲載していないが、調査時に礫には レベル差が見られた。

掘り込み 径70cm程度の平面形が不整形な掘り込みを検出した。礫との関係は不明である。

集石2号 (第21図)

検出状況 C-27区の地形が北西方向へ傾斜する Ⅲ層 上面で検出された。

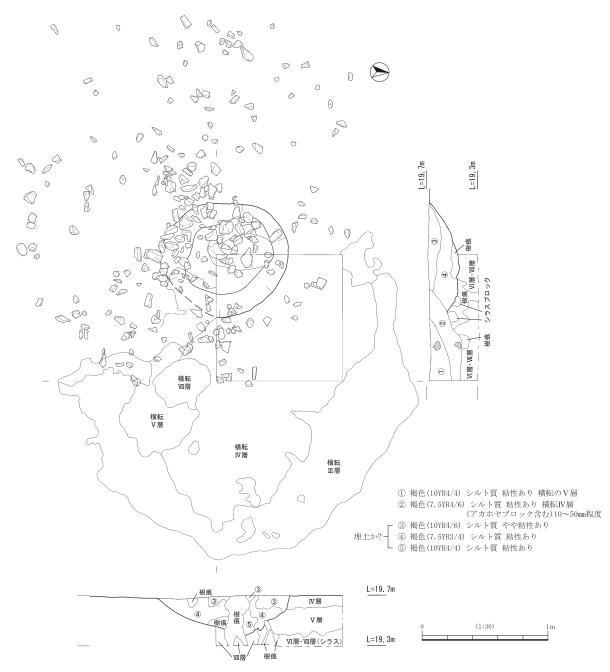
形状・規模 200cm × 200cm 程度の範囲に礫が密集し、そ

の周囲にも礫が散在する。遺物の出土はない。礫は傾斜に沿って散布しているため、礫間にレベル差がみられる。 掘り込み 礫の集中している部分の下で127cm×110cm の掘り込みを検出した。検出面からの深さは48cmである。礫は掘り込みの床面では検出されていない。

集石3号 (第22図)

検出状況 B-28 区、Ⅷ層上面で検出された。B·C-27・28 区で検出された集石 6 基のほぼ中央に位置する。

形状・規模 304cm× 223cmの範囲に礫が散在する。掘り



第19図 集石9号(2)

込みは確認できなかった。また、遺物は出土していない。

集石6号(第22図)

検出状況 C-28区の地形が西へ傾斜するⅧ層上面で 検出された。北東に集石2号が隣接する。

形状・規模 88cm×68cmの範囲に礫が密集する。掘り込みは確認されなかった。遺物は出土していない。

集石 11号 (第22図)

検出状況 C-23 区のV 層をやや掘り下げた面で、礫が 110cm \times 80cm 程度の範囲に散在する状況で検出された。検出面は集石 9 号及び集石 10 号よりも下面となる。

なお, 掘り込みは確認できなかった。

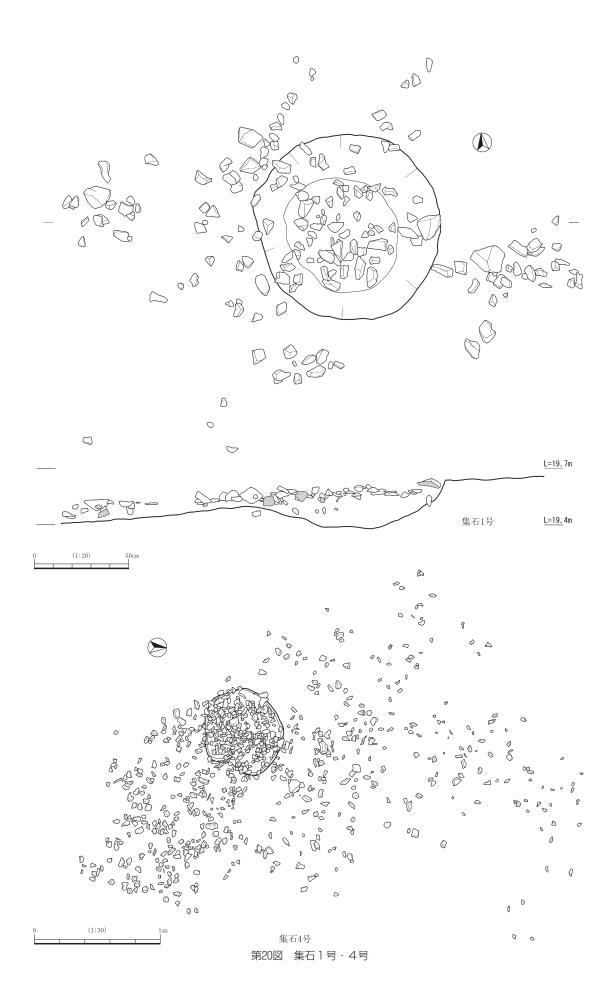
構成礫 構成礫は、安山岩が多く、他に頁岩や凝灰岩が みられた。また、礫に被熱痕跡は認められなかった。

集石7号 (第23図)

検出状況 D-16 区、Ⅲ層上面で検出された。 **形状・規模** 200cm × 130cm の範囲に礫が集中し、その 周囲にも礫が散在する。遺物は出土していない。

集石5号(第24図)

検出状況 B-28 区、Ⅷ層上面で検出された。 **形状・規模** 224cm×190cmの範囲に礫が散在する。



遺物は出土していない。

集石8号(第24図)

検出状況 D-16 区, WI 層上面で検出された。

形状・規模 80cm×75cm 程度の範囲に礫が集中し、 その周囲にも礫が散在す る。遺物は出土していない。

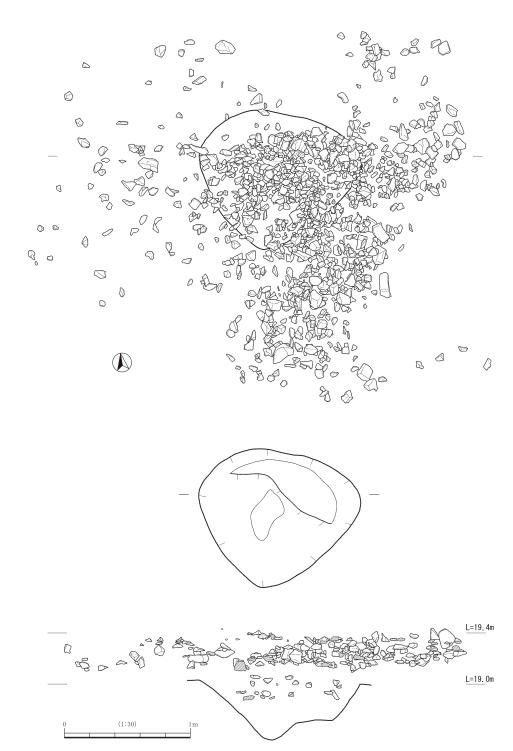
(3) 土坑

土坑は、埋土がIV層もし くはV層と非常に類似して おり、検出が困難であった。 周辺と比較して遺物や礫が 集中する箇所や、色調が居 囲より暗く微細な炭化物を 含む土等が見られた場合、 平面的な精査又はサブト確認 等を行った。また、必い、逆 茂木痕跡の有無の確認を 行った。

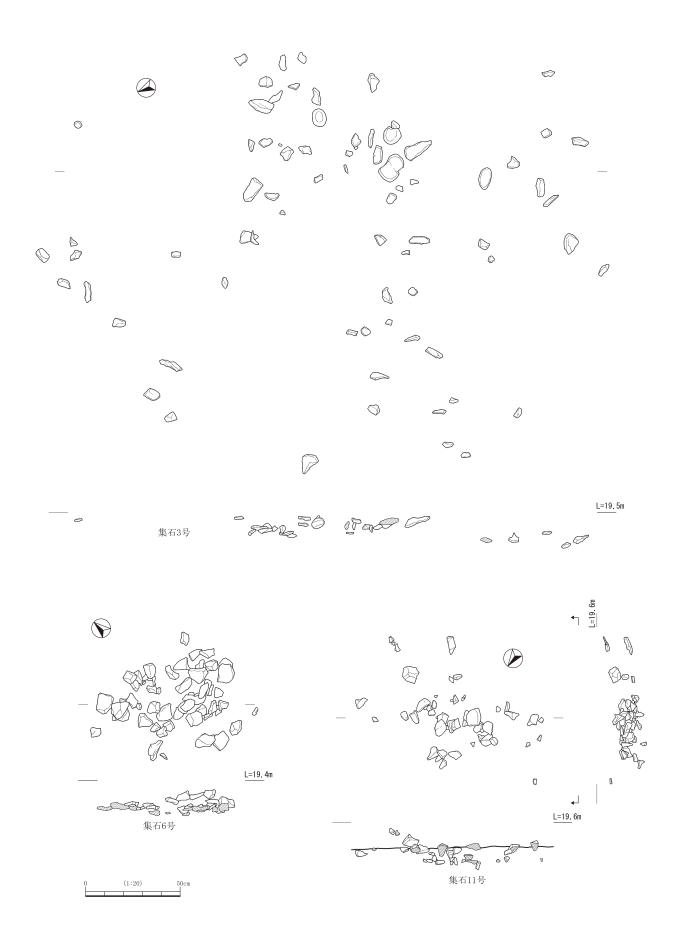
土坑3号(第25図)

検出状況 土坑3号は, D

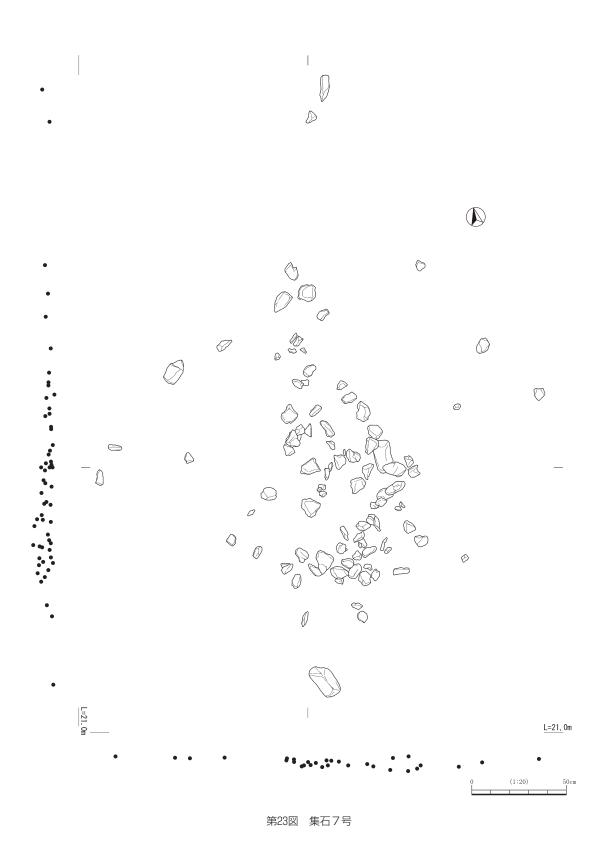
-23区のIV層をやや掘り 下げた面で検出された。IV 層掘削時に、扁平な砂岩が 立位で検出されたため, 周 辺での遺構の精査を行った ところ, 周辺よりもやや色 調の暗い土の堆積が確認さ れた。調査は、土坑の中央 付近から掘り下げを行い. 床面及び壁面の検出を試み た。埋土が検出面の色調と 似ていたため、主軸に沿っ てサブトレンチを設定し, 掘り込みの確認を行った。 形状・規模 規模は長軸 130cm, 短軸 111cm で, 平面 形は略円形である。掘り込 みは、IV層からVI層の上面 まで至る。検出面からの深 さは18cmで、断面形は、床 面は平坦で、壁面はやや外



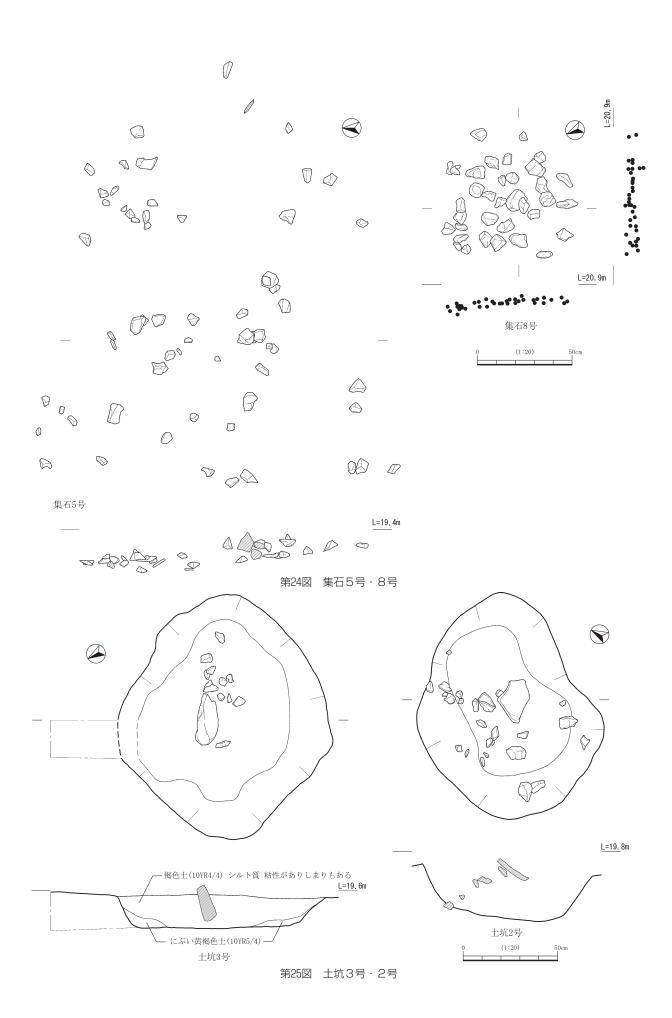
第21図 集石2号



第22図 集石3号·6号·11号



- 29 -



傾し立ち上がる。

埋土 埋土は、褐色土で土坑4号に類似するが、黒褐色のブロックを含む点で異なる。埋土中には、上記の扁平な砂岩の他に小礫が11点含まれていた。

土坑2号(第25図)

検出状況 B-28 区のIV層で検出された。 $B\cdot C-27\cdot 28$ 区の集石 6 基の東側に位置する。

形状・規模 平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長軸 117cm、短軸 89cmであり、検出面からの深さは 30cmである。断面形は床面がほぼ平坦で、壁面はやや外傾する。 埋土 埋土は茶褐色土である。また、土坑の中央部を主として、埋土中に礫が混入している。

土坑 1号(第26図)

検出状況 B-27区で、検出された。

形状・規模 平面形は不定形を呈する。規模は、長軸 146cm, 短軸 110cmであり、検出面からの深さは 24cmである。断面形は、床面はほぼ平坦で、壁面はわずかに外傾し立ち上がる。

礫の状況 礫は一部が床面から検出されている。

土坑4号(第26図)

検出状況 C-24区のⅣ層掘削中に検出された。土坑 3号と同様に,周囲と比較して色調が暗く粘性のある土が円形に検出された。また,図化はしていないが,検出 面付近に礫が数点みられた。

形状・規模 規模は長軸 118cm,短軸 115cmで,平面形は略円形である。掘り込みは、IV層から一部IV層にまで至り、検出面からの深さは 19cmで、断面形は、床面は平坦で、壁面は八の字状に立ち上がり、すり鉢状を呈する。埋土 埋土は、微細な炭化物をわずかに含む黄褐色土及び明褐色土がレンズ状に堆積する。埋土中に遺物は含まれなかった。

土坑5号(第26図)

検出状況 土坑 5 号は、C-24 区で検出された。東側に土坑 4 号が位置する。土坑 5 号は平面的な遺構精査では確認できず、土坑 4 号を断ち割った際のトレンチの西壁で掘り込みが確認された。したがって、遺構の東側は消滅している。

形状・規模 規模は長軸 100cm, 残存する短軸 65cmで, 平面形は東西方向に潰れた楕円形である。掘り込みは, IV層から WI層にまで至り, 検出面からの深さは 27cmである。断面形はすり鉢状を呈する。

埋土 埋土は、土坑 4 号と同じく微細な炭化物を含む黄 褐色土及び明褐色土がレンズ状に堆積する。また、埋土 中に遺物は含まれなかった。

土坑6号(第27図)

検出状況 D-24区のV層上面で検出された。検出面付近では、周辺と比較して土器や礫がある程度まとまって散布していた。遺物取り上げ後、遺構の精査を行ったところ周囲より色調の暗いシミ状の広がりが確認されたため、サブトレンチを設定し、掘り込み等の確認を行った。

形状・規模 規模は長軸 182cm, 短軸 151cmで, 平面形は楕円形である。検出面からの深さは 25cm程度で, 断面形は, 床面は平坦で, 壁面は八の字状に立ち上がる。 埋土 埋土は, 微細な炭化物を含む褐色土及び暗褐色土が北東方向から流れ込んで堆積した状況が確認された。 遺物 埋土中から土器が 3 点出土し, そのうち 1 点を報告する。1063 は, (5) 遺物で示す分類の 3 類 (中原式土器) に相当する。胴部片で, 内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。胎土には角閃石や小礫が多く含まれる。

(4) 落とし穴状遺構

落とし穴状遺構は、C-16 区で1基、D-15 区で2基、D-16 区で1基、E-15 区で1基を検出した。一般的な土坑とは逆茂木痕跡の有無で区別している。全て中央に1本の逆茂木を有するタイプで、平面形は1号と5号が略楕円形、2号~4号が略円形を呈する。調査は、まず半截し、その状態での記録を作成し、その後断ち割りを行い、スライスすることで逆茂木痕跡の把握を行った。

落とし穴状遺構 1号 (第28図)

検出状況 D-16区のⅢ層上面で検出した。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸 105cm, 短軸 69cmであり、検出面からの深さは 72cmである。断面形は床面がほぼ水平で、壁面はやや外傾し、立ち上がる。中央部に径 15cmの逆茂木の痕跡が残る。

埋土 埋土はV層で, 逆茂木痕跡には黄色のパミスを含んだ乳白色土が堆積する。

落とし穴状遺構4号(第28図)

検出状況 D-15区のⅢ層上面で検出した。

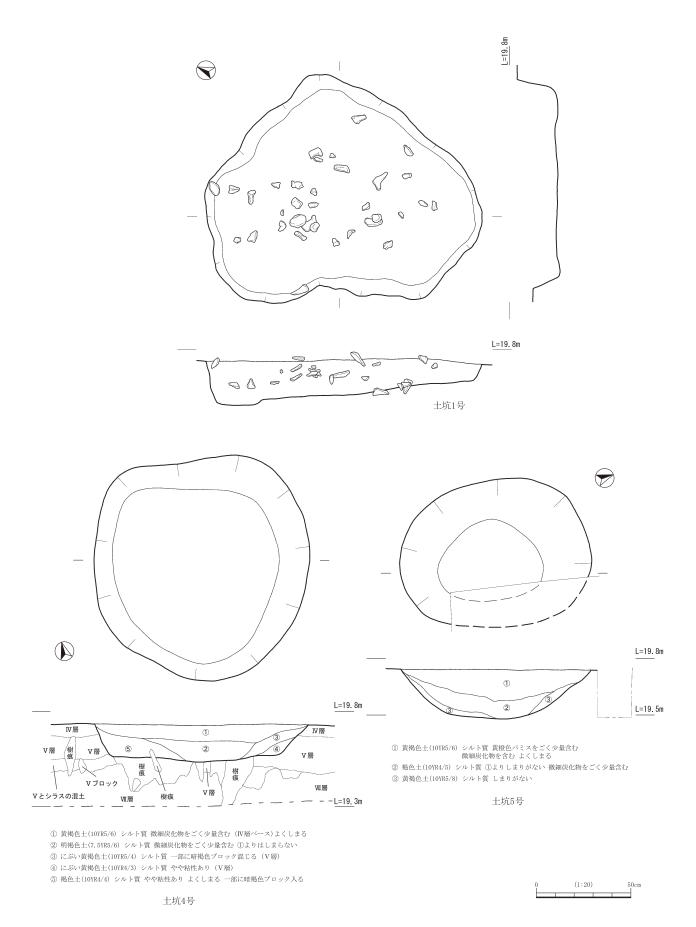
形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸120cm, 短軸111cmであり、検出面からの深さは57cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾する。中央部に径15cmの逆茂木の痕跡が残る。

埋土 埋土はV層の暗茶褐色土である。

落とし穴状遺構3号(第28図)

検出状況 C-16区のⅧ層上面で検出した。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸137cm, 短軸126cmであり、検出面からの深さは90cmである。断 面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾し立ち上



第26図 土坑1・4・5号

がり、上部でラッパ状に開く。中 央部に径 10cmの逆茂木の痕跡が残 る。

埋土 V層を基調とする。

落とし穴状遺構2号(第28図) 検出状況 D-15区のΨ層上面で

検出状況 D-15区のⅢ層上面で 検出した。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸 132cm、短軸 120cmであり、検出面からの深さは 90cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾する。中央部に径 23cmの逆茂木の痕跡が残る。

埋土 埋土はV層をベースとし, 一部にⅥ層がブロック状に混じる。 逆茂木痕跡には黄褐色土が堆積す る。

落とし穴状遺構5号(第28図)

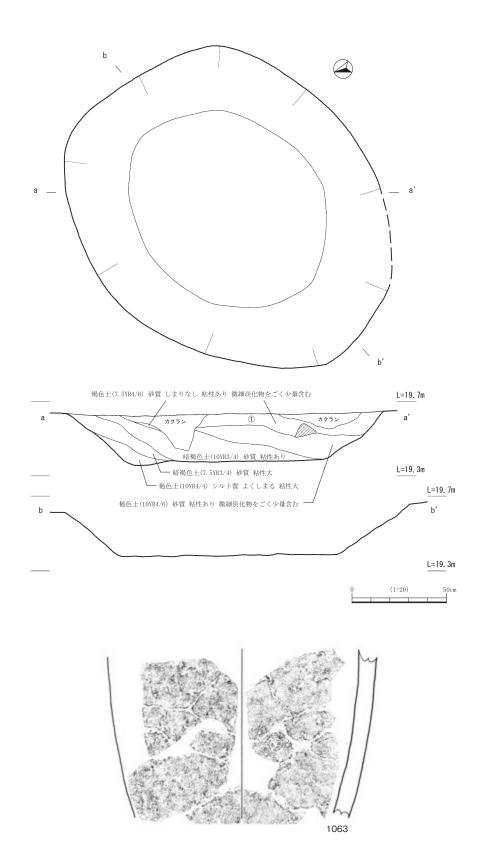
検出状況 E-15区のⅧ層上面で検出した。地山が削平されているため、残存状況は悪い。

形状・規模 平面形は略楕円形を 呈する。規模は、長軸 150cm,短軸 107cmであり、検出面からの深 さは 72cmである。断面形は、床 面はほぼ水平で、壁面は垂直に立 ち上がる。中央部に径 27cmの逆 茂木の痕跡が残る。

埋土 埋土は、V層をベースとする暗茶褐色土~灰黄色土がレンズ 状堆積を呈する。

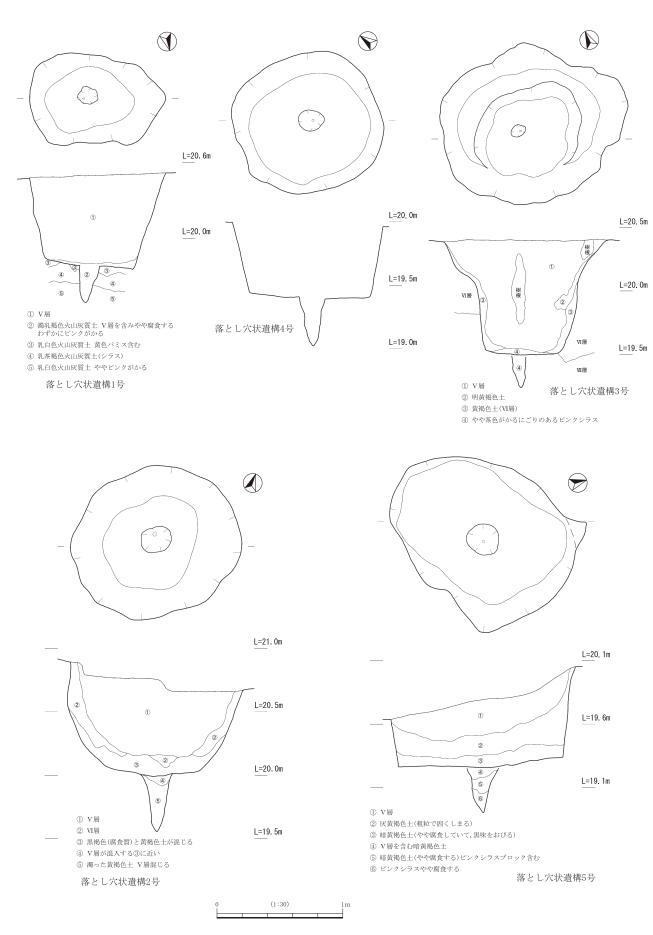
地層横転内の礫の集中について (第29図)

横転内礫集中1号,横転内礫集中2号及び横転内礫集中3号は,地層の横転内に礫が集中して検出された。これらの礫は、いわゆる集石なのか、もともと散布していた礫が地層の横転に巻き込まれたものなのか、或いは、地層横転後のある時期に自然に散布したものなのかは判断できなかった。

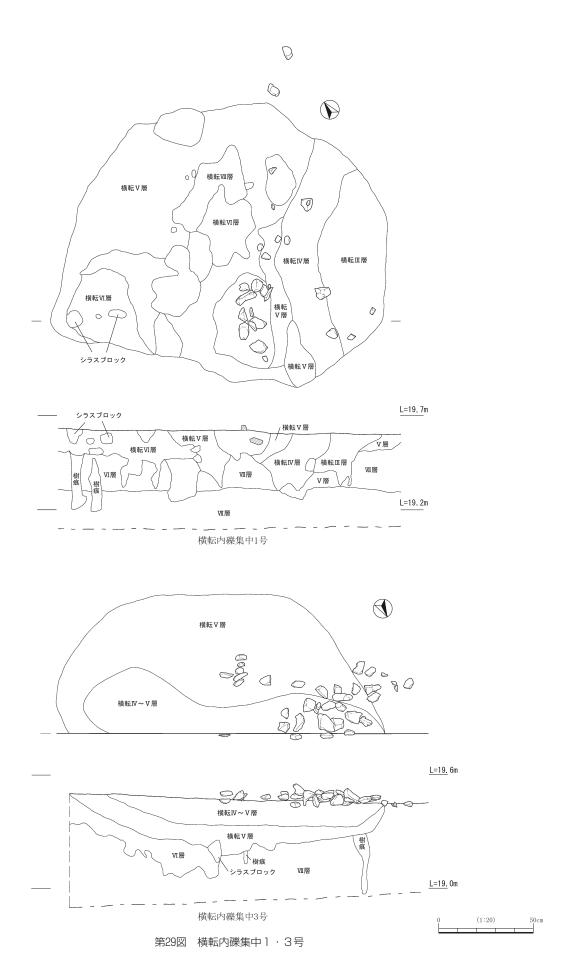


第27図 土坑6号及び出土遺物

- 33 -



第28図 落とし穴状遺構 1~5号



(5) 遺物

ア 土器

縄文時代早期を中心とした土器が出土しており、それらを中心に14類に区分した。

1類 加栗山式土器 (第30図14・15)

14 は器壁が薄く,内面整形を縦方向に工具でナデており,器面には縦方向に貝殻腹縁刺突線文を施文する。15 も縦方向の貝殻腹縁刺突文が確認できる資料で,14 と同種の円筒形土器の下位に相当すると見られる。

2類 石坂式土器 (第30図16・17)

16 は口縁端部が外反し、口唇部は貝殻腹縁部で横に刻み、外反部には貝殻腹縁刺突文を斜位に施す。胎土に0.1cm前後の白色鉱物に加え、0.3~0.5cm程の小礫が含まれる。17 の口縁部は直行し、部分的に瘤状にふくらむと見られる。胎土には小礫は認められないが、白色鉱物は多量に含まれる。

3a類 中原 I 式土器 (第30 図 18~20, 23)

18~20は"貝殻腹縁による連続刺突文が、口縁部近くの狭い範囲に施文される"もので、これら施文形態から中原 I 式土器として一括した。これらの共通する特徴に施文方向が縦位であることが指摘できる。

18の口縁部は若干外反する可能性がある。 19の口唇部は平坦面で、口縁部直下に貝殻腹縁部を斜めに平行して刺突し、刺突文間の下位に殻頂部を斜めに刺突する。20は口唇部が失われるが、貝殻腹縁部をくの字に刺突する。23は貝殻腹縁を規則的に矢羽根状に刺突したもので、口唇部は丸みを成す。

3b類 中原Ⅲ式土器 (第30·31 図, 21·22, 24 ~33, 35~39)

"貝殻腹縁による押引文が、口縁部から胴部上位に施文されるもの"で、これらの施文形態から中原Ⅲ式土器とされるものを一括した。いずれも口縁部形状の残される資料で、小破片資料については図化に努めた。

21 の器壁は 0.6cmとやや薄めで、口縁部直下では鋸歯状に押引き、その下位では横方向に直線的に押引く特徴が見られる。22 は横方向に直線的に、24 も横方向の直線的であるが押引く間隔が密に行われる。25 は石英粒や輝石、角閃石を含み、丁寧な内面調整で光沢を帯びる。27 は浅く押引き、28 では口縁部直下 1 cm程の無文帯を残して微細な押引きが施され、器壁も 1.2cmと厚く、口径も大きくなるものと見られる。胎土の輝石と角閃石が特徴的で、0.3~ 0.5cm程の小礫の混入も目立つ。29 は、口縁部がやや内傾する形状が復元される。内面調整は丁寧なナデで、胎土の輝石と角閃石は共通している。なお、26 は内面にも押引文を施すもので、口唇部が尖り気味となり、傾きには若干疑問が残る。

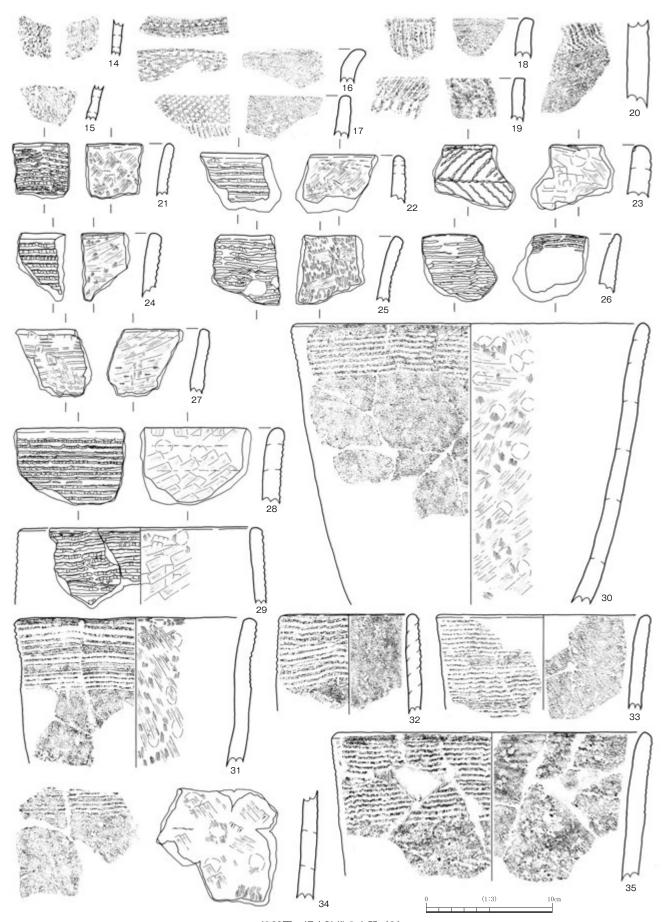
30 は重量感があり、胎土に含む白色鉱物が減少する反面、角閃石が増加する。施文は8筋の貝殻腹縁押引文を

口縁部に集中し、外面では工具ナデ、内面では指頭圧痕やミガキ状のナデ等の丁寧な仕上げが見られる。復元口径は28.6cmで、口径が最大となる形状を示し、輝石や角閃石の増加とともにやや大粒の白色小礫が胎土に含まれているが、底部形状は明らかでない。31 は、器面は橙から明褐色と赤く、白色小礫及び白色鉱物を多量に含み、特に内面はミガキ状のナデで丁寧に仕上げ、部分的には光沢が残されている。押引文は貝殻腹縁を重複する傾向が認められる。32 は11.5cmと口径は小さく、口唇部は丸い。31 と同様の特徴を持つが、より重量感があり、胎土に含む白色鉱物が減少する反面、角閃石等の黒色鉱物が多い。

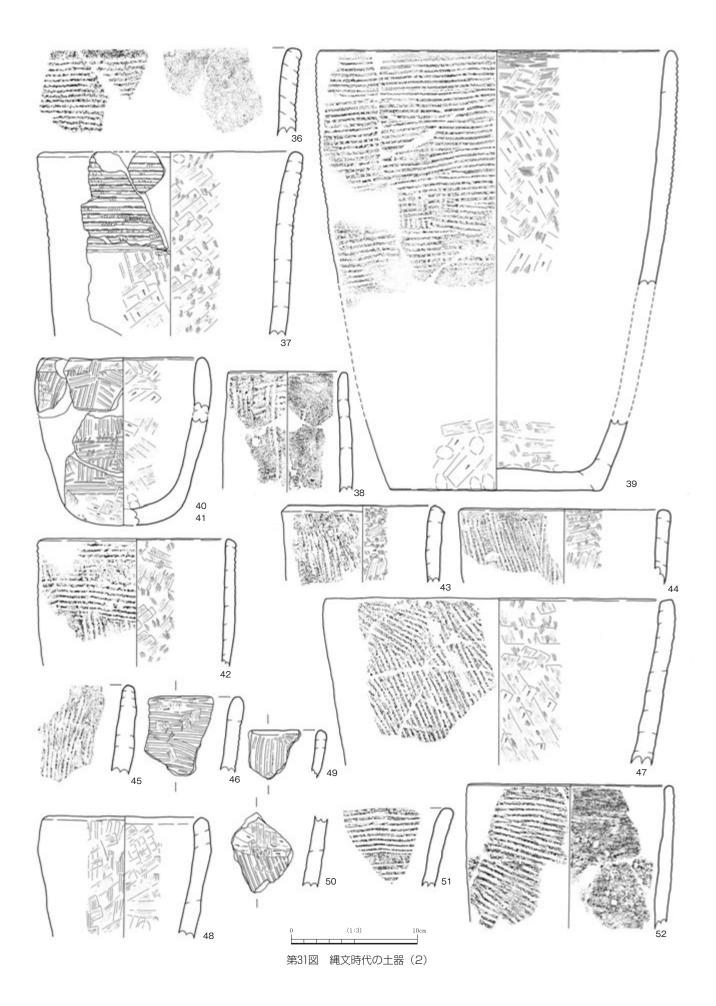
33 の器壁は若干薄く, 筋幅が若干狭くなる。34 は胎 土等から 31 と同一個体と見られ, 内外面共に指頭圧痕 やケズリやナデ, ミガキ等の丁寧な調整が見られる。

35 の復元口径は25.5cmで、器壁は1.5cmと厚く、含ま れる白色鉱物は 0.5cmを超すものも併せて、石英粒が目 立つ。36 はやや大振りの傾向が見られ、白色鉱物と角 閃石の混入が目立つ。内面調整は横方向の丁寧なナデ仕 上げが見られる。37 は石英粒や輝石、角閃石が多量に 含まれ、光沢のある器面を呈すが、0.3~1.0cm程の小礫 が含まれる。38は円筒形で、口縁部より胴部径が大きい。 器壁は厚く、施文帯以外は工具ナデの後、指頭圧痕が残 るが、丁寧なナデで器面調整を行う。5筋の腹縁部を口 縁部に平行に横方向に施文した後, さらに2筋の腹縁で 縦方向に10等分したと見られる。輝石や微細な石英粒 を中心に、角閃石の含有も目立つ胎土で、一部では光沢 を保ち、口縁部を中心に煤状炭化物が付着する。なお、9.5 cmの口径が復元でき、類似する32では押引文を口縁部 に沿って周回するが、38では横方向の条線状に周回す る押引文を直行する条線で部分的に断ち切る。

39 は貝殻腹縁条痕文を広範囲に施したもので、胴部 と底部は直接接合していないが、同一個体と判断し、そ の復元図を試みた。その結果、円形で平坦な接地面の底 部から緩やかに開きながら立ち上がる円筒形土器で、底 部を1とすると、口径と器高は1.7:2.1の比率となる。 具体的復元では口径 28.8cm, 底径 16.8cm, 高さ 35.0cmで, 器壁の平均値は1.3cmと厚く,内面は斜めに成形した後, 口縁部付近から口唇部にかけては丁寧にナデて、口唇部 は丸く仕上げる。胴部上部から口縁部にかけては、6筋 程の貝殻で横方向の条痕文が充填されるが、胴部下位で は縦方向の条痕地文に横方向の条痕文を重ねた部分も見 られ、一見押引文の伝統を継承している可能性も感じら れる。底部は安定した平底で、胴部より小さく準備した 平坦な接地面を胴部との間に粘土を継ぎ足し仕上げてい る。総じて器面は赤く、胎土に含まれる最大 0.3cm程の 白色鉱物や石英粒や輝石、角閃石が印象的で、併せて 37 同様光沢のある器面を呈している。



第30図 縄文時代の土器 (1)



3c類 中原V式土器 (第31 図40~52)

丸底で "胴部器面の広い範囲に貝殻腹縁による条線文が施文される"ものを、中原 V 式土器とした。

40,41は石英粒や黒色鉱物を多量に含む胎土で、中には 0.5cm程の小礫も認められる。なお、40 が 41 の口縁部の可能性が高いことから、図上復元を試みた。その結果、口径 13.0cm、高さ 13.3cmの小型の丸底鉢形土器が復元された。器壁は 1.3cmと厚く、貝殻腹縁による条線文は縦から斜め方向施文が先行し、胴部下位の横方向はそれらに直行して重ねられる。底部及び内面ともに丁寧にナデで仕上げている。

42では上部に横方向の貝殻腹縁条線文帯を 6.0cm程の 幅で施す。その下部に縦方向の貝殻腹縁条線文を施すが 縦方向が先行する。口径は15.0cmと小振りであるが、器 壁は 1.0cmと厚い。口唇部は外に傾き, 浅黄色の胎土は白 色鉱物や赤色粒、角閃石を含み、内面調整は指頭圧痕や 丁寧なナデにより仕上げている。43の復元口径は13.0 cmと小さく、44 は 16.6cmとやや大きく、形状は円筒形 を呈す。45の口縁部は丸く、やや水平性に欠ける。3 点とも縦方向に施文し、43では白色粒の含有が目立つ。 47 は復元口径 27.6cmと最大で、開きながら立ち上がる 形状が復元される。器壁も 1.4cm程と厚く、小礫や白色 鉱物、角閃石の含有が特に目立つ胎土で、内面はナデや ミガキで仕上げ、浅黄色の器面を呈している。51,52 は横方向の貝殻腹縁条痕文で、52では16.6cm程の口径 が復元され、47、52では明瞭な条痕文が横方向から斜 めに施される。48は縦方向の条痕文に工具を縦方向に 重ねて、ナデ消しているもので、口縁部はやや内傾気味 に立ち上がり、器壁は1.3cmと厚い。

4類 下剥峯式土器 (第32 図53·54)

53 は貝殻腹縁部を並行に重ねて刺突(横位の貝殻腹縁刺突文線文)したものである。口唇部は平坦で、器壁は 0.9cm程と薄手であるが、粘土帯接合痕が観察できる。54 も同類であると考えられる。

5類 下菅生B式押型文土器(第32~34図)

下菅生B式押型文土器に属するもので、格子目押型文 を a. 楕円押型文を b. 山形押型文を c とした。

5a類 格子目押型文 (第32 図55~59)

外面に格子目押型文を持つもので,55,56 が口縁部,57,58 が胴部,59 が底部資料である。

55の口縁部の角度については推定の域を出ないが,56では16.4cmの口径が復元でき,口縁部方向に直線的に開きながら立ち上がる形状が想定できる。なお,直接は接合しないが,59の平底が存在する。これは,橙色の器面や胎土等は類似する点が多いことから,同一個体の可能性がある。なお,横位の押型施文と見られ,内面はミガキ状にナデて平滑に仕上げている。57については施文具が明確ではないが,同列に配置した。

5b 類 楕円押型文 (第32図60~74·第33図75~79)

外面及び口縁部周辺に楕円押型文を持つもので、外面には横位施文 $(60 \sim 62)$ と縦位施文 $(63 \cdot 64)$ がある。口縁内面では、横位施文 $(63 \sim 65, 67 \sim 70)$ 、原体条痕+楕円横位施文 (60, 76)、原体条痕+山形横位施文 (61, 73)、無文 (62, 66, 71)、原体条痕状刺突文 (72, 74) が認められる。

60 は緩やかに外反する内面に原体施文を施し、61 では口縁端部がわずかに外反する内面の狭い範囲に原体施文が見られる。62,75 も胴部下位資料と判断した。62 の白色鉱物の含有は少ない。75 では輝石類が多く含まれ、縦方向のミガキ状の丁寧なナデで仕上げられている。63 は外面が縦位、内面が横位施文で、口縁部が大きく外反する形状で、25.6cm程の口径が復元される。破片資料であるが重量感がある。64 は 63 と形状も同様で非常に類似する。

65 の復元口径は36.2cmで、口縁部から肩部に縦位押型文、肩部から胴部に単節縄文を施し、外面施文は2cm幅ほどの間隔で、縦にナデて帯状にナデ消す。68,69 にも同様な手法が見られ、胎土等の特徴から同一個体と思われる。

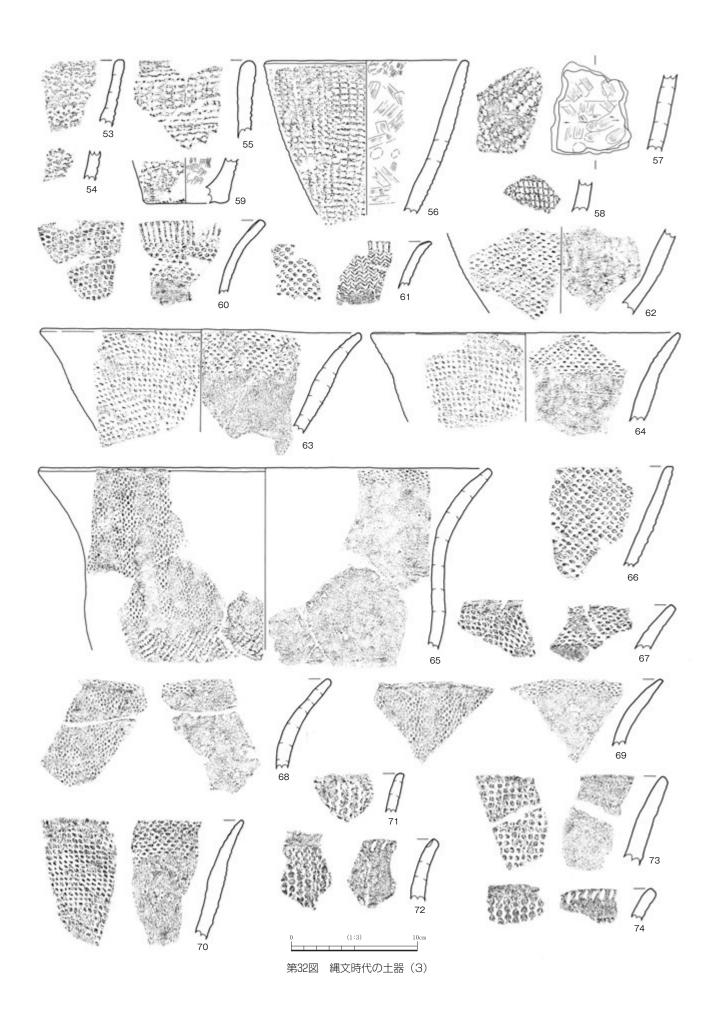
なお、65の楕円押型文は極小で、器面は砂粒の主体の胎土で粗いが、内面調整は丁寧にナデて仕上げている。66 は後述の75に近く、楕円間が明瞭で、施文も明瞭に残される。70 は、0.3cm前後の大量の石英粒や長石を含む砂質性の高い胎土を使用したもので、器面は他と比して粗い。72、74の原体条痕状刺突文は内面端部に深く明瞭に刺突する。75、77 は胴部下位で、75 の内面調整はヘラ状工具で丁寧なナデ調整を行い、77 は横位施文で胎土に含まれる大量の白色鉱物が特徴的である。

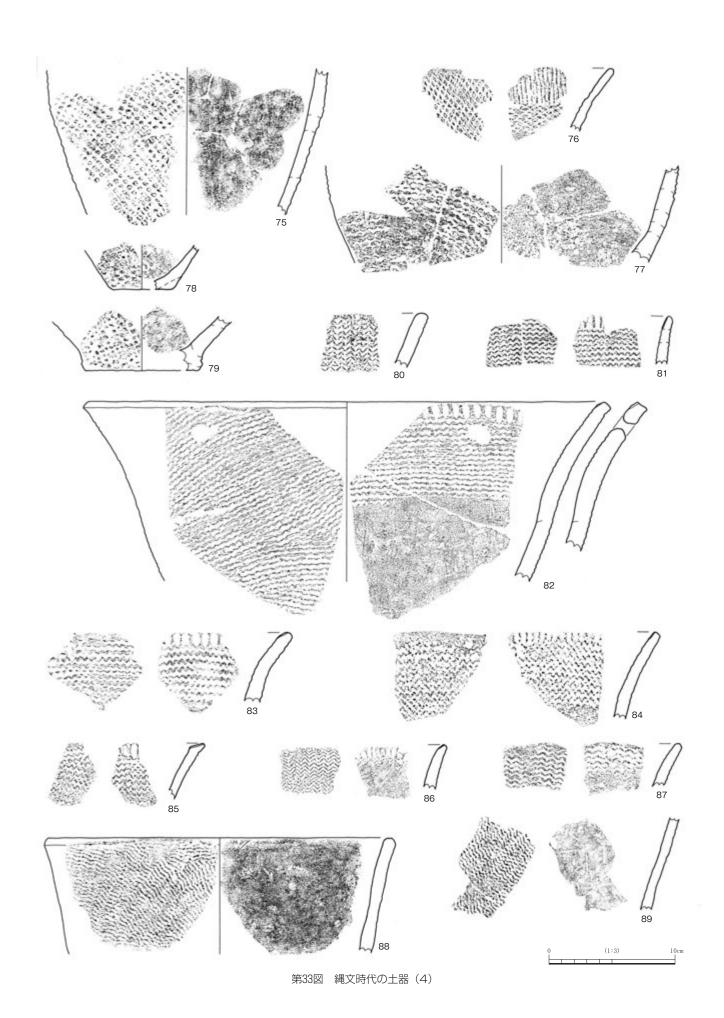
78 は平底である。79 は粘土板の貼り付けによる円盤状の形状を呈す。限られた底部での判断は難しいが、77 の胴部下位資料からは、丸底の存在も想定される。

5c 類 山形押型文 (第33·34 図80~108)

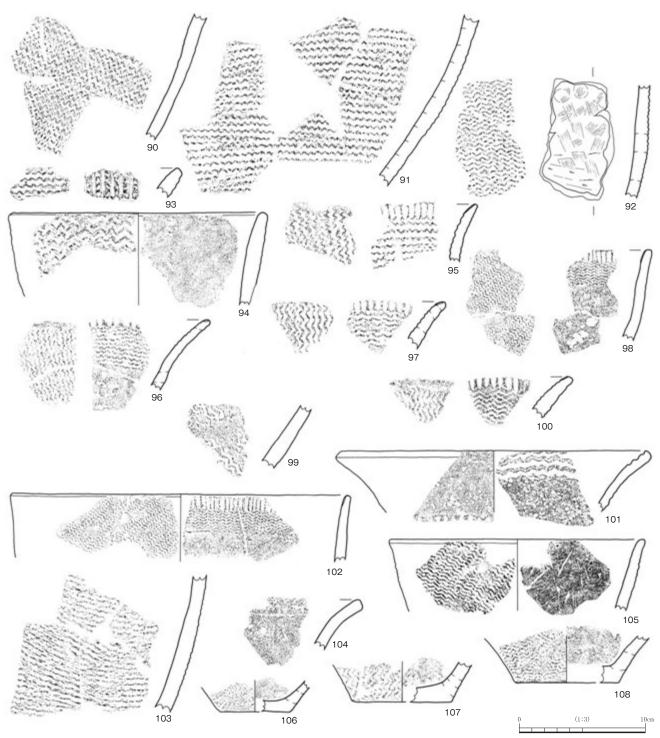
外面及び口縁部周辺に山形押型文を持つもので、外面には横位施文 $(80 \sim 94)$ と縦位施文 $(95 \sim 98, 100)$ があり、99では磨消手法が確認できる。一方、内面には原体条痕 (86, 93) や横位施文 (87, 101)、原体条痕 + 山形横位施文を併用したもの $(82 \sim 85, 95 \sim 98, 100, 102)$ 及び無文 (88, 94, 105) がある。

82 の復元口径は 42.0cm程で、口唇部は平坦になる。器壁は 1.5cm、補修孔はそれぞれ内外方向からの回転穿孔で行い、お互いの中心はズレる。内外面ともににぶい黄橙色で、内面は工具で丁寧なナデ調整で、外面上部には煤状の炭化物が残る。83 の復元図は提示していないが 27.0cm程の口径で、にぶい黄橙の特徴的器面を呈している。なお、91 との同一個体の可能性が高く、91 の復元からは内径上位が 42cm程の大型品と想定される。





- 41 -



第34図 縄文時代の土器(5)

85,86の原体施文は内面の狭い範囲に施す。92は丁寧な内面調整を示す資料で、ミガキ状のナデで調整を重ねた仕上がりが確認できる。90も石英粒や長石、輝石及び角閃石を多量に含む胎土である。

94の原体は最大規模で、大量に含む白色鉱物と輝石、角閃石を大量に含むため光沢のある器面が特徴的である。また黒曜石のチップも胎土中に確認できる。なお、内面は指頭等で横方向に丁寧にナデて仕上げている。ま

た、器壁が厚い。93の内面は横位施文の上位に、原体施文を重ねている。96の口縁部は大きく外反し、器壁も0.8cmと薄く、外面の縦位、内面の横位施文とも小型で端正な施文が見られる。石英粒等の輝石を多量に含む胎土を使用する。98の施文具は密で細かいものが用いられ、102と酷似する。なお、102と同一個体の可能性もある。103は天地不明である。101は内面横位施文である。口縁部外面は無文で、屈曲部に連続刺突文が見られる。

胎土には角閃石や黒色鉱物、赤色鉱物が多い。

106~108の3点の底部は全て平底で,106,108は横位施文,107には縦位施文が確認できる。

6類 手向山式土器 (第35・36図)

変形撚糸文施文を a 類, 単節縄文施文を b 類とし, 手向山式土器の範疇で捉えている。

6a類 変形撚糸文土器 (第35図109~122)

109 はC - 27・28 区出土の横位方向の変形撚糸文を施す1個体分の深鉢形土器の胴部資料で、器壁は薄い。にぶい橙色を呈し、外面は丁寧にナデた後に施文し、内面は丁寧なナデで仕上げる。石英粒や黒色鉱物、赤色鉱物を主体とする胎土で、角閃石等の明確な結晶鉱物は認められない。なお、出土位置は異なるが、D - 24 区出土の110 の胎土と酷似する。

110~119はC-24区, D-24区を主体とする一括 資料で、一部はV層出土で、122はC-23区V層出土 である。器形的特徴は、口唇部には施文を施さず、口縁 部は丸みを帯びながら大きく緩やかに外反する。胴部下 半で丸みを持ちながら、底部方向に緩やかにすぼまる形 状を呈する。110~113は口縁部施文帯から胴部上半に かけては縦位方向に施文し、114~116は横位方向に変 形撚糸文を施している。112 は特に器壁が薄く、口唇部 もやや先細りになり、内面調整も丁寧な横方向にナデて 仕上げている。胎土粒子も精緻であり、 金雲母を含有す るのはこの資料のみである。110, 113 は胎土や焼成等が 酷似するが、施文方向が逆転する。113は、おそらく工 具による丁寧な横方向のナデ調整が重ねて行われる。胎 土は基本的に精緻で、石英粒や輝石が目立つ。113と115、 117, 119 も石英粒や輝石が胎土に含まれ, 0.2cm前後の白 色鉱物の混入が特徴的である。116も白色鉱物を含むが、 若干粒子が小さく、輝石や角閃石が目立つ。122は白色 鉱物を含む胎土で、底径 13.2cm、底部は上げ底となる。

6b類 縄文土器 (第35図123~129)

123 は外面が明瞭で無いが、内面に横位の単節縄文を施した口縁部で緩やかに外反する。127 は胴部の一部と判断した資料で、単節縄文を縦位から斜め方向へ施文し、最上位で24cm程の径が、126 の最大部では26cm程が想定される。

124~127は、色調や内面の丁寧なナデ仕上げ、精緻な胎土などの特徴から、同一個体の可能性が高い。128は多縄文である。129は7類土器に見えるが、沈線状部は後世の傷である。

7類 塞ノ神A式土器 (第35·36 図130~135)

沈線文間に回転施文した網目状文(130~132)や撚糸文(133),単節縄文(135)を施した一群である。134も単節縄文の可能性が高いが、沈線文間に充填するものであり、沈線文からはみ出した施文は磨り消される。

131 はやや太めの撚糸を用いた網目文で、にぶい黄橙

色を呈し、赤みが少ない。器面の一部に煤状炭化物の付着が認められる。130、132 は細い撚糸を用いた網目文を施文するもので、白色鉱物の他に 0.5~0.6mm 程の小礫が含まれる。132 は破片上部に刺突文が 1 条施文されるが、胴部と頸部の境界に相当する可能性もある。134 は角閃石等の黒色鉱物を多量に含む胎土で、2 条の貝殻腹縁押引文が見られるが部位は明確でない。135 の内面調整は粗いケズリやナデで、内外ともに明褐色を呈し、石英粒や長石、輝石、黒色鉱物、さらに 0.2~0.3cm程の白色小礫の混入が特徴的である。なお、胴部上部では 34 cmの径が復元できる。出土点数が少ないが、施文手法にバリエーションがあることは興味深い。

8類 塞ノ神B式土器 (第36·37図136~149)

胴部資料を除く全てに貝殻腹縁刺突文と貝殻による沈 線文、条痕文が認められる。

136 は大型土器で重量がある。口唇端部を連続して刻み、外反する口縁部には1.4cm程の貝殻腹縁部を単独で口縁部に平行して浅く押引く。砂粒の多い胎土で、器面は粗い。138 は内面を丁寧に横方向にナデている。2筋の貝殻腹縁による押引き状の刺突文を横走させ、口唇部も同一工具で連続して刻まれる。139 の復元口径は23.0cmで、頸部屈折部は貝殻腹縁部で深く刻み、口唇部も連続して刻む。また、口縁部と胴部に同一工具で×状の平行沈線文を施している。なお、内面調整は粗いケズリとナデで、胎土に含む砂粒で器面は粗い。140 の屈曲は明瞭な稜線を残し、密な貝殻腹縁刺突文が施され、137では凹点状の連続刺突文が残される。

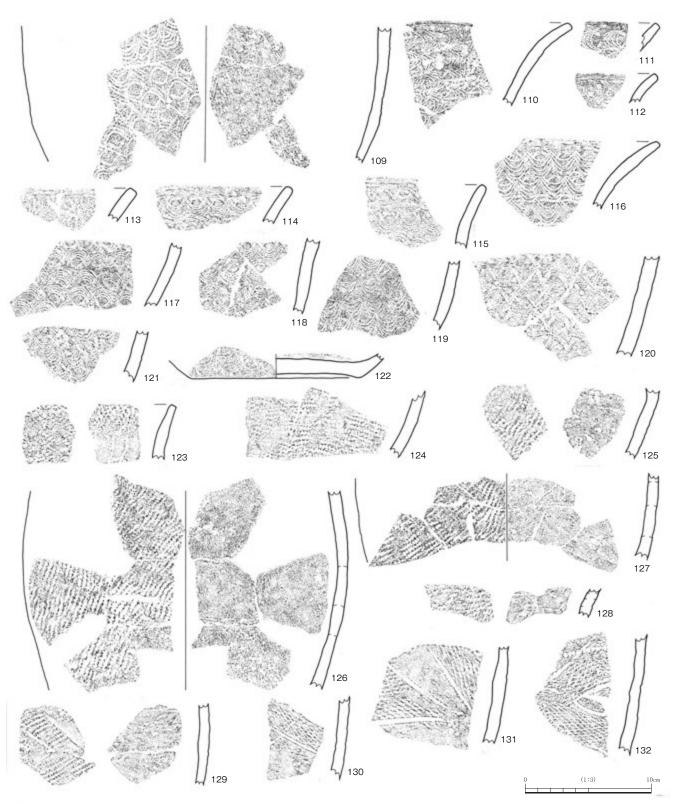
142, 146 は口唇部が残らないが、口縁部外面に貝殻腹縁による押引文が密に周回する。また、142 は 1.0cm程の貝殻腹縁部で押引いて口縁部を施文する。146 は明瞭な頸部の屈折をなし、0.5~0.6cm程の貝殻腹縁部で押引き施文する。内面は指頭圧痕やミガキ状のナデで丁寧な調整痕を残し、器壁は薄い。141, 143~145 は胴部資料で、148 は胴部と頸部の屈曲部と見られる。また、141, 143, 144 の胴部沈線文は貝殻条痕文を細沈線文で表したと見られ、施文方法は141と143 が類似する。144と145 は連続する押引文の下位を充填したもので、148 同様胴部と頸部の屈曲部に相当する可能性もある。147と149は、先行する平行沈線文間を貝殻条痕文で充填するもので、同一個体の可能性もある。

9類 轟式土器 (第37図150)

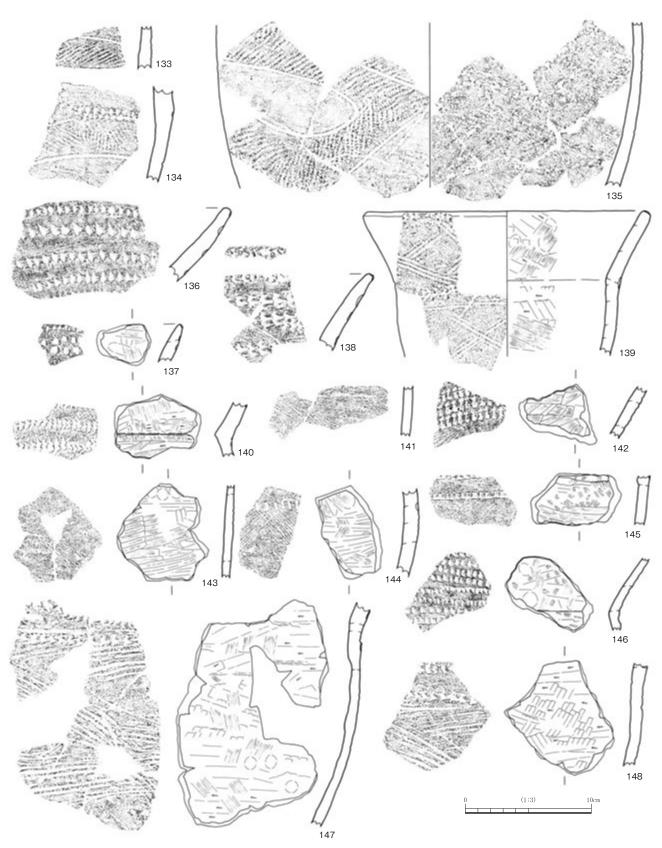
150 は口縁部である。薄手で内外ともに粗い条痕仕上げの器面に、極細の断面三角の隆起線文が5本以上周回し、口唇部は鋭利なヘラ状工具で深く刻まれる。器壁は0.8cm程と薄く、内面も粗い条痕整形となる。焼成は硬質で、胎土は長石等の白色鉱物が目立つ。

10 類 不明土器 (第37 図 151)

151 は胎土に多量の滑石が混入する。キャリパー状の



第35図 縄文時代の土器 (6)



第36図 縄文時代の土器 (7)



第37図 縄文時代の土器 (8)

形状を想定される。波状口縁を成すと見られ、その狭い 平坦な口唇部にも平行沈線文が施される。施文具は貝殻 と見られ、口縁部に沿うように横方向に刺突文を連ねて いる。

11類 沈線文土器 (第37図152・153)

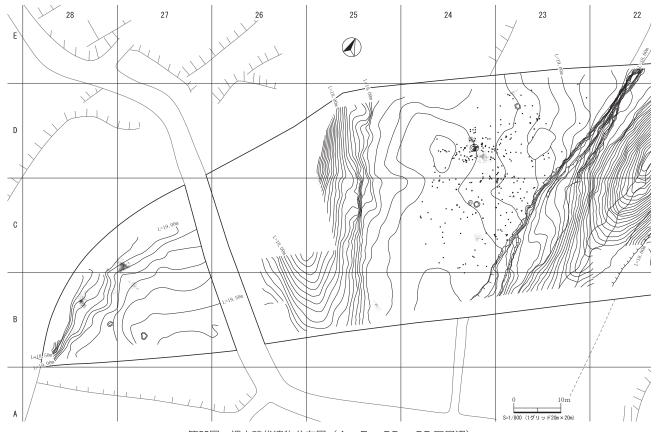
152 は平坦な口唇部と直線的に立ち上がる口縁部に沿って, 鋭利な工具による平行沈線文が周回する。153 は3条の沈線文が周回する口縁部で, 器壁の厚さや器面調整から深鉢形土器と見られるが判然としない。

12類 入佐式土器 (第37図 154~ 156)

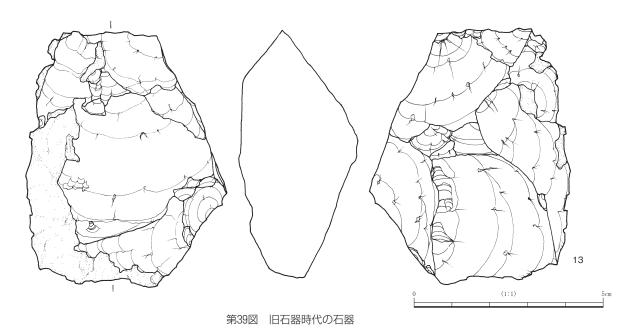
 $154 \sim 156$ は口縁部が大きく外に開く浅鉢形土器である。154, 156 の口縁部は直線的であるが,155 は波状でやや内湾し,胴部との境界に沈線文を残す。いずれも丁寧にミガキで調整される。156 は胎土に細粒の金雲母を含んでいる。

13類 黒川式土器 (第37図157~169)

157 は口唇部内側に沈線状の段を持つものである。口縁部は短く外反し、胴部以下は浅鉢形土器で、内外面ともに丁寧なミガキ調整が行われている。158 は口縁部が



第38図 縄文時代遺物分布図(A \sim E $-22\sim28$ 区周辺)



-47-

欠損したものである。

159~161, 163, 166 は鉢形土器である。160 は玉縁状の口縁部を持つ鉢形土器で、外面から焼成後穿孔される。161 は大型鉢形土器の口縁部で、底部に編布を圧痕する半粗半精製土器と見られる。167 はその編布圧痕底部で、内面はミガキ調整で、精製土器の特徴を表している。162 は小型の深鉢形土器で、器面調整は粗い。163~166 については器形がはっきりしないが、鉢形土器の一部と見られる。168, 169 は深鉢形土器の底部である。169 は平坦な接地面に加え、重量と安定感が備えられている。内面には煤状炭化物が付着する。

14 類 刻目突帯文土器 (第37 図170)

170 は、屈曲部に工具による深い刻み目が残される。 器種は不明である。

イ 石器

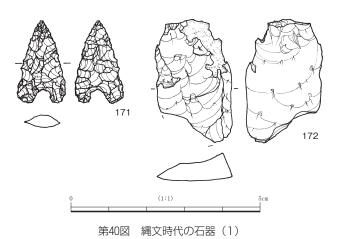
VI層、V層、IV層、III層、III層及び表土採集の区分に準じて取り扱うこととする。また、C・D-23・24区とC・D-27・28区の2つのエリアに集中する傾向があり、いずれも拠点的場所であったと判断される。なお、発掘調査で採取されている石器の中から旧石器時代に帰属すると判断したものについては形式的判断に基づき、一括して旧石器時代の遺物として取り扱っている。

(ア) VI層 (第40図171・172)

171 は石鏃である。D-16 区出土の半透明の良質の腰岳産黒曜石を素材とする。右側縁調整が丁寧で直線に近い。明らかに縄文時代層からの落下、混入と見られる。172 は剥片である。D-24 区出土で、上牛鼻産黒曜石を素材とする。右側縁部上部に礫面を残す。打面が平坦なことから分割礫を素材とした石核の可能性が高く、剥片の先端部は打撃により欠損する。

(イ) V層(第41~43図173~195)

173, 174 は石鏃である。173 はチャート製で正三角形



を成し、174 は安山岩製でやや長身で先端部を欠損する。 175 は、ナイフ形石器の先端部の可能性も考えられる。 断面三角形の剥片の右側縁に両面から二次加工を施しているもので、石材に含まれる気泡等の不純物から日東産 黒曜石製とみられる。176 はいわゆるトロトロ石器で、 チャート製である。厚手の二等辺三角形状の剥片を素材 としたものである。先頭部も鋭利に磨かれ、両側縁部と 表裏平坦面の面取りした6面全てに研磨を施している。

177 は剥片である。腰岳産の良質な黒曜石を素材とする。打面調整技術の存在が確認できる。178 は腰岳産黒曜石の残核と判断した。179~182 は剥片である。179 は右側縁部に微細剥離痕を持つチャート製である。180 は日東産黒曜石を素材とする。181 も腰岳産の良質な黒曜石で、ほぼ全周に両面からの微細な剥離痕が残される。

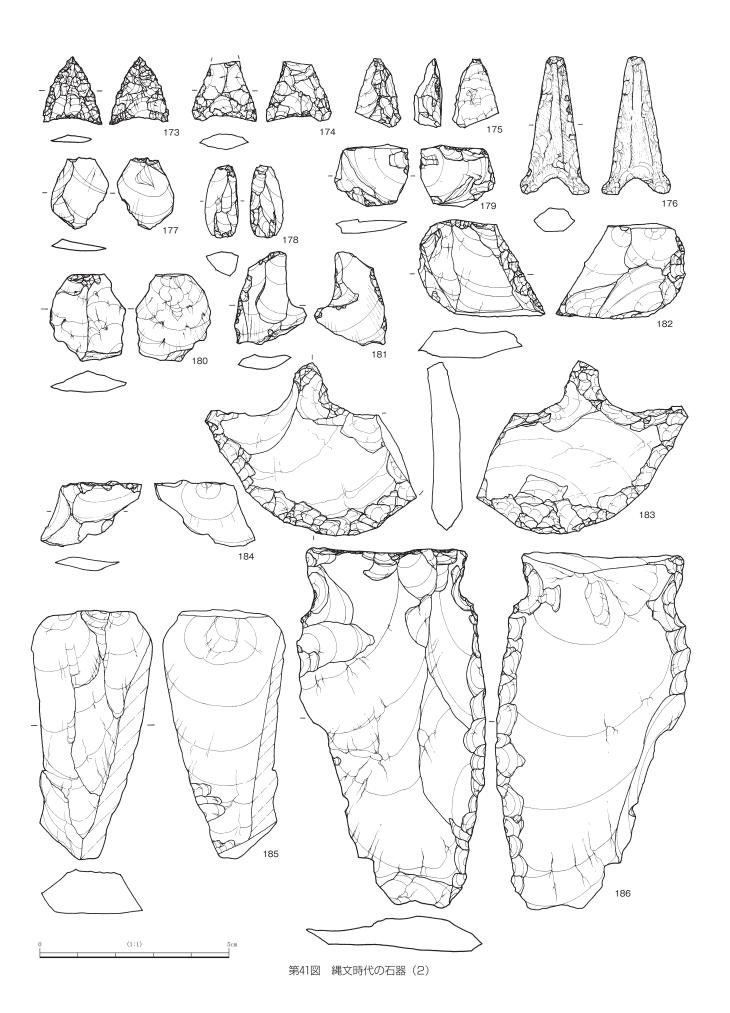
182 は左側縁腹面と右側縁部に二次加工痕及び微細な 剥離痕を持つ剥片で、打面及び底面共に平坦面を成す。 チャートを素材とする。183 は半月状刃部の石匙である。 上牛鼻産黒曜石で打面転移の見られる横長剥片を素材と する。刃部中央部の打瘤除去に多くの調整剥離が集中し ている。また、左肩部を欠損するが、右肩部は鋭利に成 形し、摘まみ部の発達は見られない。

184 は調整剥片である。185 は縦長剥片で,腹面左下部複数の剥離痕が残されるが,判断が難しい。

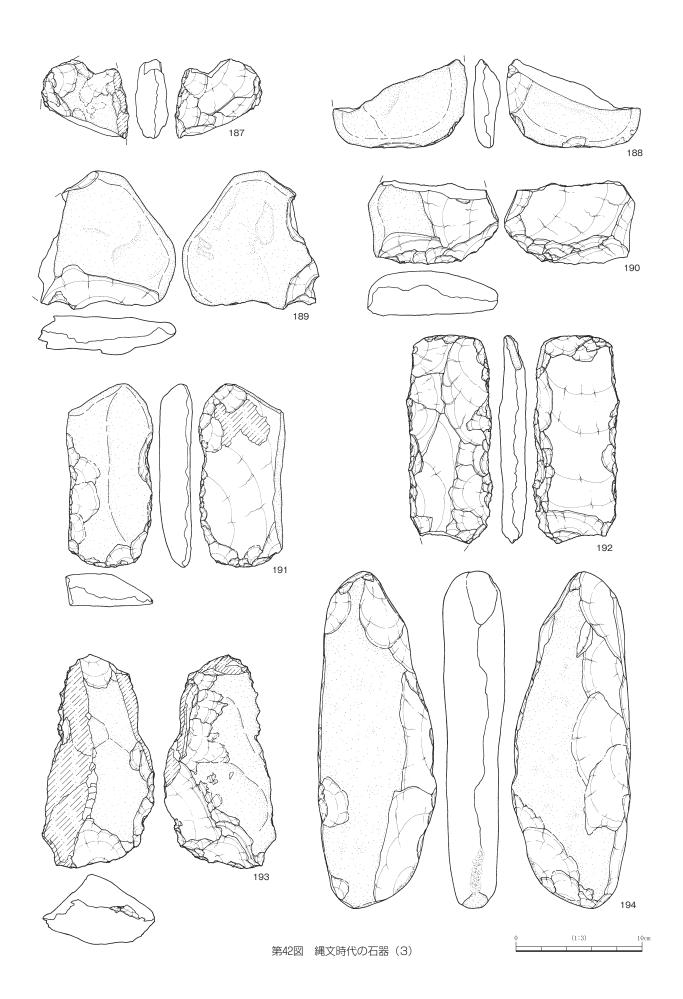
186 は縦長剥片素材の削器である。チャートを素材とする。打面は平坦面、上部両端に抉入部を持ち、右側縁全域と左側縁上部には両面方向からの刃部形成が行われる。187~190 はいずれもB-28 区出土の礫器及び石斧製作時の関連資料と見られる。187 は石斧の頭部、188 は石斧の刃部ないしは素材礫が想定される。189 は扁平な亜円礫の下端部を打ち欠いたもので、左側は欠損し、190 は両側からの剥離痕を持つ部分を下位に配置し石斧の刃部を想定しているが、上記3点を含め、器種の特定が困難な資料である。

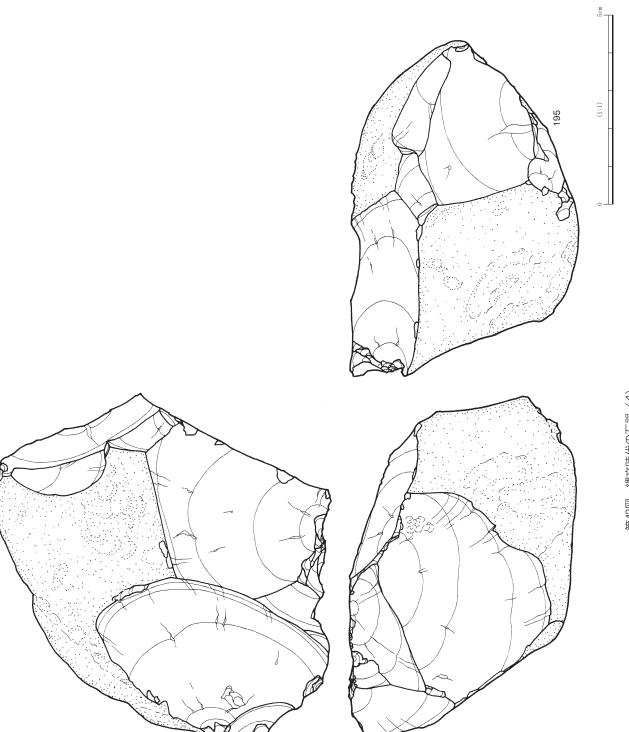
191~194は打製石斧として捉えている。191は風化が著しいが、表面は礫面、裏面は剥離面ないし節理面であり、下端部を中心に剥離成形が見られる。192は右側縁部頂部にわずかであるが礫面を残す、扁平な剥片を素材とした短冊形で、刃部は欠損する。裏面は剥離面の平坦面を活かしており、表面では側縁部からの入念な成形剥離が確認できる。193は左側縁及び右側縁上部が節理面で欠損したと思われる。石斧の一部が残されたもので、右側縁下部から下端部に剥離痕が見られる。194も風化が著しく進行する亜円礫で、明確な成形剥離は認定できないが、石斧の素材の可能性の高いものとして取り上げた。

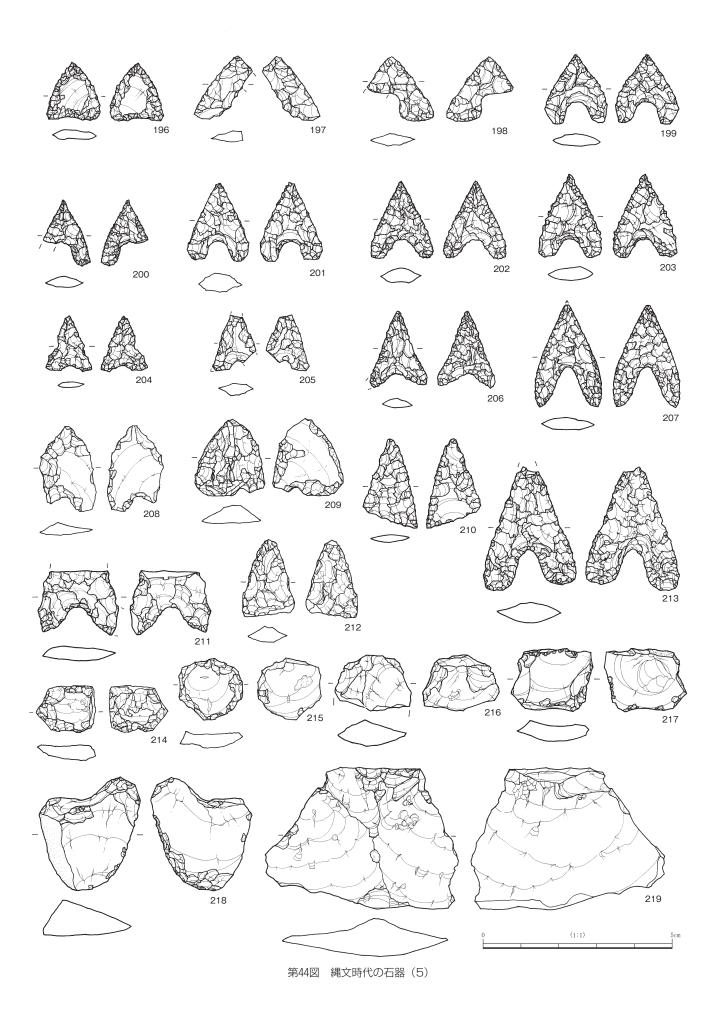
195 はD-23 区出土の針尾産黒曜石を素材とした石核で、扁平で幅広の不定形が剥出されている。



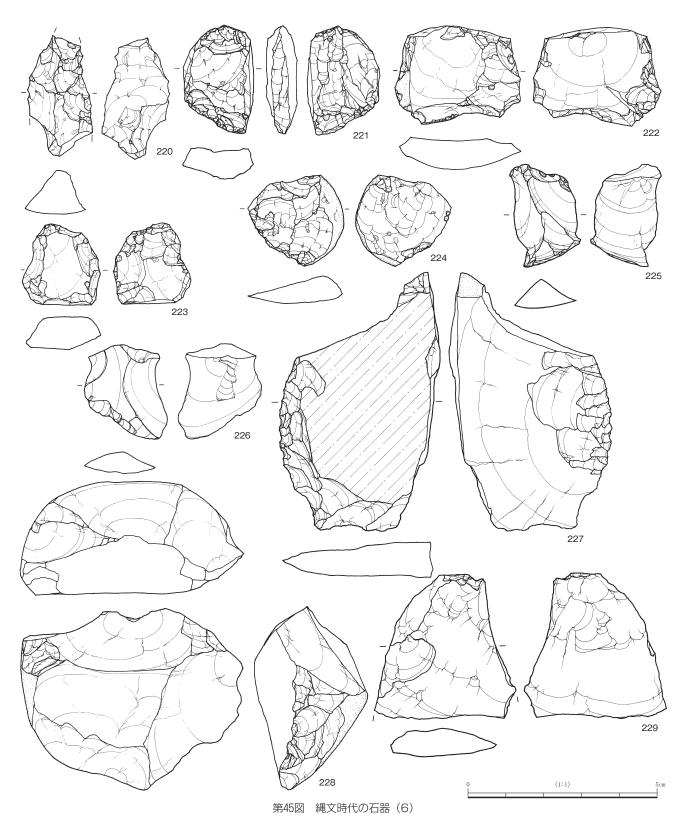
- 49 -







- 52 -

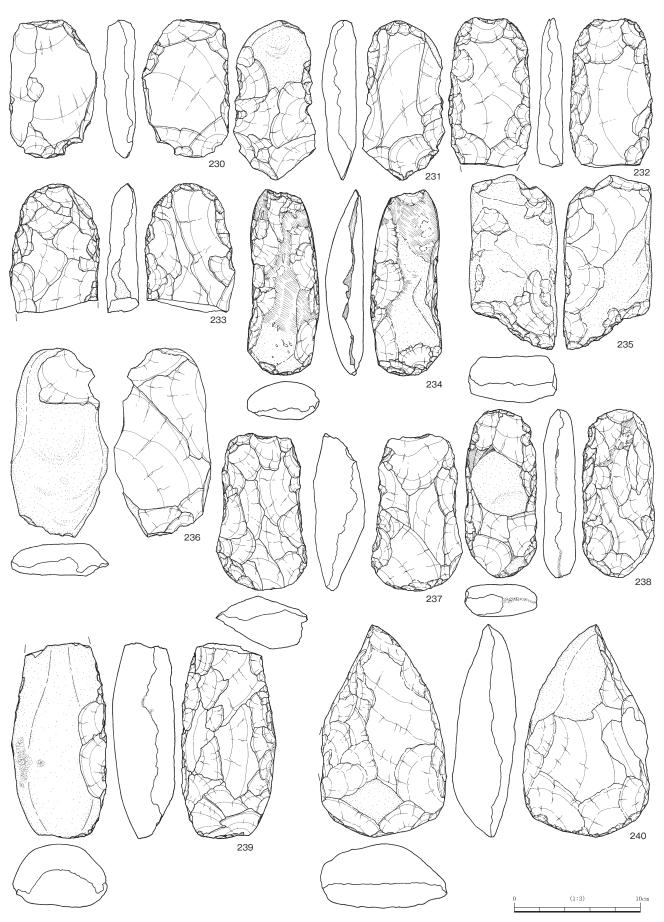


(ウ) IV層 (第44~47図196~249)

196 ~ 213 は打製石鏃である。 C - 24 区と B - 27 区 に集中して出土する。

196 は両面に素材剥離面を大きく残す正三角形鏃で、石材は桑ノ木津留産の黒曜石である。197~199 は正三角形のU脚鏃(鍬形鏃)である。片脚を欠くが、先端部

が鋭利に残る。197 は針尾産黒曜石,198,199 は桑ノ木津留産黒曜石を素材とする。199 は両脚の端部を丸く仕上げる。200~203 は形状の類似する U脚鏃である。200 が最も深く基部が抉られる。半透明の桑ノ木津留産黒曜石を素材とし、片脚は欠く。201~203 は完形品である。針尾産の灰色黒曜石を素材とした厚手の素材剥片

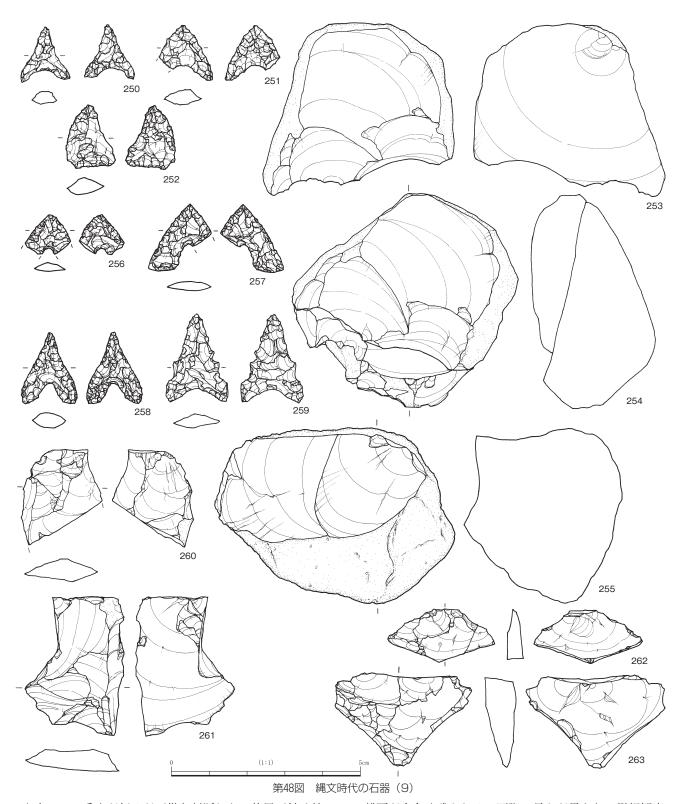


第46図 縄文時代の石器(7)



第47図 縄文時代の石器(8)

ら、遠隔地からの石材供給の存在が想定される。208は 断面三角形の扁平な剥片の肥厚する打面部を主に剥離し



たもので、重心が偏るが石鏃と判断した。使用石材は針 尾産黒曜石である。

209 は腹面をほぼそのまま残し、稜の高い背面に平坦 剥離状の調整剥離を加えたもので、腹面左隅が打点に相 当する。石鏃として報告するが、製品か否かについては 不明である。チャート製である。210 はチャート製の扁 平な剥片である。石鏃の未製品と思われる。腹面には剥

離面が大きく残される。両脚の長さが異なり、微細観察 では長脚側の剥離が細かく、摩滅の進行も認められる。

211 は本遺跡内では大型の石鏃である。使用石材は針尾産黒曜石である。側縁部は鋸歯状に仕上げた可能性が高い。212 はハリ質安山岩製の三角形鏃で、若干右側縁部を波状に仕上げ、側縁部のバランスを欠く。213 は本遺跡最大のU脚鏃である。先端部の一部を欠くが、微細

で入念な剥離が認められる。三船産黒曜石を素材とする。 214~219は剥片である。214は使用痕剥片で、三船 産黒曜石製である。215は桑ノ木津留産黒曜石を素材と する。円柱状の石核から連続して剥離した母指状の剥片 で、微細な剥離痕が見られる。216は折断剥片の打面側 (頭部)資料で、打面は平坦面である。日東産黒曜石製 で、二次加工等は見られない。217は腰岳産黒曜石製で、 ほぼ全域に微細な剥離痕を持つ。218の剥片先端部から 右側縁に、微細な剥離痕が見られる。チャート製である。 219は幅広の不定形剥片で、下端部は折断した可能性も ある。日東産黒曜石製である。

220 はナイフ形石器の側縁部ないしは基部の一部と見られ、稜の高い断面三角形の剥片を使用している。日東産黒曜石製である。221 は両側縁に樋状剥離を持つもので、彫器的機能も想定される。下縁部に両側からの整然とした剥離痕も見られることから、器種認定には至っていない。

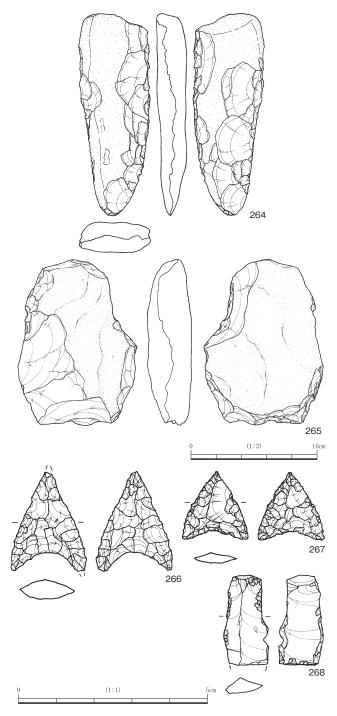
222~226 は剥片である。222 は打面が平坦な剥片である。下縁部が使用部であり、217 と類似する。なお、背面から腹面方向に使用痕が残され、さらに抉入状の曲線を成す。チャート製である。223 は厚さ0.8cm程のチャート剥片の周辺加工品で、背面はそのままに周辺部は腹面から急角度の剥離を行い、腹面は平坦な剥離で仕上げる。224 は分割礫素材石核の打面転移石核から剥出した剥片である。225 は平坦打面から剥離した剥片で、剥片の底面は石核の底面に相当する。腰岳産黒曜石製である。226 の打面は平坦である。

227 の背面は平坦面な節理面で、横長剥片の打点部両側に平坦剥離を施した削器と見られる。チャート製である。

228 は円礫を用いた稜上交互剥離の石核で、不定形な 横長剥片を剥出している。また、右側縁下部には使用痕 と見られる小剥離痕が残される。軟質頁岩製である。229 は撥形の不定形剥片で、下端部は折断した可能性もある。

230~240は石斧またはそれに準ずる資料である。230は半月形状の剥片の周辺部に二次加工が認められるもので、左側縁が厚く、右側縁が薄くなることから、横剥ぎの剥片の可能性もある。231の表面頭部には礫面を残し、裏面は風化が進行するが剥離面で構成する。成形剥離は裏面の両側縁が先行し、表面方向から再調整が加えられるが、刃部は欠損によるリダクションの可能性が高い。

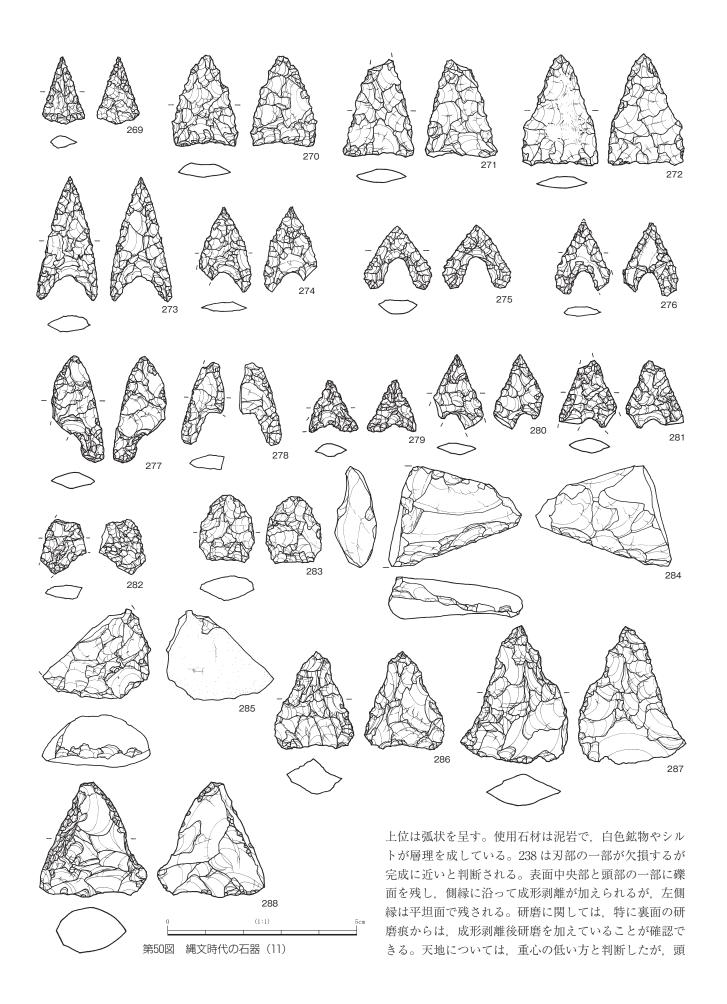
232 は幅 6.6cm, 最大厚さ 2.1cmの短冊形で, 刃部の一部が欠損する。使用石材は安山岩で, 横剥ぎの扁平剥片を素材としている。233 は幅 7.1cm, 厚さ 2.6cmの破損品の頭部と判断したもので, 剥片を素材としている。234 は完成品と判断される。両面に礫面が残ることから, 意図的に中央部がバナナ状に屈曲する亜円礫を素材として選択している。研磨痕は明瞭に残り, 最終段階で両側縁

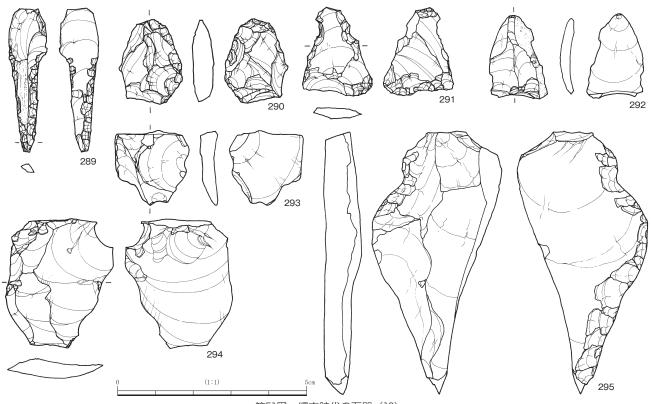


第49図 縄文時代の石器(10)

部へ研磨を加えている。天地については、重心の低い方と判断したが、頭部の研磨仕上げも丁寧なことから逆もあり得る。硬質砂岩製である。235 は長さ 13.9cm、幅 7.0 cm、最大厚さ 3.8cmの短冊状の角礫の端部に刃部形成と見られる剥離痕が認められる。なお、敲打具の可能性も想定され、繰り返し使用したことにより長軸が短くなったことも考えられる。

236の下端部裏面に見られる小剥離は、リダクションの可能性が高く、表面は礫面、裏面は剥離面で構成する。237は完成品と判断される。中央部が若干くびれ、頭部





第51図 縄文時代の石器(12)

部の研磨仕上げやくびれの位置等から逆も想定できる。 硬質砂岩製である。239の表面は礫面,裏面は分割面で 構成し,裏面の分割面に大小の成形剥離を加え,刃部は 丸鑿状に仕上げているが,研磨等の痕跡は認められな い。また,左側縁部を中心に敲打痕が残り,頭部を欠損 するが814gと重量がある。240は長さ16.7cm,幅10.1cm, 最大厚さ5.1cmの洋梨形を呈す。風化が激しく,詳細観 察が困難なことから人工品でない可能性もある。

241 はホルンフェルス製の剥片で、調整剥片と見られる。242 はハンマーストーンの可能性のあるもので、一部は欠損する。243 は全周を両面から円形状に加工した周辺加工石器で、凝灰角礫岩を使用する。244、245 は礫器である。244 は厚さ 3cm程の角礫で、下縁部を両側から、右側縁部は裏面から数回打ち欠いたもので、使用痕等については確認できない。剥離痕のある石器でホルンフェルス製である。245 は厚さ 3.5cm程の角礫の長辺の一端を、片側(裏面)から数回剥離したもので、使用痕等の確認はできない。左右両側縁の剥離は自然剥離で人為的なものではない。ホルンフェルスを素材とする。

246 は磨石と敲石の両機能を備える。248 は石皿片である。249 は横断面が蒲鉾状の石器で、刃部加工及び側縁成形は裏面方向から行っている。裏面は節理面で、天地逆の可能性もある。

(工) Ⅲ層(第48図250~255)

250~252は打製石鏃である。250は上牛鼻産黒曜石,

251 はチャートを素材とする。252 は変形の石鏃と考えられる。日東産黒曜石製である。

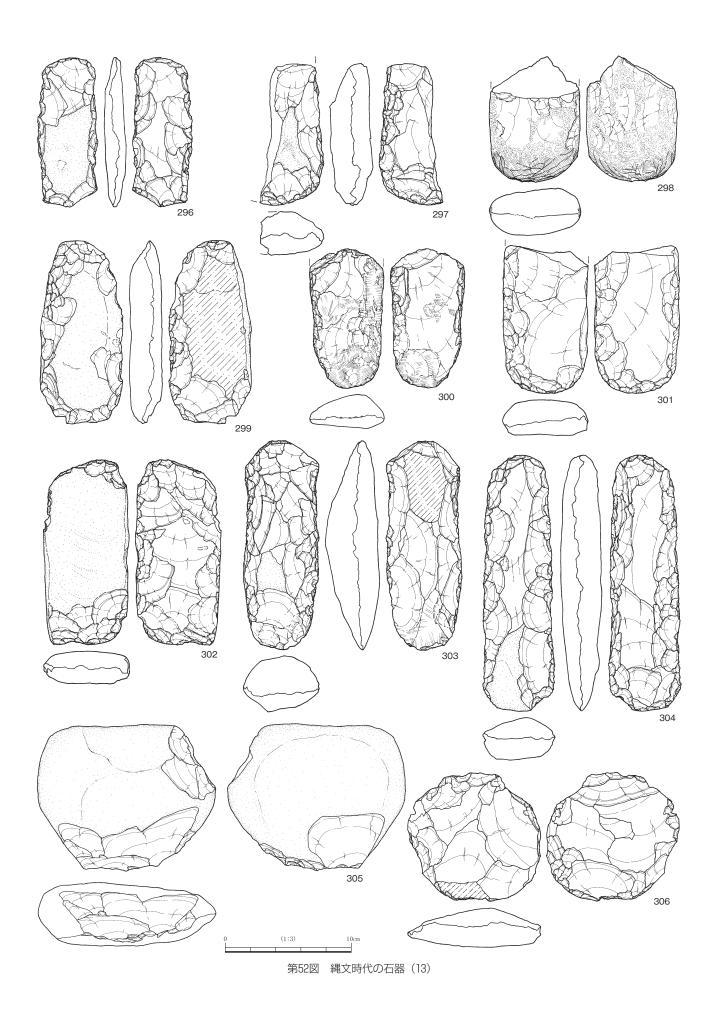
254 は霧島系黒曜石製の石核で、253 と接合することが判明している。255 は礫器である。円礫の平坦面を打面に、2~3回の打撃を加えたもので、目的剥片を剥ぎ取った痕跡は認められない。よって、試し割りした素材礫と見られる。針尾産黒曜石を素材とする。

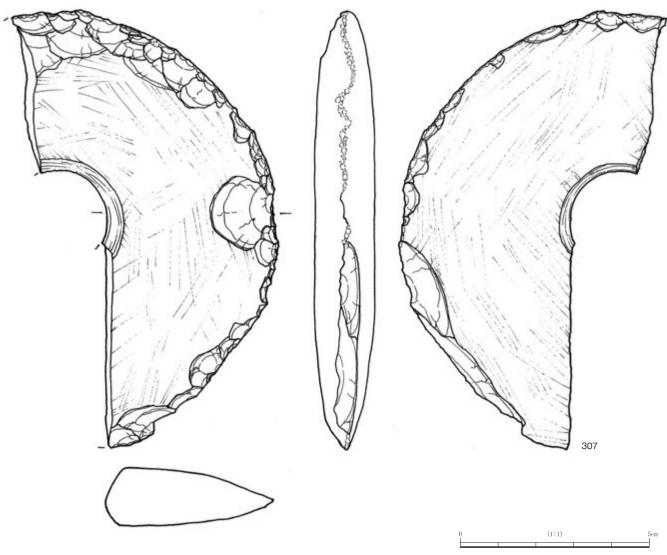
(才) Ⅱ層 (第48・49 図 256 ~ 265)

256~259 は打製石鏃である。256 は両脚端部を欠損するが、257 と同種の正三角形のU脚鏃と見られる。腹面には剥離面を多く残すもので、腰岳産黒曜石を使用する。258 は針尾産黒曜石製でほぼ完形品の石鏃である。259 は針尾産黒曜石を素材としたやや長身の石鏃である。両側縁を鋸歯状に仕上げる。

260~263 は剥片である。260 は平坦打面から剥離した剥片で、下半は折断により欠損する。滑性の高いチャート製である。261 は打面転移を繰り返す剥離技術が見られるもので、本剥片の打面は自然面である。腰岳産黒曜石製で、使用痕等は確認できない。262 は横長の不定形剥片である。上牛鼻産黒曜石製で、底面は石核の底面に相当する。263 は剥片の両下端を斜めに折断したもので、使用石材は上牛鼻産黒曜石である。

264, 265 は打製石斧である。264 は扁平な亜円礫の一端を尖頭状に仕上げたものである。265 は厚さ 3.5cm程の洋梨状の円礫素材の周縁部を剥離し、斧状に仕上げた





第53図 縄文時代の石器 (14)

ものである。先端部は刃潰れ状の小剥離が見られる。ホ ルンフェルスを素材とする。

(力) 遺構内(第49図266~268)

266,267は打製石鏃である。両者とも黒色安山岩製である。267は薄い素材剥片の三角形鏃で、基部の抉りは浅い。268は剥片である。平坦打面から剥離したやや厚手の剥片で、両側縁に激しい使用痕と摩耗痕が見られる。腰岳産黒曜石製である。なお、図示していないが、E-15区出土で、ホルンフェルス製の握り斧状の石核が出土している。厚さ3.5cm程の角礫で、両側縁部に剥離痕を残す。

(キ) 表土採集(第49~53 図 269~307)

石鏃 15 点及びその関連資料 3 点, その他の剥片石器 3 点, 打製石斧 7 点, 部分磨製石斧 2 点, 円盤状石斧 1 点, 礫器 1 点, 環状石斧 1 点が採取されている。

269~283は打製石鏃である。269は基部中央部が短

い舌状を持つ完形品で、黒色のチャートを素材とする。 270 は光沢性が高く且つ漆黒で良質の黒曜石を用いてい る。271、272 は三角鏃である。271 は安山岩製で、若干 左側縁部を波状に仕上げる特徴が酷似する。272 は他と 比して長さが卓越する。扁平な素材剥片を選択し、平坦 剥離状の成形剥離を行い, 背面中央部から先端部にかけ ては主に縦方向の研磨仕上げが行われる。273の基部は 大きく抉る典型的な二等辺三角形鏃である。針尾産黒 曜石製で側縁は微細な鋸歯状に仕上げている。274 は良 質の腰岳産黒曜石を素材とする。275 はいわゆる鍬形鏃 で、針尾産黒曜石製である。276 は桑ノ木津留産黒曜石 製である。両面に剥離面を多く残すもので、左脚端部と 先端部をわずかに欠く。277は白灰色の良質のチャート を使用し、二等辺三角形に近い。278は針尾産黒曜石製 のやや長身の三角形のU脚鏃である。279は小型の三角 形鏃で、基部の中央部をわずかに抉る。桑ノ木津留産黒 曜石を素材とする。280 は先端部が鋭利に残るが、両脚 端部は欠損する。ルーペによる詳細観察では、表面摩耗 が確認できる。針尾産黒曜石製である。281 は黒灰色のチャートを素材とする。282 は桑ノ木津留産ないしは霧島系黒曜石を使用し、左体部一部を残し、大部分が欠損する。283 は体部中央部が0.7cmと厚く、先端部は尖らない。黒灰色のチャートを素材とする。

284 は、背面中央部の先行する平坦な剥離面を含め、 横長剥片を使用した可能性の高い資料である。縦方向に 図示すると石槍の基部、左側縁を刃部とすると石匙の可 能性がある。使用石材は安山岩である。

285 は裏面を礫面で構成するもので、下辺部の剥離から掻器と判断した。

286~288は打製石鏃の未製品である。286は鉄石英製の石鏃未製品である。背面中央部はステップ,フラクチャーが起因で放棄したと見られる。287は縞状模様のある灰色チャート製で,石鏃の未製品と見られるが,右側縁部はノッチの可能性もある。288も同様で,ステップやヒンジ,フラクチャーの繰り返しにより,製作放棄したと見られる。瑪瑙製である。

289 は石錐である。背面に礫面を残す縦長剥片の打点部を刃部としており、腰岳産黒曜石を使用する。290 は石鏃である。283 と酷似する資料で、右側縁部の欠損で放棄したと見られる。石材も黒灰色のチャートと同一石材を使用している。291 は摘まみあるいは抉入部を持つ剥片で、使用石材は腰岳産黒曜石である。292、293 は調整剥片である。292 は針尾産黒曜石製、293 は黒色頁岩製である。

294 は礫打面から剥離した剥片で、先行する3枚の剥離面が見られる。素材剥片の可能性が高い。腰岳産黒曜石製である。295 は縦長剥片の頭部方向に抉入部を持つことから、石匙の可能性もあるが、刃部加工が背面方向に限られることから断定はできない。良質の安山岩を素材とする。

296~306は打製石斧である。296は表面が礫面として表示したが剥離面の可能性もある。なお、天地については刃部形成をリダクションと判断した。

297 は部位の特定が難しいが、打製石斧の刃部右側と 判断した。表面の一部に礫面を残し、厚さは3.4cmが確認できる。298 は部分磨製石斧と判断した。両面とも入 念な敲打成形で仕上げ、刃部には丁寧な研磨が加えられ る。なお、刃部の中央から先端方向に刃潰れ痕が見られ る。299 の表面は礫面、裏面は節理面と素材剥片の形状 を活かしている。なお、表面の刃部は急角度の剥離が見 られる。300 も部分磨製石斧の刃部と判断したもので、 表面は礫面、裏面は剥離面で、刃部を中心に研磨が加え られる。301 は頭部を欠損する。両面とも剥離面と図示 しているが、表面上部は礫面の可能性もある。302 は表 面が礫面と見られる。裏面に成形剥離が集中し、刃部リ ダクションが繰り返された可能が高い。303 は中央部の 最大厚さ 4.4cmの短冊型であるが、鶏頭状の頭部を成す。 図示した礫面は裏面斜線部が節理での剥落と見られるこ とから、疑問が残る。なお、裏面の刃部が磨かれ、完成 品と判断される。

304 は本遺跡最大級の短冊型の石斧で、表面刃部付近に礫面を残す。重量は504gあり、刃潰れ痕も認められることから、完成品と判断される。305 は厚さ5cm程の角礫で、突出した下縁部に数回剥離したもので、刃潰れ痕が見られる。右側縁の上部の剥離は成形剥離と見られ、握り斧とした可能性を想定できる。石材はホルンフェルス製である。306 は径10.2~10.5cm、厚さ3.1cmの円盤形で、断面はレンズ状を成す。全周に刃部が認められ、摩耗痕も認められることから、石斧的機能が高いと判断される。

307 は環状石斧である。最大厚 1.6cmで、最大長 12.0 cm程が想定できる。外縁部に残る剥離痕は全て使用痕で、全面丁寧な研磨仕上げが行われている。なお、中央部の穿孔は両側から回転して行われ、孔中央部が逆算盤玉状をなす。砂岩製である。

なお、図示しなかったが、表土層の採集を含め 42 点の磨石や敲石と 8 点の石皿が出土及び採取されている。器種は、磨石 9 点、敲石が 3 点、磨石と敲石の両機能を持つものが 24 点、磨石、敲石、凹石の 3 機能を備えているもの 6 点に区分される。主要石材が砂岩で、径 5.0 ~ 10.0cm のものが $B \cdot C - 24 \cdot 25$ 区を中心に出土している。また、 8 点の石皿は定型化した石皿の一部と判断できるものが 3 点、扁平な安山岩を使用したもの 5 点で構成される。

3 弥生・古墳時代の調査 調査の概要

弥生時代・古墳時代の遺構は確認されておらず、遺物も他時代の遺物と比して少数量しか出土していない。遺物の残存状況も悪く、表面が摩滅するものが多い。出土層はI層が大半を占める。出土遺物の中で、残存状況が良好なものや特徴的なものを中心に図化に努めた。本項では、それらの遺物について報告する。

(1) 弥生時代の遺物(第54図)

308 は弥生時代終末期に相当する肥後系の複合口縁壺である。口縁部は外反し、粘土紐を貼り付けて肥厚させる。頸部には一条の沈線をもつ。表面は摩滅しているが、内外面ともにヨコナデ調整が確認できる。胎土には白色を帯びた浅黄橙色を呈し、角閃石を多く含む。木牟礼城跡採集資料でも、同一型式の資料が確認されている(第2章参照)。

(2) 古墳時代の遺物 (第54~56 図)

ア D・E-4・5区出土遺物

 $309 \sim 311$ は、成川式土器の甕の底部片である。いずれも脚台部分は欠損し、煤や被熱痕はみられない。309、

310 は、内外面を縦方向のケズリの後、ナデ調整される。311 は、表面の摩滅が激しいが、ナデ調整であることは確認できる。

イ B~E-11~18区出土遺物

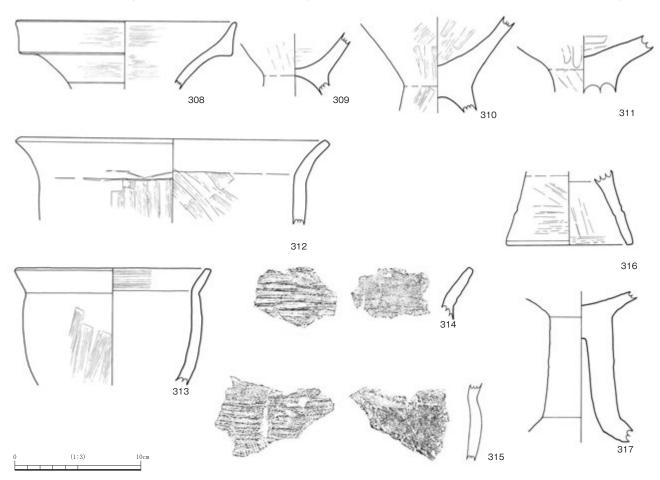
312 は成川式土器の甕である。中津野式に相当し、口縁がくの字状に外反し、口唇部は稜を成す。外面は縦方向のケズリがみられ、いわゆるカキアゲ状の口縁である。内面は斜方向のケズリで調整され、口縁部はヨコナデで調整される。

ウ B~E-18~25区出土遺物

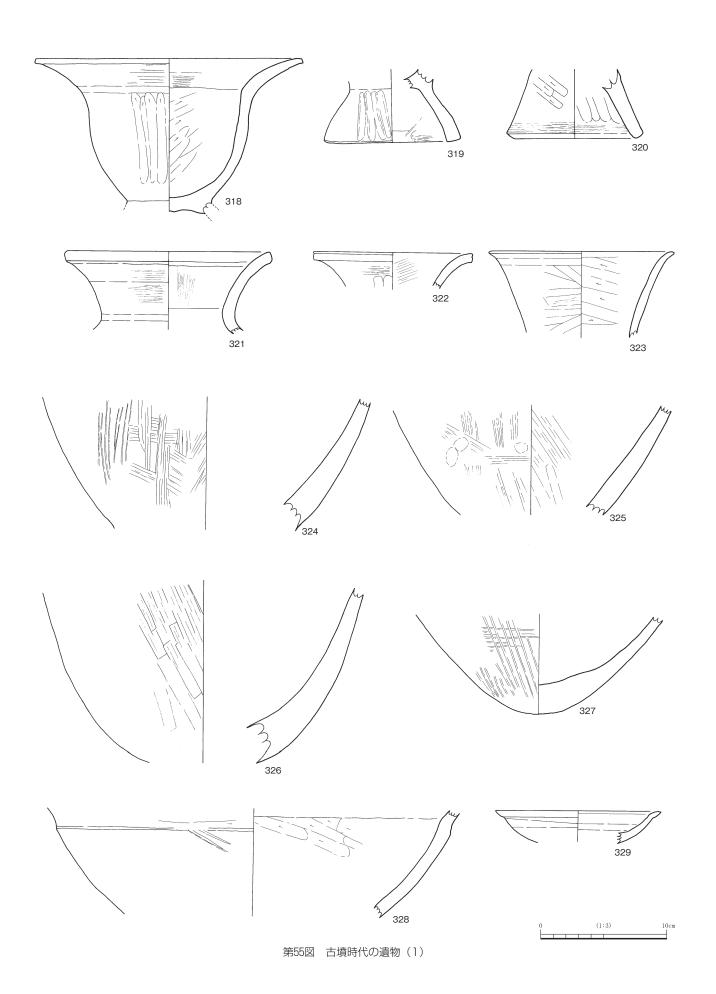
313~316 は成川式土器の甕である。313 は小型の甕である。口縁部がくの字状に外反するが、やや立ち気味になる。外面と口縁部内面にはハケメ調整がみられるが、表面の摩滅が激しい。314、315 は、外面にタタキがみられる資料である。器形や胎土的特徴から、成川式土器の範疇に収まるものと判断した。外面に平行タタキ痕がみられ、内面はナデで調整される。

316 は甕の脚部である。ハの字状に直線的に伸び、端部がやや先細りになる。内外面ともにナデ調整である。

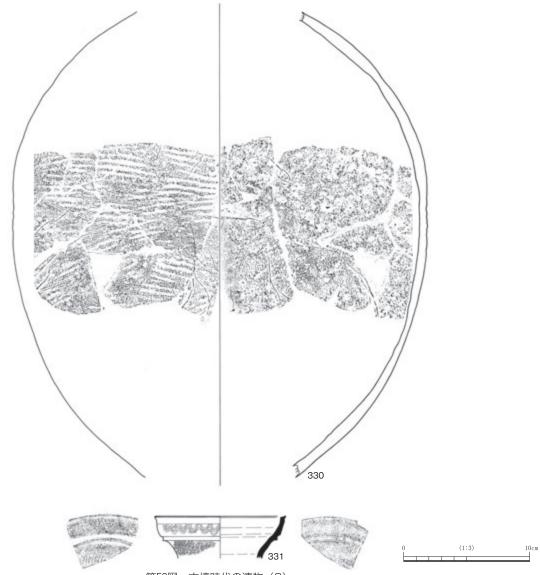
317 は高坏の脚部である。表面の摩滅が著しく、器面



第54図 弥生・古墳時代の遺物



- 64 -



第56図 古墳時代の遺物(2)

調整は特定できない。胎土は粗く、石英や白色鉱物、角 閃石を多く含む。

エ B・C-26~28区出土遺物

318~320 は成川式土器の甕である。318 は成川式土器の小型甕で、脚部が欠損する。口縁部が長く、大きく外反する。胴部は外面が縦方向の粗いケズリ、内面はヨコナデで調整され、口縁部はナデ調整である。319、320 は脚部である。319 はやや丸味を帯びる形態をもち、内外面に強い縦方向のケズリ痕が残る。端部は平坦面を成し、方形状になる。320 は直線的に伸び胎土には角閃石が多く含まれる。

 $321 \sim 328$ は壺である。 $321 \sim 323$ は、壺の口縁部で、外反する。調整は内外面ともに丁寧なヨコナデである。323 は口唇部がやや先細りになる。 $324 \sim 327$ は底部である。いずれも外面には粗いハケメ調整後、ナデで調整される。内面はナデである。外面には部分的に赤化した

箇所があり、被熱痕と思われる。

328 は鉢の胴部である。表面は摩滅のため粗い。外面は工具痕が2ヵ所みられる。329 は小型鉢と考えられる。口縁部は短く外反し、丸味を持った体部をもつ。

330 は、古式土師器の範疇に入るものと考えられる。 長胴形を呈し、器壁が非常に薄い。外面は緻密なハケメ 調整の後、斜め方向の平行タタキが全面に残る。内面は、 当て具痕と思われる僅かな凹凸がみられる。また、外面 より内面が煤の付着範囲が広い。胎土には石英、白色鉱 物を多く含む。胎土的特徴では他の成川式土器と類似す るが、形態的特徴、製作技法を鑑みると、肥後系の土師 器と考えられる。

331 は須恵器の醸である。口縁部と頸部に櫛描波状文をもつ。口頸部は短く、外上方へひろがり、頸部と口縁部との境界には僅かにつまみ出した鋭い突帯が巡っている。初期須恵器でTK 208 相当の資料で、5世紀中~後半段階に相当するものと考えられる。

4 古代の調査

古代の調査では、D-14区のΨ層中で土師器の埋納遺構が検出されている。遺物については調査区全域で出土するが、数量は多くない。なお、遺構外出土遺物の内黒土師器については古代末~中世前期に相当する資料が主であるが、古代該当の土師器との関連から古代の範疇に入れて報告する。

(1) 遺構

ア 土坑7号 (第58図)

検出状況 D-14区で溝状遺構3号を掘り下げている際に、土師器の埦が一部露出する状態で確認された。

形状・規模 平面形は中央部がすぼまる瓢箪型を呈する。 規模は、長軸(推定)45cm、短軸21cmであり、検出面からの深さは12cmである。床面は甕側がやや低くなる。

埋土 褐色土で、周囲の土と色調が似ていたが、やや黒みが強く、軟質であった。

遺物出土状況 土坑内から土師器の坏, 埦, 小型の甕の 3点が出土した。坏が正位の埦に被せられた状態で検出 され、甕は逆位の状態で検出した。

遺物 332 は土師甕である。器高が 12cmほどの小型品で 丸底を呈し、頸部でややくびれて、口縁部が外反する。 内面下半部は指頭圧痕が残る粗いナデ調整が施され、上 半部、口縁の屈曲部まではケズリで調整される。口縁部 と外面は内面に比してナデ調整が施されるが、指頭圧痕 は残り、口縁部平面形は歪む。外面のほぼ全面と内面の 底部付近に厚く煤が付着している。口縁部が四分の一程 欠損しており、意図的に打ち欠いたものと思われる。

333 は坏である。完形品で、底部切り離しはヘラ切り

である。厚さ9mm程の円盤状の底部をもつ。緩やかに立ち上がり、上方へ立ち上がる。体部はやや丸味をもつ。内外面ともに丁寧な回転ナデで調整され、胎土には1~3mmほどの小礫や赤色鉱物が含まれる。

334 は境である。体部がわずかに欠損するが、良好な状態で出土している。高い高台を有し、接地面は5 mm程の平坦面が作られる。底部から緩やかに立ち上がり、口縁部が外反する。内外面の調整は回転ナデであり、坏が被さっていた内面底部付近の表面は摩滅している。これらの3点は、10世紀後半段階に位置づけられる。

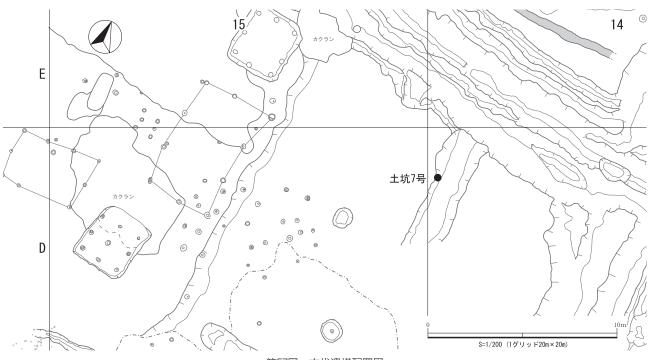
(2) 遺構外出土遺物(第59.60図)

古代の遺構外出土遺物に関しては、調査区ごとに報告する。

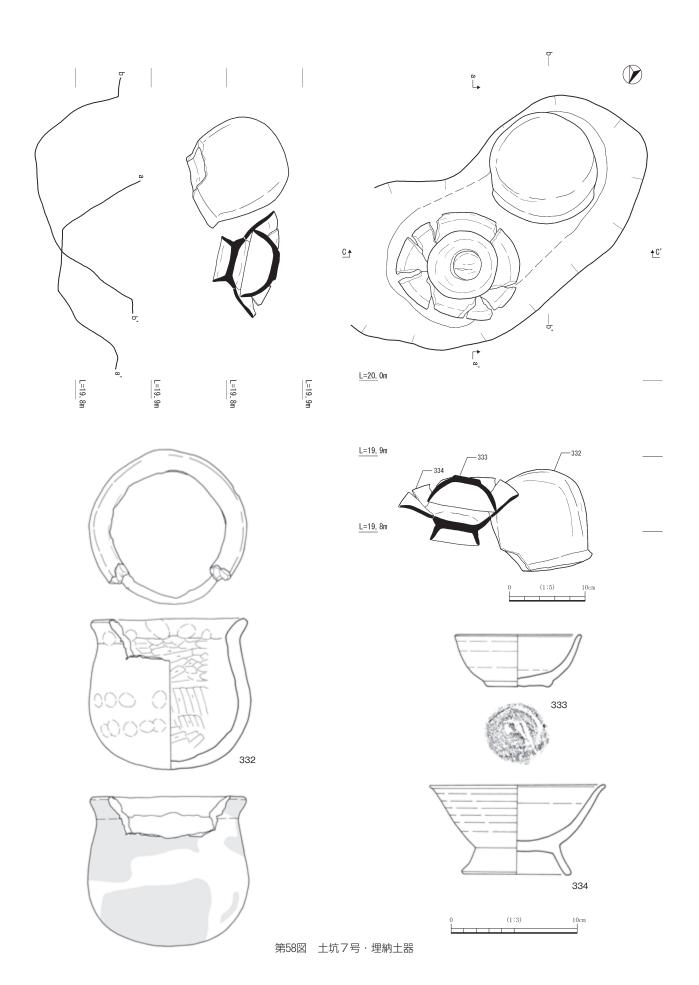
ア D・E-4・5区出土遺物(第59図)

335 は土師器の甕の口縁部である。口縁部で外反し、 内面にはケズリ痕が残る。336 ~338 は土師器の境である。336 は体部がやや曲線を描いて立ち上がる。全体的に赤褐色を呈すが、二次焼成によるものか、赤色土器であったかは表面が摩滅しているため、判断できない。337、338 は境の高台である。337 は高台が低く、ハの字状に開き、端部は丸く収まる。338 の高台は垂直に立ち、端部は丸く収まる。内面見込みは回転ナデにより、僅かに凹む。表面の摩滅が激しいが、内面には僅かに黒色化した箇所があり、内黒土師器の可能性も考えられる。

 $339 \sim 358$ は黒色土器 A で、全て内黒土師器である。 347、351 のような高い高台のものは古代の範疇に入るが、それ以外は高台が低く、ハの字状に開く資料に関しては中世前期に上る可能性が高い。 339、340 は高台が



第57図 古代遺構配置図



- 67 -

短く端部は丸く収まり、高台内は丁寧なナデ、内外面は ミガキが施される。外面の上部まで黒色化している。341 ~344 は体部が丸みを持った直口縁である。外面の上部 まで黒色化し、内外面ともに横方向のミガキが施される。

345、346 は体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が 僅かに内面に入る。347 は「ハ」の字に開く高い高台で、 丁寧な回転ナデで調整される。体部との境目を意図的に 打ち欠いた可能性が高い。

348,349は低い高台で外方にはあまり開かない。高台内にナデ調整が施される。349は、表面の摩滅のため外面の調整は確認できない。350,351の高台内は丁寧なナデ調整が施される。351は体部との境を打ち欠いている。また、底部中央部が焼成後に穿孔されており、紡錘車の紡輪として再利用された可能性がある。なお、高台内面に矢印のような線刻が3本刻まれている。穿孔部分に線刻はみられないため穿孔の方が後の可能性がある。

352 は中央部から緩やかに立ち上がる5 mmほどの短い高台を有するものである。353 は高台が低く、端部は丸く収まる。内面は横方向のミガキが施される。表面の摩滅により、黒色化部分が部分的にしか確認できない。354 は高台端部が丸く先細りになる。体部に底部切り離しの際の糸切り痕と思われる痕跡が残る。355 は高台の作りが粗い低い高台をもつ。356 は高台内がナデ調整により僅かに凹む。

357 は内外面とも赤化している箇所がみられるが、表面の摩滅が著しいため、詳細は不明である。358 は中央部から緩やかに立ち上がる5 mmほどの短い高台を有するものである。

359,360は楠葉型の黒色土器B(両黒土師器)の底部である。焼成が硬質で瓦質に近く,他の内黒土師器とは胎土が異なる。高台は低く,台形状になり,いずれも内面は丁寧なミガキが施される。360は体部がほとんど残存していないため外面の詳細は不明だが,内面にはミガキが施される。形態的特徴等から,10世紀後半~11世紀中頃のものと考えられる。

361~363 は須恵器である。361,362 は宝珠を呈す蓋のつまみである。363 は壺の頸部である。外面に丁寧なナデ調整が施され、内面はナデ調整と指頭圧痕が残る。364,365 は焼塩土器の口縁部である。内面に粗い布目痕が残る。366 は瓦である。格子目状の叩き痕と布目痕が明瞭に残る。焼成が不良で、浅黄橙色を呈す。

イ B~E-11~18区出土遺物(第59図)

 $367 \sim 374$ は須恵器である。367 は坏で、体部が直線的に外傾する。硬質で、内外面ともに丁寧な回転ナデで調整される。

368,369 は高台付坏である。高台の断面が方形状を成し、稜を成す。368 は高台内面に線刻と思われる一条の

直線がみられる。また、高台の付け根が回転ナデ調整により凹んでいる。369 は高台がほぼ直に立ち上がり、内外面ともに丁寧な回転ナデで調整される。いずれも8世紀後半~9世紀前半段階のものと考えられる。

370,371 は甕である。370 は外面に格子目叩き痕が残り、内面はナデで調整される。371 は肩部で、外面に平行叩き痕が残る。内面は上部にナデ調整、下部には同心円状の当て具痕が残る。焼成があまく、にぶい黄褐色を呈す。

 $372 \sim 374$ は壺である。372 は肩部で外面に灰釉がかかり,内面には粗いナデで調整される。373,374 は底部である。373 は底部が円盤状で,段を持つ。器壁は薄く,内外面のナデ調整も粗い。内外面の上部には自然釉の付着がみられる。374 は硬質で,底部と比して器壁が厚い。内外面はナデ調整で,胎土には $5\,\mathrm{mm}$ 大の小礫が含まれる。

ウ B~E-18~25区出土遺物(第60図)

375,379 は土師器の甕である。375 は口縁部が外反し,外面は縦方向の緻密なハケメ,内面はケズリで調整される。口縁部はナデ調整だが,僅かにハケメ痕が残る。379 は肩部である。外面には強い横方向のナデ,内面はケズリで調整される。胎土には黒雲母が少量含まれる。

376~378 は黒色土器である。376,377 は内黒土師器,378 は両黒土師器である。376 は高台が垂直に立ち上がり,端部がやや先細りになる。内面はミガキ,外面がナデ調整である。377 は高台内が回転ナデ調整により凹み,中央部が盛り上がる。胎土には約2mm大の赤色鉱物を含む。

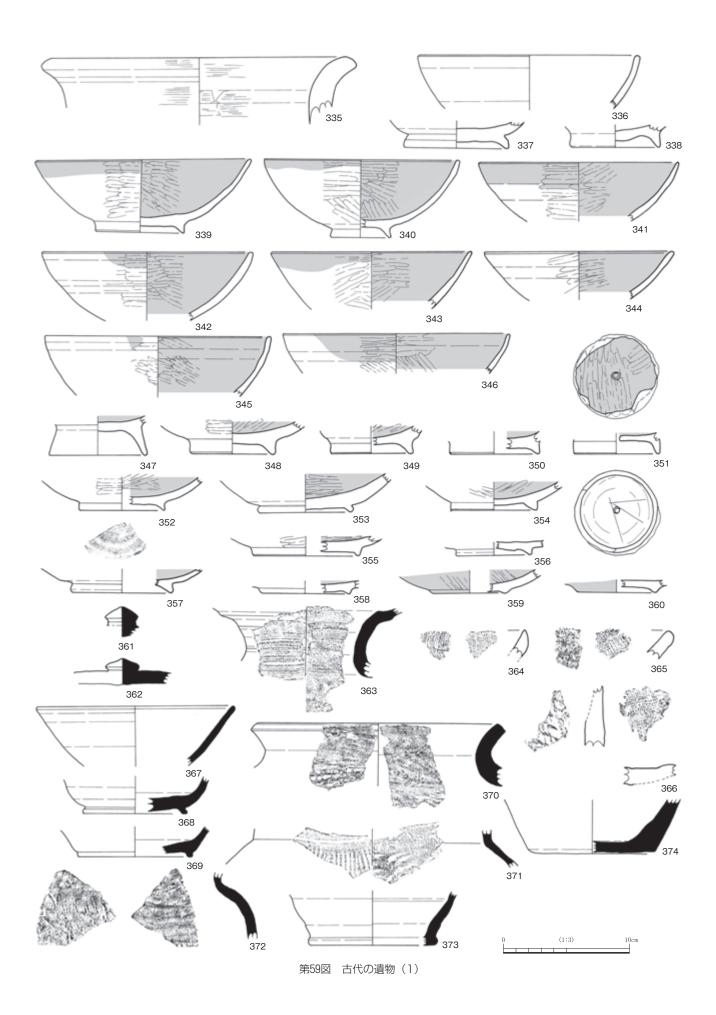
378 は黒色土器 Bで、両面黒色化する。底部切り離しは糸切りで、底部以外はミガキで丁寧に調整される。380 は土師器の坏蓋である。つまみ状の鈕を有し、鈕の周囲に直径 6.5cmほどの平坦面を作り、口縁端部は内湾する。調整は全面ナデ調整である。

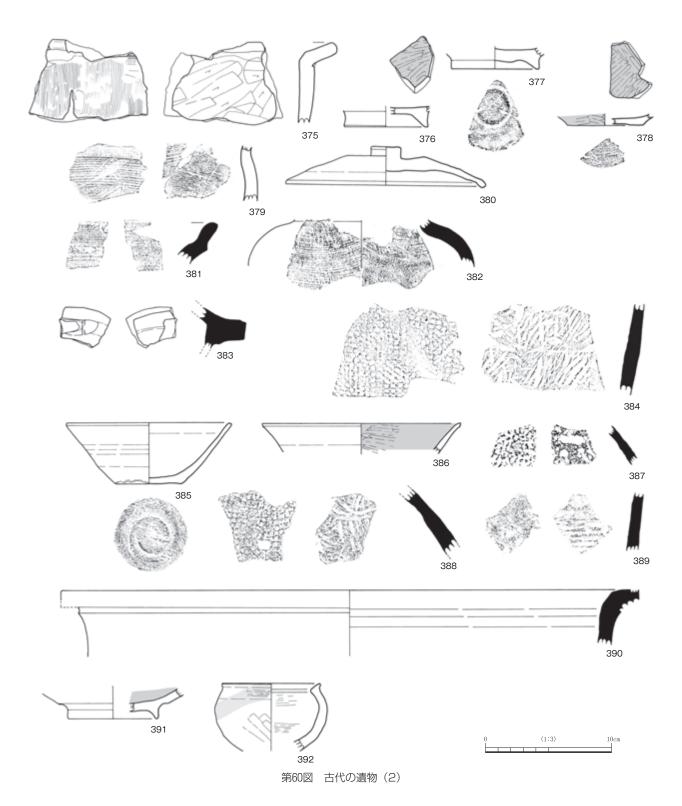
381~384は須恵器である。381~383は壺である。381 は二重口縁を呈す壺である。382は肩部で、丸みをおびる形態をもつ。内外面はヨコナデで調整される。硬質で 灰黄色を呈す。383は肩部の把手部である。把手の右側 は削って面取りされ、断面が方形状を呈す。384は甕の 胴部である。外面に格子目叩き痕、内面に平行状の当て 具痕が残る。焼成は良く、橙色を呈す。

エ B・C-26~28区出土遺物(第60図)

385 は土師器の坏である。底部切り離しはヘラ切りで、切り離し後に体部下部をヘラ削りで粗く面取りする。386 は内黒土師器である。口縁部が外方に伸び、僅かに外反する。内面の黒色部分にはミガキ、外面はヨコナデで調整される。外面の上部まで黒色化する。

387~390は須恵器の甕である。387,388は胴部片で





外面に格子目叩き痕,387 は内面に平行状の当て具痕,388 は同心円状の当て具痕が残る。389 は外面にナデ調整,内面は平行状の当て具痕が残る。390 は口縁部である。上下に割れ口があり,二重口縁を呈するものと考えられる。内外面には灰釉がかかり,2mmほどの白色の小礫を含む。

才 出土区不明遺物 (第60 図)

391 は内黒土師器である。表面が摩滅するため、詳細な調整は確認できない。腰部が強いヨコナデにより凹み、段を成す。392 は小壺もしくは坩堝である。口縁部は短く、直口縁に近い。口縁部、内面は丁寧なナデで調整されるが、外面の調整は粗いナデである。外面には煤が帯状に薄く付着する。やや硬質で、灰黄色を呈す。

5 中世の調査

中世の調査は調査区の東側から $D \cdot E - 4 \cdot 5$ 区、 $C \cdot E - 12 \sim 15$ 区及び $B \sim E - 19 \sim 26$ 区で行った。第 2節で述べたとおり、中郡遺跡群の堆積状況は非常に悪く、中世の包含層であるII 層は、丘陵の一部や谷地形の底付近等の一部で確認されるだけであった。遺構の検出は、II 層が残存している地点ではII 層掘削と平行して行い、それ以外の地点では表土直下で行った。中世に該当する遺構の埋土は、暗褐色~黒色を呈する。

D・E-4・5区の調査

調査の概要(第61図)

 $D \cdot E - 4 \cdot 5$ 区の調査は平成 21 年度に行った。調査時には、本地区周辺の小字名をとって「金剛園地区」と称した。 $D \cdot E - 4 \cdot 5$ 区周辺は、ほとんどの地点で地山である \mathbf{W} 層(シラス)まで削平を受けており、旧地形がほとんど残らない状況であった。したがって、遺構及び包含層がほぼ消滅している状況であったが、 $D \cdot E - 4 \cdot 5$ 区では、 \mathbf{W} 層及び中世の造成が確認され、表土直下のシラス上面で遺構が確認された。

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑9基、柱 穴群及び上記の焼土である。また、詳細は不明だが、シ ラスを階段或いはスロープ状に掘削した様子なども確認 された。

中世の造成(第 62 図) 中世の造成は 2 回行われたようである。 1 回目の造成は、 D-5 区の一段低い地形で確認され、 II 層の下で、 黒褐色土とシラスの混土で行われていた。 この造成土の上面には複数の焼土が見られ、この周辺での盛んな土地利用を想定させる。 さらに II 層が堆積した後に 2 回目の造成が行われ、その際の造成土は灰茶褐色土を呈する。造成面の焼土域周辺から出土した遺物と、柱穴から出土した遺物はここで報告する。

393 は土師器の皿である。内面は器壁の立ち上がり部分がやや凹み、底面中央部は盛り上がる。394、395 は鎬蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。高台が方形状を成す。畳付及び高台内は露胎する。394 は395 に比して蓮弁が幅広である。395 は体部の1/4 弱が欠損するが、良好な状況で出土している。

397 は土師器の皿である。ほぼ完形で出土した。底部切り離し痕は糸切りである。398 は滑石製石鍋の鍔部の二次加工品である。鍔部に1ヵ所穿孔がみられる。

396 は白磁椀 V 類である。扁平な玉縁状の口縁部で、 釉が厚くかかる。

掘立柱建物跡 1号(第63図)

検出状況 D-5区で、W層上面で検出された。 **形状・規模** 平面形は2×4間である。長軸方向はN 10°Eを示す。 **柱穴跡** 柱穴跡の上部は削平により消滅しており、検出 面からの深さが浅いものと深いものがある。各柱穴跡の 床面にレベル差があるという特徴を示す。

土坑

土坑は13基検出されたが、報告可能なものは9基のみである。

土坑8号 (第64図)

検出状況 D-5区のⅧ層上面で検出された。西側を土 坑9号に切られる。

形状・規模 平面形は略南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN23°Eを示す。規模は、長軸91cm、短軸50cmであり、検出面からの深さは14cmである。断面形は、床面は南側に向かって緩やかに下り、壁面はやや外傾し立ち上がる。

土坑 10号 (第64図)

検出状況 D-5区でⅧ層上面で検出された。

形状・規模 平面形は北東-南西方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN47°Eを示す。規模は長軸142cm、短軸83cmである。断面形は、床面はほぼ水平だが、長軸の中央付近でやや段が付く。検出面からの深さは33~45cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土 埋土①は、褐色土で粘性がなく、軟質である。埋土②は灰黄色土で粘性がなく、軟質である。埋土③は、褐色土シラスが混ざる。粘性がなく、軟質である。

土坑 11号(第64図)

検出状況 D-5区で、検出された。西側の一部が溝に切られている。

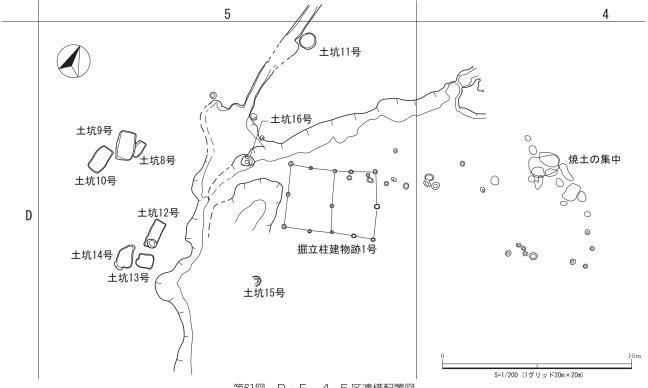
形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、径 87 cmであり、検出面からの深さは 15cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はわずかに外傾し立ち上がる。 埋土 暗褐色を呈する火山灰土を基調とする。

土坑9号(第65図)

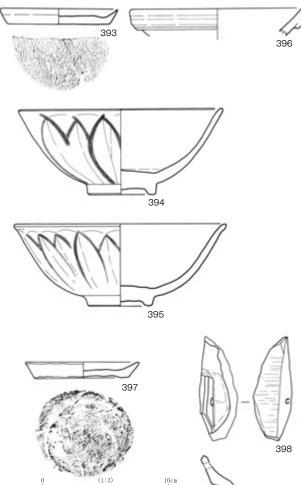
検出状況 D-5区で、Ⅷ層上面で検出された。東側の 土坑8号を切っている。

形状・規模 平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN9°Wを示す。規模は、長軸151cm、短軸99cmであり、検出面からの深さは76~90cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土 暗褐色を呈する砂質土でシラスを含む。

出土遺物 床面付近から鉄釘が出土した。いずれも木質が付着している。鉄釘は床面の3ヵ所からは数点ずつ出土し、間隔は長軸方向で126cm、短軸方向で41cmを測る。 長軸方向の平面図左右の鉄釘集中部分を結ぶ線上から、3点の鉄釘が出土しており、それぞれの鉄釘の間隔は南



第61図 D·E-4·5 区遺構配置図



D·E-4·5区出土遺物

側から 42cm, 26cm, 17cm, 41cmを測る。鉄釘は 14 点を図化しているが,これ以外に腐食や残存状況が不良のため図化できなかった小片もある。

棺 人骨や骨片等は出土していないが、形状及び釘の出土状況や木質の付着などを鑑みると木棺墓と認定できる。側面の板の厚さは1cm程度であると想定される。掘り込みの南西側及び南側からは鉄釘が出土していないことから、釘が腐食して残存していないか、もしくは鉄釘を使用しない部材で囲われていた可能性が考えられる。

土坑 15号 (第66図)

検出状況 D-5区の造成面で検出された。西側がトレンチに切られている。

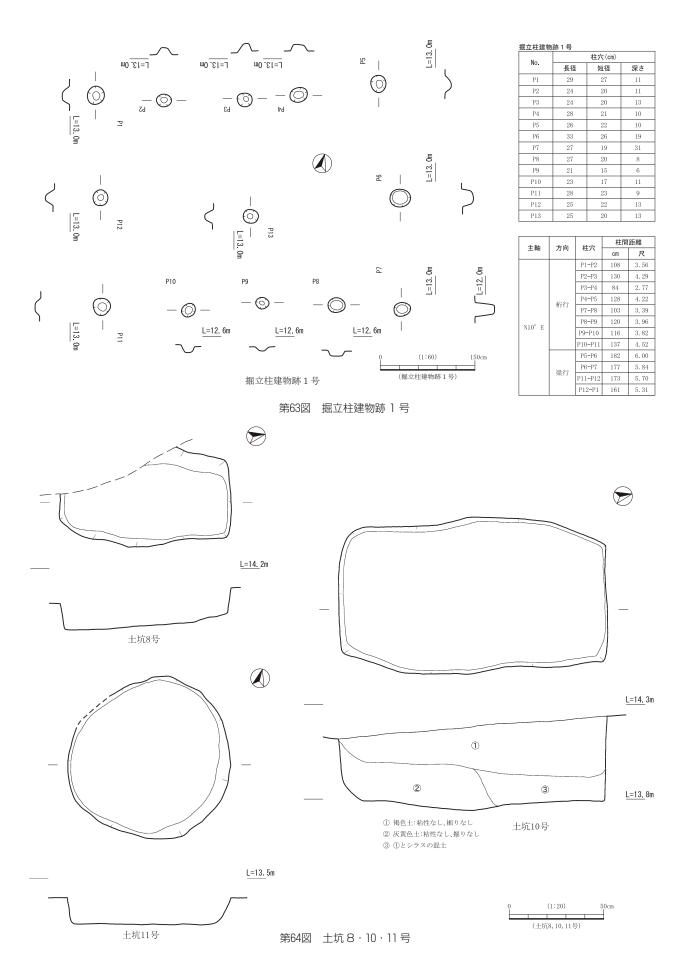
形状・規模 平面形は円形を呈すると考えられる。規模は、残存する範囲では径51cm、検出面からの深さは41cmである。断面形は、中段で平坦面を有し、中央部を段掘りしている。床面は傾斜し、不定形である。

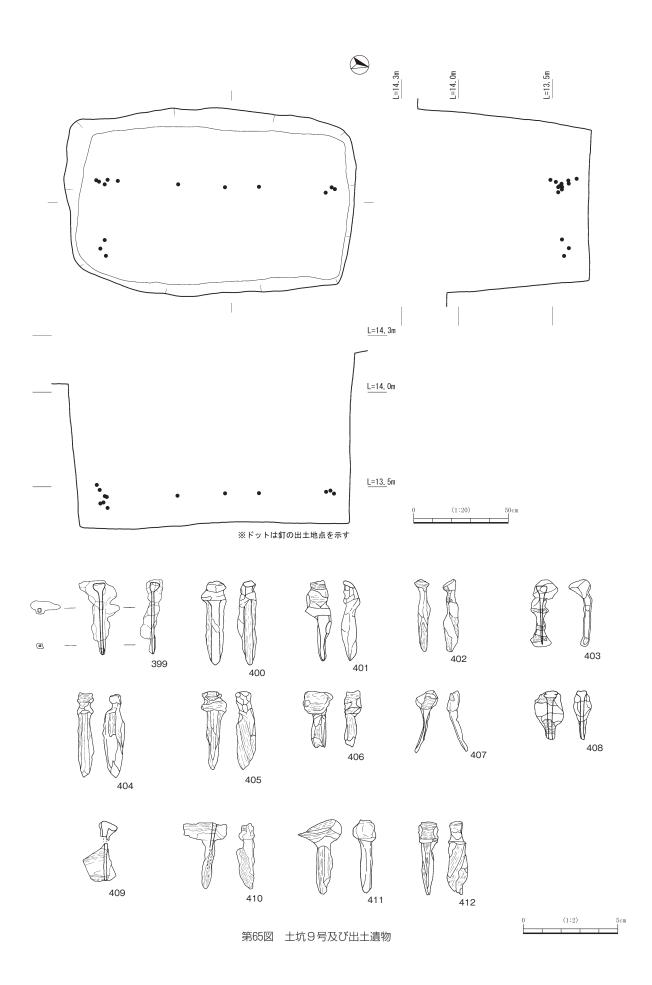
遺物出土状況 床面から約30cm上からほぼ完形の土師器坏が1点, 完形の土師器皿が2点出土している。

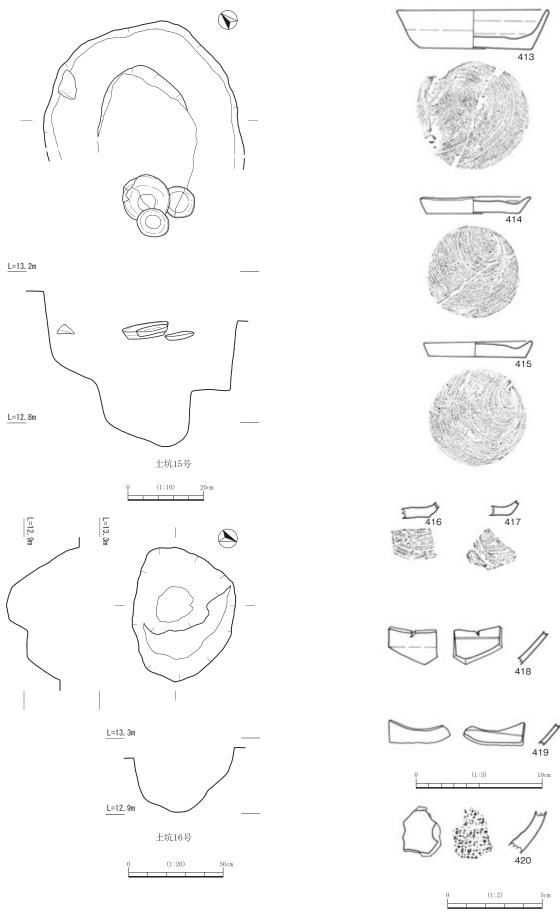
出土遺物 413 は土師器坏である。ほぼ完形で出土した。器壁が直に立ち上がり、内外面は丁寧な回転ナデ調整する。414,415 は皿である。2 点とも完形で出土している。器形、大きさがほぼ同じで、器高が低く、内面の作りだしも浅い。底部切り離し痕は糸切りである。

土坑 16号 (第66図)

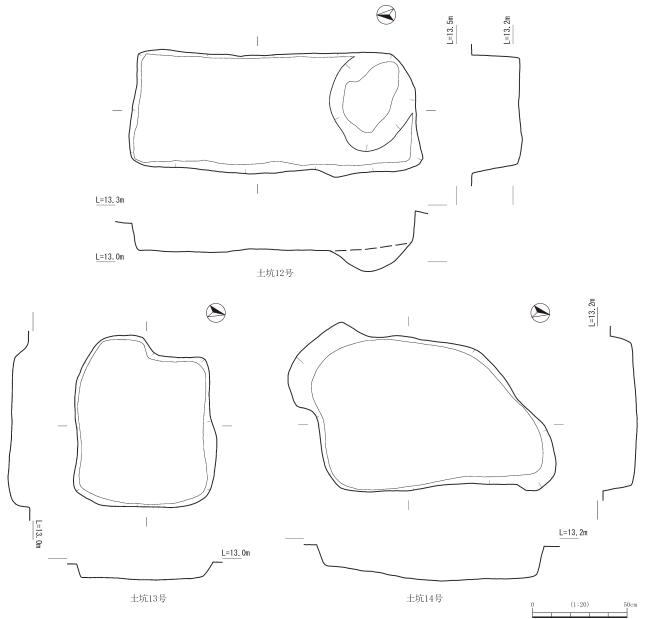
検出状況 D-5区で検出された。







第66図 土坑 15・16 号及び出土遺物



第67図 土坑 12 · 13 · 14 号

形状・規模 平面形は南北方向にやや長い略楕円形を呈する。規模は、長軸 70cm、短軸 53cmであり、検出面からの深さは 38cmである。北側の掘り込み途中に平坦面を有し、そこからさらに 10cmの二段掘りが行われている。

出土遺物 416,417 は土師器の坏もしくは皿の底部である。糸切底である。418,419 は白磁碗の胴部片である。内面に一条の沈線がみられる。420 は焼塩土器である。内面に粗い布目痕が残り,外面は粗いナデ調整が施される。胎土が粗く,白色鉱物を多く含む。

土坑 12号 (第67図)

検出状況 D − 5 区で、WI 層中から検出された。土坑 13 号・土坑 14 号に隣接する。

形状・規模 平面形は略南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN9°Eを示す。規模は、長軸 150cm、短軸 62cmであり、検出面からの深さは $15\sim32cm$ である。断面形は、床面はほぼ水平で、南側に径 $50cm \times 46cm$ 、深さ 10cmの掘り込みを有する。

埋土 暗灰色を呈する砂質土で鉄分を含む部分が散在する。

土坑 13号 (第67図)

検出状況 D-5区で検出された。

形状・規模 平面形は略方形を呈し、南西隅がやや膨らむ。長軸はN87°Eを示す。規模は、長軸91cm、短軸72cmであり、検出面からの深さは11cmである。断面形は、床面は西側に向かって緩やかに下り、壁面はやや外傾す

る。

土坑 14号 (第67図)

検出状況 D-5区で、検出された。

形状・規模 平面形は隅丸の台形状を呈する。規模は, 長軸 120cm, 短軸 81cmであり, 検出面からの深さは 18 cmである。断面形は, 床面は東西方向にはほぼ水平で, 南側から中央部に向かって緩やかに下り, 中央部から北 に向かって平坦になる。壁面はやや外傾する。

(2) C~E-12~15区の調査

調査の概要(第69図)

 $C \sim E - 12 \sim 15$ 区の調査は平成 21 年度に行った。調査時には、周辺の小字名から「岡畑地区 1 」と呼称した。本地点でも地形の改変が大きく、旧地形の残存状況は悪かったが、一部で II 層及び中世の造成が確認され、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、柱穴及び溝状遺構等が検出された。また、調査区を南北に縦断する農道に平行するように南北方向に延びる大規模な堀跡 1 号が検出された。さらに、堀跡 1 号に直交し、東西方向に延びる堀跡 2 号も検出された。

堀跡1号,竪穴建物跡等と堀跡2号遺構の切り合い関係や,堀跡1号の壁面が平坦面に造成され、その面で遺構が検出されたことから、中世の複数の時期に大規模な土地の改変が行われたことが想定される。

なお、本地点から西に向かって標高は高くなるが、C \sim E -16 区の西側から C \sim E -17 \sim 19 区では、シラスまで削平を受けていたためか、遺構及び包含層は確認されなかった。

竪穴建物跡・竪穴状遺構

本地点では、竪穴建物跡5基と竪穴状遺構1基が検出された。シラスまで削平を受けているため、遺構の上部は消滅しているが、竪穴建物跡では床面及び炉跡を検出した。

竪穴建物跡 1号(第68図)

検出状況 E-15区で、表土直下の™層上面で検出された。北側の一部は撹乱により削平されている。

形状・規模 平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN8°Eを示す。規模は、長軸340cm、短軸304cmであり、検出面からの深さは30cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾する。

柱穴跡 竪穴の四隅とその中間に8基の柱穴が確認されているが、柱穴の深さは不明である。柱間は $0.9m\sim1.6m$ である。

地床炉跡 中央部に焼土域がある。その周囲に3cm程の 窪みがあり、検出状況から地床炉跡と想定される。地床 炉跡の周辺には径1m程度の範囲にまで炭化物が認められた。

埋土 埋土のベースは、黒褐色を呈する砂質土で炭化物を含み、黄色の火山灰パミスが混ざる。

出土遺物 竪穴中央部の地床炉跡付近で瓦質土器の捏鉢 片が出土している。421 は樺万丈産の捏鉢である。口唇 部から下に8mm程をナデて、緩い段を有する。口唇部は ナデ調整により丸みを帯びている。内面は横位を主とす るハケメが施され、外面下部は指頭圧痕が残る粗いナデ 調整、上部2cm程は横位のハケメが残る。

竪穴建物跡2号(第70図)

検出状況 D-15 区で、表土直下の™層上面で検出された。北側3分の1程度の部分(北側上方)は撹乱により壁及び床面の一部が残存していないが、周囲の壁の立ち上がり等から推定される範囲である。

形状・規模 平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、 長軸はN 14° E を示す。規模は、長軸 328cm、短軸 292 cmであり、検出面からの深さは 20cmである。断面形は、 床面はほぼ水平で壁面はやや外傾する。

柱穴跡 竪穴の四隅とその中間に8基の柱穴が確認されている。柱穴の深さは $40\sim60$ cmで,柱間は1 m ~1.1 mである。

炉跡 中央部に焼土域があり、隣接して径 28cm程で周囲から 12cm掘り込まれた炉跡がある。炉跡の周辺に径70cm程度の範囲で炭化物が広がる部分が2ヵ所ある。

出土遺物 422 は土師器の皿である。体部外面は直に立ち上がり、内面は緩やかに立ち上がる。423 は土師器の坏か皿の底部である。いずれも糸切底を有する。424 は須恵器甕の胴部である。内面に平行状の当て具痕、外面に平行叩き目が残る。425 は管状土錘である。426 は鉄釘の可能性が考えられる。

竪穴建物跡3号(第71.72図)

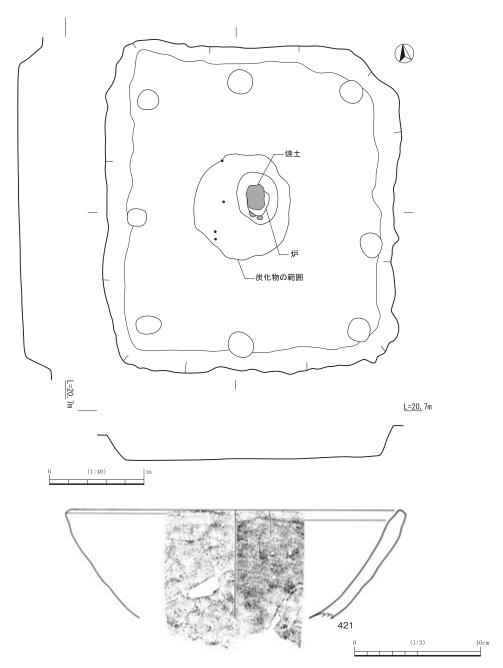
検出状況 C-15 区で、表土直下のⅧ層上面で検出された。すぐ東側に溝状遺構1号が位置する。

形状・規模 平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸は $N1^\circ$ Wを示す。規模は長軸 374cm、短軸 321cmであり、検出面からの深さは 60cmである。断面形は、床面は緩やかな凹レンズ状となり、壁面はやや外傾し立ち上がる。

柱穴跡 竪穴の四隅とその中間に南北方向に3基ずつ, 東西方向に4基ずつの柱穴跡が計10基確認されている。 柱穴の深さは40~60cmで,柱間は南北方向に平均144cm, 東西方向に平均84cmである。

炉跡 床面では、炭化物が集中し、焼土が検出される。 また、炉跡と考えられる範囲が3ヵ所検出された。

ステップ 南側に2段のステップ状(階段状)の部分が



第68図 竪穴建物跡 1 号及び出土遺物

検出されたことから、ここに入り口のあった可能性がある。

出土遺物 427~431 は土師器皿である。427 は完形に復元できた。全て糸切り底を有する。432 は白磁皿 IX類である。口禿の皿で、口縁部が外反し、口唇部から下に内面 3 mm程、外面 0.5mm程が無釉である。433 は上田 B類に相当する青磁碗である。片切彫と丸彫を混用して蓮弁文を施す。胎土が橙色を呈し、細かい灰釉が全面を覆うようにかかる。福建省産と考えられ、龍泉窯系青磁の模造品の可能性がある。434 は龍泉窯系青磁碗 II - b 類である。丸彫で鎬蓮弁文が施される。

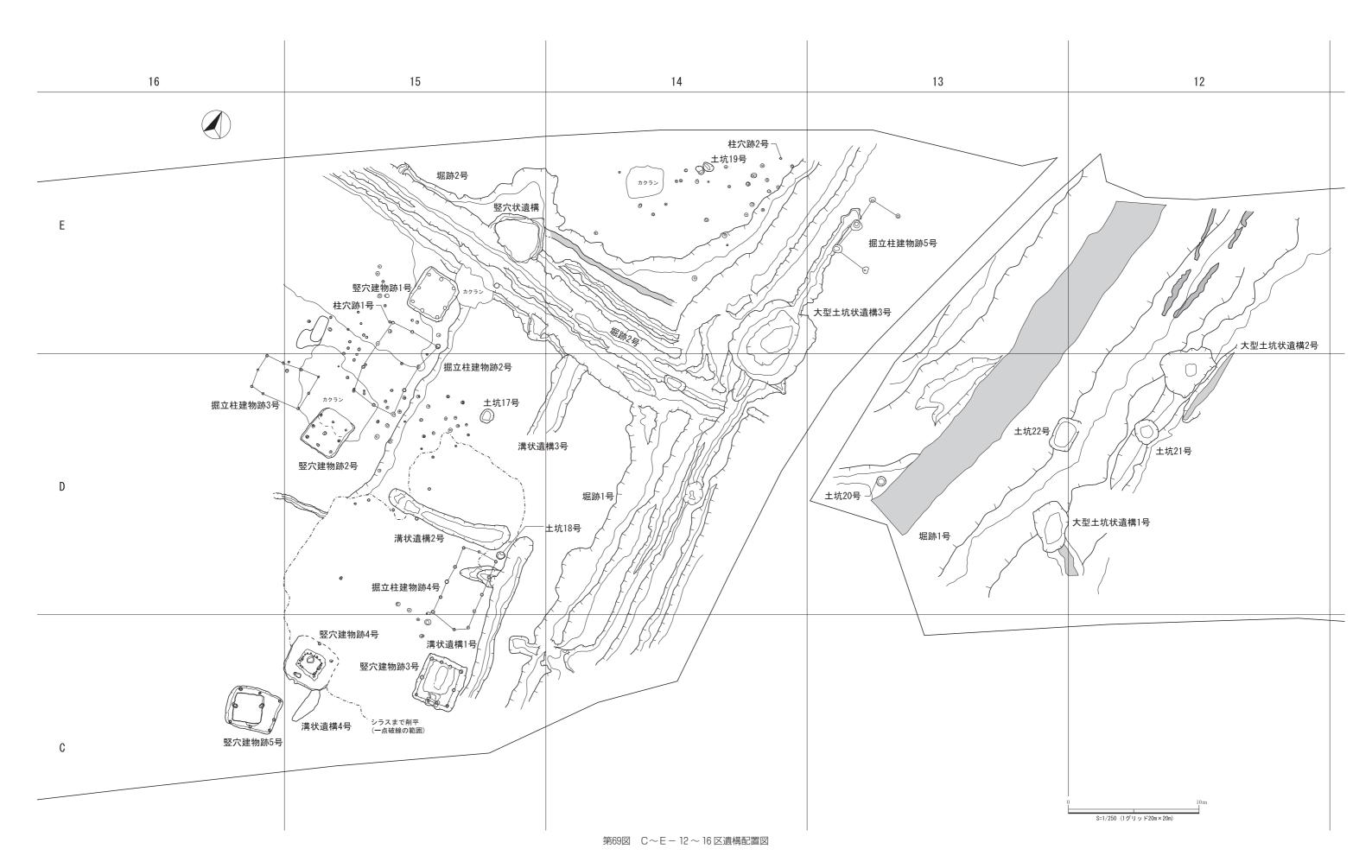
435 は瓦質の片口鉢である。竪穴中央部の炉跡付近で

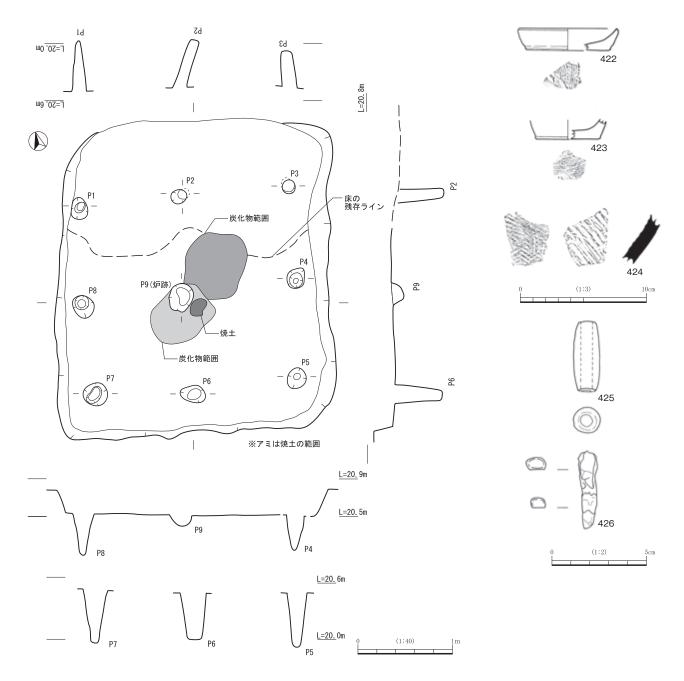
出土した。ヘラナデにより口唇部に斜めの平坦面をつくる。片口の一部が残る。内外面とも器壁の剥落が激しい。436 は鉄製品である。幅 13mm程であり、左側で上方に屈曲する。用途は不明である。

竪穴建物跡 4号(第73図)

検出状況 C-15 区で、表土直下のⅢ層上面で検出された。北側と東側の壁は撹乱を受け消滅している。炭化物を含む黒色のしみ込みの範囲から床面の範囲を想定した。

形状・規模 平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、 長軸はN84°Wを示す。規模は、撹乱を受けているため





第70図 竪穴建物跡2号及び出土遺物

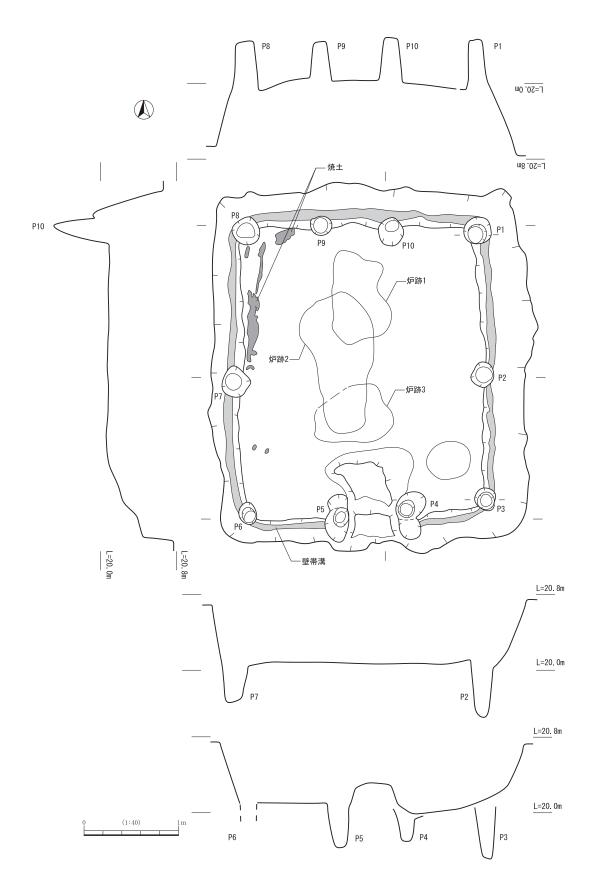
断定はできないが、推定で長軸 375cm程度、短軸 355cm程度であり、検出面から床面までの深さは 30cmである。床面はほぼ水平だが、中央付近で 192cm× 180cm、深さ80cmの掘り込みがあり、二段掘りを呈する。この段掘り部分は、上部の竪穴の主軸と若干ずれる。また、最下部の貼り床の下から60×50cm、深さ28cmの土坑を検出した。南東側の角付近で溝状の掘り込みと接するが、関係は不明である。

柱穴跡 上面の床面では柱穴を3基検出した。また、中央部の段掘り部分では、4面に壁帯溝を有し、その内側に東西方向を軸とした2基の主柱と15基の小さな柱穴が巡る。

炉跡 竪穴建物跡 4 号では、複数の炉跡が検出された。 炉跡は一部上下の重なりを有し複雑だが、最低でも 4 面 は確認された。少し埋まるたびに、その上を地床炉とし て利用している状況がうかがえる。なお、最下部の炉跡 床面出土炭化物の放射性炭素年代測定結果では、920 ± 30yrBP という結果が得られている。詳細は第 4 章を参 照されたい。

埋土 茶褐色土を主体とする。

出土遺物 437 は土師器の坏の底部と思われる。糸切り 底を有する。



第71図 竪穴建物跡3号



竪穴建物跡5号(第74図)

検出状況 C-16区で,表土直下のⅧ層上面で検出された。北側に竪穴建物跡 4号が位置する。

形状・規模 平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN 78° Eを示す。規模は、長軸 400cm、短軸 324 cmであり、検出面からの深さは 30cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾する。中央やや西寄りに、主軸のずれた掘り込みがあり、220cm×220cm程度の方形を呈する。上部の床面からの深さは 20cm程度である。埋土が連続している状況から、上部の竪穴を掘削する際に同時に掘り込まれたものと判断した。北側の床面には粘土貼りが施されていた。

柱穴跡 竪穴の四隅とその中間に 8 基の柱穴が確認されており、柱穴の深さは $40\sim70$ cmである。柱間は南北方向で平均 128cm、東西方向で 156cmを測る。東西方向に 2 基の主柱が検出されている。また、P10 内からは礫が出土している。

炉跡 上部の床面に対応する炉跡は竪穴のほぼ中央付近で検出された(第74図中の炉跡1)。また、段掘り部分からも、やや西側によった箇所で炉跡が検出された。

なお、炉跡出土炭化物の放射性炭素年代測定結果では、800 ± 30yrBP、そして張床下の炉跡床面で830 ± 30yrBPという結果が得られている。詳細は第4章を参照されたい。

出土遺物 438 は土師器の坏である。底部内面中央部はナデ調整が施され、周縁部には回転ナデがみられる。器壁は直線的に引き出される。439 は土師器皿の底部である。441、442 は龍泉窯系青磁碗 II 類の口縁部から胴部である。片切彫で幅広の鎬蓮弁が施される。440 は鞴の羽口である。

竪穴状遺構(第75図)

検出状況 E-15 区の堀跡 2 号掘削後、Ш層上面で検出された。全体が堀跡 2 号に切られており、北側はさらに撹乱を受けて一部削平されている。

形状・規模 平面形は北側が突き出た五角形様を呈する。 規模は、長軸 404cm、短軸 356cmであり、検出面からの 深さは 36cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁 面は基本的にはやや外傾するが、一部でオーバーハング している所もみられる。内側の壁面外側に平坦面があり、 そこからもう一度、壁が立ち上がる部分がある。柱穴跡 や炉跡は確認できない。

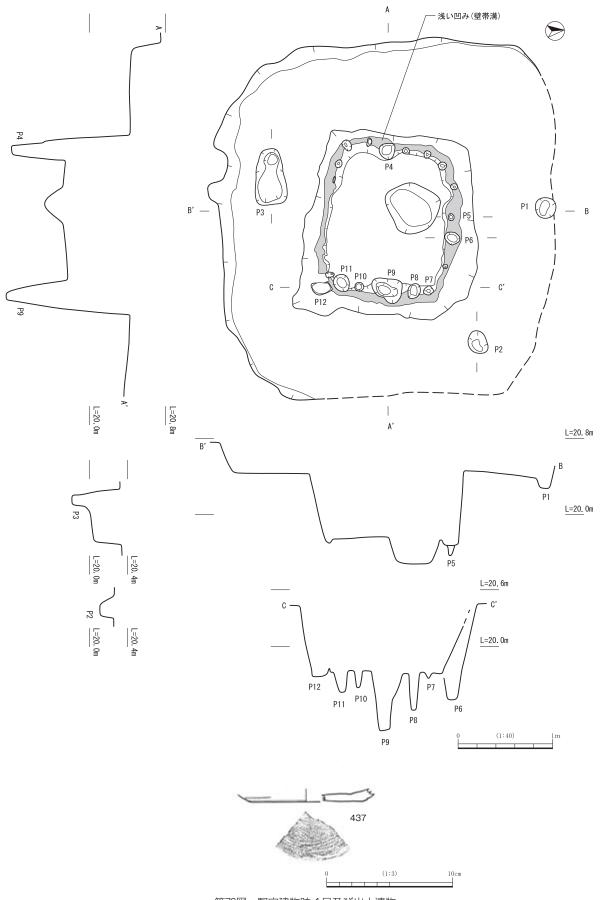
出土遺物 443~446 は土師器の皿である。443 は底部内面中央でナデ調整により平坦にするが、やや盛り上がる。内面の立ち上がりは回転ナデにより凹み、器壁をわずかに立ち上がらせる。444 は底部で、糸切り痕が残る。445、446 は底部内面中央部から強い回転ナデの痕跡がみられる。446 は口縁部の内外面に部分的に煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性が高い。皿はすべて糸切り底である。

447 は中国陶器で、水注の肩部と思われる。外面に2条の沈線が施される。灰緑釉が全体にかかるが、部分的に無釉の筒所もみられる。

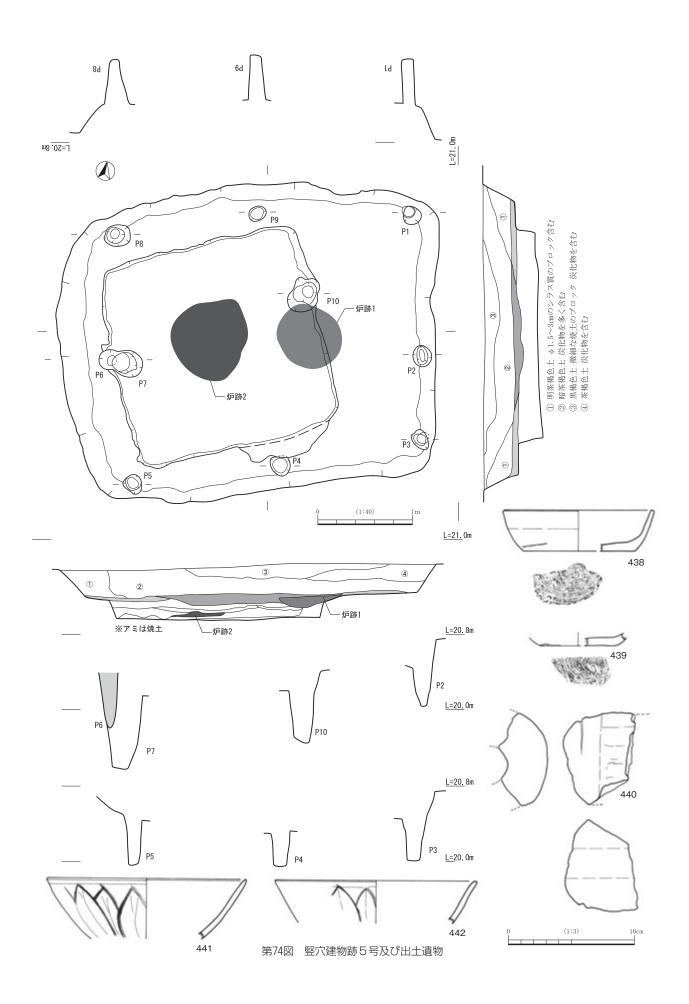
掘立柱建物跡 4号 (第76 図)

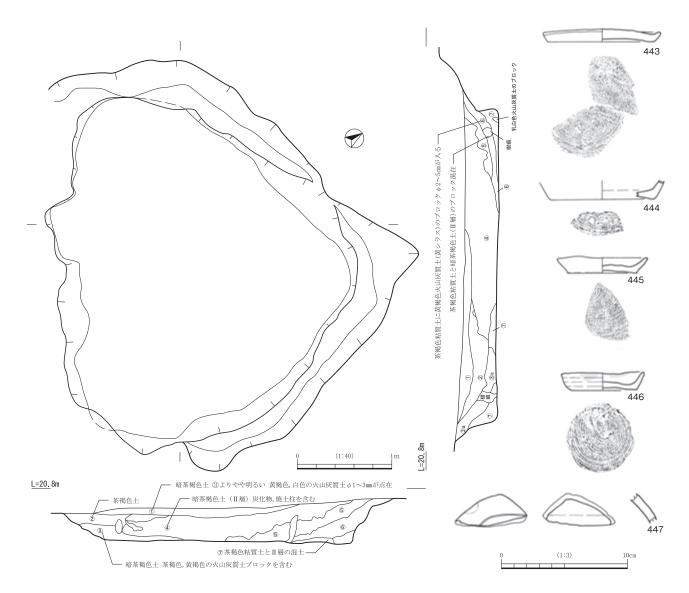
検出状況 C · D − 15 区で、 M 層上面で検出された。 一 部を溝状遺構 1 号に切られる。

形状・規模 平面形は南北方向に長い2間×4間である。 桁行方向はほぼ真北を示す。規模は, 梁間間東側541cm, 西側544cm, 桁行間北側275cm, 南側320cmである。



第73図 竪穴建物跡4号及び出土遺物





第75図 竪穴状遺構及び出土遺物

掘立柱建物跡3号(第76図)

検出状況 D-15·16 区で, Ⅲ層上面で検出された。 一部撹乱を受ける。

形状・規模 平面形は東西方向に長い 2 間× 3 間であるが、南東部の桁行 2 本目の柱穴跡は未検出である。桁行方向は N 92° E を示す。規模は、桁行間北側 427cm、南側 395cm、梁間間東側 292cm、西側 265cmである。

埋土 柱穴の埋土は茶褐色土である。

掘立柱建物跡2号(第77図)

検出状況 D·E-15 区で、Ⅷ層上面で検出された。 竪穴建物跡1号と竪穴建物跡2号に挟まれる。

形状・規模 平面形は南北方向に長い2間×3間で,桁行方向はN7°Wを示す。規模は,桁行間東側626cm,西側599cm,梁間間北側389cm,南側358cmである。

埋土 柱穴の埋土は茶褐色土である。

出土遺物 448 は滑石製石鍋の口縁部である。P 1 から出土した。内外面とも縦方向の削り痕が残る。鍔部下には煤が付着する。

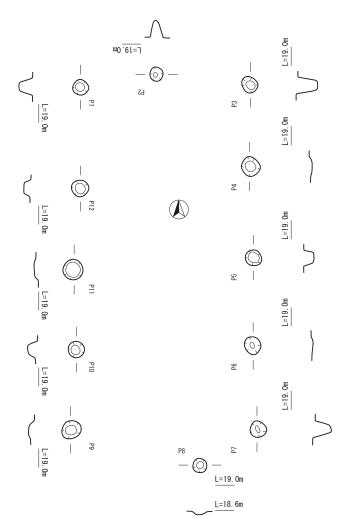
掘立柱建物跡5号(第77図)

検出状況 E-13区の、Ⅲ層上面で検出された。検出された付近には、堀跡1号の壁面を造成し平坦面が造り出されている。建物跡の東側は調査区外へ続くと想定される。

形状・規模 現状での規模は, 桁行間東側 485cm, 西側 460cm, 梁間間北側 230cm, 南側 273cmである。

柱穴跡内の礫 図化しなかったが、北側の東の柱穴を除いて礫が出土している。特に西側の桁行中央の柱穴から根石と想定される礫が5点程度出土している。

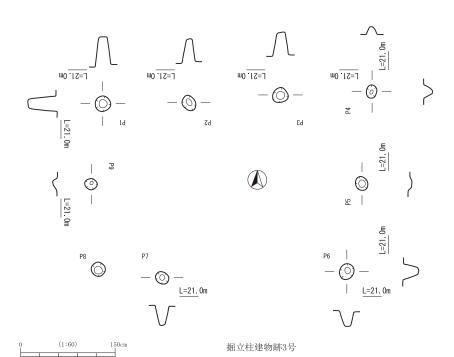
柱穴跡



掘立柱建物跡 4 号				
No.	柱穴(cm)			
No.	長径	短径	深さ	
P1	25	22	21	
P2	22	18	27	
Р3	27	20	33	
P4	31	24	4	
P5	28	21	16	
P6	29	22	3	
P7	26	20	28	
P8	23	20	5	
P9	32	22	7	
P10	26	22	15	
P11	33	25	5	
P12	28	22	10	

主軸	方向	柱穴	柱間距離		
土物	万円		cm	尺	
		P1-P2	121	3. 99	
	桁行	P2-P3	154	5.08	
	MITT	P7-P8	108	3, 56	
		P8-P9	212	6. 99	
N0°	ion.4=:	P3-P4	129	4. 25	
		P4-P5	145	4.78	
		P5-P6	137	4. 52	
		P6-P7	130	4. 29	
	梁行	P9-P10	128	4. 22	
		P10-P11	127	4. 19	
		P11-P12	129	4. 25	
		P12-P1	160	5. 28	

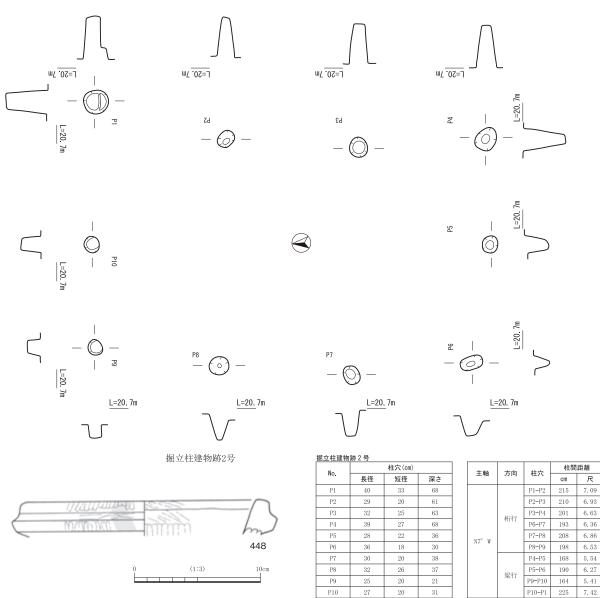
掘立柱建物跡4号



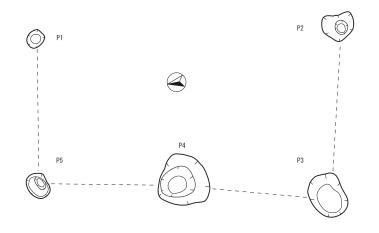
掘立柱建物跡3号				
No.	柱穴(cm)			
NO.	長径	短径	深さ	
P1	25	21	45	
P2	26	17	37	
P3	25	20	35	
P4	21	15	13	
P5	23	17	5	
P6	25	20	25	
P7	22	15	30	
P8	23	19	-	
P9	20	17	7	

主軸	方向	柱穴	柱間距離		
土平田			cm	尺	
		P1-P2	138	4. 55	
	桁行	P2-P3	145	4. 78	
N92° E		P3-P4	144	4. 75	
		P6-P7	295	9. 73	
		P7-P8	100	3, 30	
	梁行	P4-P5	146	4.81	
		P5-P6	146	4.81	
		P8-P9	138	4. 55	
		P9-P1	127	4. 19	

第76図 掘立柱建物跡4・3号



10cm



(1:3)

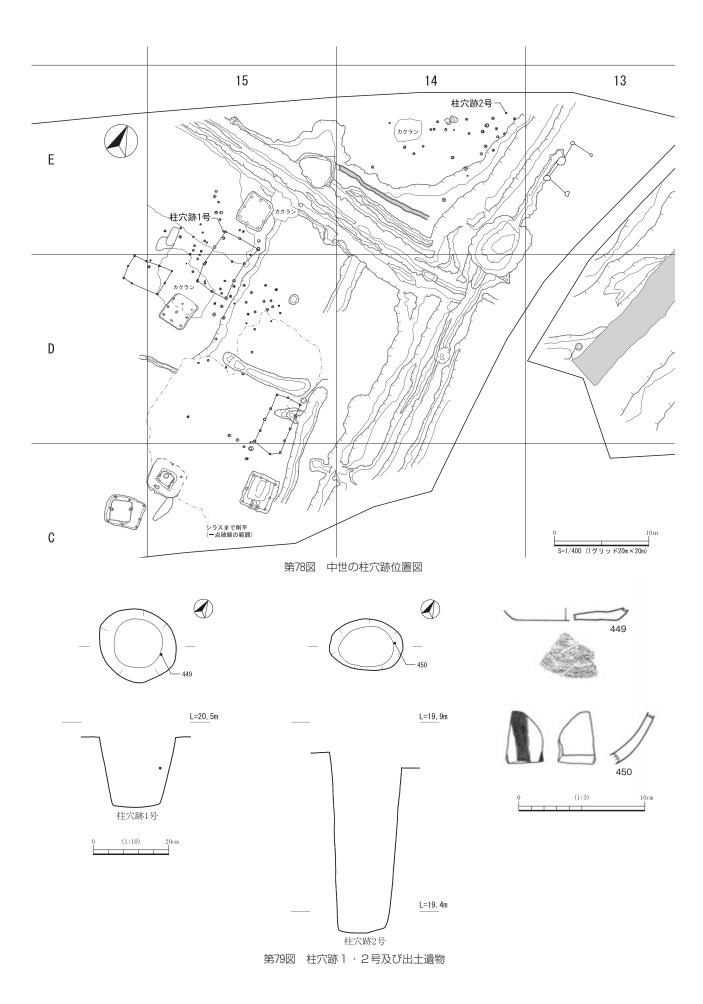
68			P6-P7	193	6.36
36	N7° W		P7-P8	208	6, 86
30	N/ W		P8-P9	198	6, 53
38			P4-P5	168	5. 54
37		梁行	P5-P6	190	6. 27
21		朱1」	P9-P10	164	5. 41
31			P10-P1	225	7.42

No.	柱穴(cm)		
NO.	長径	短径	深さ
P1	30	20	-
P2	52	40	-
Р3	72	43	-
P4	90	69	-
P5	43	28	-

主軸	方向	柱穴	柱間距離	
土井田	기비	往八	cm	尺
N9° W	桁行	P1-P2	485	16.00
		P3-P4	237	7.82
		P4-P5	223	7. 35
		P2-P3	273	9.00
	朱1」	P5-P1	230	7. 59

掘立柱建物跡5号 (1:60)

第77図 掘立柱建物跡2・5号及び出土遺物



- 89 -

柱穴跡は、74基検出された。埋土が黒褐色のものと 灰褐色のものの2種類みられた。柱穴内から遺物の出土 したものだけを報告する。

柱穴跡 1号(第79図)

検出状況 E-15区で、Ⅷ層上面で検出された。掘立 柱建物跡2号の北西隅の柱穴に隣接する。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、20cm×20cmであり、検出面からの深さは18cmである。断面形は、床面はレンズ状を呈し、壁面はやや外傾する。

出土遺物 底面から 10cm上方で土師器が出土した。449 は土師器の坏か皿の底部である。糸切底を有する。

柱穴跡2号(第79図)

検出状況 E-14 区で、W層上面で検出された。やや柱穴が集中する場所であるが、建物跡の復元はできなかった。

形状・規模 平面形は略楕円形を呈する。規模は、20cm × 13cmであり、検出面からの深さは48cmである。断面 形は床面がレンズ状を呈し、壁面はやや外傾する。

出土遺物 450 は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類の胴部である。鎬 蓮弁の鎬の部分が残る。

土坑

土坑は6基検出された。

土坑 19号 (第80図)

検出状況 E-14区で、Ⅷ層上面で検出された。

形状・規模 平面形は不定形を呈する。規模は、長軸82cm、短軸63cmであり、検出面からの深さは53cmである。 断面形は床面が西側にわずかに凹む。壁面は外傾する。

遺物出土状況 床面付近と、検出面付近で土師器の小皿が出土した。

出土遺物 451, 452 は皿である。いずれも器壁が低く、内面の作り込みが甘く、円盤状を呈す。451 は均整がとれて回転ナデ調整も丁寧である。452 は 451 と比してやや調整が粗い。

土坑 18号 (第80図)

検出状況 D-15 区で、Ⅷ層中で検出された。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸 68cm, 短軸 57cmであり、検出面からの深さは6cmである。 断面形は床面がレンズ状に凹む。網掛け部分で硬化面を 検出した。

埋土 暗茶褐色土 (Ⅱ層) で、炭化物を多く含み黒色を 呈する部分がある。0.5~2 cm未満の鉄滓や微細な鉄片 を多く含む。また、埋土中には礫も含まれていた。 出土遺物 453 は鉄滓である。

土坑 20号 (第80図)

検出状況 D-13 区で、堀跡 1 号の底面付近の W層上面で検出された。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸74cm, 短軸73cmであり、検出面からの深さは6cmである。断面形は、床面はレンズ状に凹む。

埋土 黒色土で炭化物を含む。

土坑 17号 (第80図)

検出状況 D-15区で、Ⅷ層上面で検出された。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸 105cm, 短軸 102cm, 検出面からの深さは 43cmである。 断面形は床面がほぼ水平で、壁面はやや外傾する。

埋土 埋土は暗褐色を呈する。埋土中から礫が1点出土 している。

土坑 22号 (第81図)

検出状況 D-12・13 区の境界で、Ⅲ層上面で検出された

形状・規模 平面形は南北方向に長い隅丸方形を呈する。規模は、長軸 261cm, 短軸 171cmであり、検出面からの深さは 32cmである。断面形は、床面はほぼ平坦で、壁はやや外傾する。

埋土 茶褐色土中に赤褐色の焼土と炭化物が混在する。 炭化物は径1cm~8cm程度の炭化木で、樹皮を残すもの もあった。

土坑 21 号 (第81 図)

検出状況 D-12 区で、堀跡 1 号に沿った土塁状の高まりの北東側で検出された。

形状・規模 平面形は略円形を呈し、規模は、長軸 196 cm, 短軸 182cmであり、検出面からの深さは 192cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外湾しながら立ち上がる。壁面はWI層(シラス)で、底面から水が湧き出す。井戸であった可能性がある。

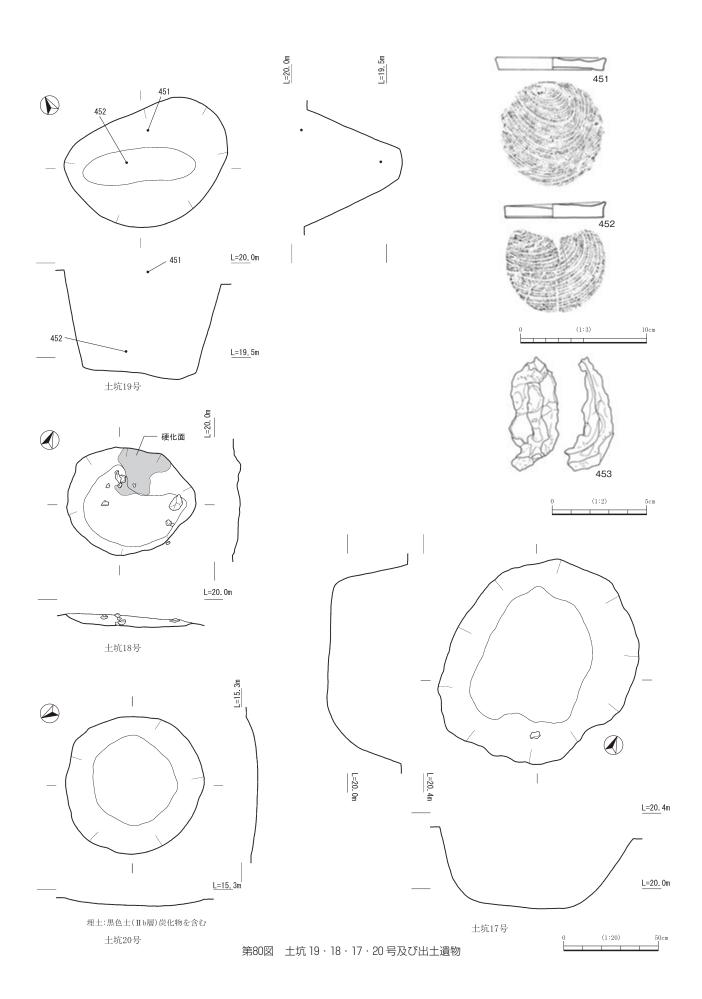
埋土 検出面から下へ150cm程度まで:茶褐色土で径5~10cm程度のシラスのブロックが入る。検出面から150cm以上下:暗茶褐色粘質土、Ⅱ層に類似するが、粒子が細かく、焼土・炭化物を含まない。

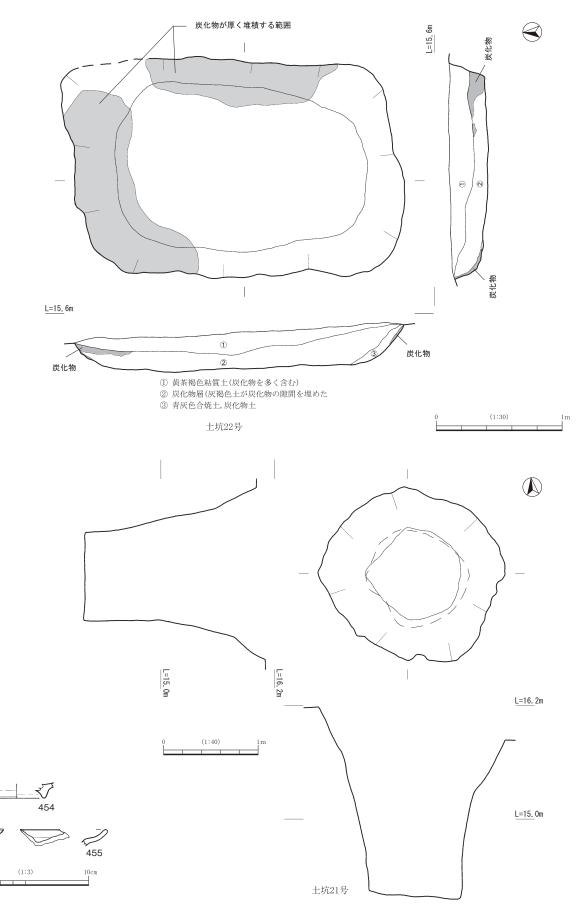
出土遺物 454 は青磁碗の底部である。全面に施釉後、 畳付の釉を剥いでいるが、一部釉が残る。455 は青磁の 坏である。口縁部は「く」の字状に外反し端部を上方に 引き出す。

大型土坑状遺構 1号(第82図)

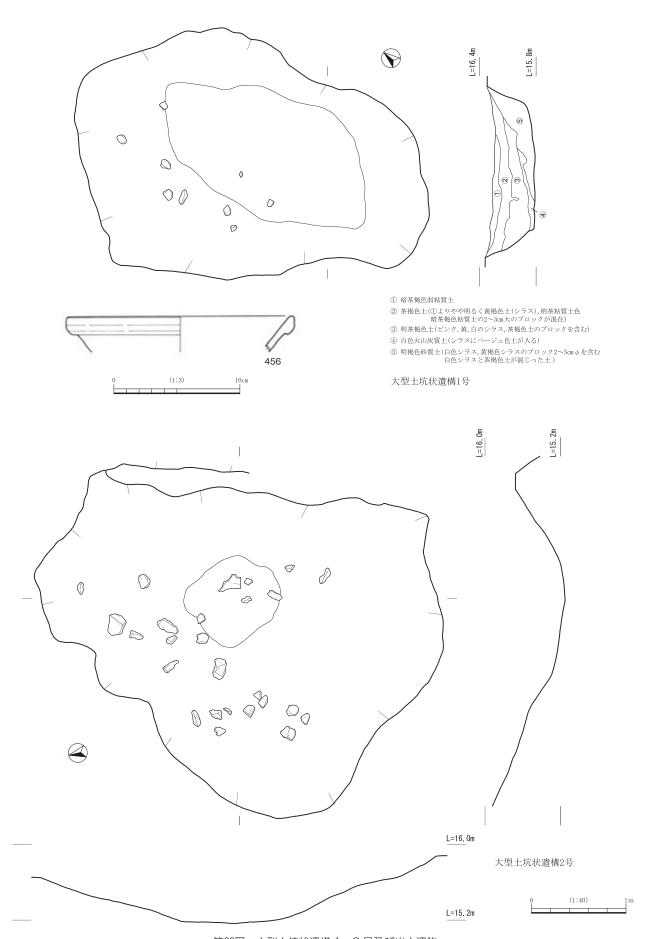
検出状況 堀跡 1 号内の D − 12 · 13 区の境界で、 **W**層 上面で検出された。堀跡 1 号との関係は不明である。

形状・規模 平面形は不定形を呈する。規模は、長軸 352cm、短軸 262cmであり、検出面からの深さは 47cmで

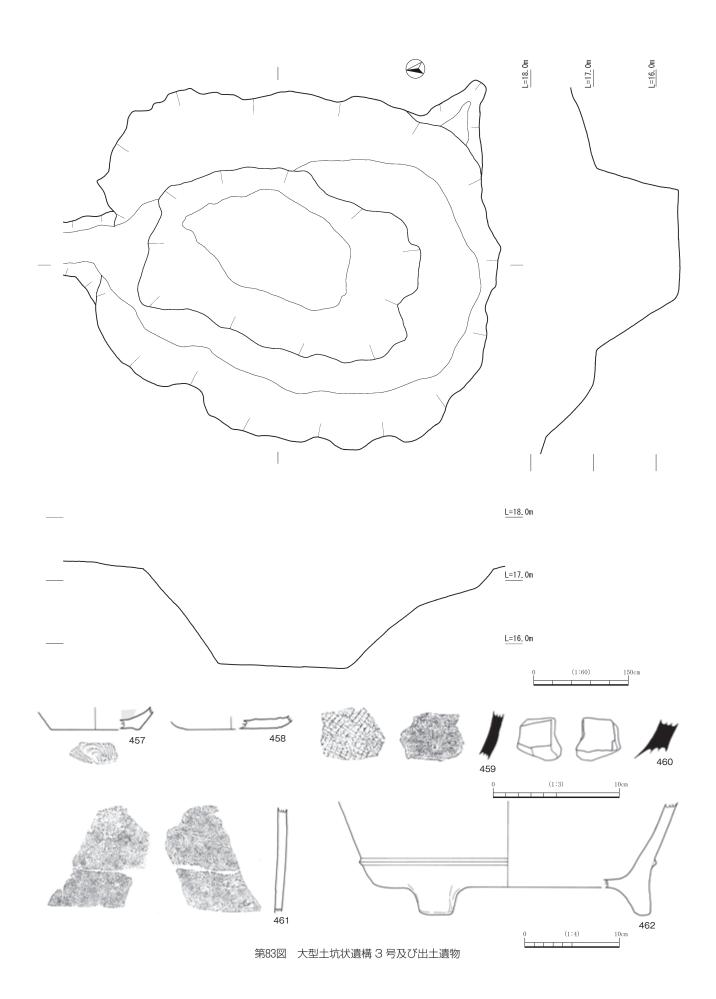




第81図 土坑 22・21 号及び出土遺物



第82図 大型土坑状遺構 1・2 号及び出土遺物



ある。断面形は、床面はほぼ平坦で、壁はやや外傾する。 また、埋土中に礫が出土した。

出土遺物 456 は白磁碗 V 類の口縁部である。扁平な玉縁口縁を有する。

大型土坑状遺構2号(第82図)

検出状況 堀跡 1 号内の $D \cdot E - 12$ 区で、W層上面で検出された。堀跡 1 号との関係は不明である。また、埋土から径 $10 \sim 20$ cm程度の礫が 26 個出土した。

形状・規模 平面形は不定形を呈する。規模は、長軸 420cm、短軸 330cmであり、検出面からの深さは 72cmである。断面形は不整形で、床面から壁面が緩やかに外傾しながら立ち上がる。

大型土坑状遺構3号(第83図)

検出状況 D・E − 14 区, E − 13 区堀跡 1 号の内部の Ⅷ層上面で検出された。

形状・規模 平面形は東西方向に長い略隅丸長方形を呈する。規模は、長軸 612cm、短軸 546cmであり、検出面からの深さは 162cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾し、上部でラッパ状に開く。

埋土 褐色のパミス混じりの黒褐色土, 褐色のパミス及び白色のシラスが混在している。

出土遺物 457 は土師器皿の底部である。内外面に煤状のものが付着している。458 は土師器の坏か皿の底部である。器壁の立ち上がり部に沈線が1条巡る。

459 は須恵器の壺の胴部である。内面にナデ調整痕, 外面に格子目叩き痕が残る。胎土は層状を呈し, 0.5mm 以下の白粒が多くみられる。460 は須恵器の壺の胴部で ある。胎土はほぼ均一だが, 器壁が厚いためか, 断面内 部に黒色を呈する部分がある。

461 は国産陶器の甕の胴部片と思われる。内外面はナデで調整される。462 は瓦質の火鉢である。脚部は隅丸長方形を呈する平坦面を有し、体部下部に1条の突帯が巡る。内外面ともハケメとナデ調整が施されているが、外面の突帯より上位は特に丁寧な調整が施される。脚部の数は不明である。

堀跡 1号(第84·85図)

検出状況 $C \sim E - 12 \sim 14$ 区で、調査区を南北方向に 縦断する農道に沿って検出された。農道に沿って調査区 外の南北方向に続くものと想定される。

形状・規模 調査区内での規模は、南北方向に長さ約35 m、東西方向の幅約50 mに渡り、上述のように南北方向は調査区外へ続く。

断面形は、 $E-12\cdot13$ 区からD-13 区に南北方向に底面があり(第84 図のアミ掛けの範囲)、壁面の立ち上がりは大きく外傾し、壁面には小規模な段差がみられる。

床面までの深さは約2~2.5 m程度である。

埋土 埋土はレンズ状堆積を呈し、床面付近にはⅡ層が 堆積する。Ⅱ層の上層には、Ⅱ層とシラスの混土等が堆 積し、最終的に1mほどの表土で覆われる。

出土遺物 床面付近のⅡ層出土遺物を報告する。463, 464 は土師器の坏の底部である。いずれも糸切り底を有 する。

465 は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。片切彫りで幅広の 鎬蓮弁が施される。釉内に径1mm以下の気泡が多くみら れる。466 は青磁碗の底部である。断面四角の高台を有 し、畳付きは外側に向けて斜め上にヘラ切りを行う。見 込みには圏線が巡る。片切彫りの鎬蓮弁が施される。高 台内周縁部まで施釉されている。467 は青磁碗の底部で ある。断面台形の高台を有し、高台内は中心部に向けて 盛り上がる。見込みに目跡が残り、釉が白濁化した部分 がある。残存部の外面は無釉である。平面が略円形を呈 しており、高台も含めて意図的に打ち欠いた可能性があ る。

468 は中国産の天目碗の口縁部であるが、小片であるため、詳細は不明である。胎土は白色を基本として微細な黒粒が多く含む。内外面に黒色を呈する鉄釉がかかり、内面は口唇部から2mm程下の所から下へ3mmほど、外面は口唇部から2mm程下の所から下へ8mmほど色調が褐色を呈している。

469 は瓦質の火鉢である。口唇部外面の張り出しと胴部に巡らした2条の突帯で区画を作り出す。最上部の区画に断面 V 字状の長方形の印文を巡らし、2番目の区画に四菱文を巡らす。

470 は平瓦である。凸面はナデ調整が施される。凹面 は布目が残るが周縁部にナデ調整が施される。

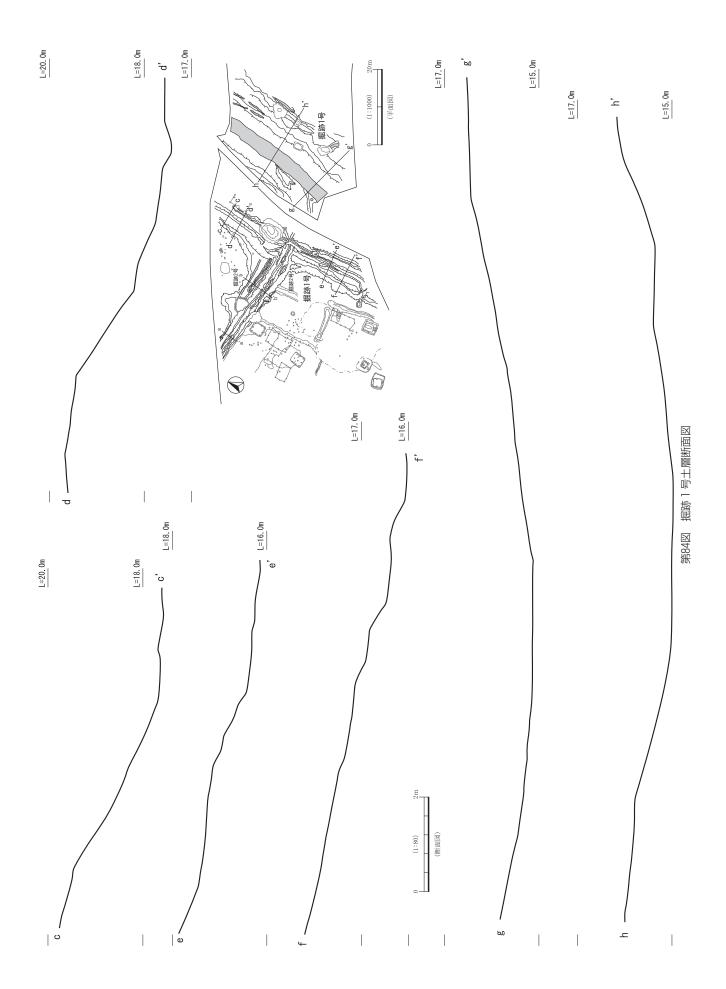
堀跡2号 (第86~88図)

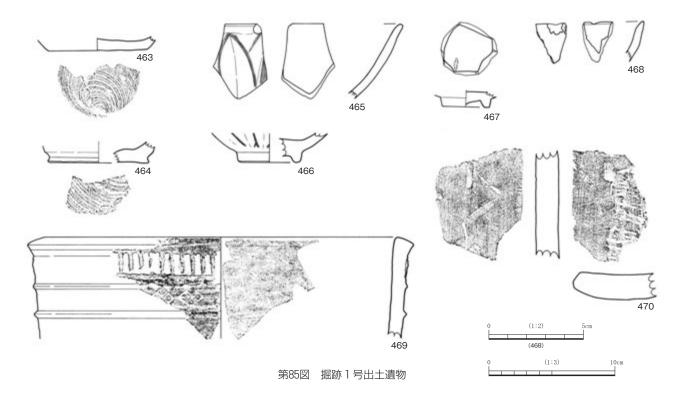
検出状況 D·E-14·15 区で、表土直下のW層上面で検出された。長軸は東西方向であり、堀跡 1 号に直交する。検出状況から、堀跡 1 号、竪穴建物跡 1 号及び竪穴状遺構を切っており、時期差のあったことが確認された。

形状・規模 検出された範囲で、東西方向に長さ約30 m, 南北方向に幅約5 m, 長さ約30 mであり、東端は堀跡1号にぶつかり、西側は調査区外へ延びる。検出面からの深さは約80cmである。断面形は、最下部で狭い平坦面を有する。壁面は外傾するが、南側の傾斜が北側と比較して緩やかである。

埋土 埋土は、Ⅱ層を基調としたレンズ状堆積を基本とする。一部にシラス等が混入する。

出土遺物 底面付近から出土した遺物を報告する。471 ~ 473 は土師器坏である。色調は全て褐色を呈する。471 は底部内面を回転成形した痕跡が残るが、中央はナ





デ消されている。体部は直線的に延び、口縁部は鋭い。 472 は途中で内側に屈曲する。口縁部は鋭い。474 は底 面内部にナデて回転成形した痕跡が残る。

474,475 は土師器皿である。474 の色調は乳白色を呈し、475 は褐色を呈する。474 は底部内面をナデて回転成形したあと体部を直線的に立ち上げる。口唇部内面が斜めに面取りされている。475 は底部内面をナデて回転成形したあと体部外面を直線的に立ち上げる。体部内面は緩やかに立ち上がる。

476 は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。片切彫で蓮弁文が表現され、間弁を有するが、鎬が僅かに確認できる。477 は、明代以降の青磁碗の底部である。高台は欠損している。見込みに界線が廻り、内面中央部が輪状に釉剥ぎされ、その中に目跡が残る。高台内の周縁部は施釉されるが、中央部は施釉されない。胎土は赤橙色を呈し、粗い。高台については意識的に打ち欠いている可能性がある。

478 は青磁皿の底部である。外面下部は露胎でヘラケズリにより稜線がはっきりした調整が施される。479 は白磁皿の底部である。体部外面下部は露胎である。高台畳付部は緩やかな曲線を描く。見込みに目跡が残る。森田D群に比定されるものである。

480 は染付碗の底部である。高台畳付は丸みを帯びて成形され、釉は畳付を越えて高台内面の途中までかかる。畳付に砂が付着している。見込みに花文が施される。釉は白濁し、胎土も黒色鉱物を多く含んで、粗いことから 璋州窯産と考えられる。

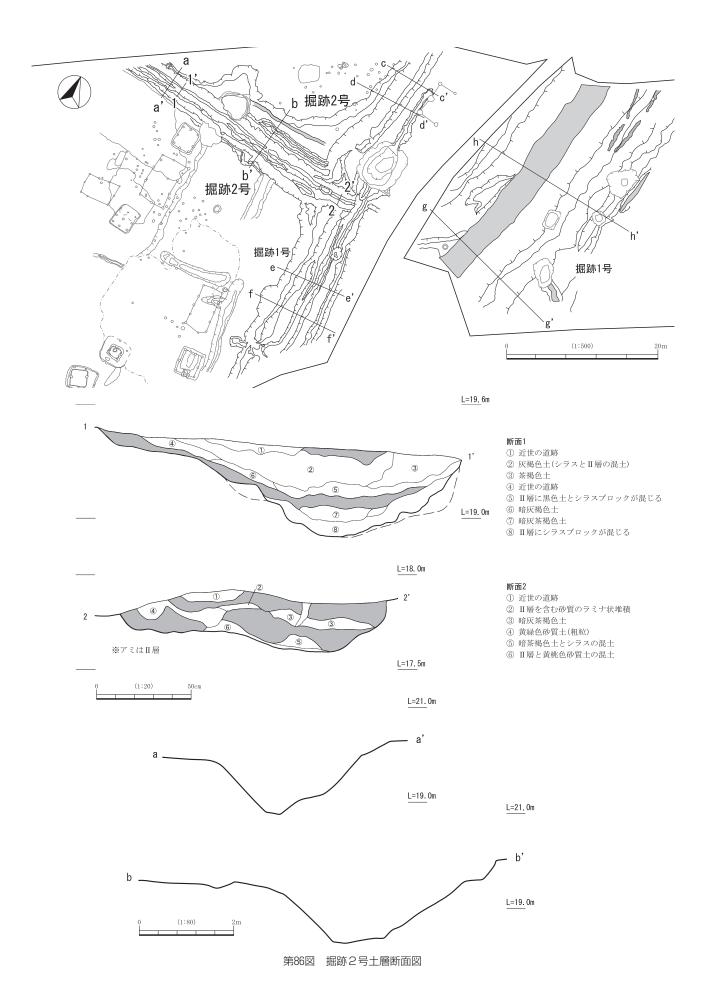
481 は中国陶器の甕または壺の胴部片である。内外面

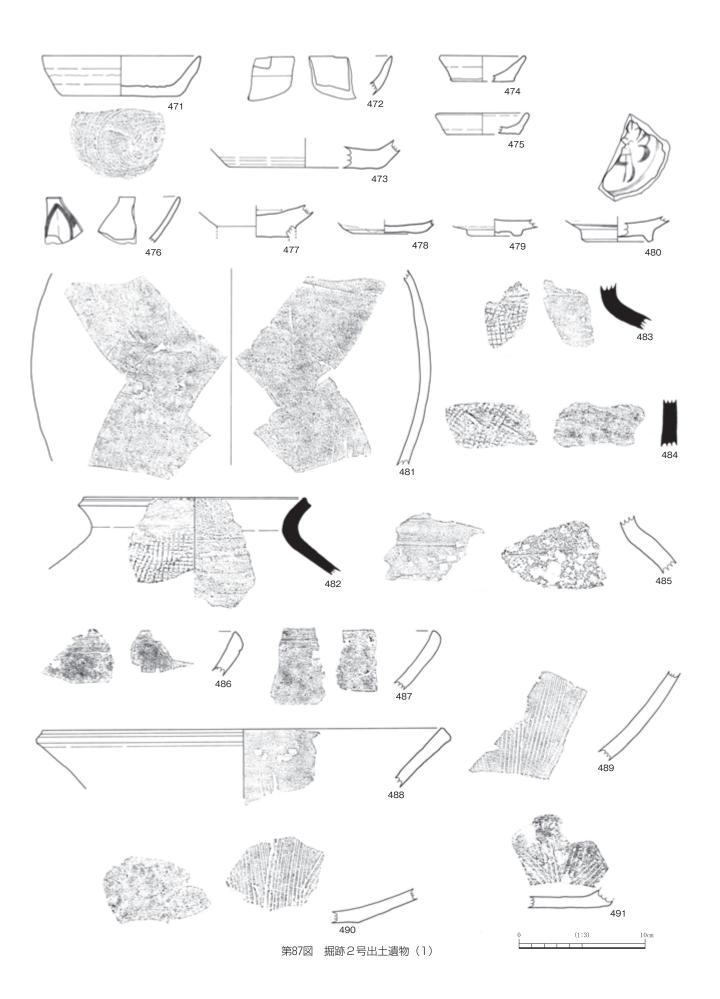
は,横方向のナデ調整が施される。胎土は淡橙色を呈し, 白色鉱物を多く含む。

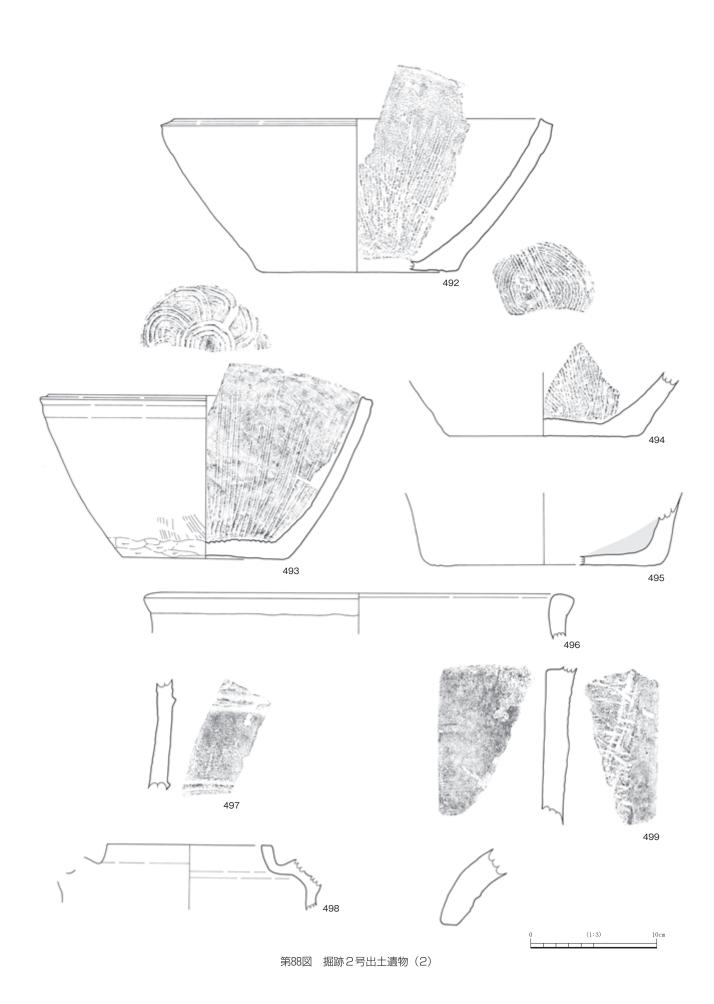
482~484 は須恵器の甕である。482 は口縁部~胴部である。外面の頸部より上位にはナデ調整,下位には格子目叩き痕,内面はナデ調整とハケメ調整の痕跡が残る。口唇部に段を有する。483 は頸部である。外面に格子目叩き痕,内面はナデ調整が施されている。胎土が均一な状態である。484 は胴部である。外面に格子目叩き痕,内面に平行状の当て具痕が残る。485 は瓦質で,頸部から胴部である。外面には平行叩き目,内面は当て具痕を摺り消すナデ調整が施されている。胎土は茶色を呈している。

486~494 は擂鉢である。486 は口縁部から胴部上部である。口唇部は断面三角を呈し、凹みを有さない。内面は外面に比して丁寧なナデ調整が施され、擂目が施されている。487 は口縁部から胴部である。内外面とも丁寧に調整が施され、表面に灰釉がかかる。3条の擂目が残る。488 は口縁部から胴部上部である。口唇部外面がやや盛り上がり、中央部は凹む。内面に3条の擂目が残る。489 は胴部である。内面は外面に比して丁寧なナデ調整が施され、擂目が密に施される。490 は胴部下部から底部である。外面は屈曲して立ち上がり、内面は緩やかに立ち上がる。残存している内面には密に擂目が施される。491 は底部である。見込みには中心から放射状に擂目が施される。外面は剥落が激しい。

492 は完形に復元できるが、底部中心部は欠損している。底部は薄いが、内面の立ち上がりが緩やかで体部の下部は器壁が厚くなる。口唇部は内面側が高く、中央部







- 100 -

がやや凹む。内外面とも粗いナデ調整が施されている。 密に擂目が施される。

493 は完形に復元できるものである。内外面とも底部から屈曲して立ち上がり、口唇部は内面がやや高く、窪みを有する。見込みに同心円の周囲に曲線を配した擂目、体部内面に放射状の5条を単位とする擂目が施されている。内面には丁寧なハケメ調整が施され、外面はやや粗いナデ調整とハケメ調整が施される。

494 は胴部下部から底部である。内面見込みには同心 円状の擂目の上に直線的な擂目が施される。体部には密 に放射状の擂目が施される。

495 は軟質の瓦質土器だが器種は不明である。鉢と考えられる。底部の内面中央部にはハケメが残り、周縁部には幅5mm程度のヘラナデ痕が残る。底部外面は粗いナデ調整が施される。底部周縁の上から体部を立ち上げ、内面はナデ調整痕が残るが、外面は剥落が激しく不明である。内面の底部から割れ口で一面に煤が付着しており、欠損後に何らか再利用された可能性がある。

496,497は火鉢である。496は口縁部で、口縁端部を外側にやや引き出し、口唇部に平坦面をつくる。497は胴部で上下2条の突帯が巡る。外面上部に文様が一部残る。内外面とも剥落がみられるが、外面はナデ調整が施されている。外面の色調が褐色を呈している。

498 は茶釜の口縁部から胴部である。肩部に斜めに孔の長さが2cmの耳が付く。耳の位置の内面には取付けの際の指頭圧痕が残り、凹む。口唇部には平坦面をつくる。外面は丁寧なナデ調整が施され、内面は、口縁部にハケメ、胴部にナデ調整が施される。

499 は丸瓦である。凹面には布目が残り、平坦面は丁寧なナデが施される。凸面は長軸方向のナデ調整が施される。玉縁面がわずかに残る。中国産の瓦である可能性がある。

溝状遺構

本地点で溝状遺構は、4条検出された。調査時の切り 合い関係から、竪穴建物跡や掘立柱建物跡、堀跡1号よ りも新しい時期のものと判断される。

溝状遺構 1号(第89図)

検出状況 C・D-15区で、 Ⅲ層上面で検出された。 掘立柱建物跡3号を切っている。北端の西側に東西方向 に延びる溝状遺構2号が隣接している。

形状・規模 平面形は、長軸はほぼ南北方向に延びており、N3°Eを示す。規模は、長軸13 m、短軸1.2 m程度であり、南側は調査範囲外に続く。検出面からの深さは66cmである。断面形は底面がレンズ状を呈し、壁面は外傾する。北側に東西方向への分岐がある。

埋土 黒褐色土で、黄色の火山灰パミスが混ざる。

溝状遺構2号(第89図)

検出状況 D-15区で、Ⅷ層上面で検出された。東端 で溝状遺構1号と隣接する。

形状・規模 平面形は東西方向に延びており、長軸はN89°Wを示す。規模は、長軸9.7 m、短軸1.2 m程度である。断面形は底面がほぼ平坦で、壁面は外傾する。検出面からの深さは30cm程度である。

埋土 埋土は溝状遺構 1 号と同じで、黒褐色土を基調と する

出土遺物 500, 501 は糸切底を有する土師器の底部である。

溝状遺構3号(第69図)

検出状況 $D-14\cdot15$ 区で、M層上面で検出された。 北端は堀跡 2 号の裾に切られ、南側は削平により消滅する。

形状・規模 平面形は南北方向に延びており、長軸はN 10°Wを示す。規模は、長軸7m, 短軸2.5 m程度である。 埋土 埋土は溝状遺構1号及び2号と同じで、黒褐色土を基調とする。

その他の遺構

堀跡1号や堀跡2号の壁面のわずかな平坦面に,近世のものと考えられる道跡(帯状の硬化面)や,小規模な溝状遺構などが検出されている。

(3) B~E-19~26区の調査

調査の概要

B~E-19~26 区は地形が起伏に富み、丘陵部と谷地形及び低湿地からなる。低湿地については(4)で報告する。B~E-19~26 区の丘陵部では \mathbb{N} ~ \mathbb{M} 層まで削平を受けており、 \mathbb{I} 層の堆積は確認されなかった。そのため、この地点では、表土除去後、直ちに中世の遺構検出を行なった。

B~E- $22 \cdot 23$ 区及 \overline{V} B·C-25 区の傾斜地及 \overline{V} 谷 状地形の底付近では、 \overline{I} 層が良好に残存していたが、 含まれる遺物は、小片が少量認められる程度であった。

また、B-24 区からE-22 区に向かって南北方向に大規模な地形の造成が認められたが、造成後のII 層の堆積は確認できなかったため、造成は近世以降のものであると判断した。

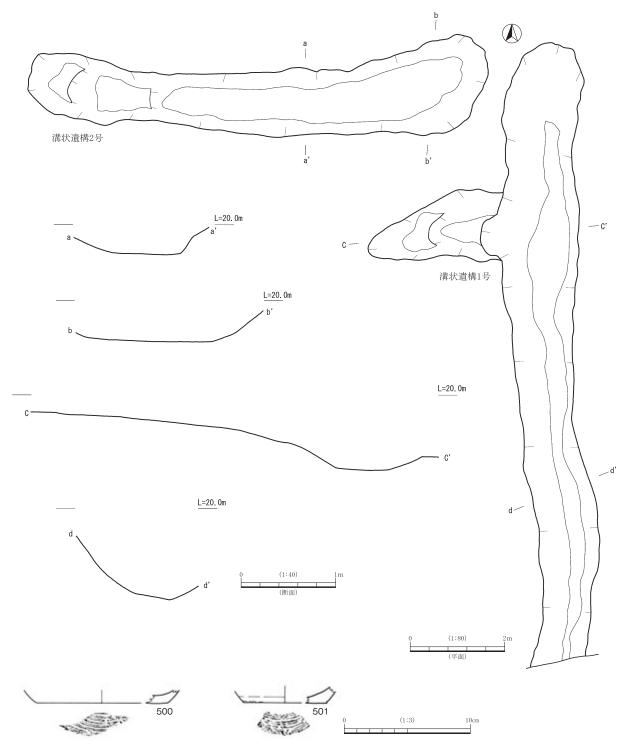
土坑

土坑は5基検出された。

土坑 23号 (第91 図)

検出状況 土坑 23 号は, C-23 区で西から東へ向かって緩やかに傾斜する W層上面で検出された。

形状・規模 平面形は、南北方向に長い隅丸長方形を



第89図 溝状遺構 1・2 号及び出土遺物

呈し、長軸はN9°Eを呈しする。規模は、長軸194cm、短軸98cmである。検出面からの深さは28cmで、断面形は床面がほぼ平坦で、壁面は八の字状に立ち上がる。 埋土 埋土は、Ⅱ層に該当する暗褐色~黒褐色土がレンズ状に堆積する。埋土中から遺物は出土しなかった。

土坑 24号 (第91図)

検出状況 B-25区で検出された。谷地形を確認する

ための先行トレンチで検出されたため、WI層上面での検出となった。

形状・規模 規模は、長軸 117cm, 短軸 108cmで, 平面形は, 西側がやや直線的となる円形となる。 検出面からの深さは 11cmで, 断面形はすり鉢状になる。

埋土 埋土は、黒色土と褐色土・黄褐色土がブロック状に堆積する。なお、埋土中から遺物の出土はない。

土坑 27号 (第91 図)

検出状況 B-25 区のⅡc層上面で検出された。検出面と遺構埋土が同系統の黒色土であり、平面形及び掘り方の確認を行うため、まずサブトレンチを設定し調査を行った。

形状・規模 規模は,長軸 90cm,短軸 83cmで,土坑 24 号よりやや小ぶりな円形となる。検出面からの深さは19cmで,断面形はすり鉢状になる。

埋土 埋土は、黒色土と暗褐色がレンズ状に堆積する。 なお、埋土中から遺物は出土しなかった。

土坑 25号 (第91 図)

検出状況 C - 22 区の谷地形の底付近で, Ⅱ c 層の下の WI 層上面で検出された。

形状・規模 規模は長軸 55cm, 短軸 50cmで, 平面形は 円形となる。

埋土 埋土は暗灰色の粘質土である。

土坑 26 号 (第91 図)

検出状況 D-20 区で, 地形が東から西へ傾斜する斜 面で検出された。

形状・規模 規模は,長軸 116cm,短軸 74cmで,平面形は,東西に長い楕円形である。

埋土 埋土は、Ⅱ層の黒色土である。

溝状遺構 (第 92·93 図)

 $B \sim E - 22 \sim 25$ 区では、溝状遺構が 11 条検出された。中世に該当するものは、溝状遺構 5 号 ~ 12 号である。 溝状遺構 13 号 ~ 15 号は近世以降に該当する。 なお、 12 号については近世以降の可能性もある。

溝状遺構5号(第92図)

検出状況 溝状遺構 5 号は, D・E-23・24 区の表土 直下で検出された。東西方向に延び, 西端は調査区外へ 続く。

形状・規模 調査した範囲で、長さ約 $15.5 \,\mathrm{m}$ 、幅 $80 \sim 120 \,\mathrm{cm}$ 程度である。断面形は不整形で、すり鉢状になる地点や箱形になる地点がみられた。

埋土 埋土は、褐色土~黒褐色土であり、Ⅱ a 層に相当する。基本的にはレンズ状堆積だが、ベルト4の一部のように、ブロック状の堆積も確認された。埋土中に多くの礫が含まれていた。

出土遺物 502 は土師器の坏または皿の口縁部片である。503,504 は明代以降の青磁碗の底部である。内面 見込みには花文の印文が入る。

溝状遺構6号(第92図)

検出状況 D-23区の表土直下で検出された。西側の1.7

mに溝状遺構5号が位置し、東側は溝状遺構8号に隣接する。溝状遺構5号と軸を同じにすることから、本来は同一のものであったと考えられる。

形状・規模 長さ約 4.5 m, 幅 $80 \sim 120 \text{cm}$ 程度である。断面形は、床面にやや凹凸が見られるが、すり鉢状となる。

埋土 埋土は、褐色土〜暗褐色土が、ブロック状に堆積する。暗褐色土はⅡ a層に相当する。溝状遺構 5 号同様、埋土中に多くの礫が含まれていた。

溝状遺構8号(第92図)

検出状況 D-22 区の表土直下で検出された。溝状遺構 6 号に隣接し、溝状遺構 6 号からほぼ直角に南北方向に折れるような位置関係となる。

形状・規模 長さ約 10.5 m, 幅 100 ~ 130cm程度である。 断面形は、溝状遺構 5 · 6 号と比較して壁面の立ち上が りの角度がきつい。

埋土 埋土は、Ⅱ a層に相当する暗褐色土を主体とし、 ブロック状に堆積する。溝状遺構8号も埋土中に多くの 礫が含まれていた。

出土遺物 505, 506 は瓦質土器である。505 は擂鉢で、 内面に擂目がみられるが、単位は不明である。外面の摩 滅は著しい。506 は甕もしくは壺の胴部である。硬質で、 内面には横方向のナデ調整が確認できる。

溝状遺構7号(第93図)

検出状況 $B \sim D - 22 \cdot 23$ 区の,西から東へ緩やかに傾斜するW層上面で検出された。 $B \cdot C - 23$ 区では地形の傾斜と平行するように南北方向に延び,南端は道状遺構 1 号と連接する。一部を溝状遺構 13 号に切られる。 $C \cdot D - 22 \cdot 23$ 区の境界付近で,ほぼ直角に東方向に折れるが,東端は自然消滅する。

形状・規模 南北方向約25 m, 東西方向約7 mである。 直線的に形成されるが, 南端の道状遺構付近では, 不規 則に曲がる。幅は最小40cm程度から最大150cm程度であ る。断面形はすり鉢状を基本とするが, 箱形で二段堀状 になる箇所もみられた。検出面からの深さも地点により 変化し、10cm~50cm程度となる。

埋土 埋土は $IIb \sim IIc$ 層に相当する黒褐色土が主体で、レンズ状堆積を基本とする。北側では埋土にしまりはなく、硬化面等は確認されなかったが、道状遺構 1号付近では埋土が固くしまるようになり、床面が硬化する箇所も存在した。

出土遺物 508 は土師器の皿である。口縁部の内外面に 煤が部分的に付着することから、灯明皿として使用され ていたものと考えられる。509 は白磁皿IX類で、口禿皿 の口縁部である。510 は瓦質の擂鉢である。内面の擂目 が深い。

溝状遺構9号(第93図)

検出状況 B・C-25区の表土直下のⅢ層上面で検出 された。南東から北西へ傾斜する谷地形の斜面に平行に 形成される。南東端は調査区外へ続く。

形状・規模 調査した範囲で、長さ約20 m, 幅70~130cm程度である。断面形はすり鉢状になる。

埋土 埋土は、Ⅱ a層に相当し、レンズ状堆積を呈する。 埋土中に多くの礫が含まれていた。

出土遺物 507 は白磁碗の胴部片である。内面には一条の沈線が入る。

溝状遺構 10号 (第93図)

検出状況 C-25 区の表土直下のW層上面で検出された。傾斜する谷地形の斜面に平行に形成される。南東から北西に延びており、溝状遺構 $9\sim10$ 号はほぼ並列する。

形状・規模 調査した範囲で, 長さ約11 m, 幅50cm 程度である。

溝状遺構 11号 (第93図)

検出状況 B・C-25区の表土直下のⅢ層上面で検出された。傾斜する谷地形の斜面に平行に形成される。溝 状遺構 9 号と 10 号の間に位置する。

形状・規模 調査した範囲で、長さ約7 m、幅 50cm 程度で、規模は溝状遺構 10 号と類似する。

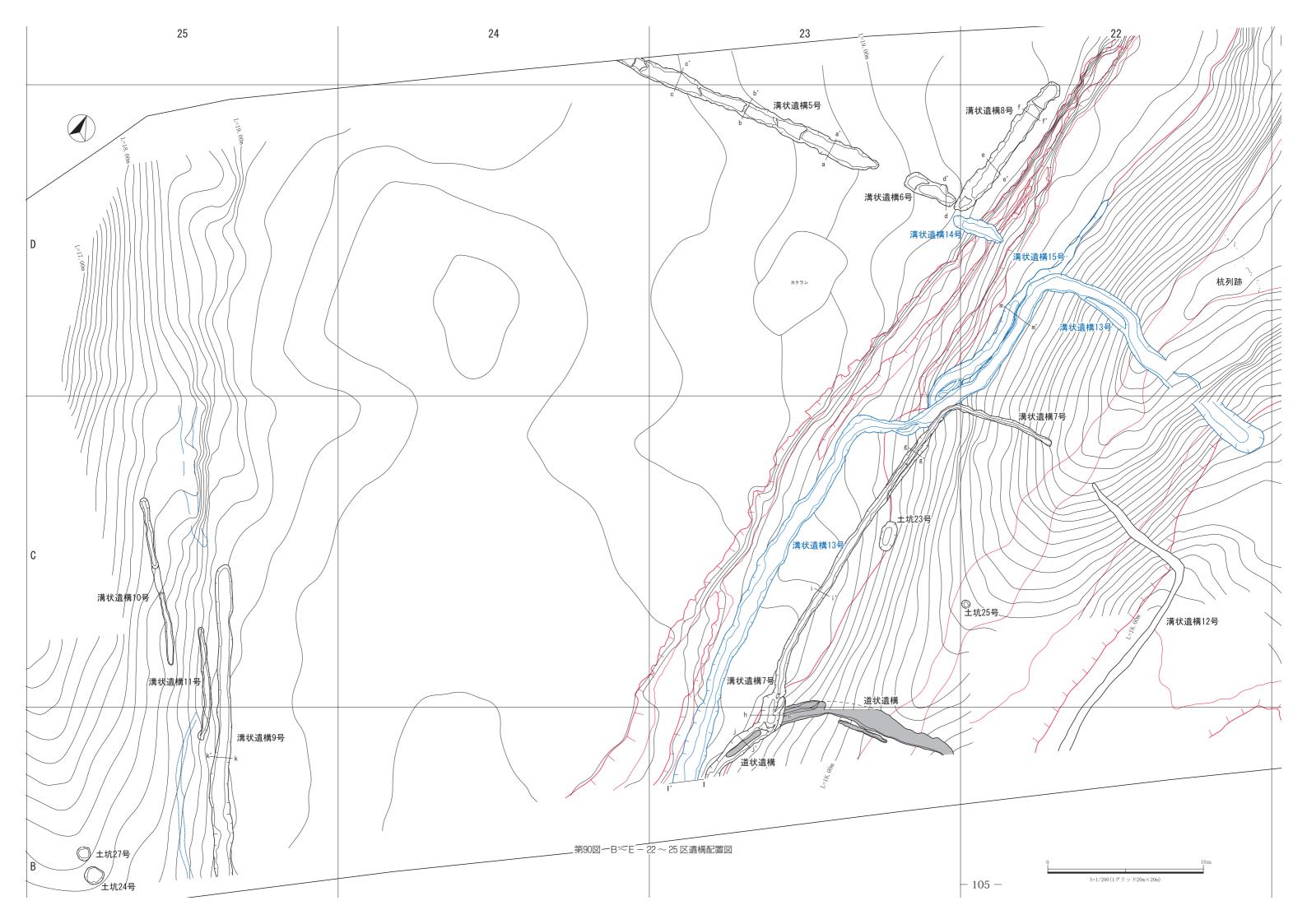
近世以降の溝状遺構

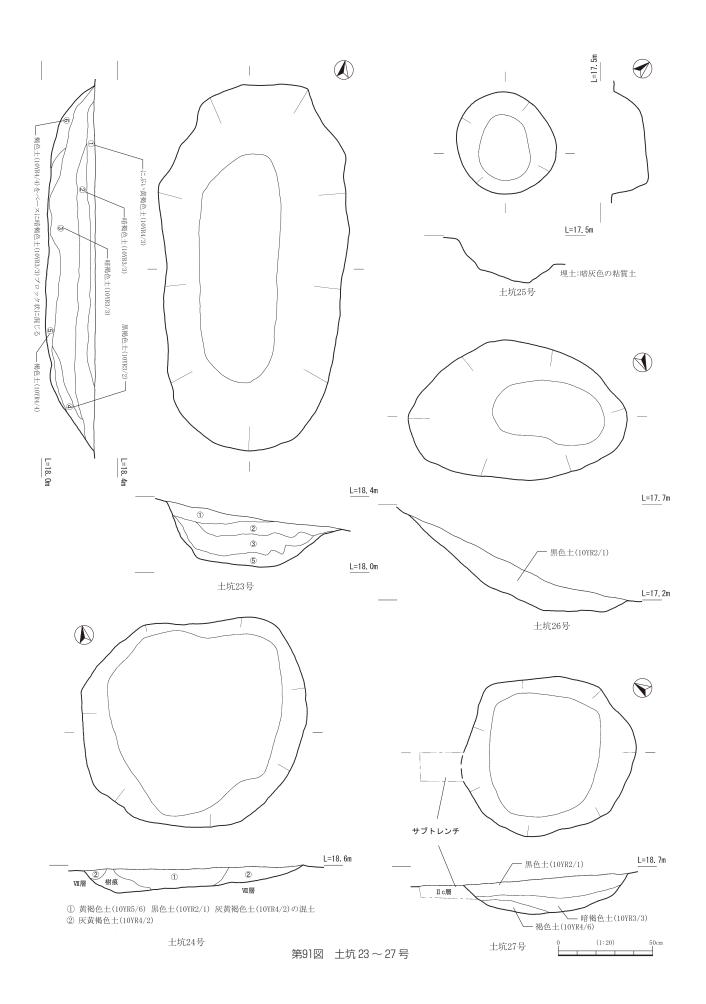
B~D-22・23区では、中世に該当する溝状遺構と重なる様に、近世以降の溝状遺構 13号~15号が検出された。近世以降の溝状遺構は埋土がⅡ上層を基調とする。特に溝状遺構 12号は、溝状遺構 7号と軸や折れる方向等が類似する。傾斜面に平行した、南北に直線状に延びるものや、東西どちらかに直角に折れる形状を成すもの等がある。

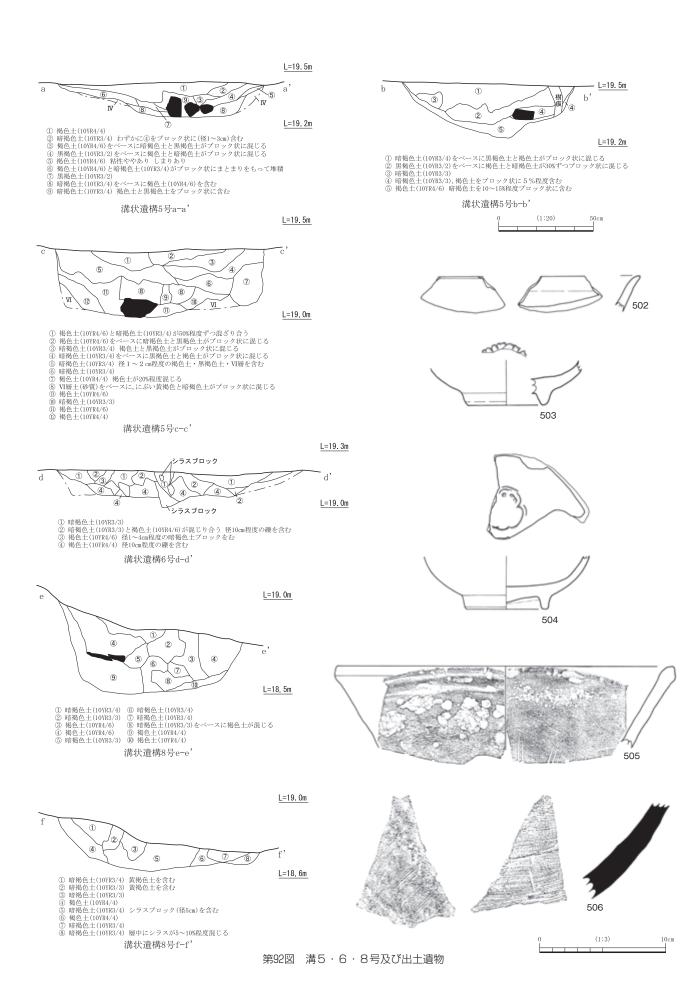
道状遺構 (第94図)

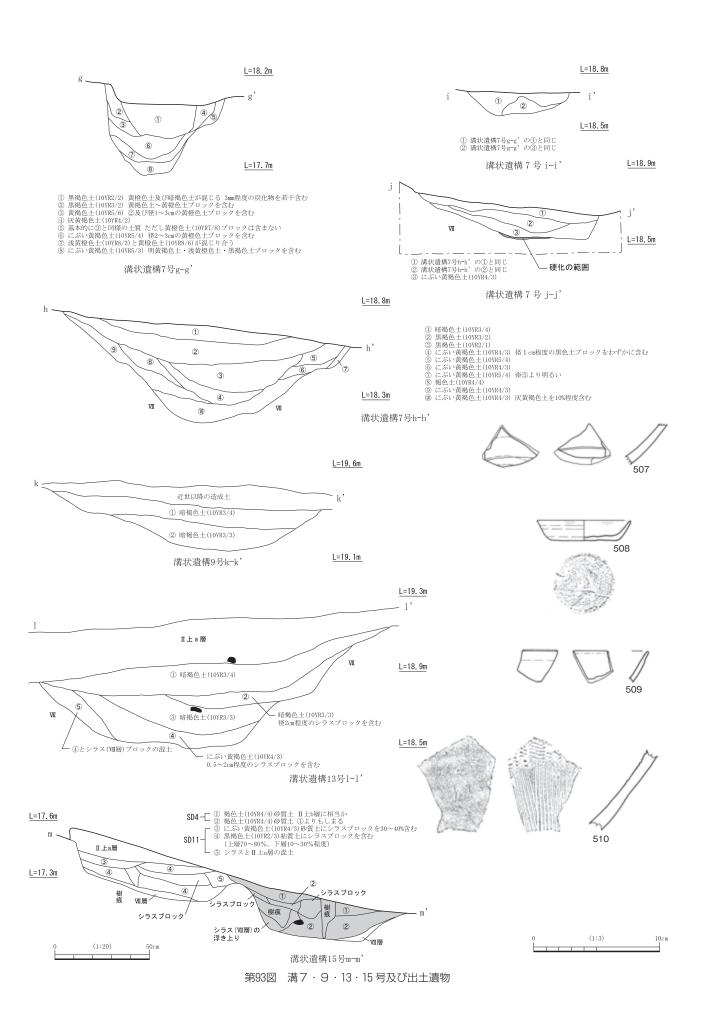
検出状況 B・C - 23 区の谷頭付近の,東側はⅡ b層上面で,西側のⅡ層が堆積しない箇所ではⅢ層上面で検出された。遺構の北端が土層観察用ベルトと重なったために,掘削時に一部を破壊している。平面形は東西方向にやや北側に膨らむような弧を描く。東端は調査区外へ続くが,西端は溝状遺構 7 号と繋がり,調査区外へ続く。断面の状況 Ⅱ a層に覆われ,Ⅱ b層に形成される。埋土は黄褐色~褐色の砂質土で,非常に固くしまる層を形成する。地点によっては,床面付近ではラミナ状の堆積が確認された。浅いすり鉢状に凹むが,人為的な掘り込みではなく,人間等の往来により徐々に形成されたものと考えられる。

満状遺構7号との関係 道状遺構と溝状遺構7号の新旧関係は、溝状遺構7号の黒色土が道状遺構の硬化面を切っている状況から、本遺構が古いと判断した。しかし、本遺構と溝状遺構7号床面の硬化面は、レベル差が無く、一連のものと判断されることから、ほぼ同時期のものであると想定される。

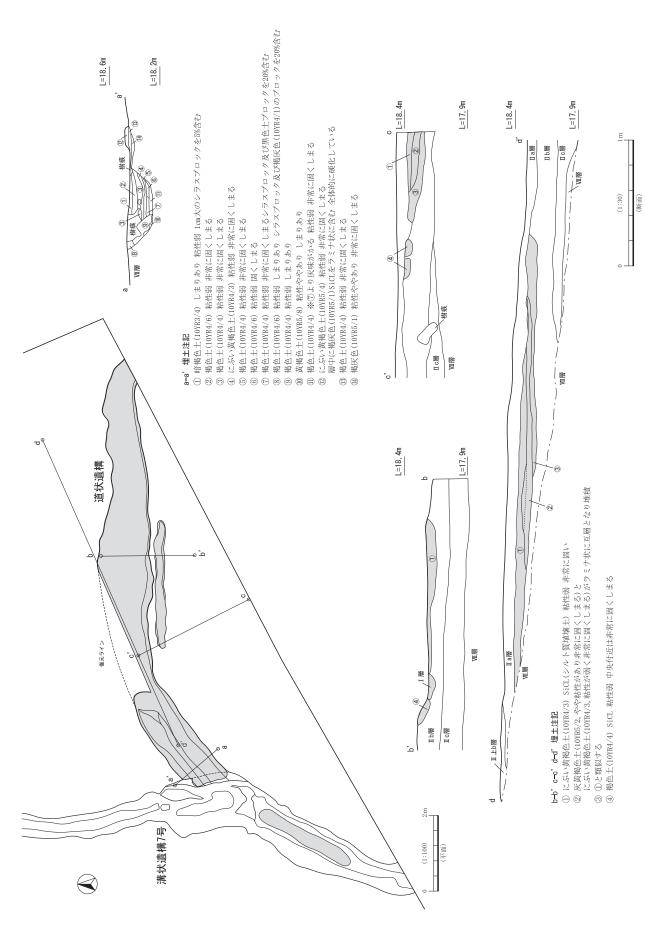








- 109 -



(4) 低湿地の調査

調査の概要

 $C \sim E - 19 \sim 22$ 区は、調査開始時点で水が溜まっており、低湿地の様相を呈していた。湧水は、調査開始前には表土直下から認められたが、調査・掘削が進捗すると、低 II 層と地山である II 層(シラス)との層境から認められるようになった。この地点では、地形と湧水を利用して、近世から現代(1980 年代)まで営々と水田が営まれており、その面数は、断面で確認した結果 I0 面を超えるものであった。また、稲作については、花粉分析及びプラントオパール分析の結果、中世まで遡る可能性が想定された。

今回の発掘調査では、現代~近世の水田跡については 調査対象とせず、重機により掘削を行い、中世に堆積し たと想定された低Ⅱ層(平成21年度はⅡ層)を調査対 象として、人力による掘削、遺構検出・調査及び遺物の 取り上げを行った。

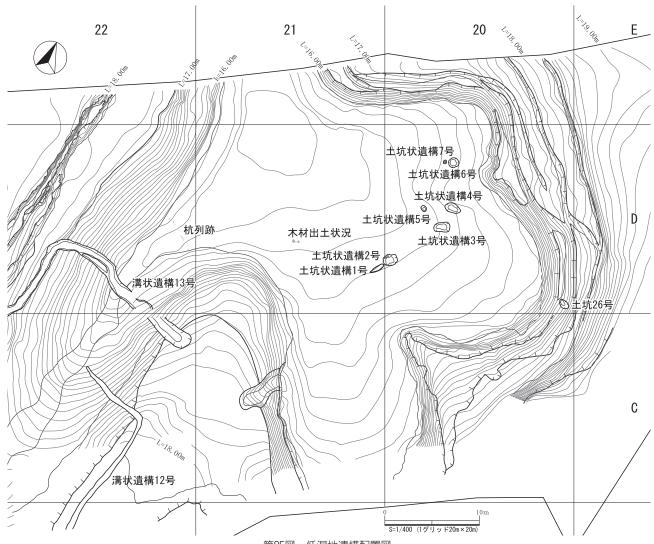
低Ⅱ層の掘削は、木製品やその他自然遺物の検出に注 意しながら行い、杭列などの遺構は低Ⅱ層掘削中に検出 した。また、低Ⅱ層掘削後、Ⅷ層上面で円形や楕円形状 に黒色土や暗灰色土の堆積を確認した場合は、土坑状遺 構として調査を行った。

低 II 層掘削後、III 層状面で遺構精査及び地形測量を行った。その結果、 $C \sim E - 19 \sim 22$ 区では、八つ手状の小さな谷状地形が入り組んでおり、D - 21 区 Gb 小グリッド付近を底に、全体的に南東から北西方向へ傾斜していることが判明した。

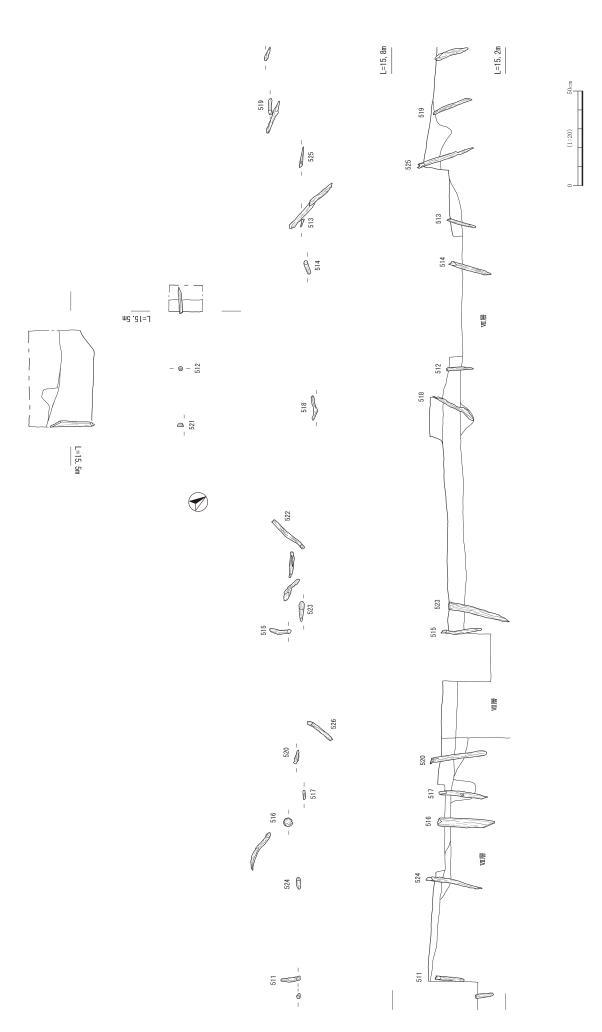
低Ⅱ層における遺物の出土状況は、C・D-21区をピークに、北西方向へ薄くなる。また、湧水も南東から北西へ向かって流れていることが判明した。したがって、低Ⅱ層は、南西方向からの流れ込みによる堆積と判断した。調査状況から、この付近における中世の大規模な土地造成等は想定できない。

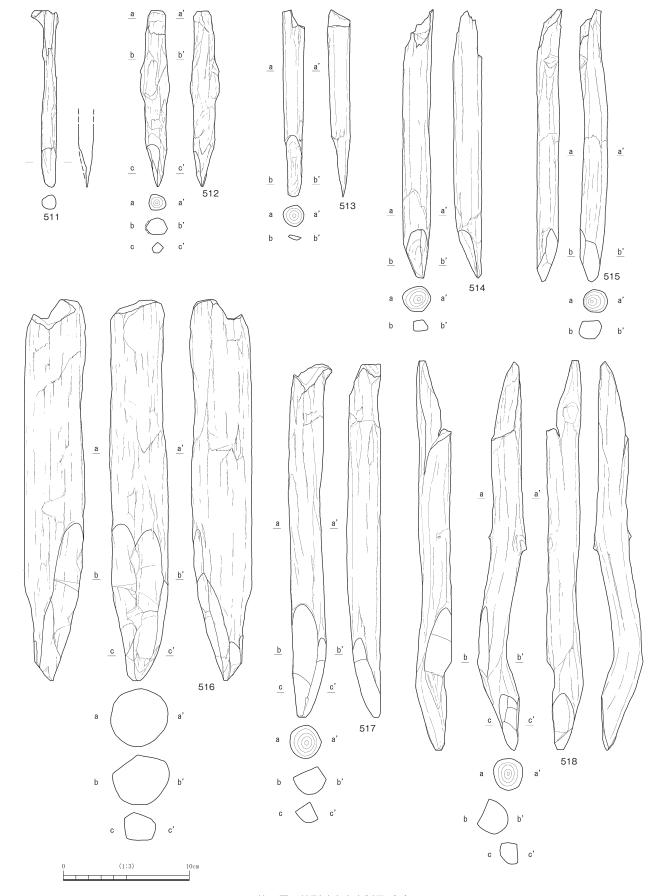
杭列跡 (第96~98図)

検出状況 $D-21\cdot 22$ 区の南北方向に延びる谷状地形の先端付近で、低 II 層掘削中に、木製の杭が立位で検出された。そこで、掘削中の面で遺構の精査を行ったところ、I0 本程度の木製杭が、谷状地形に直交するような状況で列を成していることが確認された。杭列跡よりも

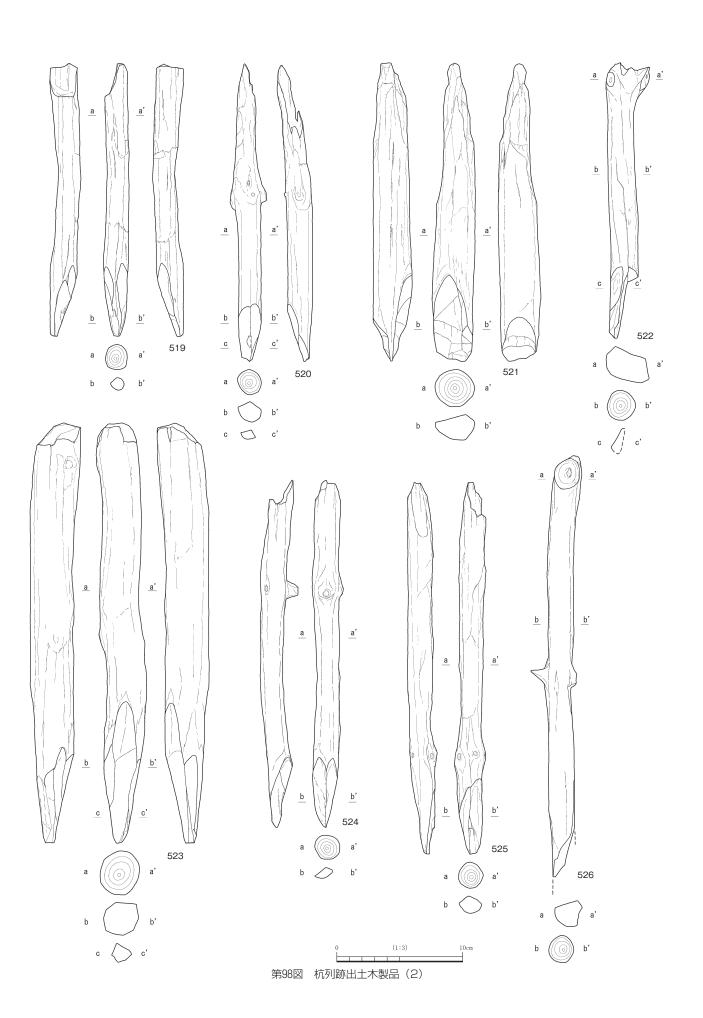


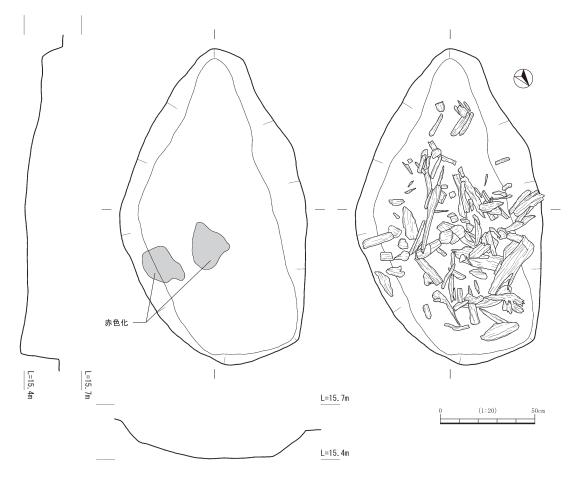
第95図 低湿地遺構配置図





第97図 杭列跡出土木製品(1)





第99図 土坑状遺構 1号

東側では湧水が認められ、低Ⅱ層が堆積するが、南西側 の谷状地形の底部付近には湧水は認められず、湿り気を 帯びないⅡ層の堆積へと変化する。

また、その列の南西 70 cm程度の地点で、2本の木製 杭が平行に並んでいることが確認された($512 \cdot 521$)。木製杭の数は 16 本で、最初の検出面から $5 \sim 10 \text{cm}$ 掘削 を進めたところ、杭列との関連を想定される棒状の木材 が出土した。

規模 杭列は、東西約5mの範囲で並んでいる。各杭間の間隔は、 $6\sim100$ cm程度と幅があるが、 $20\sim30$ cm程度のものが多い。

遺物 木製の杭 16 点と棒状の木材 4 点が出土し、そのうち 16 点を図化した。木製杭は全て III 層まで打ち込まれており、 III 層〜低 II 層中に含まれる部位のみ残存している。519~525 は木製杭である。太さ 1.6~4.6cmの棒状の木材の先端を削り出し、杭に加工している。一部に枝を切り落とした様な加工痕が認められるが、体部の加工はほとんど行われておらず、一部に樹皮が確認できた。522、526 は棒状木製品である。先端部は破損しているが、体部に加工痕が観察される。杭列の樹種また年代測定結果については第 4 章を参照されたい。

土坑状遺構 低湿地では、™層上面で円形や楕円形状に低Ⅱ層(黒色土~暗灰色)の堆積を確認された。人為的な掘り込みなのか、自然の窪地かということは判断できなかったが、比較的壁面がしっかりと立ち上がるものについては、土坑状遺構として記録を作成した。

土坑状遺構 1号(第99図)

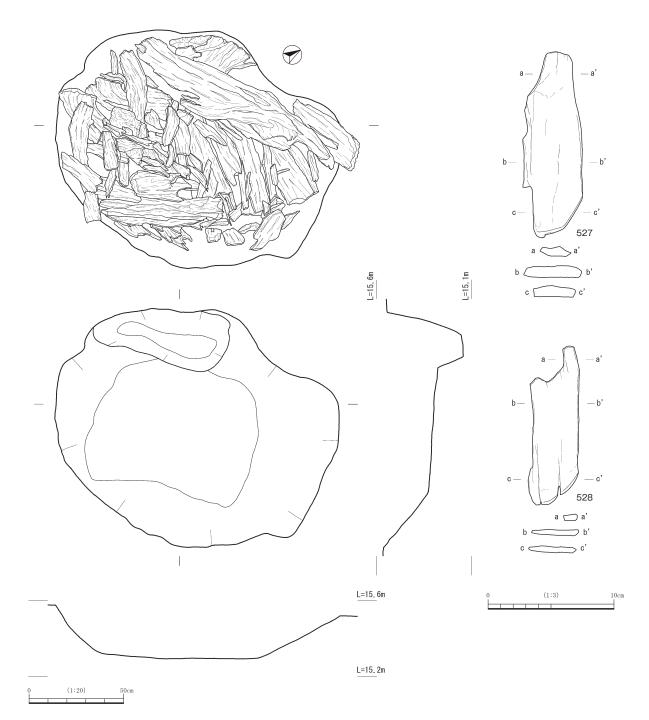
検出状況 D-21 区で一部の木材が露出する状態で検出された。北東には土坑状遺構 2 号が隣接する。

規模・断面形 規模は長軸 168cm, 短軸 100cmで, 検出 面からの深さ 21cmである。断面形は, 長軸方向は比較 的壁面が立つが, 短軸方向では八の字状に近い。

埋土等の状況 埋土は黒色の低 II d 層からなる。埋土中には、多量の木材が混入しており、一部で炭化した木材が見られた。また、本遺構の床面で赤色化している範囲も認められた。木材には、数cm程度の小片から長さ30cmを超える大型のものまで含まれている。調査時に木材の加工痕等の有無を確認したが、明確なものは認められなかった。

土坑状遺構2号(第100図)

検出状況 D-20区で一部の木材が露出する状態で検



第100図 土坑状遺構 2 号及び出土木製品

出された。南西には土坑状遺構1号が隣接する。

規模・断面形 規模は長軸 149cm, 短軸 125cmで, 検出面からの深さ 25cmだが, 北西側は 40cm程度と一部深くなる。断面形は, 緩やかなすり鉢状を呈するが, 一部壁面が立つ箇所もみられる。

埋土等の状況 埋土は黒色の低 II d層からなる。埋土中には、多量の木材が混入しているが、土坑状遺構 1号と比較して大型のものが多く、中には長さ 100cmを超えるものも存在した。木材は自然木と判断されるものが大半を占めたが、527、528 のように、薄手で一部削り出さ

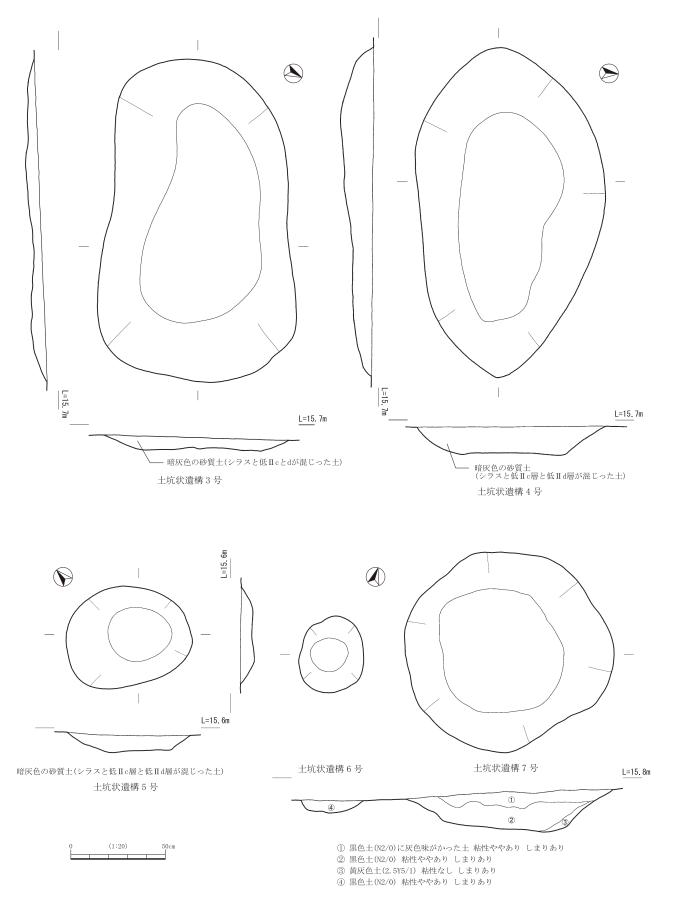
れたような痕跡が見られるものも存在する。

土坑状遺構3号(第101図)

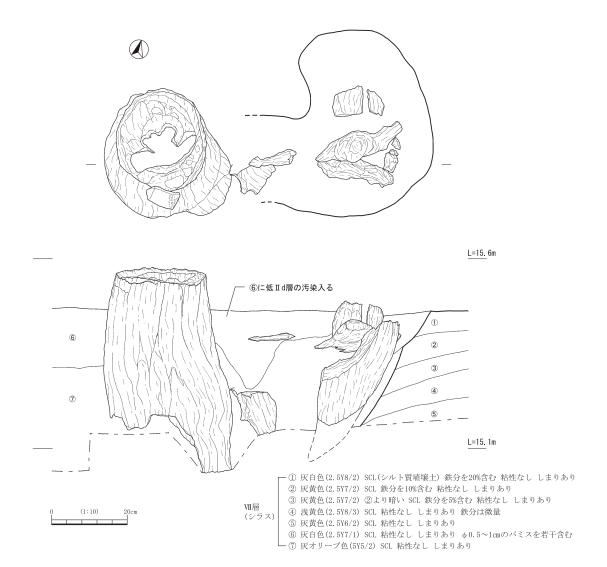
検出状況 D-20区で検出された。北側には土坑状遺構 4号が位置する。

規模 規模は長軸 170cm, 短軸 98cmで, 検出面からの深さ8cmである。平面形は角丸の長方形を呈し, 断面形は, 壁面は八の字状で, 床面には凹凸がみられる。

埋土 埋土は暗灰色の砂質土で、本遺構を覆っていた低 Ⅱ c 層と Ⅲ 層 (シラス) が混じり合ったものである。



第101図 土坑状遺構3~7号



第102図 木材出土状況

土坑状遺構4号(第101図)

検出状況 D-20 区で検出された。南側には土坑状遺構 3号が、西側には土坑状遺構 5号が位置する。

規模 規模は長軸 174cm, 短軸 100cmで, 検出面からの深さ 17cmである。平面形は東西方向に潰れた不整形な精円形を呈し, 断面形は, 壁面は緩やかに立ち上がる。 埋土 埋土は土坑状遺構 3 号と同じ暗灰色の砂質土である。

土坑状遺構5号(第101図)

検出状況 D-20 区で検出された。東側には土坑状遺構 4号が位置する。

規模 規模は長軸 65cm, 短軸 52cmで, 検出面からの深 さ9cmである。平面形は潰れた円形を呈し, 断面形はすり鉢状である。

埋土 埋土は土坑状遺構 3 号と同じ暗灰色の砂質土である。

土坑状遺構6号(第101図)

検出状況 D-20区で検出された。東側には土坑状遺構7号が隣接する。

規模 規模は長軸 40cm, 短軸 34cmで, 検出面からの深 さ6cmである。平面形は円形で, 断面形はすり鉢状を呈する。

埋土 埋土は土坑状遺構7号と同じく低Ⅱd層からなる。

土坑状遺構7号(第101図)

検出状況 D-20区で検出された。西側には土坑状遺構6号が位置する。

規模 規模は長軸 110cm, 短軸 105cmで, 検出面からの深さ 20cmである。平面形は円形に近く, 断面形はすり鉢状を呈する。

埋土 埋土は低 II d 層である。

その他

D-20区 Cd では、低湿地の底面が傾斜する地形の変換点付近で、竹を用いた遺構が検出された。残存状況が悪く、図化及び取り上げはできなかったが、複数の竹が縦に地中に並べて刺さっている状況であった。

また、低湿地では遺構ではないが、樹木や樹種の集中などが確認された。特徴的なものを報告したい。なお、 樹種や種実に関しては、第4章を参照されたい。

D-21 区 Fb では,低 II $c\cdot d$ 層から III 層にめり込む 状態で大型木材が検出された。木材は切り株のような状態で,太さは 40cmを超え,残存長 100cm程度である。樹種はクスノキである。 D-20 区 Cc の土坑状遺構 4 号と土坑状遺構 5 号の中間付近の低 II $c \sim d$ 層中において, 50×50 cm程度の範囲で種実が集中して検出された。種実同定の結果,クスノキの種子であることが判明した。

出土木製品

529~538は杭である。棒状の木材の先端を削り出し、 杭に加工している。529は完形で、樹皮は残存しない。 530は、上部と下部が割れた状態で出土した。接合した 状態で図化している。先端の加工は明瞭である。531は、 上部は欠損するが、下部の加工痕や体部の残存状態は良い。先端加工は、2回に分けて削り出した痕跡がみられる。

532 は、約 45cmと長めの木材で、体部には枝の切り離し痕や樹皮などはみられない。533 は枝を切り落とした加工痕が認められる。533、534 は体部の枝を切り落とした切り込みがみられる。先端の削り出しは浅い。535は、細めの棒状木材を使用する。上部にも浅い削り出しがみられ、下部の先端部の削りだしは広く、やや鋭利な面をつくりだす。536 は上部が炭化している。枝が残るが、一部の枝は切り落とされている。537 は全体が炭化している。538 は先端部の削り出しに穿孔がある。

539 は椀の底部である。外面は黒色の被膜で覆われ、内面は一部に赤褐色の被膜がみられる。漆器である可能性がある。540 は蓋である。現存する最大径は7.4cmを測る。左右側面に面を成し、略楕円形を呈する。外面はレンズ状を呈する。内面は略円状のかえりが削り出され、内面は凹む。541~550 は、加工痕が確認できる木製品だが、用途が不明なものである。541 は船底形に削り出されており、両端は斜めに面取りされ、鋭利になる。

542 は、板状の加工品で、正面図右側面が弧を描くように成形されており、左側面は破損した痕跡が残る。543 はわずかに曲線を成すように成形される。先端部は削り出しの加工痕が残る。543 は三角柱状の形状を成す。中央部には上下方向に鋭利な工具痕も確認できる。全体が炭化している。544 は上部と左右側面に削り出し痕が残る。545 は、上部に鋭利な工具で施された切れ込みが

あり、下部は工具によって削り出される。裏面は破損している。546 は板状を呈しており右側面と下部が鋭利な工具痕がみられる。547 は、上下に削り出し痕がみられる

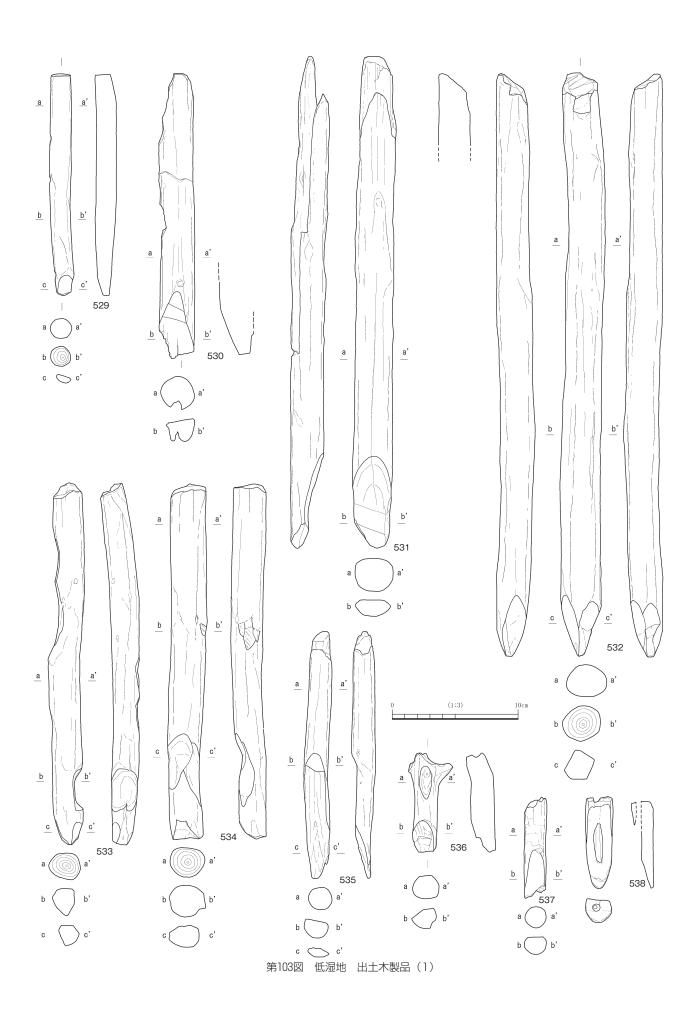
548~550は棒状木製品である。548は4面を面取りされた棒状の加工品である。549は548同様に面取りされており、上下も切断されている。550は、正面と裏面はやや幅広い面取りが施され、左右の側面は斜めに加工され、断面六角形を呈している。箸状の加工品である。

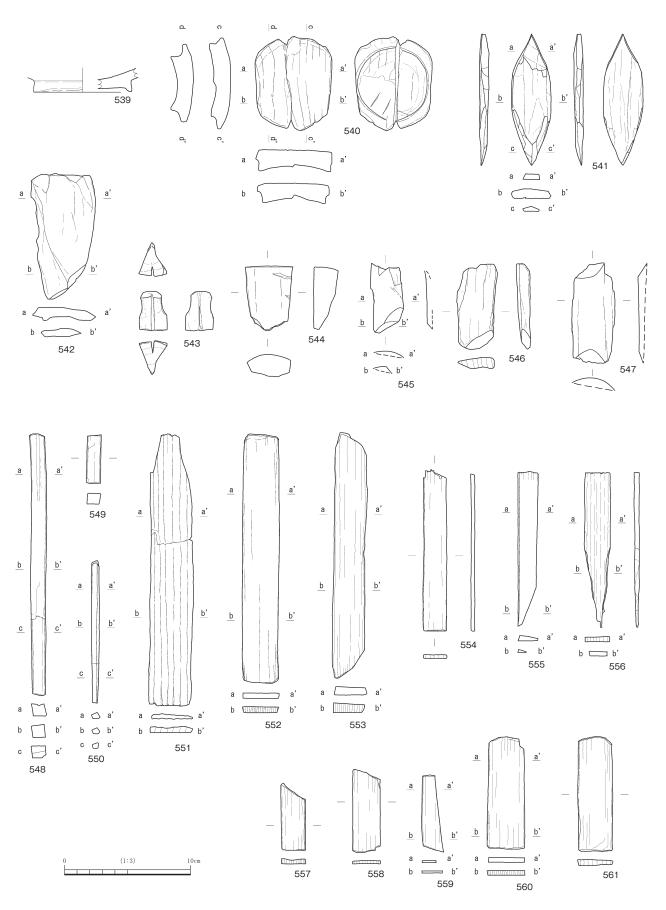
551~561 は板状木製品である。551 は下部に擦過痕がみられ、先端面が摩耗する。553 は、下部に斜め方向の切断痕が残る。上部は欠損しているため明確には確認できないが、下部と対応した形状を呈している可能性がある。554 は上部が欠損し、下部先端面が僅かに摩耗する。

555 は斜めに削り出し、鋭利になる。556 は右側面下部に削り出す。左側面は切断痕が明確ではない。557,558 は、上部が欠損している。559 は、台形状を呈しており、ヘラ状を成す。欠損している上部以外は面取りされている。560 は、上部が欠損するが、下部先端面にはわずかに摩耗する。561 は、下端は厚さ6 mm、上端は厚さ3 mmと上部ほど薄くなる。

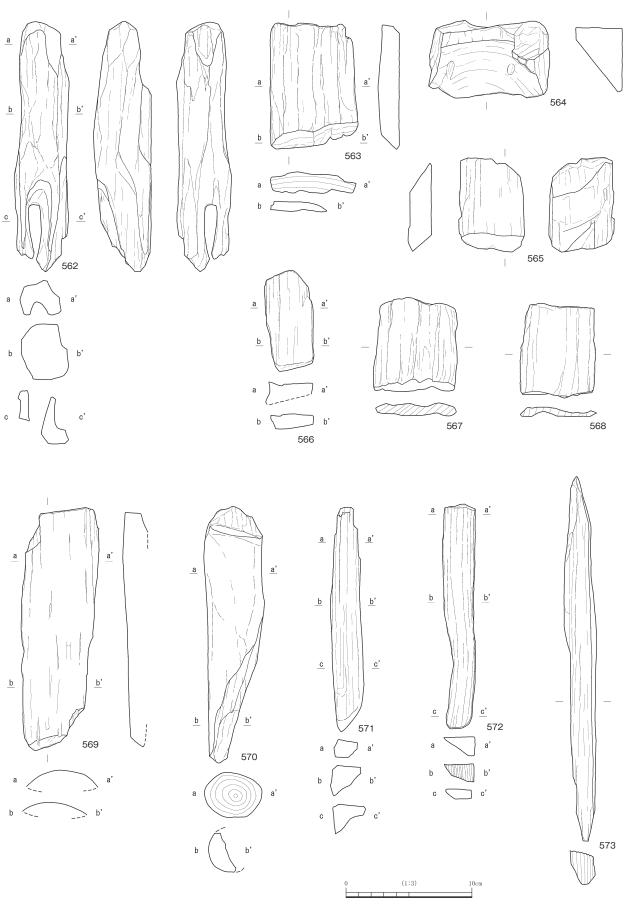
562~573 は、加工痕を有するが、用途が不明なものである。562 は、下部に貫通したほぞ孔状の抉りと、貫通していない溝状の抉りが残る。上部にも貫通していない溝状の抉りが残る。563 は、板状を呈するが、表面、裏面には凹凸があり、厚さが一定ではない。下部は斜めに切断されている。564 は、下部が斜めに切断されている。裏面は凹凸があり、上部は欠損している。565 は、上下が斜めに切断されており、正面にも工具を打ち込んだ痕跡が残る。566 は、上部左側が斜めに切断されている。下部は欠損部が丸みを帯びている。

567 は、概ね板状を呈するが、正面・裏面には凹凸があり、厚さが一定ではない。568 は、横断面が波形を呈している。569 は、上下で切断した後、縦に裂かれている。表面には樹皮が残る。570 は、杭状を呈し、先端部を斜めに削り出す。571 は、下部が斜めに切断されている。572 は、断面長方形を呈する。573 は上下端が斜めに削り出す。





第104図 低湿地 出土木製品(2)



第105図 低湿地 出土木製品(3)

(5) 遺構外出土遺物(第106~126図)

中世の遺構外遺物は、調査区ごとに報告する。出土層位は包含層及び表土のものも一括して報告する。土師器については、底部の切り離し技法が糸切りのものを中世に分類した。口径10~16cm、底径7~11cmのものを坏とし、口径10cm以下、底径5~9cmのものを皿とした。

ア D·E-4・5区出土遺物(第106~113図) 土師器(第106図)

574~607 は土師器である。574~583 は坏である。574 は底部が9 mm程の厚さで、いわゆる円盤状の底部を呈している。底部と体部の境は比較的明瞭で、腰部はナデで面取りがされるが、表面が全体的に磨滅しているため、詳細は不明である。575 は体部がやや外反しながら立ち上がる。外面には薄く煤が付着する。576 は厚めの底部を回転ナデにより成形し、体部が斜めに引き出された後、上方に立ち上がる。体部の立ち上がりが不明瞭で、丸みをもつ。577 は緩やかに内湾しながら立ち上がる。578 は直線的に外傾する。579~583 は坏の底部である。579~582 は底部と体部の境が不明瞭だが、583 は非常に明瞭で他と比して、体部が横方向に開く。580 は二次的な焼成により、全体的な黒色化がみられる。

584~606 は皿である。584 は体部を短く引き出し、内面見込みが回転ナデ調整により凹む。586 は体部が直線的に引き出され、外方に伸びる。587 は強い回転ナデ調整により体部中央部に僅かに段をもつ。588、589 は体部が直線的に外傾し、見込み周縁部がやや凹む。591 は体部が直線的に外傾する。胎土に茶色鉱物が多く含まれる。592 は体部がやや内湾しながら立ち上がる。593 は体部をわずかに引き出し、回転ナデにより見込み周縁部が凹む。

594 は体部を短く引き出し、見込み周縁部が凹む。595 は体部を短く引き出す。596 は体部が直線的に外傾する。597 は完形で、内面は浅く、円盤形を成す。598 は内外面ともに丁寧な回転ナデ調整である。599 は体部下部に粗く引き上げたためか段をもつ。600・601 は口縁端部がやや先細りになり、丸く収まる。内外面ともに丁寧な回転ナデで調整される。604 は底部が平坦をなさず、僅かに盛り上がる。底部切り離しの糸切り痕は明瞭に残る。

605 は底部径が小さいが、体部が長く、上方に引き上げる。腰部には糸切り用の糸の痕跡が斜めに残る。

607 は小壺である。体部が肩部で曲線を描いて内湾し、 算盤状を呈す。頸部は欠損しているが、上方に伸びることが確認できる。底部切り離しは糸切りで内外面は回転 ナデだが、内面の調整はやや粗い。

中世須恵器 (第 106·107 図)

 $608 \sim 620$ は捏鉢である。 $608 \sim 614$ は東播系の捏鉢で、 口縁部を肥厚させる。口縁部外面には自然釉が付着し、 黒色を呈す。610 は片口鉢の注ぎ口である。 $611 \sim 614$ は 底部で、比較的小型品で、内外面はナデ調整される。

615~620 は、樺万丈産の捏鉢である。内面にハケメ 状の調整痕を残し、胎土には白色粒が多く含まれる。615, 616, 618 は外面に縦方向のハケメ後にナデ消す。617, 619, 620 は底部である。617 は内面見込みまでハケメ状 の調整痕が残る。619 は外面に綾杉状の叩き痕を残す。

621,622 は産地不明の擂鉢である。621 は硬質で、橙色を呈す。擂目は鋭く、約10条で一単位入る。622 は瓦質の擂鉢で、焼成があまく、淡黄色を呈す。表面の剥落が著しい。内外面に煤が付着する。623 は茶釜の口縁部である。口縁部が垂直に立ち上がる。外面は黒色化し、胎土には白色粒を多く含む。

瓦・羽口・土錘・碁石(第107図)

624・625 は、平瓦である。外面に叩き痕を明瞭に残し、内面には布目痕が残る。626~628 は、鞴の羽口である。626 は先端部の破片で、被熱で溶解しており、ガラス質化している。627、628 は先端部付近の破片であり、被熱による黒色化がみられる。628 は割れ口部分が黒色化し、ガラス質化している。629~643 は管状土錘である。629、630、632~634 は焼成が良く、硬質で黒色化する。637~643 はやや赤色を呈し、表面はナデで調整される。

644 は碁石の可能性がある資料である。蛇紋岩製で丁寧に磨かれている。他にも2例図化している (873, 874)。 このような円礫が含まれない層からの出土であるため、 碁石と考えられる資料として報告する。

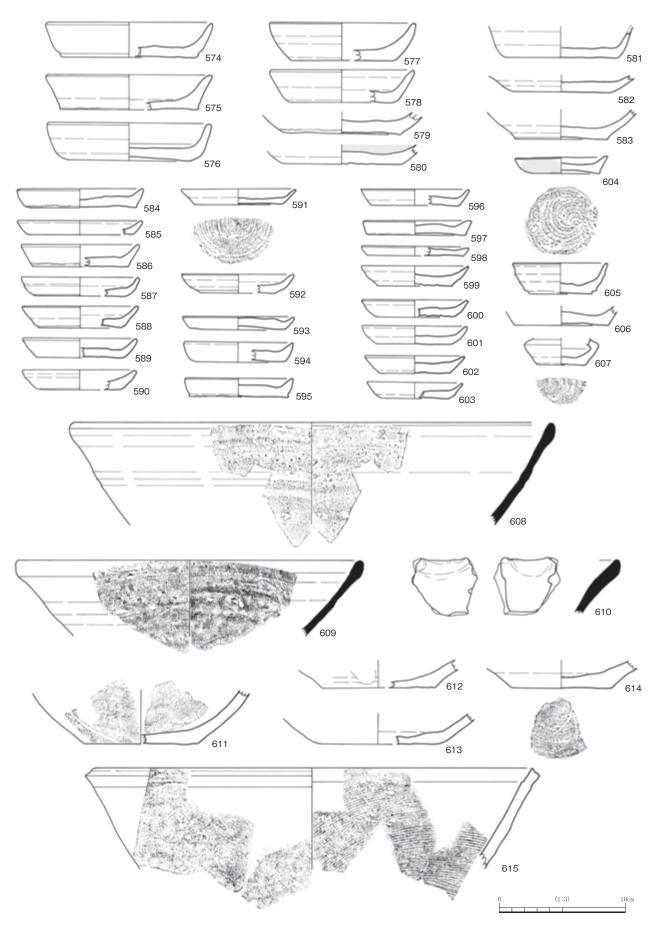
青磁 (第108図)

645~677 は青磁である。645~651 は同安窯系青磁 碗 I 類である。口縁部は直口縁で、外面には縦位の櫛目 文をもつ。646,647,650 は内面上位に一条の沈線、外面中位に櫛目文をもつ。さらに650 と651 の内面にはジグザク状の点描文が入る。

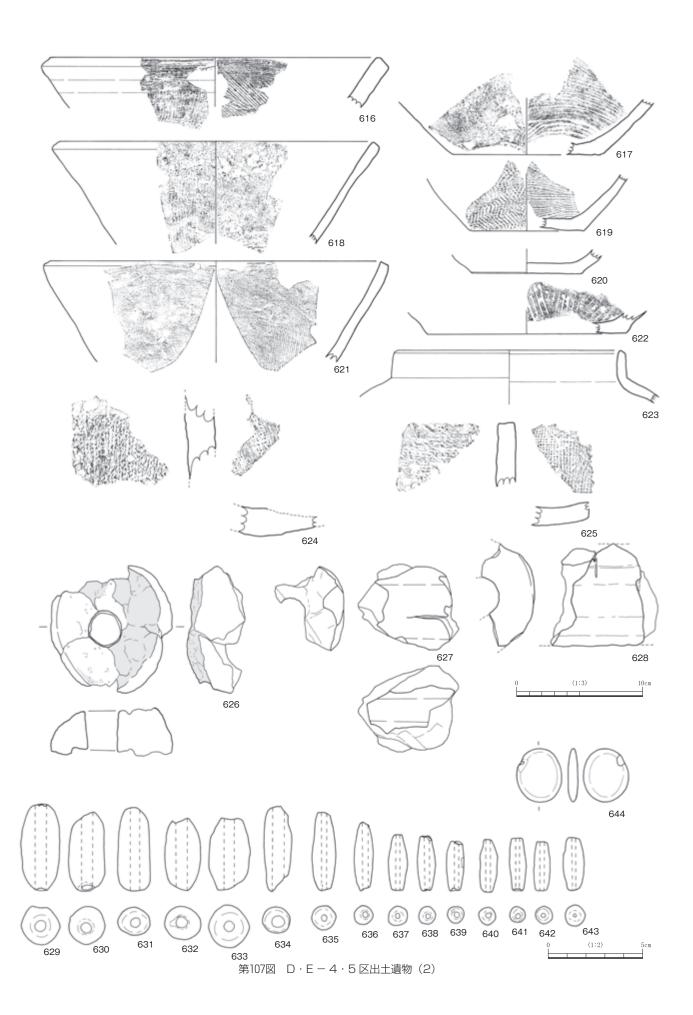
652~658 は龍泉窯系青磁碗 I 類である。652,653 は、内面に劃花文をもつ。腰部がやや張り、口縁部が直口または僅かに外反する。654~656 は底部であり、畳付から高台内面が露胎する。655 は内面見込みに片彫りの花文をもつ。657 は無文の碗である。658 は小碗である。輪花状の口縁をもち、腰部が張り、底部が厚い。畳付と高台内は露胎する。釉は厚く施釉され、発色が良く青味を帯びた緑色を呈す。

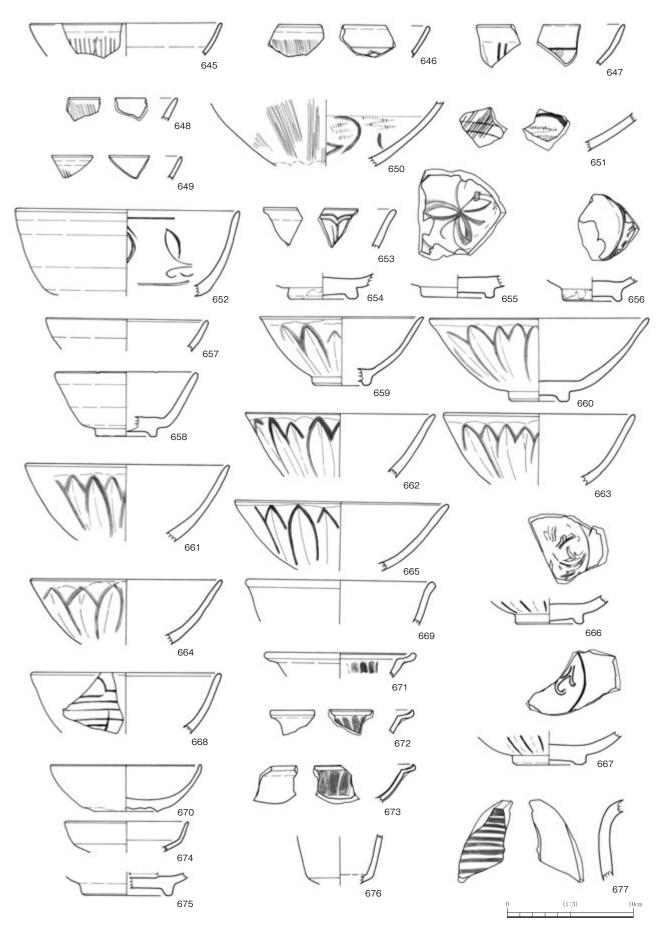
 $659 \sim 667$ は龍泉窯系青磁碗 II 類に比定されるものである。直口縁で、外面に鎬蓮弁文をもつ。 $666 \cdot 667$ は底部片で、内面見込みに草花文の印文をもつ龍泉窯系青磁碗 II - c 類に比定されるものである。

668,669は明代以降の碗である。668は外面に雷文帯をもつ上田C類に比定されるものである。669は口縁部が外反し、無文のもので上田D類に比定されるものである。670は小型の鉢である。削り出しによる碁笥底風の底部を持ち、底部内面は赤色化する。釉が厚くかかり、

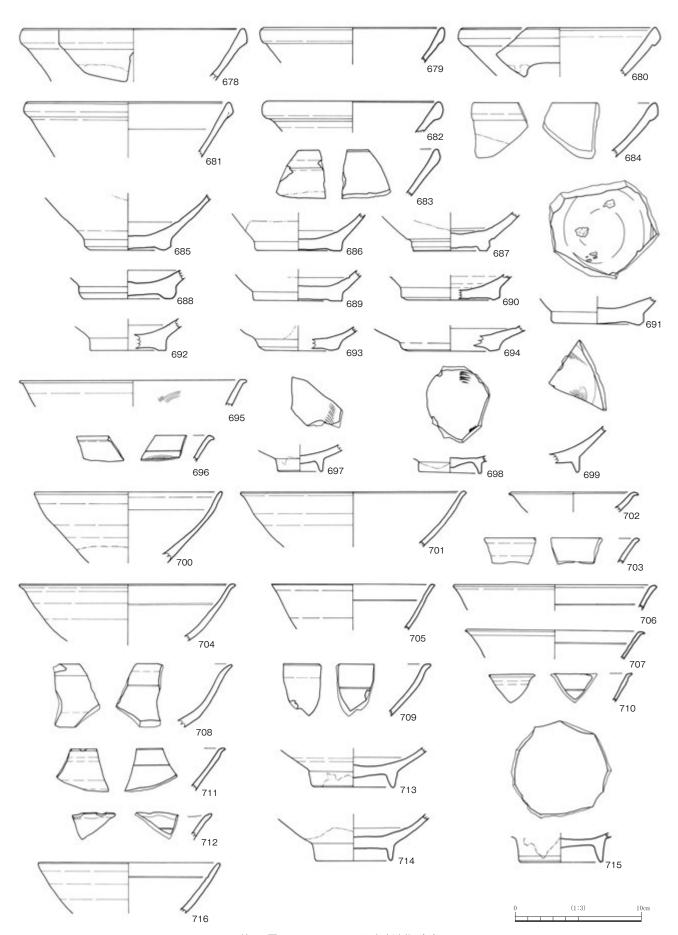


第106図 D·E-4·5区出土遺物(1)

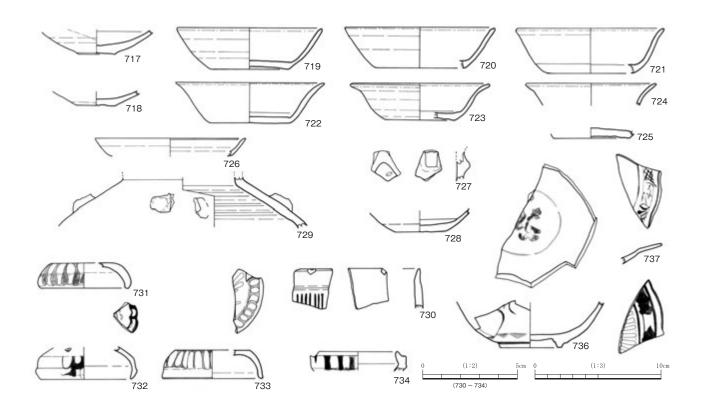


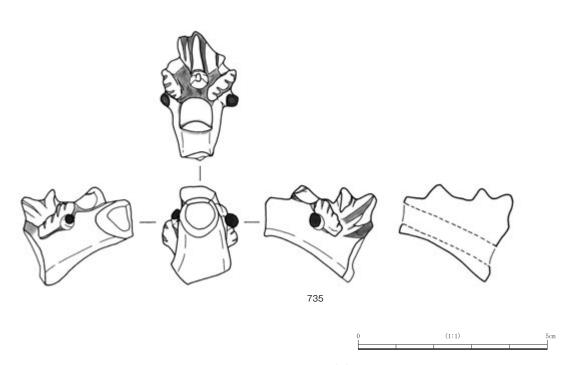


第108図 D·E-4·5区出土遺物(3)



第109図 D·E-4·5区出土遺物(4)





第110図 D·E-4·5区出土遺物(5)

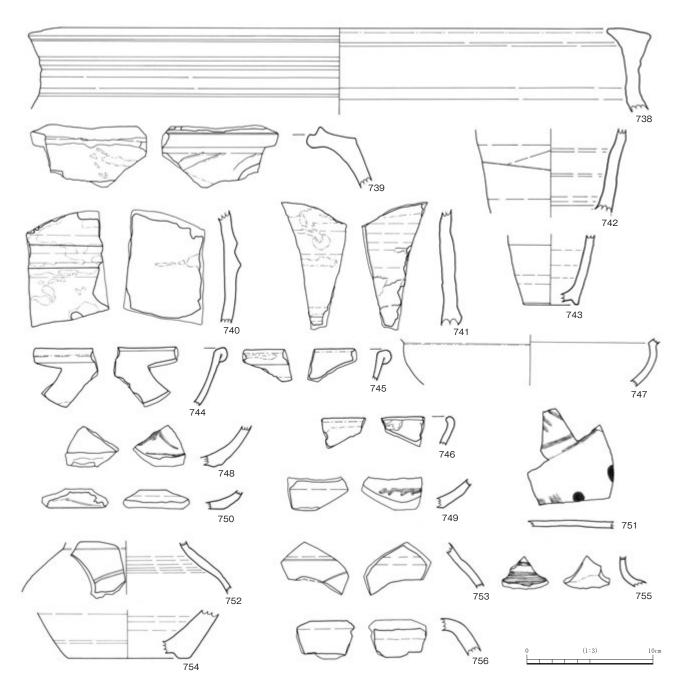
底部には砂目が多く付着する。

674 は同安窯系青磁皿である。胴部中位で屈曲し、器壁が薄く、胎土が精緻である。675 は底部である。碗よりやや低い高台をもつ。内面見込みの釉を輪状に掻き取った部分が黒色化する。671~673 は、龍泉窯系青磁坏皿類に比定されるものである。口縁端部を屈曲させ、上端は凹面を成し、端部をつまみあげる。内面には削り出

しによる花弁状を成す。676 は、筒形の香炉である。外面は施釉し、内面は露胎する。677 は花瓶(花生)の頸部である。横位の線状の浮文がみられる。

白磁 (第109・110図)

 $678 \sim 728$ は白磁である。 $678 \sim 694$ は,扁平な玉縁口縁をもつ白磁碗IV類に比定されるものである。釉は胴部中位以下が露胎するが,施釉部分は厚い。胎土は685,



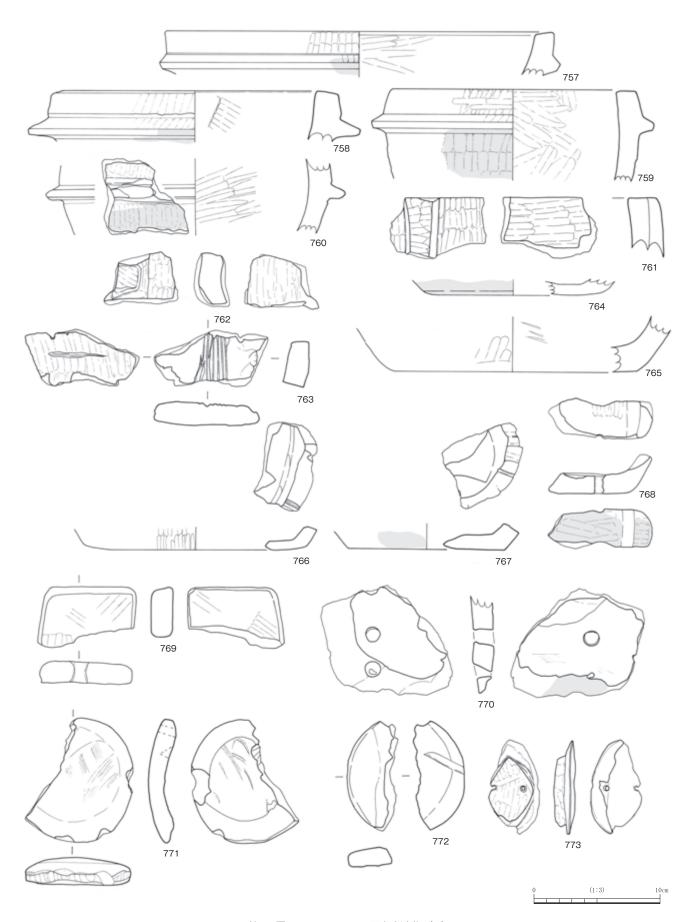
第111図 D·E-4·5区出土遺物(6)

688 のように淡黄色で粗いものもあるが、基本的には灰白色で精緻である。685~691 は底部が厚く、高台の削りが浅い。内面下位には段をもつ。687 は高台内面の釉を輪状に掻き取り、685、692 は高台内面に砂目がつく。691 は内面見込みに目跡がある。

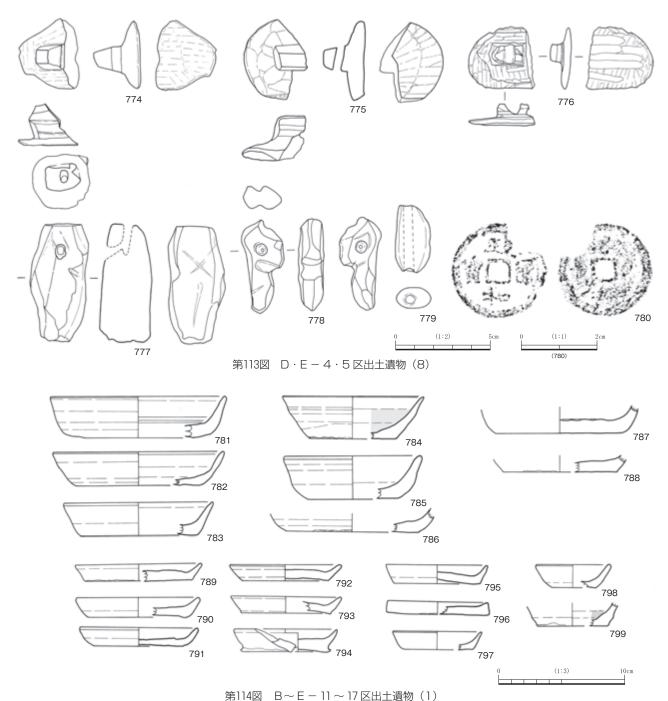
695~715 は白磁碗 V 類である。695,696 は嘴状の口縁部で内面に櫛描文をもつ。釉は胴部下位以下が露胎し、胎土は灰白色を呈し、精緻である。697~699 は底部で、内面に櫛描文が施される。高台外面~高台内は露胎する。700~716 は直口縁もしくは嘴状の口縁部をもつ。胎土

は粗く、釉は灰色味を帯びる。外面胴部下位は露胎し、内面上位に沈線が施される。712 は稜花状の口縁部をもつ。713~715 は白磁碗 V 類の底部で高い高台をもち、腰部~高台内は露胎する。715 は意図的な打ち欠きがみられる。716 は明代以降の白磁碗である。胎土・釉調が粗く、内面上位に沈線が一条巡る。

717~725 は皿である。717,718 は白磁皿V類に比定されるものである。平底で胴部中位以下が露胎する。718 は釉の剥落が著しい。719~725 は口禿口縁をもつ白磁皿IX類に比定されるものである。口縁部は直口するもの



第112図 D·E-4·5区出土遺物(7)



WILL D C II IV EUTSW

と、外反するものがある。底部は平底で釉が拭き取られ、胴部との境には段を成す。

726 は森田 D 群に比定される皿である。直口縁で,胎土は精緻で灰色を呈す。727 は水注の把手部である。729 は四耳壺である。肩部で横形の耳部をもち,内面には強いケズリ痕がみられる。730 は小壺の口縁部である。外面には縦位の櫛文が入る。

青白磁(第110図)

728 は皿である。内外面ともに厚く,精良な釉がかかる。731 \sim 734 は合子である。731 \sim 733 は蓋で,外面は型押しの菊花文をもつ。いずれも内面は露胎する。734

は身で受け部は露胎する。

735 は龍首水注の注口部である。全体の表現は精巧であり、目・眉上隆起・冠毛がみられる。全体的に釉は厚く、目の表現には褐釉が使用される。注口の大きさは約0.6cmである。神奈川県鎌倉市所在の二ノ鳥居西遺跡の出土品と細部には違いがあるが、非常に類似する。

青花 (第110図)

736,737は青花である。736は璋州窯系の饅頭心の碗で、小野碗E群に比定されるものである。胎土は粗く、淡黄色を呈し、黒色粒が多く含まれる。高台内面には削り出しの痕が確認できる。737は稜花皿である。削り出

しにより菊花形を成す。

中国陶器(第111図)

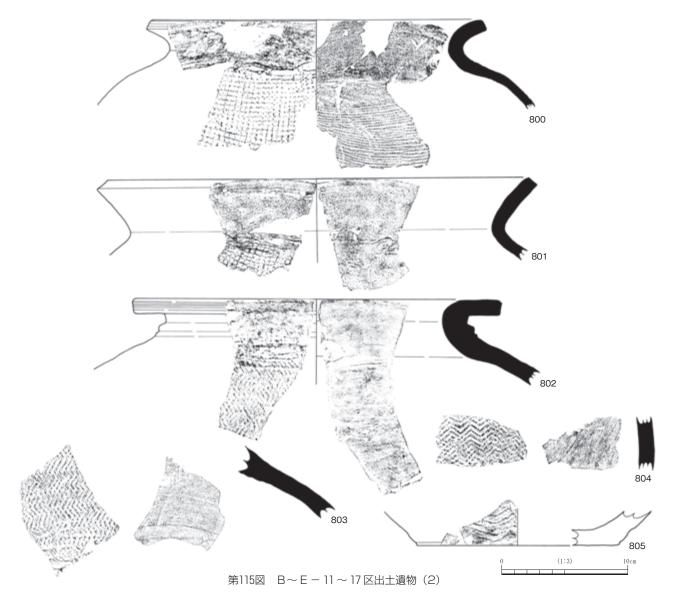
738~741 は甕である。胎土は粗く白色粒を多く含み, 焼成があまい。738 は口縁部で暗緑色釉が施され, 発色が悪く疎らである。口縁部が内側に張り出し, 断面は逆台形を呈す。739 は内側に屈曲し, 外面に稜線を成す。灰黄色釉で施釉されるが, 白濁して発色は悪い。内面には同心円の当て具痕をもつ。740, 741 は, 胴部片で738 と同一個体と考えられる。突帯を持ち, 釉は疎らだが厚い。

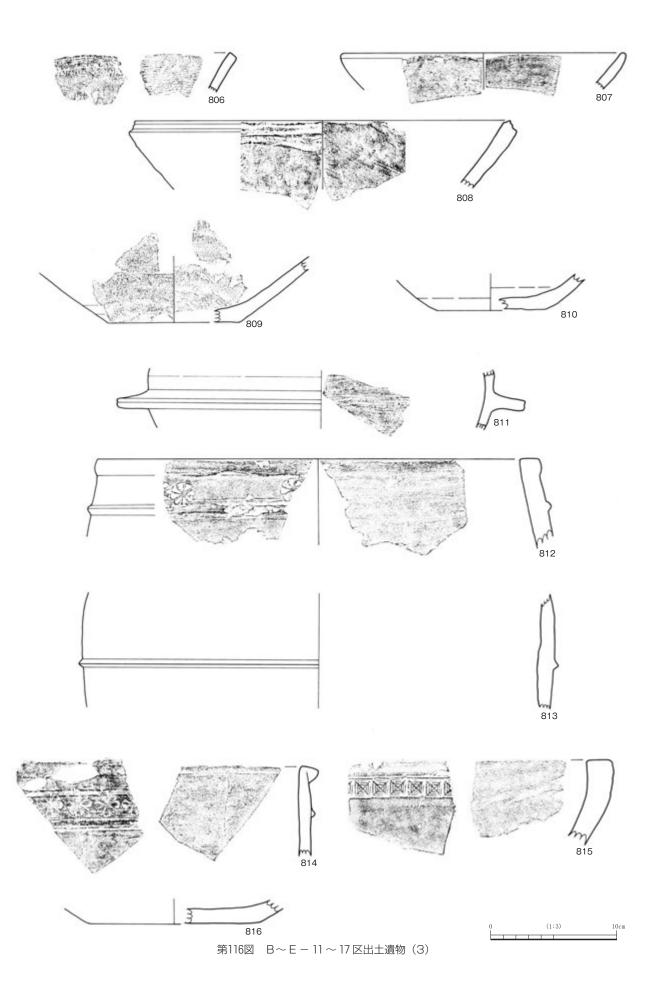
742,743 は長胴形の壺である。いずれも内外面に回転へラ削り痕が明瞭に残る。742 は灰黄色釉が薄く施釉される。743 は高台状の底部をもつ小型の壺で、底部と内面は施釉せず、外面には灰黄色釉がかかる。

744~747は鉢である。744,745は口縁部を折り曲げて玉縁状に肥厚させる。745は灰黄色釉で施釉され、口唇部の釉を掻き取る。胎土には白色粒を多く含む。746は、僅かに内面に屈曲させる口縁部で、表面は摩滅が激

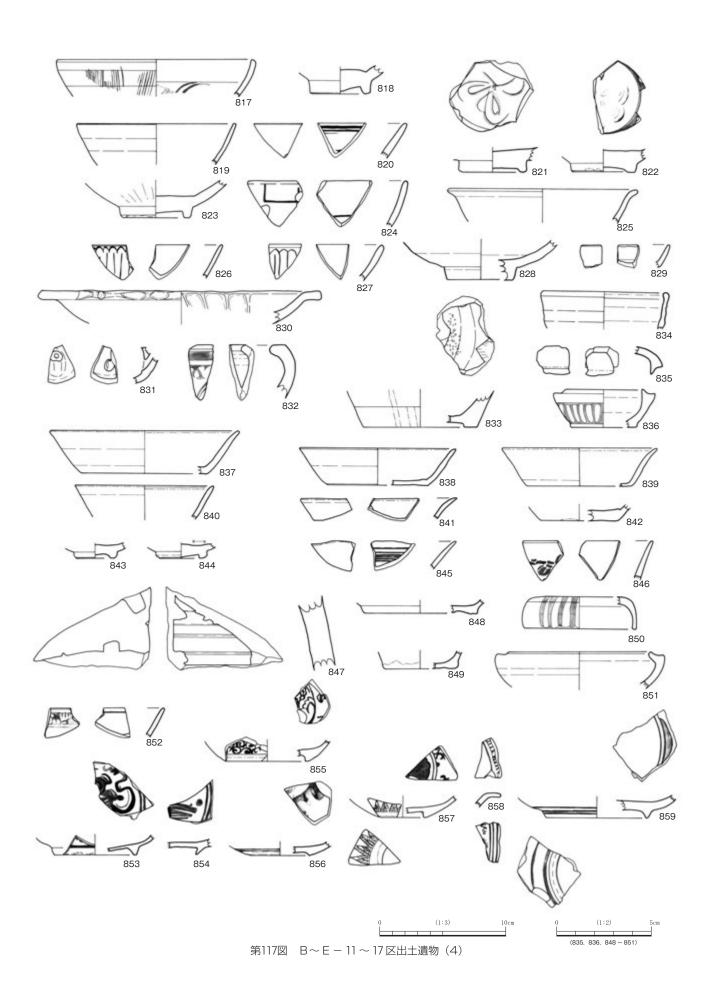
しく、釉が剥落するが、僅かに褐色部分が確認できる。 内面口縁部下には砂が付着する。胎土は745と類似し、 灰色で白色鉱物を含む。747は胴部である。口縁部にかけて屈曲し、胴部が丸味をもつ。胴部は褐色を呈すが、 屈曲部上部からは露胎する。内面は表面が摩滅している ため、詳細は不明だが、部分的に黄緑色釉が確認できる。 748~751は盤の底部である。立ち上がりの境が明瞭でない。いずれも外面が無釉で、内面は黄釉を施釉し、 褐釉による施文がある。胎土は粗く、黒色粒・白色粒を 多く含む。751は鉄絵による文様がみられる。なお、749 と751は胎土・釉調が類似することから、同一個体の可能性がある。

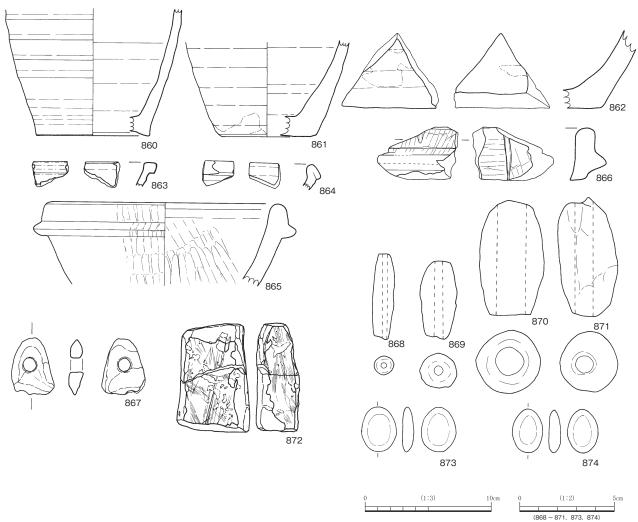
752~754 は水注である。752 は黄色味の黄緑色釉である。頸部と胴部の境と肩部に円弧状の沈線をもつ。胎土は茶色を呈し、白色粒を含む。753 は釉が全面的に剥落する。754 は高台状を成す底部である。釉は緑味を帯びる黄緑色釉で、畳付・底部内面は露胎する。755 は小





- 133 -





第118図 B~E-11~17区出土遺物(5)

片のため器種の判別が困難だが、黄褐釉の小型壺と考えられる。内面は露胎し、外面に施釉される。暗褐色の釉が線上に入る。胎土は盤の胎土と類似しており、粗く、混入物も多い。

国産陶器(第111図)

756 は常滑焼の壺の肩部である。内面は露胎し、外面 には緑灰色釉が厚く施釉される。

滑石製品 (第112:113 図)

757~768 は滑石製石鍋である。外面には縦方向の削りが確認できる。757~760 は鍔の断面が台形状を成す。 鍔がやや垂れ下がり、いずれも鍔下部から煤が厚く付着する。757 は鍔部の稜が鋭く、鍔下部には煤が付着する。761、762 は、縦耳の石鍋片である。761 は断面方形で、稜が鋭い。762 は鍔部を再加工している。763 は石鍋の胴部片を再加工しており、加工の際の切断線が数本みられる。765 は底部片である。

766~768 は底部片の二次加工品である。割れ口を磨き、面を作り出す。768 は、外面に煤が付着し、底部に

は穿孔が入る。 $769 \sim 778$ は,二次加工品である。769 は温石と考えられる。板状を呈し,側面部が面を成す。中央部には穿孔痕が確認できる。770 は穿孔が2 カ所ある。表面には煤が付着し,石鍋の底部片の再加工品と考えられる。771,772 は円盤状を成す。771 は穿孔痕が2 カ所確認できる。

 $773 \sim 776$ はスタンプ状の馬連形を成す。773, 775 は 穿孔をもつ。777, 779 は土錘形を呈すものである。777 の穿孔は逆L字状を成す。778 は勾玉状を成し,中央部に穿った痕があるが,貫通はしない。

古銭

780 は政和通寳である。1111 年初鋳の北宋銭で、隷書である。

イ B~E-11~17区出土遺物(第114~118図) 土師器(第114図)

 $781 \sim 788$ は坏である。 $781 \sim 783$ は体部が直線的に外傾する形態をもつ。784 は内面に煤が厚く付着している。

785 は体部が内湾しながら立ち上がり口縁部にかけて器壁が薄くなる。786 \sim 788 は底部である。788 は内外面ともに煤が付着する。

789~799は皿である。789,790は体部を短く引き出し、 見込みの周縁部が凹む。口縁端部は丸く収まる。794は 口縁部が歪んでいる。底部糸切りを一度途中まで行った 後、3mmほど下で二度目の糸切りを行った痕跡が底部で 確認できる。796は体部をわずかに引き出すが、ほぼ円 盤状に近い。799は内面に厚く煤が付着する。

中世須恵器 (第115・116図)

800~805 は甕である。800 は樺万丈産で焼成は良く、硬質で胎土には白色粒が多く含まれる。外面に格子目状の叩き痕を残し、内面にハケメ状の調整痕を残す。801 は外面に格子目叩き痕、内面はナデ調整である。802~805 は外面に綾杉状の叩き痕を残す。806~810 は捏鉢である。806 は内面にハケメ状の調整痕が残ることから、樺万丈産と考えられる。807 は、硬質で内外面は丁寧なナデ調整である。808 は口縁端部が粘土帯貼り付けにより、段状になる。809、810 は底部である。

瓦質土器 (第116図)

青磁 (第117図)

811 は羽釜で、鍔部下位には煤が付着する。812~815 は火鉢である。812 は胴部に突帯を巡らし、間に花文のスタンプ文をもつ。813 は胴部片で突帯が巡る。814 は口縁部が断面三角形を成し、突帯を一条巡らす。口縁部と突帯の間に花文のスタンプ文をもつ。硬質で灰白色を呈す。815 は直口縁で、体部が丸味をもち、外面に格子目状のスタンプ文をもつ。816 は、鉢の底部と考えられる。全体的に煤が付着し、底部の煤が非常に厚い。割れ口の断面にも煤が付着することから、二次焼成を受けたと思われる。

817,818は同安窯系青磁碗 I 類に比定されるものである。817は直口縁で、外面には縦位の櫛目文、内面上位に沈線をもち、中位に櫛目文が入る。818は逆台形状の厚い高台である。

819~821 は龍泉窯系青磁碗 I 類に比定される。819 は 直口縁で無文である。820 は外面が無文で、内面に劃花 文をもつ。821 は底部で、内面に見込みに片彫りの草花 文をもつ。畳付~高台内面が露胎する。

822,823 は龍泉窯系青磁碗 II 類に比定されるものである。底部が肉厚で、高台が断面四角形を成す。823 は外面に鎬蓮弁文をもつ。822 は内面見込みに草花文の印文をもつ龍泉窯系青磁碗 II - c 類に比定されるものである。

 $824\sim827$ は、明代以降の碗である。824 は雷文帯をもつ上田 C 類に比定されるものである。825 は器壁が薄く、無文で外反する口縁部をもつ、上田 D 類に比定されるものである。

826,827は細描蓮弁文をもつ上田B類に比定されるものである。剣頭と細線が蓮弁の単位を意識されておらず、

簡略化されている。828 は底部で高台が小さい。明代以 降の碗である。

830 は盤である。口縁部が稜花を呈し、大きく外反する。内面は削り出しの花弁をもつ。831 は水滴の注口部で、体部は丸みをもつ。832 は鉢である。口縁部が内面に屈曲し、平坦面を成す。外面には草花文の印文をもつ。834 は筒形香炉である。口縁部を内側に折り曲げる。外面は施釉、内面は露胎する。833 は壺の底部である。高台状の底部で、内面には砂目がつく。福建省産のものと考えられる。835・836 は合子である。835 は蓋である。836 は合子の身で、型作りの菊花形を成す。

白磁 (第117図)

837~847は白磁である。837~842は白磁皿IX類に比定されるもので口禿口縁をもつ。843,844は森田D群に比定される皿である。胎土は粗く、淡黄色を呈し、黒色粒を多く含む。844は見込みの釉を輪状に掻き取る。847は四耳壺または瓶の胴部である。釉はガラス質で光沢をもつ。内面には削り痕が明瞭に残る。846は、馬上坏の可能性がある。外面には花文の浮文がみられる。

845 は壺の口縁部と考えられる。稜花の口縁で、内面には数条の沈線文が巡る。中国産かまたは時期が新しくなる可能性があるものであるが、類例不足のため、本報告書では白磁として報告しておく。

青白磁(第117図)

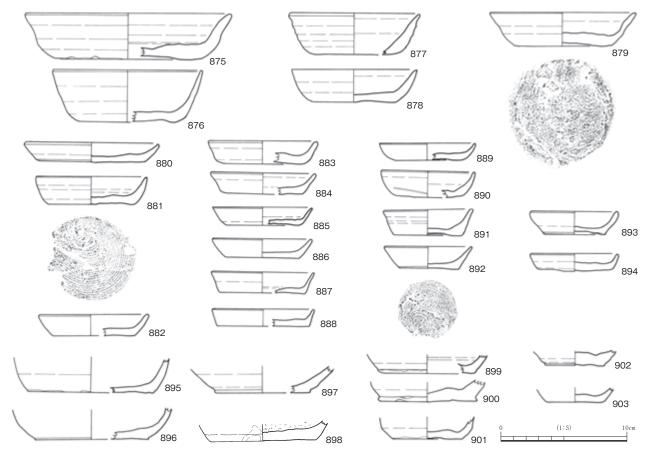
848~851 は青白磁である。848 は水注の底部で、底部は露胎する。全体的に釉は厚くかかり、青味が強い。849 は小壺の底部と考えられる。胴部下位以下が露胎する。850,851 は青白磁の合子である。850 は蓋で、型作りである。851 は合子の身で、他と比してサイズが大きい。

青花 (第117図)

852~859は青花である。852は蓮子碗で小野分類の碗 C群に比定されるものである。口縁部外面に四方襷文と 思われる文様をもつが,詳細は不明である。853,854は 端反りの皿で,小野分類の皿B群に比定されるものであ る。内面見込みに玉取獅子が描かれる。855~857は,碁 笥底の小野分類の皿C群に比定されるものである。底部 の釉は掻き取られる。855は外面に渦巻文をもつ。857は 外面に芭蕉葉文をもち,内面には唐草文が描かれる。858 は稜花皿である。859は端反りの皿で,853,854よりは 後続する小野皿B2群に比定されるものである。高台が 細く、端部の釉は掻き取られる。

中国陶器(第118図)

860~862 は壺である。いずれも内外面に回転へラ削り 痕が明瞭に残る。860,861 は長胴形の壺である。860 は 褐色を呈し,灰黄色釉がかかるが,発色が悪く,焼成も あまい。861 は褐色の胎土を呈し,白色粒を多く含む。硬 質で暗緑黄色釉が施釉され,発色も良い。底部は施釉し ない。862 は器壁が厚く,大型の壺の底部と考えられる。



第119図 C~E-18~25区出土遺物(1)

灰黄色釉で胎土は褐色を呈す。内外底には砂が付着する。 864 は鉢である。折り曲げ口縁で下方に下がり、扁平 な形を成す。外面口縁部下位と、内面に僅かに自然釉が かかるが、基本的に無釉で、褐色を呈する。863 は口縁 部断面が方形状を成す小型の盤である。黄緑色釉がかか るが、口唇部と口縁部を直線上に釉を掻き取る。

滑石製品(第118図)

865,866は滑石製石鍋である。865は鍔が横耳形で、 鍔下部には煤が厚く付着する。866は石鍋の再加工品で、 割れ口を磨き、面を作り出している。867は二次加工品 である。三角形状を成し、中央を穿孔する。

その他の遺物(第118図)

873,874 は碁石と考えられる資料である。黒色の砂岩製で、表面を丁寧に磨いている。872 は砥石である。砂岩(天草石)製で、表面・側面には擦過痕が残る。868~871は管状土錘である。870,871 は大型品で手づくねにより、指頭圧痕が明瞭に残る。

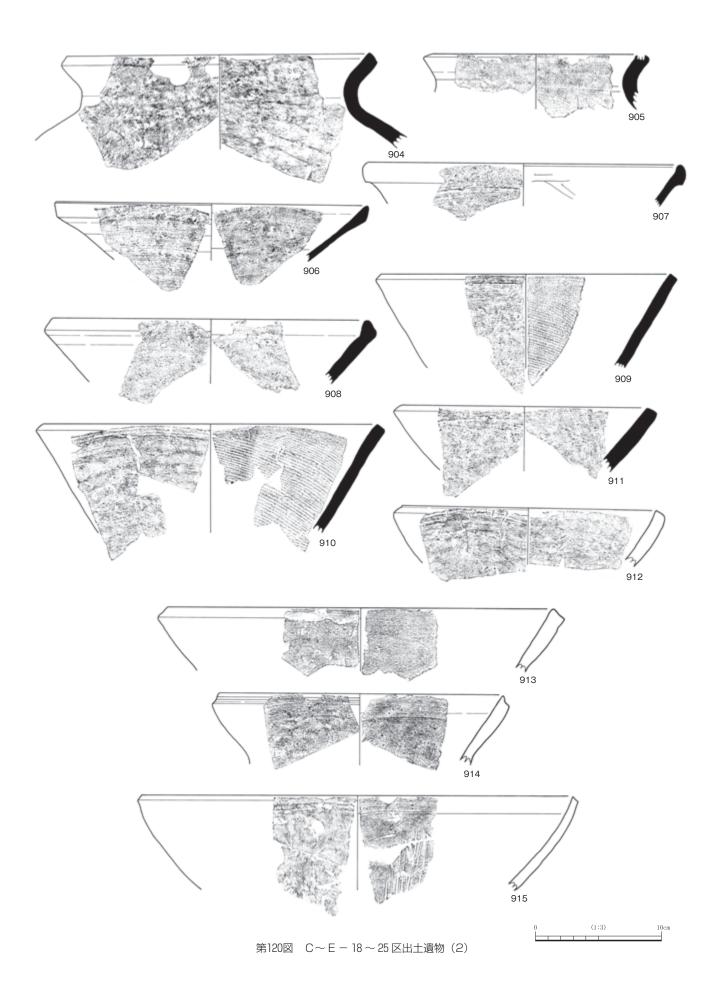
ウ C~E-18~25区出土遺物(第119~123図) 土師器(第119図)

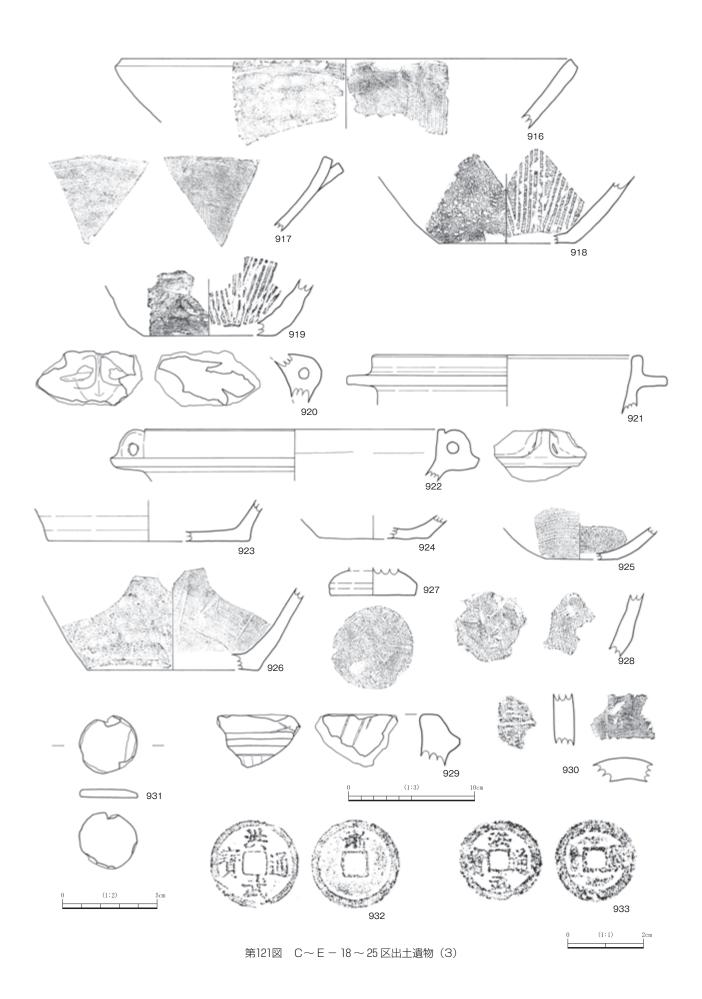
875~879は坏である。875は底部から緩く立ち上がり、 体部から外反する形態をもつ。内面には僅かに煤の付着 がみられる。876は直線的に外傾し、器壁が非常に薄い。 879 は内面底面に煤が付着し、表面が剥落する。胎土が粗く、5 mm程の小礫が多く含まれる。878 は外面が部分的に赤化する。

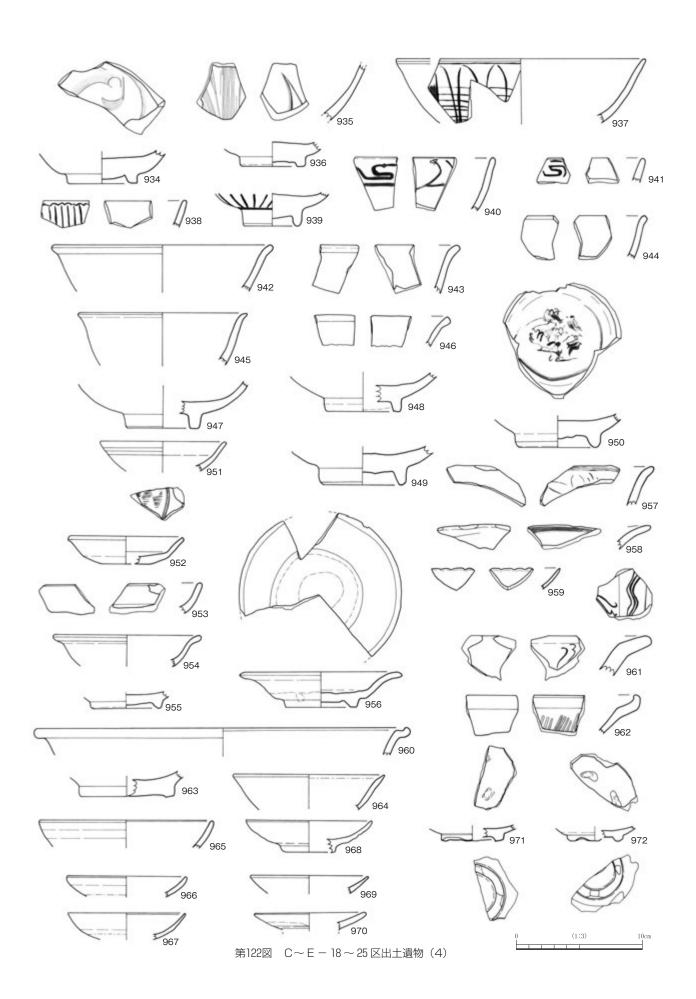
880~894は皿である。881は内外面の全体に煤が付着している。885は1.7mmほどの大粒の赤色鉱物が含まれる。886は外面表面に薄く赤色化した箇所があるが、塗布されたものかは不明である。895~898は坏の底部である。897は内外面に厚く煤が付着している。898は、内面にガラス化した鉄が付着していることから、坩堝の転用品と考えられる。899~903は皿の底部である。900も内面に煤が付着するが、二次的な焼成により赤化している。中世須恵器・瓦質土器(第120・121図)

904,905は甕の口縁部である。内外面ともにヨコナデで調整される。905は内面の当て具痕をナデ消すが、僅かな凹凸は残る。906~908は東播系の捏鉢である。口縁部を肥厚させ、口縁部には自然釉が付着し、黒灰色を呈す。908は口縁部を内面に屈曲させ、くの字状に近い形状を成す。909,910は樺万丈産の捏鉢である。内面にハケメ状の調整痕を残し、胎土には白色粒が多く含まれる。

911,912 は産地不明の捏鉢である。硬質で灰色を呈す。 内外はナデ調整である。 $913 \sim 919$ は擂鉢である。 $913 \sim 915$ は硬質で、灰白色を呈し、端部がヨコナデ調整より、







僅かに凹む。内面には約8本程度の単位の擂り目が入る。 916 \sim 919 は基本的に淡黄色で、焼成はあまい。 擂目は約6条を1単位として施される。

920 は茶釜である。肩部に耳部がつく。921, 922 は羽釜である。鍔をもつタイプで、922 は鍔に耳部がつく。鍔部下には煤が付着する。923~926 は、鉢の底部と考えられる。926 は器壁が薄い。内面が丁寧なナデ調整が施されるのに対し、外面の調整は粗く、叩き痕のような凹凸が目立つ。925 は、外面にハケメ状の調整痕を明瞭に残す。927 は器種不明である。燭台の台部とも考えられるが、断定は難しい。外面をケズリによって成形し、ナデ調整で仕上げる。

その他の遺物 (第121図)

928 は焼塩土器である。外面には指頭圧痕,内面には布 目痕がみられる。929 は滑石製石鍋である。鍔部の稜が 明瞭ではなく, 丸味をもつ。鍔部下位には煤が付着する。 930 は丸瓦である。凸面はナデ調整で,凹面には布痕が 残る。淡黄色を呈す。931 はメンコである。硬質で,灰白 色を呈す。932, 933 は洪武通寶で, 1368 年初鋳,明代の 古銭である。932 は背浙,重点通,マ頭通である。933 は無背、単点通、マ頭通である。

青磁 (第122図)

934, 935 は龍泉窯系青磁碗 I 類に比定されるものである。934 は底部で、内面見込みに片彫りの花文をもつ。935 は胴部片で、外面に縦に横目を入れる片彫蓮弁文をもち、内面に横目文をもつ。936 は龍泉窯系青磁碗 II 類に比定される底部である。底部は厚く、高台が断面方形を成す。畳付~高台内面は露胎する。

937~951 は明代以降の碗である。937~939 は上田B 類に比定されるものである。直口縁で、端部は丸味をもつ。 外面には簡略形の連弁文と横位の沈線文が入る。938 は細 描連弁文をもつ。939 は胴部に連弁文をもち、底部が厚 く、畳付~高台内が露胎する。940、941 は雷文帯をもつ 上田 C 類の碗で、940 は内面に草花文をもつ。

942~950は口縁部が外反し、口縁端部が丸く収まる上田 D 類に比定されるものである。947、948は二次的な被加熱により釉が変色する。949は高台内面の釉を輪状に掻き取り、その箇所が赤色に発色している。950は内面見込みに草花文の印刻をもつ。951は高麗青磁の碗と考えられる。胎土は暗い灰色を呈し、黒色粒を多く含む。

952, 953 は龍泉窯系皿 I 類に比定されるものである。 胴部下位で屈曲し、外方に伸びる。952 は、内面に櫛目文 をもち、底部は無釉である。

954~959 は明代以降の皿である。954,956 は口縁部が外反し、端部がやや厚みを帯び、丸みをもつ。956 は外面の腰部~高台内面まで無釉で、内面見込みは輪状に釉を掻き取る。露胎部分は部分的に赤色化する。955 は皿の底部である。957~959 は稜花皿である。957,958 は口縁部

内面に草花文が施される。959 は無文で、菊花皿に近い。 960~962 は盤の口縁部である。961 は器壁が厚く、大型品と考えられる。口縁内面には波状文、体部には草花文が施される。960、962 は、口縁端部を屈曲させ、上端は凹面を成し、端部をつまみあげる。962 の内面には縦方向の文様がみられる。

白磁 (第122:123 図)

963 は口縁部が玉縁状になる白磁碗Ⅳ類の底部である。高台外面~底部は露胎する。高台の削り出しは浅い。964 は口禿口縁の白磁皿Ⅳ類である。965~972 は森田D群に比定されるものである。965 は碗で,胎土は灰白色で精緻である。966~972 は皿である。直口縁で胴部は丸みをもつ。971,972 は割高台で内面見込みに目跡がつく。973~975 は四耳壺である。973 は肩部,974 は胴部である。釉調は光沢があり,精良である。975 は厚く高い底部をもつ。高台部分は露胎し,内面には砂目が多く付着する。976 は壺もしくは瓶の底部である。内面が露胎し,外面が高台内まで施釉されるが,畳付の釉は掻き取る。977 は水注の底部である。

青花 (第 123 図)

978 は端反り碗の口縁部で、小野分類の碗B群に比定されるものである。口縁部の内面に界線、外面には草花文をもつ。979 は直口縁で、小野分類の碗C群に比定されるものである。内面に界線、外面には四方襷文、胴部は芭蕉文をもつ。981 ~983 は碗の底部である。981 は高台内面まで施釉し、畳付の釉は掻き取る。外面・内面見込みと高台内面に花文をもつ。胎土が精緻であることから、景徳鎮産と考えられる。

982 は饅頭心の碗で小野分類のE群に比定されるものである。内面見込に山水人物が描かれる。983 は、腰部に界線を持ち、高台は内面まで露胎する。また内面見込みは輪状に釉を掻き取る。982、983 は璋州窯系産と考えられる。

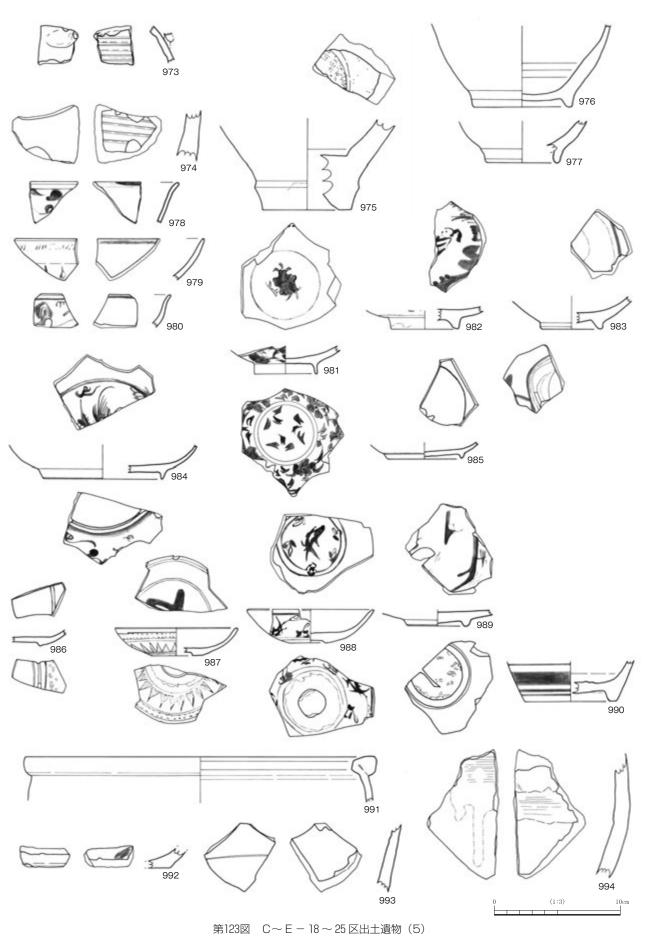
980,984,985 は端反りの皿で、小野分類の皿B群に比定されるものである。980 は口縁部が外反し、内面に界線、胴部に草花文をもつ。984 は玉取獅子が描かれる。

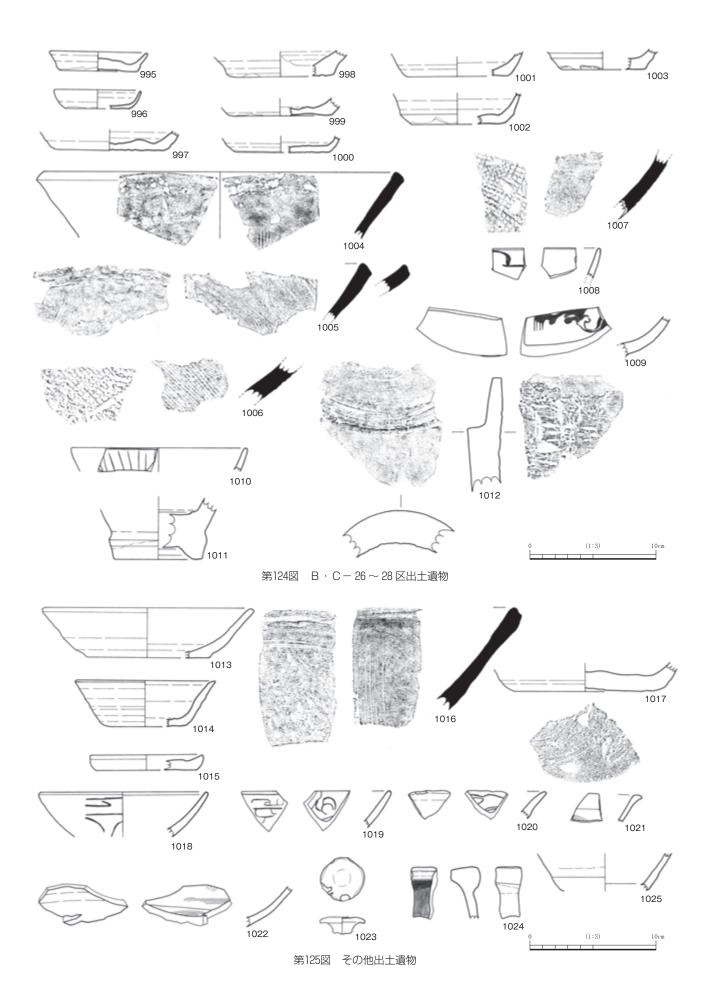
986 ~ 988 は碁笥底をもつ小野分類の皿C群である。底部の釉は掻き取られる。986 は底部に砂目がつく。987 は外面に芭蕉葉文,988 は草花文を内外面見込みにもつ。

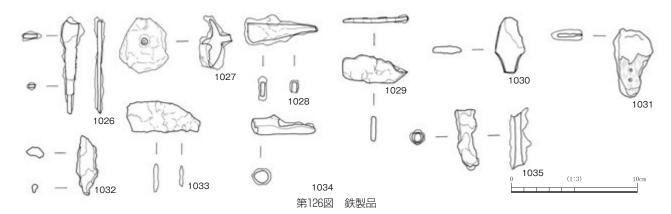
989 は、小野分類の皿E群である。高台内面に5mm大の小礫が付着する。内面見込には、山水が描かれる。990は、壺もしくは瓶である。底部には界線をもち、内面は露胎する。17世紀代のものと考えられる。

中国陶器(第123図)

991 は鉢である。口縁部を折り曲げて玉縁状に肥厚させる。ヨコナデにより内面は稜を成す。無釉で表面は暗褐色を呈し、胎土には褐色・白色粒を多く含む。992 は盤の底部である。外面は露胎し、内面に黄緑色釉が施釉され、







褐釉による文様が描かれる。993 は水注の胴部片である。 一条の沈線が巡る。外面の釉は部分的に剥落する。

国産陶器(第123図)

994 は常滑焼の甕の胴部片である。外面に叩きによる 平行状の押印がみられる。灰緑色釉が厚くかかる。

エ B·C-26~28区出土遺物(第124図) 土師器

995,996は皿である。995は体部が直線的に外傾する。 見込み周縁部が回転ナデにより凹む。996は体部が曲線 を描いて立ち上がった後,直線的に外傾する。997~1002 は底部の径から坏の底部と判断した。1003は底部の径か ら皿の底部であると考えられる。

中世須恵器

1006, 1007 は甕の胴部片である。いずれも硬質で外面 は格子目叩き痕が残る。内面調整は1006 がハケメ状の調 整痕, 1007 がナデ調整である。1004, 1005 は擂鉢である。 1005 は片口鉢である。

青磁・白磁・瓦

1008 ~ 1010 は明代以降の青磁の碗である。1010 は上田B類に比定されるもので、細描蓮弁文をもつ。1008 は上田C類に比定されるもので、雷文帯をもつ。1009 は内面に草花の印文をもつ。1011 は白磁の四耳壺の底部である。底部が厚く、底部の外面中位~高台内は露胎する。1012 は、丸瓦である。凸面は、丁寧なナデで調整され、黒色化する。凹面は、布目痕が明瞭に残る。凹面側縁部

オ 出土区不明遺物 (第125・126 図)

土師器・中世須恵器(第 125 図)

は布目痕がナデ消されている。

 $1013 \sim 1015$ は土師器である。1013, 1014 は坏で,1013 の体部は直線的に外傾する。1014 は,口縁部内面上から 1.5mm程度のところで面取りのような調整が施される。1014 は体部が直線的に外傾する。内面上部にハケメがみられる。1015 は皿であり,体部を短く引き出す。回転ナデ調整により内面の立ち上がり部分が凹む。

1016 は擂鉢である。硬質で、口縁部端部はヨコナデに

より凹む。1017は鉢の底部である。底部の切り離しは糸切りである。

輸入陶磁器(第125図)

 $1018 \sim 1020$ は青磁である。1018, 1019 は明代以降の青磁の碗である。上田 C 類に比定されるもので,外面には雷文帯をもつ。1020 は稜花皿である。内面には草花文をもつ。 $1021 \sim 1023$ は白磁である。1021, 1022 は碗 V 類に比定されるものである。嘴状の口縁部をもち,内面には櫛描文をもつ。

1023 は小壺の蓋である。天井部のみ施釉される。1024 は中国陶器の黄褐釉盤の口縁部である。外面は無釉で、内面は施釉される。1025 は天目碗の胴部である。鉄釉が厚く施釉される。

鉄製品 (第 126 図)

1026~1035は鉄製品である。本遺跡の中世の遺物は表層からも多く出土しているため、これらの鉄製品を中世の項に掲載することとするが、明確な時期の特定はできていない。

1026 は刀子または鉄鏃の茎部の可能性がある。1027 は 紡錘車である。紡輪が湾曲しており、軸が一部残存する。 1029, 1031 ~ 1033 は刀子の可能性がある。1031 は木製 の把が装着されており、約2mmの断面円形の目釘が残る。

1028, 1030 は鉄鏃である可能性がある。1028 は略菱形を呈する鉄鏃の上部が切断された可能性がある。1030 は略菱形を呈す。1034, 1035 は、筒状を呈す。煙管の可能性が高いが、残存部での断定はできない。

6 近世の調査

近世に該当する遺構に関しては、前項で記した通りである。近世に相当する遺物の出土層はI層である。出土遺物の中でも残存状況が良いものを中心とし、掲載する。

(1) 近世の遺物

ア D・E-4・5区出土遺物(第 127 図)

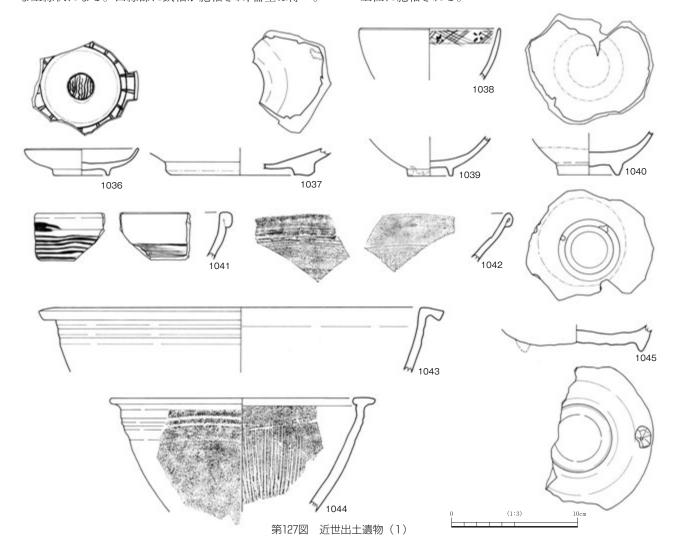
1036~1039, 1041, 1042 は肥前系の陶磁器である。1036 は皿である。内面見込みは釉を輪状に掻き取る。内面は格子文が描かれ、外面は無文である。畳付の釉は掻き取る。1037 は鉢である。畳付~高台内面は露胎し、内外面には灰釉がかかる。また内面には目跡が残る。1038, 1039 は碗である。1038 は磁器で、透明釉が施釉され、外面は無文、内面には四方襷文をもつ。

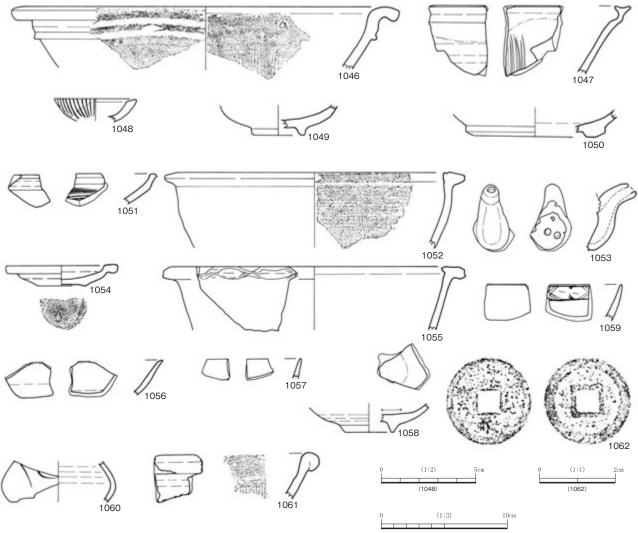
1039 は京焼風陶器と考えられる。胎土は浅黄色を呈し、全体に灰釉が施釉される。高台が小さく、畳付~高台内面は露胎する。1041 は鉢である。口縁部を折り返し、玉縁状にする。内外面には白土による刷毛目文が施される。1042 は擂鉢である。1041 同様、口縁部を折り返し、扁平な玉縁状になる。口縁部に鉄釉が施釉され、器壁は薄い。

1040、1043~1045 は薩摩焼である。1040 は龍門司窯系の碗である。鉄釉が施釉され、内面見込みの釉を輪状に掻き取る。1043 は苗代窯系の鉢で、口縁部が断面台形状を成す。外面には沈線文が2条入り、内面には強いヨコナデがみられる。鉄釉が施釉されるが、口縁部の釉が掻き取る。1044 は擂鉢である。口縁部が内側に張り出し、丁字状を成す。外面は施釉されず、内面には鉄釉がかかる。1043 同様、口縁部の釉は掻き取る。1045 は土瓶の底部である。脚部は3カ所つくものと考えられる。外面は無釉で、内面には鉄釉が施釉される。胎土は明赤褐色を呈し、白色粒を多く含む。

イ B~E-11~17区出土遺物(第128図)

1046 は薩摩焼の擂鉢である。口縁部が外反し,口縁下には削り出しによる突帯をもつ。体部はやや丸味を帯びる。1047 は肥前系の擂鉢である。口縁部は凹み,内面口縁部下は大きく凹み断面 Y 字状をなす。鉄釉が口縁~胴部上位にかかる。1048 は紅皿である。外面には縦位の櫛文を施し,やや青味かかった透明釉が,内面~外面胴部上位に施釉される。





第128図 近世出土遺物(2)

ウ C~E-18~25区出土遺物(第128図)

1049 は肥前系(唐津か?)の碗である。胎土は黄橙色を呈し、灰釉が施釉される。畳付には釉が付着しており、 焼成時のものと考えられる。1050 は肥前系の鉢と考えられる。内面は無釉で、外面には透明釉がかかる。底部形態と釉調は1037 と類似する。1051 は鉢の口縁部と考えられる。内面には白土による刷毛目文がみられる。

1053 は土瓶の注口である。鉄釉が施され、内面には3カ所穿孔される。1054 は小型の鉢と考えられるが、器種が不明である。底部は糸切り底で、外面に薄く透明釉がかかる。口縁部の一部に煤が付着することから、灯明皿として使用されていた可能性がある。

1052,1055 は苗代窯系の薩摩焼である。1052 は擂鉢で、 内面上位に段を成す。外面に藁灰釉が施釉される。1055 は植木鉢である。稜花状の口縁部で、口縁部の釉が掻き 取られる。

エ B・C-26~28区出土遺物(第128図)

1056 は肥前系の皿である。口縁部が外反し、やや先細りになる。全体に透明釉が施釉される。1057 は、肥前系の碗の口縁部と考えられる。無文で、全面に鉄釉がかかる。1058 は肥前系の碗である。内面の釉は輪状に掻き取られる。1060 は肥前系の油壺である。内面は露胎し、外面には草花文と思われる文様が描かれる。

1061 は薩摩焼の擂鉢である。鉄釉が全面にかかり、内面の擂目は粗い。

才 出土区不明遺物 (第128 図)

1059 は肥前系の碗である。直口縁で、内面には四方襷文をもつ。1062 は寛永通賓である。表面の摩耗が著しく、時期については判別できない。

第2表 旧石器時代の遺物観察表

挿図No.	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
7,1	1	-	D-24	VII	掻器	ob_日東	2.65	2.14	0.98	5.41	71.0 3
	2	116	B-27	IV	掻器	ob_腰岳	2.16	1.24	0.65	1.54	
	3	960	B-27	V	ナイフ形石器	ob_減出 ob_桑ノ木津留	2.31	1.22	0.71	1.57	
	4	2410	C-24		角錐状石器	ob_日東	2.54+	1.61	1.17	4.32	
	5	Z410 -	B-27	I	ナイフ形石器	ob_上牛鼻	2.46				
							3.49	1.62	0.80	1.70	
14	6	-	B-25	-	台形石器	ob_上牛鼻		2.15	0.70	4.70	
	7	-	C-26	Ιс	台形石器	チャート	2.72	2.82	0.70	4.29	
	8	146	B-27	IV	ナイフ形石器	ob_上牛鼻	2.6+	2.05	0.98	4.39	
	9	1315	D-15	IV	ナイフ形石器	ob_日東	3.68	1.91	1.16	5.78	
	10	591	B-27	V	ナイフ形石器	ob_日東	3.34 +	2.45	1.26	8.46	
	11	763	B-28	V	彫器	チャート	2.73	2.79	1.16	8.72	
	12	544	C-27	IV	_	ob_日東	2.89+	2.25	1.97	10.46	
39	13	857	B-27	V	石核	ob_日東	6.74	5.33	3.16	92.46	
第3表	縄文時代の)遺物観察	表(1)								
挿図No.	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
7年1211/0.	171	1301	D-16	VI	打製石鏃	ob_腰岳	2.16	1.28	0.41	0.73	T/H 45
40	172	3021	D-16 D-24	VI	剥片	ob_上牛鼻	3.24+	2.04	0.41	4.03	
				V			-				
	173	799 1016	B-28	V	打製石鏃	<u>チャート</u> 安山岩	1.77	1.56	0.27	0.54	
	174		B-28		打製石鏃		1.57 +	1.72	0.45		
	175	2515	D-23	V	ナイフ形石器	ob_日東 チャート	1.82+	1.24 +	0.77	1.23	
	176	820	B-27	V	トロトロ石器 剥片		3.66	1.83	0.74	3.93	
	177	2375	D-24			ob_腰岳	1.86	1.54	0.49	0.67	
	178	2545	D-23	V	残核	ob_腰岳	1.91	0.92	0.63	1.09	
41	179	2517	D-24	V	剥片	チャート	1.66	1.99	0.39	1.67	
	180	2727	D-23	V	剥片	ob_日東	2.30	2.00	0.60	2.31	
	181	2517	D-23	V	剥片	ob_腰岳	2.45	1.95	0.40	2.03	
	182	2388	C-23	V	剥片	チャート	2.56	3.41	0.77	7.05	
	183	2399	C-24	V	石匙	ob_上牛鼻	4.53	5.60+	0.95	19.78	
	184	2500	D-24	V	調整剥片	ob_針尾	1.70	2.68	0.40	0.91	
	185	-	D-23	V	剥片	玉髓	6.50	3.30	1.15	28.80	
	186	2671	D-24	V	削器	チャート	9.44	5.10	1.30	55.86	
	187	503	B-28	IV	打製石斧	ホルンフェルス	6.24 +	6.93	2.62	118.07	
	188	755	B-28	IV	打製石斧	ホルンフェルス	7.01 +	10.66	2.16	139.27	
	189	645	B-28	IV	打製石斧	ホルンフェルス	10.95	10.87 +	3.08	358.00	
42	190	784	B-28	IV	打製石斧	ホルンフェルス	6.62 +	10.3	3.55	327.21	
42	191	616	B-27	V	打製石斧	ホルンフェルス	14.5	6.85	2.65	360.00	
	192	2377	D-24	V	打製石斧	ホルンフェルス	16.37 +	6.86	2.23	278.35	
	193	2454	D-24	IV	打製石斧	ホルンフェルス	16.84	8.91	5.57	746.00	
	194	2572	D-23	IV	打製石斧	ホルンフェルス	26.58	9.42	4.97	1600.00	
43	195	2359	D-23	V	石核	ob_針尾	6.08	9.07	8.97	444.00	
	196	181	B-27	IV	打製石鏃	ob_桑ノ木津留	1.49	1,42	0.27	0.49	
	197	2047	C-24	IV	打製石鏃	ob_針尾	1.66	1.57 +	0.29	0.45	
	198	2300	C-24	IV	打製石鏃	ob_桑ノ木津留	1.73	1.81	0.29	0.50	
	199	-	B-27	IV	打製石鏃	ob 針尾	1.79	1.66	0.36	0.71	
	200	648	B-28	IV	打製石鏃	ob_桑ノ木津留	1.72	1.23+	0.34	0.37	
	201	612	B-27	IV	打製石鏃	ob 針尾	2.06	1.65	0.53	1.04	
	202	657	B-28	IV	打製石鏃	チャート	2.03	1.65	0.41	0.93	
	203	-	B-27	IV	打製石鏃	ob_針尾	2.14	1.67	0.39	0.94	
	204	-	B-27	IV	打製石鏃	チャート	1.88	1.22	0.19	0.24	
	205	2174	C-24	IV	打製石鏃	ob_腰岳	1.50+	1.16+	0.34	0.41	
	206	2040	C = 24	IV	打製石鏃	ob_版品 ob_腰岳	2.03+	1.54+	0.28	0.46	
	207	2276	D-24	IV	打製石鏃	ハリ質安山岩	2.68+	1,77	0.33	1.05	
44	208	2231	D - 24	IV	打製石鏃	ob 針尾	2.27	1.48	0.35	0.91	
	209	148	B-27	IV	器種不明	チャート	2.01	1.78	0.79	2.20	
	210	133	B-27	IV	打製石鏃	チャート	2.37	1.41	0.30	0.67	
	211	2941	C-24	IV	打製石鏃	ob_針尾	1.71 +	2.15+	0.44	1.38	
	212	-	B-27	IV	打製石鏃	ハリ質安山岩	2.07	1.40	0.39	0.89	
	213	2255	D-23	IV IV	打製石鏃	ob_三船産	3.23+	2.46	0.59	2.57	
	213	2117	C-24	IV IV	使用痕剥片	ob_三加座	1.27	1.57	0.32	1.05	
	215	-	B-27	IV IV	剥片	ob_桑ノ木津留	1.72	1.63	0.45	1.15	
	216	2299	C-24	IV IV	折断剥片	ob_栄ノ不伴留 ob_日東	1.72	2.08	0.43	1.15	
	217	2505	D-24	IV IV	微細剥離痕剥片	ob_腰岳	1.49+	2.08	0.73	2.03	
	217		C-23	IV IV	使用痕剥片	チャート	3.00		0.96	6.60	
		2087						2.65			
	219	2049	C - 24	IV N	剥片	ob_日東	3.72	5.12	1.00	15.28	
	220	2296	C - 24	IV TV	ナイフ形石器	ob_日東	3.58 +	1.75	1.20	4.94	
	221	2039	C-24	IV TV	影器	ob_日東	2.81	1.90	0.82	4.50	
	222	-	B-27	IV	剥片	チャート	2.58	3.40	1.00	8.57	
	223	-	B-27	IV	剥片	チャート	2.14	2.04	0.89	5.09	
45	224	2274	D-24	IV	剥片	ob_日東	2.42	2.57	0.76	4.48	
	225	2940	D-24	IV	剥片	ob_腰岳	2.70	1.84	1.01	3.12	
	226	2179	C-24	IV	剥片	ob_桑ノ木津留	2.50	2.20	0.55	2.38	
	227	124	B-24	IV	削器	チャート	6.85	4.28	1.00	30.93	
	228	2938	D-24	V	石核	軟質頁岩	4.78	5.87	3.01	80.02	
	229	2438	C-23	IV	剥片	ob_日東	3.83+	3.73+	0.93	11.68	

第3表 縄文時代の遺物観察表(2)

		り夏物観祭				1		T = 1 = / 1	T = 1 = 1 = 1		
i図No.	掲載番号		出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)		重量(g)	備考
	230	2120	C-24	IV	打製石斧	ホルンフェルス	10.90	6.98	2.56	217.46	
	231	114	B-27	IV	打製石斧	ホルンフェルス	12.59	6.56	2.75	234.22	
	232	2945	D-24	IV	打製石斧	安山岩	11.79+	6.60	2.07	223.22	
	233	1181	C-24	IV	打製石斧	ホルンフェルス	10.18+	7.16	2.60	215.98	
	234	2340	D-23	IV	打製石斧	硬質砂岩	14.70	5.70	3.03	301.01	
46	235	1121	D - 24	IV	打製石斧	ホルンフェルス	13.96	7.00	3.74	443.00	
	236	-	C - 23	IV	打製石斧	ホルンフェルス	14.96	7.72	2.62	319.13	
	237	1267	B - 28	IV	打製石斧	泥岩	12.40	7.30	4.10	361.00	
	238	119	B-27	IV	打製石斧	硬質砂岩	13.34	5.75	2.60	285.85	
	239	2116	C-24	IV	打製石斧	頁岩	15.40+	7.56	4.97	814.00	
	240	624	B-28	IV	打製石斧	ホルンフェルス	16.74	10.11 +	5.14	896.00	
	241	234	B-27	IV	剥片	ホルンフェルス	4.76	8.08	1.35	38.99	
	242	2181	C-24	IV · V	敲石	砂岩	7.05	4.88	3.27	152.46	
	242	910	C-24 C-27	IV V	周辺加工石器	擬灰岩	7.03	8.89	1.73	132.46	
		_									
45	244	1324	E-15	IV	礫器	ホルンフェルス	7.56	10.43	3.29	287.68	
47	245	216	B-27	IV	礫器	ホルンフェルス	9.82	10.79	3.75	510.00	
	246	2071	D-23	IV	敲石	砂岩	8.90	7.29	4.36	390.00	
	247	1182	C-24	IV	石器	ホルンフェルス	14.66	9.78	5.56	960.00	
	248	2322	C - 23	IV	石皿	砂岩	23.46 +	19.11 +	4.98	3810.00	
	249	2964	E-23	IV	打製石斧	ホルンフェルス	15.98	7.97	3.52	472.00	
	250	38	B-27	Ш	打製石鏃	ob 上牛鼻	1.45	1.31	0.37	0.32	
	251	69	B-27	II	打製石鏃	チャート	1.47	1.42	0.46	0.48	
	252	69	C-27	I	打製石鏃	ob 日東	1.67	1.35	0.46	0.70	
	253	961	B-27	V	接合資料	ob 霧島	4.56	5.11	0.40	0.70	
	254	446	C - 27	II	石核	ob_霧島	5.65	6.00	3.30	98.96	
	255	445	C-27	II	礫器	ob_針尾	4.66	6.33	4.16	138.62	
48	256	_	C-23	I	打製石鏃	ob_腰岳	1.03 +	1.17+	0.25	0.23	
	257	-	D-23	I	打製石鏃	ob_針尾	1.78	1.68 +	0.27	0.46	
	258	_	D-22	I	打製石鏃	ob_針尾	1.85	1.50	0.40	0.68	
	259	-	D-21	II	打製石鏃	ob_針尾	2.30	1.67	0.46	0.86	
	260	2940	D-21	П	剥片	チャート	2.54+	2.13+	0.60	2.80	
	261	-	B-26	Пс	剥片	ob_腰岳	3.70	2.64	0.64	5.96	
	262	_	D-20	II d	剥片	ob_上牛鼻	1.43 +	2.85 +	0.48	1.54	
	263	_	D = 20	Ιс	剥片	ob_上牛鼻	2.46	3.08	0.46	5.75	
	264	-	D-21	低Ⅱc	打製石斧	頁岩	16.00	5.68	2.41	267.84	
	265	267	D-5	I	打製石斧	ホルンフェルス	13.12	9.45	3.54	490.00	
49	266	竪穴建物状遺構	E-15	-	打製石鏃	黒色安山岩	2.56	2.10	0.50	1.61	
	267	竪穴建物状遺構	E-15	_	打製石鏃	ob_針尾	1.76	1.75	0.30	0.60	
	268	土抗7号	C – 24	_	剥片	ob_腰岳	2.40 +	1.21	0.40	1.33	
	269	-	B ⋅ C - 26~28	_	打製石鏃	チャート	1.74	1.15	0.41	0.53	
	270	_	D-13	_	打製石鏃	ob_上牛鼻	2.40	1.77	0.40	1.50	
	271	-		_	打製石鏃	安山岩	2.55+	1.90	0.40	1.47	
	272	_	C - 15	_	打製石鏃	安山岩	2.90	1.98	0.40	1.83	
	273	_	D-14	_	打製石鏃	ob_針尾	3.30	1.64	0.44	1.57	
	274	_	B-26	_	打製石鏃	ob 腰岳	2.20	1.40	0.31	0.64	
		_	大園	_	打製石鏃					0.62	
	275					ob_針尾	1.61	1.80	0.41		
	276	-	B-27,28	-	打製石鏃	ob_桑ノ木津留	1.9+	1.46	0.30	0.49	
	277	-	B-26	_	打製石鏃	チャート	2.78	1.41 +	0.40	1.24	
50	278	_	E-23	_	打製石鏃	ob_針尾	2.22+	1.12+	0.39	0.64	
00	279	_	D-13	_	打製石鏃	ob_桑ノ木津留	1.37	1.20	0.33	0.31	
	280	_	B-28	-	打製石鏃	ob_針尾	1.94+	1.35+	0.34	0.56	
	281	-	採取	-	打製石鏃	チャート	1.77 +	1.47 +	0.41	1.01	
	282	_	D-13	-	打製石鏃	ob_桑ノ木or霧島	1.46+	1.22+	0.40	0.59	
	283	_	D-28,29	-	打製石鏃	チャート	1.77	1.49	0.70	1.54	
	284	_	-	I	石匙	安山岩	3.43 +	3.06	1.10	7.99	
	285	_	C - 24	_	掻器	ob_日東	2.39+	2.81 +	1.40	7.33	
	286	_	E - 15	_	打製石鏃	鉄石英	2.55	2.01	0.89	3.36	
		_		_							
	287		B-27		打製石鏃		3.67	2.82	0.85	5.38	
	288	-	D-24	_	打製石鏃	瑪瑙	3.06	2.85	1.21	9.09	
	289	-	C - 25	-	石錐	ob_腰岳	3.76	1.08	0.27	0.85	
	290	_	C-27	-	打製石鏃	チャート	2.61	1.69	0.58	2.45	
	291	-	C - 23,24	-	剥片	ob_腰岳	2.31	1.86	0.28	1.60	
51	292	-	D-7	-	調整剥片	ob_針尾	2.20	1.60	0.40	0.94	
	293	_	D-7	-	調整剥片	黒色頁岩	2.00	1.96	0.50	1.65	
	294	-	D-24	-	剥片	ob_腰岳	3.44	2.90	0.75	5.19	
	295	_	C - 15	-	石匙	安山岩	6.93	3.46+	1.03	17.72	
	296	-	C - 25	表土採集	打製石斧	ホルンフェルス	11.80	4.82	1.77	123.23	
	297	_	B - 28	表土採集	打製石斧	頁岩	11.22	5.08+	3.44	210.03	
	298	-	D - 20	表土採集	打製石斧	頁岩	9.9+	7.24	3.73	340.00	
	299	-	C-28	表土採集	打製石斧	ホルンフェルス	14.49	6.56	2.62	359.00	
	300	-	B-28	表土採集	打製石斧	ホルンフェルス	11.08 +	5.95	2.70	214.94	
=0	301	_	C-28	表土採集	打製石斧	ホルンフェルス	11.7 +	6.76	2.84	340.00	
52		-	C – 23	表土採集	打製石斧	ホルンフェルス	14.58	6.84	2.60	343.00	
52	302			1 -ba 1 1-5 //:	+・一キリア・36	ホルンフェルス	16.49	6.07	4.38	468.00	
52	302 303	-	D - 15	表土採集	打製石斧	小ルマ / エルハ	10.43	0.01	1.00		
52		-	D-15 B-27,28		打製石斧 打製石斧	ホルンフェルス	20.20	5.74	3.29	504.00	
52	303 304		B-27,28	表土採集	打製石斧	ホルンフェルス	20.20	5.74	3.29	504.00	
52	303	-									

第4表 弥生・古墳時代の遺物観察表

挿図	掲載	出土地点	扇	取上番号	種別	器種	部位	器面	i調整	色	調	法	₩ (cm)			胎土		備考
番号	番号	田工地从	PER	取上留写	性历リ	福性	mp1M.	外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	
	308	-	-	1391	弥生土器	遊	口縁~頸部	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 Huel0YR8/3	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	17.2	-	-	0	0	0	白色赤色 鉱物	肥後型複合口 縁壺
	309	D-5	П	-	成川式土器	魙	胴部~脚部	ナデ	ナデ	浅黄橙色 Huel0YR8/4	浅黄橙色 Huel0YR8/4	-	-	-	0	0	0	黒色·赤 色鉱物	
	310	D-5	П	380	成川式土器	甕	胴部~脚部	ケズリ→ナデ	ナデ	浅黄橙色 Huel0YR8/4	浅黄橙色 Huel0YR8/4	-	-	-	0	0	0	黒色・白 色鉱物	
	311	D-5	I	-	成川式土器	甕	胴部~脚部	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Huel0YR8/3	-	-	-	0	0	0	黒色・赤 色鉱物	
54	312	E-16	Ι	-	成川式土器	魙	口縁部	ハケメ→ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3	25.0	-	-	0	0		白色鉱物	
01	313	C-22	Πb	1343	成川式土器	兠	口縁~胴部	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	12.8	-	-	0	0	0	赤色鉱物	
	314	D-23	II上b	一括	成川式土器	売	胴部	平行タタキ	ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	-	-	-	0	0		赤色鉱物	
	315	C-23	Πa	一括	成川式土器	甕	胴部	平行タタキ	ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	明黄褐色 Hue2.5Y7/6	-	-	-	0	0		赤色鉱物	
	316	D-21	低Ⅱc	一括	成川式土器	兠	脚部	ナデ	ナデ	灰黄褐色 Hue10YR6/2	灰黄褐色 Huel0YR6/2	-	10.0	-	0	0		小礫・白 色鉱物	
	317	D-22	II d	一括	成川式土器	高坏	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	橙色 Hue7.5YR7/6	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	318	B-28	I	783	成川式土器	売	口縁~底部	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	明黄褐色 Huel0YR7/6	21.3	-	-	0	0		小礫・黒 色鉱物	
	319	B-26	Пс	一括	成川式土器	兠	脚部	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	浅黄橙色 Huel0YR8/4	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	-	11.0	-	0	0	0	黒色・赤 色鉱物	
	320	C-27	III	450	成川式土器	兠	脚部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	-	10.9	-	0	0	0	黒色鉱物	
	321	B-28	Ι	-	成川式土器	並	口縁部	ナデ	ナデ	明黄褐色 Huel0YR7/6	明黄褐色 Hue10YR7/6	16.6	-	-	0	0	0	白色鉱物	
	322	B-27	ШЬ	-	成川式土器	壺	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	12.6	-	-	0	0	0	白色鉱物	
55	323	B-27	Ι	-	成川式土器	並	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 Huel0YR7/4	明黄褐色 Hue10YR7/6	14.8	-	-	0	0	0	白色鉱物	
	324	B-28	IV	478	成川式土器	並	胴部~底部	ハケメ→ナデ	ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	明黄褐色 Huel0YR7/6	-	-	-	0	0			
	325	B-27	IV	52	成川式土器	Ť	胴部	ハケメ→ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	326	D-28	IV	74	成川式土器	Ť	胴部~底部	ハケメ→ナデ	ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	黄橙色 Huel0YR8/6	-	-	-	0	0			
	327	B-27	Ι	-	成川式土器	Ť	胴部~底部	ハケメ→ナデ	ナデ	浅黄橙色 Huel0YR8/3	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	-	2.0	-	0	0			
	328	B-28	Ι	一括	成川式土器	鉢	胴部	ナデ	ケズリ→ナデ	明黄褐色 Huel0YR7/6	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	329	C - 28	Ι	-	成川式土器	鉢	口縁~底部	ナデ	ナデ	明黄褐色 Huel0YR6/6	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	13.1	-	-	0	0	0	白色鉱物	
56	330	C-27	I · III	28	古式土師器	売	胴部	ハケメ → 平行タタ キ	ナデ	橙色 Hue5YR6/8	橙色 Hue5YR6/6	-	-	-	0	0	0	白色鉱物	
	331	C - 28	Ι	-	須恵器	聰	口縁部	ナデ	ナデ	オリーブ色 Hue5Y6/2	オリーブ黄色 Hue5Y6/3	9.0	-	-	0	0			櫛描波状文

第5表 古代の遺構内出土遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	遺構	出土地点	取上 番号	種別	器種	部位	器面流	調整	色	調	法	量(cr	n)			胎土		備考
番号	番号	255.179	III II ABAA	番号	1里.50	60*128	TIP IV.	外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	188 45
	332	土抗7号	-	-	土師器	売	完形	ナデ	ケズリ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	12.4	-	11.9	0	0		白色鉱物	煤付着
58	333	土抗7号	D - 14	-	土師器	坏	完形	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	黄橙色 Huel0YR8/6	10.0	5.0	4.1	0	0	0	赤色鉱物	
	334	土抗7号	D - 14	-	土師器	埦	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	14.0	8.6	7.1	0	0	0	黒色鉱物	

<u>≯</u>	三		包彻的	<u> 祭表(I)</u>															
挿図 番号	掲載 番号	出土地点	扇	取上番号	種別	器種	部位	器面	調整	色	.調	法	量(cn				胎土		備考
番号	番号	山工地州	727	収上宙ケ	但此別	6計1里	TAININ.	外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	7HI 45
	335	D-5d	I	609	土師器	兠	口縁部	ヨコナデ	ケズリ→ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄橙色 Huel0YR8/4	25.0	-	-	0	0		白色鉱物	
	336	D-5c · D-5d	I	626 · 464 · 385	土師器	埦	口縁~胴部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue2.5YR6/6	橙色 Hue2.5YR6/6	17.8	-	1	0	0		白色鉱物	
	337	D-5d	I	974	土師器	埦	底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	-	8.4	1	0	0		白色鉱物	
	338	D-5	П	-	土師器	埦	底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	黄灰色 Hue2.5Y6/1	-	7.2	1	0	0		白色鉱物	
	339	D-5 · D-5c	Ι · Π	632 · 376	内黒土師器	埦	口縁〜底部	ナデ→ミガキ	ミガキ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	黑色 Hue7.5Y2/1	17.0	7.0	5.7	0	0	0	赤色鉱物	
	340	D - 5d	I	692 · 370	内黒土師器	埦	口縁〜底部	ナデ→ミガキ	ミガキ	浅黄橙色 Huel0YR8/3	黑色 Hue7.5Y2/1	15.5	4.8	6.2	0	0	0	赤色鉱物	
	341	D - 5d	I	368	内黒土師器	埦	口縁~胴部	ナデ→ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	褐灰色 Huel0YR4/1	16.0	-	-	0	0			外面に煤付着
	342	D - 5a	I	1065	内黒土師器	埦	口縁~胴部	ナデ→ミガキ	ミガキ	黄褐色 Hue2.5Y5/3	黒色 HueNl.5/	16.5	-	-	0	0		赤色鉱物	
	343	D-5	П	-	内黒土師器	埦	口縁~胴部	ミガキ	ミガキ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	黒色 Hue2.5Y2/1	16.0	-	-	0	0		黒雲母	
	344	D-5	I	一括	内黒土師器	埦	口縁~胴部	ナデ→ミガキ	ミガキ	灰黄色 Hue2.5Y7/2	黑色 Hue5Y2/1	15.0	-	-	0	0		赤色鉱物	
	345	D -5d	I	614 · 975	内黒土師器	埦	口縁~胴部	ナデ→ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	黑色 HueN2/	18.0	-	-	0	0		赤色鉱物	
59	346	D - 5b	I	256	内黒土師器	埦	口縁~胴部	ミガキ	ミガキ	灰黄色 Hue2.5Y7/2	黑色 HueNl.5/	18.0	-	-	0	0		赤色鉱物	
"	347	D-5	П	263	内黒土師器	埦	底部	ナデ	ミガキ	浅黄橙色 Huel0YR8/3	黒色 Huel0YR1.7/1	-	7.8	-	0	0		赤色鉱物	
	348	D-5	I	-	内黒土師器	埦	胴部〜底 部	ナデ→ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	黒色 Huel0YR1.7/1	-	6.8	-	0	0		赤色鉱物	外面丹塗り
	349	D-5	I	-	内黒土師器	埦	胴部〜底 部	ナデ	ミガキ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	黒色 Huel0Y2/1	-	6.6	-	0	0		赤色鉱物	
	350	D-5	П	-	内黒土師器	埦	底部	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	黒色 Huel0YR1.7/1	-	7.2	-	0	0		赤色鉱物	
	351	D - 5d	I	352	内黒土師器	埦	底部	ナデ	ミガキ	橙色 Hue7.5YR7/6	黒色 Hue7.5YR1.7/1	-	6.8	-	0	0	0		焼成前穿孔。高台内面 に矢印状の線刻あり
	352	D-5	П	371	内黒土師器	埦	胴部〜底 部	ナデ→ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	黄灰色 Hue2.5Y4/1	-	6.8	-	0	0	0	赤色鉱 物・火山 ガラス	高台内「X」の字に 線刻
	353	D-5	П	-	内黒土師器	埦	底部	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/2	橙色 Hue7.5YR7/6	-	7.4	-	0	0		赤色鉱物	
	354	D - 5d	Ι · Π	380	内黒土師器	埦	胴部~底 部	ナデ→ミガキ	ミガキ	明黄褐色 Huel0YR7/6	黑色 Huel0YR2/1	-	6.8	1	0	0		赤色鉱物	高台境に接合痕あり
	355	D-5	П	-	内黒土師器	埦	底部	ナデ→ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	黑色 Huel0YR1.7/1	-	8.6	-	0	0		赤色鉱物	
	356	D-5	П	332	内黒土師器	埦	底部	回転ナデ	ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	暗灰色 HueN2/	-	6.0	-	0	0		赤色鉱物	
	357	D-5	П	252	内黒土師器	埦	底部	ナデ	ミガキ	にぶい橙色 Hue2.5YR6/4	赤灰色 Hue2.5YR5/1	-	8.2	-	0	0	0	赤色鉱 物・火山 ガラス	内面丹塗り→黒色化

第6表 古代の遺物観察表(2)

445 East	4EL 4B	I		XX (=)				器面	調整	伍	調	<i>j</i> ‡	量(ci	n)			胎土		
挿図 番号	掲載 番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位	外面	内面	外面	内面	口径	_	器高	石英	長石	_	他	備考
	358	D - 5d	I	607	内黒土師器	埦	底部	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	黒色 Hue7.5YR1.7/1	-	7.2	-	0	0		火山ガラス	
	359	D-5	-	1)	楠葉型黒色 土器B	埦	胴部~底 部	ミガキ	ミガキ	灰色 Hue5Y5/1	灰色 HueN4/	6.0	-	-	0	0			
	360	D - 5d	I	967	楠葉型黒色 土器B	埦	底部	ナデ	ミガキ	暗灰色 HueN3/	暗灰色 HueN3/	-	6.5	-	0	0			
	361	D-5a	I	557	須恵器	蓋	つまみ部	ナデ	ナデ	オリーブ黒色 Hue7.5Y3/1	灰色 Hue7.5Y5/1	-	-	-	0	0			
	362	D-5c	I	1274	須恵器	蓋	つまみ部	ナデ	ナデ	灰色 Hue7.5Y6/1	灰色 Hue7.5Y6/1	-	-	-	0	0			
	363	D-5	I	-	須恵器	並	頸部	ナデ	ナデ	灰色 HueN5/	灰色 HueN5/	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	364	D-5	I	-	焼塩土器	-	口縁部	ナデ	布目圧痕	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	-	-	-	0	0		白色鉱 物·小礫	二次焼成による赤化
	365	D-5d	I	963	焼塩土器	-	口縁部	ナデ	布目圧痕	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	-	-	-	0	0		白色鉱 物·小礫	
59	366	D-5	П	-	瓦	平瓦	-	格子目タタキ	布目圧痕	浅黄橙色 Huel0YR8/3	浅黄橙色 Huel0YR8/3	-	-	-	0	0		白色鉱物	布目あり
	367	E-12	Πa	1156	須恵器	坏	口縁~胴部	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 Hue2.5Y7/2	灰黄褐色 Huel0YR6/2	15.7	-	-	0	0			
	368	E-13	Πb	1117	須恵器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	灰色 HueN6/	灰白色 Hue5Y7/1	-	8.4	-	0	0		小礫	高台内へラ切り痕
	369	E-12	I	-	須恵器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	灰色 HueN5/	灰色 HueN5/	-	9.2	-	0	0		白色鉱物	
	370	DE-13	I	-	須恵器	甕	口縁部	ナデ→格子目 タタキ	ナデ	灰色 HueN6/	灰色 HueN6/	20.2	-	-	0	0		小礫	
	371	D - 14	I	-	須恵器	甕	肩部	ナデ → 平行タ タキ	ナデ → 同心円 あて具痕	にぶい黄褐色 Huel0YR5/4	黄灰色 Hue2.5Y5/1	-	-	-	0	0		黒色鉱物	
	372	D-14	I	-	須恵器	並	肩部	ナデ	ナデ	灰オリーブ色 Hue5Y6/2	灰色 Hue5Y6/1	-	-	-	0	0		小碟	外面に自然釉
	373	D-13	I	-	須恵器	並	底部	ナデ	ナデ	明灰黄色 Hue2.5Y5/2	黄灰色 Hue2.5Y4/1	-	10.2	-	0	0		小碟	
	374	D-12	I	-	須恵器	並	底部	ナデ	ナデ	灰色 HueN5/	灰色 HueN5/	-	10.0	-	0	0		小礫·白 色鉱物	
	375	D-21	低IId	-	土師器	甕	口縁~胴部	ハケメ・ナデ	ヘラケズリ・ ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	-	-	-	0	0			
	376	B-25	Πb	一括	内黒土師器	埦	底部	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	黑色 Huel0YR1.7/1	-	-	-	0	0		赤色鉱 物・火山 ガラス	
	377	C-20	I	一括	内黒土師器	埦	底部	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	黒色 Hue7.5Y2/1	-	7.0	-	0	0		赤色鉱物	高台内に1条の線刻 あり
	378	B-23	I	一括	両黒土師器	坏	底部	ミガキ	ミガキ	黒色 Hue2.5Y2/1	黒色 Hue2.5Y2/1	-	6.0	-	0	0			糸切り底
	379	D-19·20	I	-	土師器	売	胴部	ヨコナデ	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	橙色 Hue7.5YR6/6	-	-	-	0	0		黒雲母· 赤色鉱物	
	380	C-23	ΙΙс	一括	土師器	蓋	天井部~ 底部	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 Hue5YR6/8	橙色 Hue5YR6/8	16.0	2.4	3.0	0	0			
	381	D-23	II .La	一括	須恵器	並	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y6/1	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	382	B-25	Πb	一括	須恵器	並	肩部	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 Hue2.5Y7/2	灰黄色 Hue2.5Y7/2	-	-	-	0	0		白色鉱物	
60	383	B-25	Πa	一括	須恵器	並	胴部	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y6/1	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	384	D-20	II	-	須恵器	兠	胴部	格子目タタキ	平行あて具痕	橙色 Hue7.5YR7/6	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	-	-	-	0	0		白色鉱 物·小礫	
	385	B-27 · 28	I	=	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐色 Huel0YR7/6	明黄褐色 Huel0YR7/6	13.2	5.4	4.8	0	0	0		ヘラ切り
	386	B-27	I	-	内黒土師器	埦	口縁~胴部	回転ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	黑色 Huel0YR7/1	5.8	-	-	0	0	0	白色鉱 物·小礫	
	387	B-27	I	=	須恵器	兠	胴部	格子目タタキ	平行あて具痕	青黒色 Hue5BG2/1	灰色 HueN5/	-	-	-	0	0			
	388	C-28	I	-	須恵器	兠	胴部	格子目タタキ	同心円あて具 痕	灰色 Hue5Y4/1	灰色 Hue5Y6/1	-	-	-	0	0			
	389	B-27	I	-	須恵器	兠	胴部	ヨコナデ	平行あて具痕	黄灰色 Hue2.5Y6/1	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	390	C-28	-	-	須恵器	売	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	オリープ灰色 Hue5GY5/1	オリープ灰色 Hue5GY5/1	-	-	-	0	0			
	391	-	I	=	内黒土師器	埦	胴部~底 部	ヨコナデ	ナデ→ミガキ	灰白色 Hue2.5Y8/2	褐灰色 Huel0YR6/1	-	7.2	-	0	0		赤色鉱物	
	392	-	-	1480	土師器	坩堝	口縁部	ナデ	ナデ	灰黄色 Hue2.5Y 6 /2	灰黄色 Hue2.5Y6/2	7.8	-	-	0	0		白色・黒 色鉱物	外面に煤付着

第7表 中世の遺構内出土遺物観察表(1)-1 土師器・須恵器他

挿図	掲載	遺 構	層	出土	取上番号	種別	器種	部位	器面	調整	色	調	法	量(cn	1)			胎土		備考
番号	番号		ner	地点	以上. 宙 与	1里力リ	6計1里		外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	789-45
62	393	造成面焼土 域	-	D-5	-	土師器	Ш	口縁〜底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue5YR7/6	橙色 Hue5YR7/6	9.2	8.0	1.2	0	0		白色·黒 色鉱物	糸切り
02	397	柱穴	-	D-5	-	土師器	Ш	完形	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	9.0	7.5	1.3	0	0		赤色鉱物	糸切り
	413	土坑15号	П	D-5	268	土師器	坏	完形	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 Hue7.5YR6/1	橙色 Hue7.5YR7/6	12.0	9.0	3.2	0	0		赤色鉱物	糸切り
	414	土坑15号	П	D-5	-	土師器	Ш	完形	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	8.7	7.2	1.3	0	0		白色·黒 色鉱物	糸切り
66	415	土坑15号	П	D-5	-	土師器	Ш	完形	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	8.5	7.7	1.3	0	0		白色・黒 色鉱物	糸切り
00	416	土坑16号	ı	D-5	-	土師器	坏・皿	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	-	-	-	0	0		白色・黒 色鉱物	糸切り
	417	土坑16号	-	D-5	-	土師器	坏· 皿	底部	ナデ	ナデ	明褐灰色Hue 7.5 YR7/2	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	-	-	-	0	0		赤色鉱物	糸切り
	420	土坑16号	П	D-5	一括	焼塩土器	-	胴部	ナデ	布目痕	橙色 Hue2.5YR6/6	橙色 Hue2.5YR6/6	-	-	-	0	0		白色・黒 色鉱物	二次焼成によ る赤化
68	421	竪穴建物跡 1号	-	E - 15	①②③床面	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	灰オリーブ色 Hue5Y6/2	灰色 Hue5Y5/1	26.9	-	-	0	0		白色鉱物	
	422	竪穴建物跡 2号	-	D- 15	-	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	7.8	6.6	1.7	0	0		赤色鉱物	糸切り
70	423	竪穴建物跡 2号	-	D - 15	一括	土師器	坏.	底部	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	明赤褐色 Hue5YR5/6	-	5.2	-	0	0		白色鉱物	糸切り
	424	竪穴建物跡 2号	-	C - 16	-	須恵器	兠	胴部	平行タタキ	平行あて具痕	暗赤褐色 Hue 5YR3/3	黄灰色 Hue2.5Y5/1	-	-	-	0	0		白色・黒 色鉱物	
	427	竪穴建物跡 3号	-	C- 15	-	土師器	小皿	口縁 ~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	9.2	7.0	1.4	0	0		白色鉱物	糸切り
	428	竪穴建物跡 3号	-	C- 15	-	土師器	Ш	口縁 ~底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	9.3	7.0	1.5	0	0		白色·赤 色鉱物	糸切り
72	429	竪穴建物跡 3号	-	C- 15	床面	土師器	小皿	口縁 ~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	8.8	7.0	1.3	0	0		白色鉱物	糸切り
12	430	竪穴建物跡 3号	-	C- 15	-	土師器	Ш	口縁 ~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	8.8	7.0	1.5	0	0		白色·赤 色鉱物	糸切り
	431	竪穴建物跡 3号	-	C- 15	-	土師器	Ш	口縁 ~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	8.9	6.6	1.6	0	0		白色·赤 色鉱物	糸切り
	435	竪穴建物跡 3号	-	C- 15	-	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ナデ→ハケメ	ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	灰色 Huel0Y4/1	-	-	_	0	0		白色鉱物	
73	437	竪穴建物跡 4号	下	-	_	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	-	9.0	-	0	0		白色・赤 色鉱物	糸切り

第7表 中世の遺構内出土遺物観察表(1)-2 土師器・須恵器他

第7	表	中世の過	貴構内	出出	遺物観察	表(1)	-2	土師	器・須恵											
挿図 番号	掲載 番号	遺構	層	出土地点	取上番号	種別	器種	部位	器面 外面	調整 内面	外面	.調 内面	法: 口径	量(cn 底径	1) 器高	石英	長石	胎土 角閃	他	備考
	438	竪穴建物跡 5号	_	C- 16	-	土師器	坏	胴部 ~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	12.0	9.0	3.3	0	0	7,1114	白色·赤 色鉱物	糸切り
74	439	竪穴建物跡		C-	_	土師器	ш	底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色		6.0	_	0	0		白色・赤	糸切り
		5号		16 E -			\vdash	口縁			Hue5YR7/6 橙色	Hue5YR7/6 橙色			1.0				色鉱物	
	443	竪穴状遺構	-	15 E -	-	土師器	Ш	~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR6/6 橙色	Hue7.5YR6/6 橙色	9.4	8.4	1.0	0	0		黒色鉱物 白色·赤	糸切り後ナデ
75	444	竪穴状遺構	-	15	-	土師器	Ⅲ	底部	ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR6/6	Hue7.5YR6/6	-	8.4	-	0	0		色鉱物	糸切り
	445	竪穴状遺構	-	E - 15	-	土師器	Ш	口縁 ~底部	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐色 Hue10YR6/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	7.2	5.4	1.4	0	0		白色鉱物	糸切り
	446	竪穴状遺構	-	E - 15	-	土師器	Ш	口縁 ~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	6.6	5.2	1.5	0	0		白色·黒 色鉱物	糸切り
79	449	柱穴跡1号	-	E - 15	P60①	土師器	坏・Ⅲ	底部	ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	-	8.0	-	0	0		白色・黒 色鉱物	糸切り
	451	土坑19号	-	E- 14	-	土師器	Ш	完形	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	8.7	8.3	1.0	0	0		白色·赤 色鉱物	糸切り
80	452	土坑19号	-	E- 14	-	土師器	Ш	口縁 ~底部	回転ナデ	回転ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/6	橙色 Hue7.5YR6/6	8.0	7.8	1.2	0	0		白色鉱物	糸切り。器形 歪んでる
	457	大型土抗状	П	D·	_	土師器	ш	底部	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色	にぶい褐色	_	7.0	_	0	0		白色鉱物	糸切り
		遺構3号		14 E-			坏.				Hue5YR5/6 にぶい黄橙色	Hue7.5YR5/4 にぶい黄橙色								
	458	大型土抗状 遺構3号	II	14 D ·	-	土師器	1	底部	ナデ	回転ナデ	Hue10YR7/4	Hue 1 0 YR7/4	-	7.2	-	0	0		白色鉱物	糸切り
83	459	大型土抗状 遺構3号	Π	E - 14	-	須恵器	菫	胴部	格子目タタキ	ナデ・ハケメ	灰色 HueN6/	灰色 HueN5/	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	460	大型土抗状	П	Б-	-	須恵器	並	胴部	ナデ	ハケメ	黄灰色	黄灰色	-	_	_	0	0		白色鉱物	
	400	遺構3号 大型土抗状	_	14 E-	+15.	707 RF 1, RF	باد داد	ste tet	.1.79 3 202	ナデ・ハケメ	Hue2.5Y6/1 にぶい黄色	Hue2.5Y6/1 褐灰色 Hue	_	20.4	_		0		play d. Z. dale fishin	
	462	遺構3号		14 D ·	一括	瓦質土器	火鉢	底部	ナデ・ミガキ	テナ・ハクメ	Hue 2.5 Y 6/3	10YR5/2	_	30.4	_	0	0		白色鉱物	
	463	堀跡1号	II	E – 14	410	土師器	坏	底部	ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue5YR6/3	褐灰色 Hue5YR5/1	-	7.8	-	0	0		白色・赤 白鉱物	糸切り
85	464	堀跡1号	II	D – 14	413	土師器	坏	底部	ナデ	回転ナデ	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	-	8.0	-	0	0		白色鉱物	糸切り
	469	堀跡1号	II	C- 14	-	瓦質土器	火鉢	口縁部	ナデ・ミガキ	ナデ	灰色 Hue7.5Y4/1	灰色 Hue5Y5/1	30.6	-	-	0	0		白色·黒 色鉱物	
	470	堀跡1号	II	E- 14	408	瓦	平瓦	_	ナデ	布目痕・ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	-	-	-	0	0		白色鉱物	布目痕
	471	堀跡2号	_	Е-	727	土師器	坏	口縁	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	12.5	9.0	3.2	0	0		白色鉱物	糸切り
	472	堀跡2号	_	15 E -	内溝	土師器	坏	一底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR7/4 にぶい橙色	Hue7.5YR7/4 にぶい橙色	_	_	_	0	0		白色鉱物	7
				15 D-			\vdash	~胴部			Hue7.5YR7/3 灰黄褐色	Hue7.5YR7/3 にぶい黄橙色		100					白色·黒	
	473	堀跡2号	_	14 D-	-	土師器	坏	底部	ナデ	回転ナデ	Hue10YR6/2 にぶい橙色	Hue10Y6/4 にぶい橙色	_	12.0	-	0	0		色鉱物 白色・黒	
	474	堀跡2号	-	14	666	土師器	Ш	底部	ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR7/4	Hue7.5YR7/4	-	5.0	-	0	0		色鉱物	糸切り
	475	堀跡2号	-	E - 15	676	土師器	Ш	口縁 ~底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	7.4	5.8	1.7	0	0	0	黒色鉱物	糸切り
	482	堀跡2号	Ι · Π	D- 13 D -14	-	須恵器	兠	口縁部	格子目タタ キ・ナデ	ナデ・ハケメ	灰色 HueN6/	灰色 HueN6/	17.6	-	-	0	0		白色鉱物	
	483	堀跡2号	П	E - 15	431	須恵器	売	頸部	格子目タタキ	ナデ	灰色 HueN6/	灰色 HueN6/	-	_	_	0	0		白色鉱物	
87	484	堀跡2号	_	Е-	_	須恵器	売	胴部	格子目タタキ	ナデ	灰色 HueN4/1	灰色 HueN5/	_	_	_	0	0		白色鉱物	
	485	堀跡2号	П	15 E -	438	瓦質土器	変	頸部	格子目タタキ・ハケメ	ナデ	里色	黒色	_	_	_	0	0		白色鉱物	
			_	15 D -	400		\vdash	~胴部	キ・ハケメ		Hue7.5Y2/1	Hue7.5Y2/1		_		0	0			
	486	堀跡2号		14 E -	-	瓦質土器	擂鉢	口縁部		ナデ	灰色 HueN6/	灰色 HueN6/	_		_				白色鉱物	
	487	堀跡2号	-	15	677	瓦質土器	擂鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰色 HueN5/	灰色 Hue5Y5/1	-	_	-	0	0		白色鉱物	
	488	堀跡2号	II	E - 14	古道硬化面上	瓦質土器	擂鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰黄色 Hue2.5Y6/2	灰黄色 Hue2.5Y6/2	32.7	-	-	0	0		白色鉱物	
	489	堀跡2号	П	E - 14	古道硬化面上 421	瓦質土器	擂鉢	胴部	ナデ	ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	490	堀跡2号	-	D- 14	底面落ち込み	瓦質土器	擂鉢	胴部 ~底部	ナデ	ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/4	浅黄橙色 Huel0YR8/4	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	491	堀跡2号	-	E - 15	-	瓦質土器	擂鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/3	にぶい褐色 Hue7.5YR6/3	-	-	-	0	0		赤色鉱物	
	492	堀跡2号	I · II	D- 14 E	436 · 674	瓦質土器	擂鉢	口縁 ~底部	ナデ	ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/4	淡黄色 Hue2.5Y8/4	31.0	16.0	12.1	0	0		白色鉱物	
				-15 D-			\vdash	/EW HIP							-					
	493	堀跡2号	Ι · Π	14 E - 14 E -	721 · 715	瓦質土器	擂鉢	口縁 ~底部	ナデ	ハケメ	黄橙色 Huel0YR8/6	橙色 Hue7.5YR7/8	26.4	13.2	12.8	0	0		白色鉱物	
	40.	High of		15 E -	gån till tide	ngripa i nn	495.61	ghe den	,	,	浅黄橙色	灰白色		15.		_	_		44	
	494	堀跡2号	_	15 E -	底面溝	瓦質土器	擂鉢	底部胴部	ナデ	ナデ	Hue10YR8/3 明黄褐色	Hue2.5Y8/2 明黄褐色	_	15.0	-	0	0		白色鉱物	
88	495	堀跡2号	埋土	15	一括	瓦質土器	鉢	- 底部	ナデ	ナデ	Hue10YR7/6	Hue2.5Y7/6	-	18.0	-	0	0		赤色鉱物	煤付着
	496	堀跡2号	I	D- 14 E -15	930	瓦質土器	火鉢	口縁部	ナデ	ナデ	オリーブ黒色 Hue7.5Y3/1	オリーブ黒色 Hue7.5Y3/1	34.0	-	-	0	0		白色鉱物	
	497	堀跡2号	-	E - 15	697	瓦質土器	火鉢	胴部	ミガキ	ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	灰白色 Hue2.5Y8/2	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	498	堀跡2号	1	D- 14 E	_	瓦質土器	茶釜	口縁	ナデ	ナデ・ハケメ	灰オリーブ色	灰色Hue5Y4/2	13.0	_	_	0	0		白色鉱物	
				-15 D-				~胴部			Hue5Y5/3 灰白色	灰白色								
	499	堀跡2号	-	14 D-	底面	瓦	丸瓦 坏·	-	ナデ	布目痕・ナデ	Hue5Y7/2 橙色	Hue5Y7/2 にぶい黄橙色	_	-	-	0	0		白色鉱物	
89	500	溝状遺構 2号	-	15	-	土師器	Ш	底部	ナデ	ナデ	Hue5YR7/6	Hue10YR7/4	-	10.4	-	0	0		白色鉱物	糸切り
	501	溝状遺構 2号	-	D- 15	-	土師器	坏· 皿	底部	ナデ	ナデ	黄褐色 Hue2.5Y5/3	黄褐色 Hue2.5Y5/3	-	6.6	-	0	0		赤色鉱物	糸切り
	502	溝状遺構 5号	-	E - 24	一括	土師器	坏· 皿	口縁 ~胴部	ナデ	ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	-	-	-	0	0		白色鉱物	
92	505	溝状遺構 8号	ı	D- 22	一括	瓦質土器	擂鉢	口縁部	ハケメ・ナデ	ハケメ	灰色 Hue5Y5/1	灰黄色 Hue2.5Y7/2	27.0	-	-	0	0	L	白色鉱物	
	506	溝状遺構 8号	-	D- 22	-	瓦質土器	甕· 壺	胴部	ハケメ・ナデ	ハケメ	灰色 Hue7.5Y6/1	灰色 Hue7.5Y5/1	-	-	-	0	0		白色・黒 色鉱物	
П	508	溝状遺構 7号	II 上a	C – 23	一括	土師器	ш	口縁 ~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	7.5	4. 6	1.6	0	0		赤色鉱物	糸切り
93	510	溝状遺構	-	C-	一括	瓦質土器	擂鉢	胴部	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	_	-	0	0		白色鉱物	糸切り
ш	/	7号		23				veP		L	Hue10YR7/4	Hue10YR7/4								/

第8表 中世の遺構内出土遺物観察表(2)陶磁器

2D C	110	十 に ツ 返	1441 117		一年ルンフィゴ	~ (_ /	Lm) hyy til	4									
挿図 番号	掲載 番号	遺構	層	出土地点	取上 番号	種別	器種	分類	部位	胎土色調	法:	量(cn 底径	_	釉薬種類	色調	部位	備考
	394	造成面焼土域	П	D-5	345	青磁	碗	龍泉碗 Ⅱ – b類	口縁~底部	灰色 Hue5 Y 6/1	16.2	5.4	6.8	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5 Y 6/2	畳付~高台内露胎	
62	395	造成面焼土域	-	D-5	-	青磁	碗	龍泉碗 Ⅱ-b類	口縁~底部	灰白色 Hue5Y7/1	16.7	5.2	6.5	青磁釉	明オリ-ブ灰色 Hue5G Y 7/1	畳付~高台内露胎	
	396	落ち込み	П	D-5	-	白磁	碗	碗V類	口縁部	灰白色 Hue2.5 Y 8/2	14.0	-	-	透明釉	浅黄色 Hue2.5 Y 7/3	残存部全面施釉	
66	418	土坑 16号	-	D-5	-	白磁	碗	碗IV類?	胴部	灰白色 Hue7.5 Y 7/1	-	-	-	透明釉	灰色 Hue7.5 Y 6/1	残存部全面施釉	
00	419	土坑16号	-	D-5	-	白磁	碗	碗IV類?	胴部	灰白色 Hue7.5 Y 8/1	-	-	-	透明釉	灰白色 Huel0Y7/1	残存部全面施釉	
	432	竪穴建物跡 3号	-	-	ı	白磁	Ш	皿IX類	口縁部	灰白色 Hue5 Y 8/1	11.2	-	-	透明釉	明オリーブ灰色 Hue5G Y7/1	残存部全面施釉	
72	433	竪穴建物跡 3号	-	C-15	-	青磁	碗	上田B類	口縁部	橙色 Hue5YR6/6	-	-	-	青磁釉	にぶい黄橙色 HuelOY R7/3	残存部全面施釉	
	434	竪穴建物跡 3号	-	C-15	-	青磁	碗	龍泉碗 Ⅱ – b類	口縁部	灰白色 Hue5 Y 7/1	-	-	-	青磁釉	灰色 Hue7.5 Y 7/1	残存部全面施釉	
74	441	竪穴建物跡 5号	-	-	-	青磁	碗	龍泉碗 Ⅱ – b 類	口縁~胴部	灰オリーブ色 Hue5 Y 6/2	16.0	-	-	青磁釉	灰オリ-ブ色 Hue7.5 Y 6/2	残存部全面施釉	
74	442	竪穴建物跡 5号	-	C-16	-	青磁	碗	龍泉碗 Ⅱ – b類	口縁部	灰黄色 Hue2.5 Y 7/2	16.0	-	-	青磁釉	オリ-ブ黄色 Hue5Y6/3	残存部全面施釉	
75	447	竪穴状遺構	-	E-15	-	中国陶器	水注	-	胴部	灰白色 Hue5 Y 8/1	-	-	-	灰緑釉	暗オリーブ色 Hue5Y4/4	内面露胎	
79	450	柱穴跡2号	-	E-14	P - 116	青磁	碗	龍泉碗 Ⅱ – b 類	胴部	灰白色 Hue7.5 Y 7/1	-	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5 Y 5/2	残存部全面施釉	
81	454	土抗21号	-	D-12	一括	青磁	碗	-	底部	灰白色 Hue2.5 Y / 2	-	4.6	-	青磁釉	明オリ-ブ灰色 Hue2.5G Y7/1	畳付~高台内露胎	
01	455	土抗21号	-	D-12	一括	青磁	坏	龍泉窯系	口緑~胴部	灰白色 Hue5 Y 8/1	-	-	-	青磁釉	オリ-ブ灰色 Hue2.5G Y 6/2	残存部全面施釉	
82	456	大型土抗状 遺構1号	-	D-12	(3)	白磁	碗	碗V類	口縁部	灰白色 Hue5 Y 7/1	18.0	-	-	透明釉	灰白色 Hue7.5 Y 7/2	残存部全面施釉	
83	461	大型土抗状 遺構3号	П	D·E -	-	国産陶器	甕	-	胴部	灰黄褐色 Hue 1 0 YR 5 / 2	-	-	-	無釉	灰黄褐色 HuelOYR5/2	-	
	465	堀跡1号	П	D-14	411	青磁	碗	龍泉碗 Ⅱ – b類	口緑~胴部	灰白色 Hue5 Y 7/1	-	-	-	青磁釉	オリーブ色 Hue5Y5/4	残存部全面施釉	
85	466	堀跡1号	П	D-14	-	青磁	碗	龍泉碗 Ⅱ-b類	胴部〜底 部	灰白色 Hue5 Y7/1	-	5	-	青磁釉	灰オリ-ブ色 Hue7.5 Y 5/3	残存部全面施釉	
00	467	堀跡1号	П	D-14	-	青磁	碗	-	底部	灰白色 Hue2.5Y7/	-	3.7	-	青磁釉	灰白色 Hue7.5 Y 7/1	残存部全面施釉	
	468	堀跡1号	П	D-14	-	中国陶器	天目碗	-	口縁部	浅黄色 Hue2.5 Y 7/3	-	-	-	鉄釉	暗褐色 HuelOY R3/3	残存部全面施釉	
	476	堀跡2号	-	D-14	底面	青磁	碗	龍泉碗 Ⅱ – b類	口縁部	灰白色 Hue7.5 Y 7/1	-	-	-	青磁釉	灰オリ-ブ色 Hue7.5Y4/2	残存部全面施釉	
	477	堀跡2号	-	E-15	底面722	青磁	碗	明代以降	底部	にぶい橙色 Hue7.5Y R6/4	-	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/3	内面見込み輪状掻き取 り、高台内露胎	高台打ち欠き
	478	堀跡2号	-	E-14	716	青磁	Ш	同安皿 I - la類	底部	灰白色 Hue5Y7/1	-	5	-	青磁釉	灰色 Hue7.5 Y 6/1	胴部下位~底部露胎	
87	479	堀跡2号	П	E-15	-	白磁	Ш	森田D群	底部	灰白色 Hue2.5 Y 8/2	-	4.2	-	透明釉	灰白色 Hue2.5 Y 8/2	腰部~高台内面露胎	
	480	堀跡2号	-	E-15	679	青花	碗	小野碗B群	底部	浅黄色 Hue2.5 Y 7/3	-	5.6	-	透明釉	灰白色 Hue5Y7/2	畳付~高台内露胎	璋州窯系
	481	堀跡2号	底面	D-14 E-14 E-15	底面溝	中国陶器	売・壺	-	胴部	橙色 Hue7.5YR6/6	-	-	-	無釉	橙色 Hue7.5 Y 6/6	=	
92	503	溝状遺構5号	-	D - 23	一括	青磁	碗	上田D類?	底部	淡黄色 Hue2.5 Y 8/3	-	6.0	_	青磁釉	オリープ灰色 Huel0Y4/2	畳付~高台内露胎	
	504	溝状遺構5号	-	D - 23	一括	青磁	碗	上田D類?	胴部~底 部	灰白色 Hue5Y7/1	-	6.4	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5 Y 6/2	畳付~高台内露胎	
93	507	溝状遺構 9 号	-	B-25	一括	白磁	碗	碗V類	胴部	灰白色 Hue5Y7/1	-	-	-	透明釉	灰白色 Hue7.5 Y 7/1	残存部全面施釉	
33	509	溝状遺構7号	I下a	C-23	一括	白磁	Ш	皿IX類	口縁部	灰白色 Hue5Y8/2	-	-	-	透明釉	灰白色 Huel0Y8/1	残存部全面施釉	

第9表 中世の遺構内出土遺物観察表(3)滑石製品

挿図 番号	掲載 番号	遺構	屋	出土地点	取上	種別	器種	部位	色調	法	量(cn	1)	備考
番号	番号	20. 149	res	地点	番号	任生かり	60°128.	mpiw.	巴阿	口径	底径	器高	7Ht 45
62	398	柱穴	-	D-4	-	滑石製品	石鍋	胴部	灰白色Huel0Y7/1	-	-	-	穿孔1ヶ所
77	448	掘立柱建物跡2号	-	E-15	-	滑石製品	石鍋	口縁部	灰白色Huel0Y7/1	19.8	-	_	

第10表 中世の遺構内出土遺物観察表(4)土製品

Į.	章図 音号	掲載番号	遺構	層	出土地点	取上	種別	器種	色調	法	量(cr	n)		胎	土		備考
潘	子号	物拟雏分	783 179	/87	TIT TEN	番号	1里.60	布产1里	E-, (vi)	長さ	幅	穿孔	石英	長石	角閃	他	188 45
	70	425	竪穴建物跡 2号	I	C-15	-	土製品	土錘	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	3.7	1.4	0.6	0	0			
	74	440	竪穴建物跡 5号	-	C-16	-	土製品	羽口	にぶい黄橙色 10YR7/2	-	-	-	0	0		白色 鉱物	

第11表 中世の遺構内出土遺物観察表(5)

וילל	120 7-12		1上退彻既示仪 1	(0)							
挿図 番号	掲載 番号	出土地点	遺構	取上番号	種別	器種	長さ (cm)	ФĦ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
	399			-	鉄製品	釘	3.8	0.1	0.1	3.13	
	400			-	鉄製品	釘	(4.4)	(0.9)	0.9	3.03	
	401			-	鉄製品	釘	4.2	0.7	0.7	2.03	
	402			-	鉄製品	釘	(3.8)	(0.5)	0.6	1.30	
	403			-	鉄製品	釘	3.2	0.1	0.2	1.61	
	404			-	鉄製品	釘	(4.50)	(0.7)	0.4	2.19	
65	405	D-5	土抗 9 号	-	鉄製品	釘	(4.1)	(0.7)	0.7	2.40	
65	406	D-5	11019 9	一括	鉄製品	釘	3.0	0.6	0.4	1.57	
	407			-	鉄製品	釘	3.2	0.2	0.2	0.99	
	408			-	鉄製品	釘	2.5	0.2	0.1	2.06	
	409			一括	鉄製品	釘	3.1	0.1	-	2.01	
	410			-	鉄製品	釘	2.5	0.2	0.2	1.90	
	411			-	鉄製品	釘	3.9	0.8	0.6	2.64	
	412			-	鉄製品	釘	(3.9)	(0.6)	(0.9)	1.94	
70	426	C-16	竪穴建物跡2号	一括	鉄製品	釘?	4.1	0.9	0.7	5.25	
72	436	C-14	竪穴建物跡3号	一括	鉄製品	釘?	4.0	1.3	0.5	5.74	
80	453	-	土抗18号	埋土	鉄製品	鉄滓	6.0	2.2	1.4	26.13	

第12表 中世の遺構内出土遺物観察表(6)木製品

挿図 番号	掲載 番号	出土地点	遺構	取上番号	種別	器種		法量 (cm)		樹種	備考
番号	番号	штивж	755 179	収上留り	1里力リ	60*198	長さ	幅	厚さ	12/1/128	788 45
	511				10	杭	14.0	a:1.2	a:1.2	-	
	512				23	杭	13.9	a:1.4 b:1.8 c:0.8	a:1.2 b:1.3 c:0.8	-	
	513]			22	杭	14.8	a:1.6 b:1.1	a:1.7 b:0.4	-	
97	514	杭列跡	低IIc·d	D-22	3	杭	21.3	a:2.3 b:1.2	a:2.0 b:0.9	マツ属複維管東亜属	
97	515	かしかりまか	Frit. q	D-22	5	杭	21.6	a:1.9 b:1.7	a:1.8 b:1.4	-	
	516]			8	杭	30.2	a:4.6 b:4.5 c:2.5	a:4.6 b:4.0 c:2.2	エゴノキ属	
	517				7	杭	28.0	a:2.5 b:2.6 c:1.8	a:2.7 b:2.2 c:1.6	-	
	518				4	杭	30.8	a:2.3 b:2.4 c:1.4	a:2.5 b:2.8 c:1.7	マツ属複維管東亜属	
	519				21	杭	21.6	a:1.9 b:1.1	a:2.0 b:1.0	-	
	520				6	杭	23.5	a:1.9 b:1.8 c:1.2	a:2.0 b:1.6 c:0.8	-	
	521				12	杭	23.7	a:3.2 b:3.1	a:3.0 b:2.0	ハイノキ属ハイノキ節	
98	522	杭列跡	低IIc·d	D-22	15	杭	21.8	a.3.3 b.2.2	a.2.9 b.2.4	-	
90	523	かしかりか	Fric. a	D-22	20	杭	33.2	a:3.1 b:2.8 c:1.6	a:3.5 b:2.6 c:1.6	シキミ	
	524				9	杭	27.5	a:1.9 b:1.4	a:1.9 b:0.9	-	
	525				2	杭	29.5	a:2.0 b:1.8	a:2.1 b:1.4	-	
	526				14	杭	33.4	a.2.2 b.2.0	a.2.1 b.2.2	-	
100	527	土抗状遺構2号	低Ⅱ	D-20	一括	板状木製品	14.7	a.2.6 b.4.7 c.3.3	a.0.8 b.1.0 c.0.9	-	
100	528	土抗状遺構2号	低Ⅱ	D-20	一括	板状木製品	12.6	a. (1.1) b.3.7 c.3.8	a. (0.5) b.0.5 c.0.6	-	

第13表 中世の遺物観察表(1) 木製品

-		世の夏物館	宗衣()	/ 个装品							
挿図 番号	掲載 番号	層	出土地点	取上番号	種別	器種	長さ	法量 (cm) 幅	厚さ	樹種	備考
5	529	低II d	D-20	_	木製品	杭	17.6	a.1.7 b.1.6 c.1.2	a.1.6 b.1.6 c.0.7	_	
	530	_	_	1402	木製品	杭	22.6	a.2.7 b.2.4	a.2.7 b. (1.8)	_	
	531	_	-	1420	木製品	杭	39.0	a.3.0 b.2.8	a.2.6 b.1.4	=	
	532	低Ⅱb	D-20	-	木製品	杭	46.2	a.2.9 b.3.1 2.3	a.2.6 b.2.9 c.2.3	-	
	533	低II d	D-20	-	木製品	杭	28.7	a.2.5 b.1.7 c.1.7	a.2.1 b.2.1 c.1.6	-	
103	534	低II d	D-20	-	木製品	杭	28.2	a.2.8 b.2.8 c.2.5	a.2.4 b.2.6 c.1.8	-	
	535	低Ⅱc	D-21	-	木製品	杭	19.6	a.1.8 b.1.9 c.1.7	a.1.8 b. (1.5) c (0.8)	-	
	536	低Ⅱc	D-20	-	木製品	杭	7.9	a.2.1 b.2.0	a.1.9 b.1.6	-	
	537	低Ⅱc	D-21	-	木製品	杭	8.0	a.1.7 b.1.7	a.1.7 b.1.4	=	
	538	低Ⅱc	D-20	-	木製品	杭	7.3	2.1	1.9	=	
	539	低Ⅱc	C-20	-	木製品	碗	(器高) 1.9	(底径) 7.8	-	-	
	540	低Ⅱc	D-20	-	木製品	蓋	7.5	6.1	最大1.7 最小1.3	-	
	541	低Ⅱc	D-20	-	木製品	棒状木製品	10.4	a.1.4 b.3.2 c.1.1	a.0.5 b.0.8 c.0.4	-	
[542	_	-	1371	木製品	棒状木製品	10.0	a.5.0 b.3.2	a.1.0 b.0.7	-	
	543	低Ⅱc	D-21	-	木製品	棒状木製品	3.2	2.2	2.7	-	
	544	低Ⅱc	D-21	-	木製品	板状木製品	5.2	3.5	1.8	-	
	545	低Ⅱc	D-20		木製品	板状木製品	5.6	a.2.3 b.1.3	-	-	
	546	低Ⅱc	D-20	一括	木製品	板状木製品	6.6	3.0	0.9	-	
	547	低Ⅱc	D-20	-	木製品	板状木製品	8.0	3.4	-	-	
	548	低Ⅱc	D-20	-	木製品	板状木製品	20.8	a.1.2 b.1.2 c.1.2	最大1.0 最小0.1	-	
	549	低Ⅱc	D-20	-	木製品	板状木製品	3.8	1.2	0.9	-	
104	550	低Ⅱc	D-20	-	木製品	板状木製品	11.3	a.0.6 b.0.6 c.0.5	最大0.5 最小0.1	=	
	551	低Ⅱc	D-20	-	木製品	板状木製品	22.6	a.3.3 b.3.4	a.0.4 b.0.5	-	
	552	低II d	D-21	-	木製品	板状木製品	19.8	a.2.9 b.2.8	a.0.5 b.0.5	-	
	553	低II d	D-21	-	木製品	板状木製品	19.5	a.2.5 b.2.5	a.0.7 b.0.8	=	
	554	-	-	1369	木製品	板状木製品	12.8	1.9	0.3	-	
	555	Πс	D-20	-	木製品	板状木製品	12.3	a.1.6 b.0.6	a.0.4 b.0.3	-	
	556	-	-	1365	木製品	板状木製品	12.3	a.2.0 b.1.5	a.0.4 b.0.4	-	
	557	低Ⅱc	D-21	-	木製品	板状木製品	5.4	1.9	0.4	=	
ı	558	低II d	D-21	-	木製品	板状木製品	6.6	2.2	0.3	-	
	559	低Ⅱc	D-20	-	木製品	板状木製品	6.1	a.1.1 b.1.6	a.0.2 b.0.2	=	
	560	低Ⅱc	D-20	-	木製品	板状木製品	8.9	a.2.8 b.3.0	a.0.4 b.0.4	-	
	561	低II d	D-21	-	木製品	板状木製品	9.1	2.8	0.5	-	
	562	П	-	1460	木製品	板状木製品	19.8	a. (-) b.3.7 c.4.1	a. (-) b.4.4 c.4.3	-	
	563	-	-	1419	木製品	板状木製品	10.0	a.6.8 b.4.4	a.1.7 b.0.9	=	
	564	-	D-20	-	木製品	板状木製品	5.3	9.6	3.7	-	
	565	П	-	1291	木製品	板状木製品	7.0	5.2	1.7	=	
	566	П	-	1289	木製品	板状木製品	8.0	a.3.8 b.3.3	a. (-) b.1.2	-	
105	567		-	1417	木製品	板状木製品	7.4	6.3	1.0	-	
105	568	П	-	1441	木製品	板状木製品	7.6	6.0	0.7	-	
	569	低II c	D-20	-	木製品	板状木製品	19.3	a.5.8 b.5.0	-	-	
	570	п	C-20	1273	木製品	杭	20.3	a.4.5 b.2.1	a.3.6 b. (3.1)	-	
	571	低Ⅱc	D-20	-	木製品	杭	17.8	a.1.9 b.2.4 c.2.5	a.1.0 b.2.4 c.2.4	-	
ı İ	572	_	-	1452	木製品	杭	17.8	a.2.5 b.2.4 c.2.1	a.1.5 b.1.4 c.0.8		

第14表 中世の遺物観察表(2)-1 土師器・須恵器他

	4表	TEV	ノ思が	了觀察表	(2) -	1	工即态	・須思器化			707								
挿図 番号	掲載 番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位	外面	i調整 内面	外面	内面	法 口径	量(cm 底径	1) 器高	石英	長石	胎土 角閃	他	備考
	574	D-5	П	382	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	橙色 Hue7.5YR7/6	13.3	10.9	2.8	0	0		茶色·白 色鉱物	糸切り
	575	D – 5d	I	991 · 992	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	13.2	11.0	2.7	0	0		茶色·白 色鉱物	糸切り
	576	D-5	П	355	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	13.0	9.8	3.0	0	0		白色鉱物	糸切り
	577	D-5c	I	1263 · 499	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3	11.7	8.1	3.0	0	0	0	茶色·白 色鉱物	糸切り
	578	D-5	П	366	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	橙色 Hue7.5YR6/6	11.4	8.4	2.6	0	0		茶色·白 色鉱物	糸切り
	579	D-5	II	381	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	-	9.5	-	0	0		白色鉱物	糸切り
	580	D - 5b	I	338	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 Huel0YR5/1	褐灰色 Huel0YR5/1	-	9.4	-	0	0		茶色·白 色鉱物	内全体と外の 一部が黒色化
	581	D-5	II	311	土師器	坏	胴部~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	-	9.0	-	0	0		白色鉱物	糸切り
	582	D – 5b	I	1126	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	-	7.6	-	0	0		白色鉱物	糸切り
	583	D-5c	I	463 · 938	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	-	7.4	-	0	0		白色鉱物	糸切り
	584	D-5	II	293	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	10.0	8.9	1.5	0	0		茶色·白 色鉱物	糸切り
	585	D-5	II	295	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	橙色 Hue5YR7/6	10.0	8.4	1.1	0	0		白色鉱物	糸切り
	586	D-5	II	342	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	9.4	7.7	1.7	0	0	0	茶色鉱物	糸切り
	587	D-5	II	-	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR7/6	9.4	7.4	1.5	0	0	0	茶色鉱物	糸切り
	588	D – 5d	I	1174	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色 Hue10YR6/2	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	9.2	6.5	1.7	0		0	茶色·白 色鉱物	糸切り。二次 焼成痕
	589	D – 5a	I	1045 • 1048	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/3	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	9.1	7.0	1.6	0	0	0	茶色·白 色鉱物	糸切り
	590	D-5c	I · II	529	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色 Hue10YR8/6	黄橙色 Huel0YR8/6	11.0	8.4	1.6					糸切り
	591	D-5c	I	-	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	にぶい橙色 Hue5YR7/4	9.1	7.0	1.3	0	0	0	茶色鉱物	糸切。内面丹 途
	592	D-5	II	-	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue2.5YR6/8	9.0	6.0	1.5	0	0	0	茶色鉱物	糸切り
	593	D-5	II	-	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	8.9	7.6	1.0	0	0	0		糸切り。全体 的にやや摩滅
	594	D-5c	I	808	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	にぶい黄橙色 Huel0YR6/4	8.8	7.5	1.6	0	0	0		糸切り。二次 焼成可能性あ
106	595	D-5	П	310	土師器	ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	8.6	7.8	1.5	0			茶色鉱物	糸切り
	596	D-5	П	374	土師器	ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR7/6 明黄褐色	Hue7.5YR7/6 浅黄橙色	8.6	7.0	1.3	0		0	茶色鉱物	糸切り。煤付
	597	D-5	п	346	土師器	ш	完形	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR7/6 橙色	Hue7.5YR8/6 橙色	8.6	7.8	1.1	0		0	茶色・白	着。
	598	D-5	П	-	土師器	ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR6/6 にぶい黄橙色	Hue7.5YR6/6 橙色	8.6	7.6	0.8	0	0	0	色鉱物	糸切り
	599	D-5	П	_	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR7/4 黄灰色	Hue7.5YR7/6 灰黄色 Hue2.5Y7/2	8.6	6.0	1.6	0	0	0	茶色·白 色鉱物	糸切り。須恵 器質で硬質
	600	D – 5c	I	507	土師器	ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue2.5Y5/1	にぶい橙色	8.6	6.6	1.4	0	0	0	茶色·白 色鉱物·	糸切り
	601	D-5	П	353	土師器	ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR6/3 にぶい黄橙色	Hue7.5YR7/4 にぶい黄橙色	8.3	6.0	1.4	0	0	0	金雲母 茶色·白	糸切り
	602	D-5c	I	-	土師器	ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR7/3 灰黄褐色	Hue10YR7/3 にぶい黄橙色	8.0	5.7	1.4	0	0	0	色鉱物	糸切り。二次
	603	D-5	_	_	土師器	ı	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR5/2 橙色	Hue10YR6/3 にぶい橙色	7.6	5.4	1.3	0	0	0	白色鉱物	焼成糸切り
	604	D-5	П	320	土師器	ш	完形	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR7/6	Hue7.5YR7/4 橙色	7.4	6.1	1.4	0		0	茶色・白	糸切り。煤付
	605	D-5	II	328	土師器	Ш	口縁~底部	回転ヘラケズ リ→回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR6/4 にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	Hue7.5YR7/6 にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	7.4	5.0	2.4	0	0	0	色鉱物 茶色·白 色鉱物	差 糸切り
	606	D-5	П	321	土師器	Ш	胴部~底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 Huel0YR8/3	橙色 Hue2.5YR7/6	_	7.4	_	0	0	0	巴亚(初	糸切り
	607	D-5	П	361	土師器	小壺	胴部~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	橙色 Hue7.5YR7/6	_	4.0	_	0	0		茶色·白 色鉱物	糸切り
	608	D-5	П	-	瓦質土器	捏鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ	灰色 Hue7.5Y5/1	灰色 Hue7.5Y5/1	38.4	_	_	0	0		白色鉱物	東播系
	609	D - 5b	I	1137 · 1138	瓦質土器	捏鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ	灰色 HueN4/	灰色 HueN6/	27.6	-	-	0	0		白色鉱物	束播系
	610	D-5	II	-	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰白色 Hue7.5Y7/1	灰白色 Hue7.5Y7/1	-	-	-	0	0		白色鉱物	束播系
	611	D-5 · D -5a	I • II	457 · 1147	瓦質土器	捏鉢	底部	ナデ	ナデ	灰黄色 Hue2.5Y6/2	黄灰色 Hue2.5Y6/1	-	9.0	-	0	0		白色鉱物	束播系
	612	D-5b	I	261	瓦質土器	捏鉢	底部	ナデ	ナデ	灰色 Hue7.5Y6/1	灰色 Hue7.5Y6/1	-	9.0	-	0	0		白色鉱物	束播系
	613	D-5	-	-	瓦質土器	捏鉢	底部	ナデ	ナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y6/1	-	10.0	-	0	0		白色鉱物	束播系
	614	D-5b	I	1075	瓦質土器	捏鉢	底部	ナデ	ナデ	灰白色 Hue5Y7/1	灰色 Hue5Y5/1	-	8.0	-	0	0		白色鉱物	束播系
	615	D-5 · D -5c	I • II	638	瓦質土器	捏鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ→ハケメ	灰色 HueN4/	灰色 HueN4/	34.6	-	-	0	0		白色·黒 色鉱物	樺万丈系
	616	D – 5a	I	1051	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	黄灰色 Hue2.5Y5/1	黄灰色 Hue2.5Y5/1	27.6	-	-	0	0		白色·黒 色鉱物	樺万丈系
	617	D-5	П	288	瓦質土器	捏鉢	底部	ナデ→ハケメ	ナデ→ハケメ	灰白色 Hue5Y7/1	灰白色 Hue5Y7/1	-	12.0	-	0	0		白色·黒 色鉱物	樺万丈系
	618	D-5d	I	1001	瓦質土器	捏鉢	口縁~胴部	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3	24.9	-	-	0	0		白色·黑 色鉱物	樺万丈系
107	619	D-5	Пα	-	須恵器	捏鉢	底部	綾杉状タタキ 痕	ナデ→ハケメ	灰色 HueN6/	灰色 HueN6/	-	9.0	_	0	0		白色·黒 色鉱物	樺万丈系
	620	D-5	П	274	須恵器	捏鉢	底部	ナデ	ナデ	灰黄色 Hue2.5Y6/2	灰色 Hue5Y4/1	-	8.8	_	0	0		白色鉱物	樺万丈系
	621	D-5	II	333	瓦質土器	擂鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	27.4	-	-	0	0		白色鉱物	
							1	l		110001100/0	110001100/0								

第14表 中世の遺物観察表(2)-2 土師器・須恵器他

		中世位	ノ退物	加観察表	(2) -		土師器	・須恵器化	9										
挿図 番号	掲載 番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位	器面 外面	i調整 内面	外面 外面	内面	上 口径	量(cm 底径	器高	石英	長石	胎土 角閃	他	備考
	622	D-5 · D-5a	Ι · Π	-	瓦質土器	擂鉢	底部	ナデ	ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	-	15.8	-	0	0		白色鉱物	
	623	D-5· D-5b	I · II	266	瓦質土器	茶釜	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色 Hue2.5Y3/2	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	18.5	-	-	0	0			
107	624	D-5	II	337	瓦	平瓦	-	縄状タタキ痕	布目圧痕	灰色 Hue7.5Y6/1	灰色 Hue7.5Y6/1	-	-	_	0	0		白色鉱物	
	625	D-5	П	-	瓦	平瓦	-	縄状タタキ痕	布目圧痕	浅黄色	浅黄色 Hue2.5Y7/3	_	_	_	0	0		白色鉱物	
	781	E-14	_	111	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue2.5Y7/3 橙色	橙色	14.0	9.0	3.3	0	0			
	782	D-13	I	_	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR7/6 明黄褐色	Hue7.5YR7/6 明黄褐色	13.6	10.0	2.7	0	0		茶色・白	
				1100						Hue10YR7/6 橙色	Hue10YR7/6 橙色			_				色鉱物茶色:白	é im h
	783	E-13	Πa	1123	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR6/6 にぶい橙色	Hue7.5YR6/6 にぶい黄橙色	11.8	9.1	2.6	0	0		色鉱物 茶色·白	糸切り
	784	D-13	I	-	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR7/4 橙色	Hue10YR6/4 橙色	11.2	7.0	3.4	0	0		色鉱物 茶色·白	内面に煤付着
	785	D-13	I	-	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue5YR6/6 浅黄橙色	Hue7.5YR7/6 浅黄橙色	11.0	7.0	3.4	0	0		色鉱物	糸切り
	786	D · E – 13	-	-	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR8/4	Hue10YR8/4	-	10.5	-	0	0		白色鉱物	糸切り。ヘラ 痕あり
	787	D · E – 13	-	-	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	-	10.0	-	0	0		白色鉱物	
	788	E-13	Πb	1119	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 Hue2.5Y5/1	黄灰色 Hue2.5Y5/1	-	9.0	-	0	0		茶色・白 色鉱物	
	789	D-13	Πb	1126	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	明黄褐色 Hue10YR7/6	10.0	8.4	1.3	0	0		茶色・白 色鉱物	糸切り
114	790	D · E – 13	-	-	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色 Hue7.5YR7/8	黄橙色 Hue7.5YR7/8	9.7	8.0	1.6	0	0		白色鉱物	糸切り
	791	D-15	П	1316	土師器	III	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR7/6	9.4	7.0	1.5	0	0		茶色鉱物	糸切り
	792	E-13	Πb	1120	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	橙色 Hue5YR6/6	8.8	6.8	1.3	0	0	0		糸切り
	793	E-12	Πb	1144	土師器	III	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色 Hue10YR5/2	灰黄褐色 Hue10YR5/2	8.8	7.0	1.3	0			茶色·白 色鉱物	
	794	D-13	Па	1113	土師器	ııı	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色 Hue5YR7/6	8.7	7.0	1.8	0	0		C360.100	糸切り
	795	E-12	II a ·	1147 ·	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue5YR7/6 橙色	橙色	8.0	6.8	1.5	0	0	0		糸切り
	796	E-12	ПР	1148	土師器		口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR7/6 橙色	Hue7.5YR7/6 橙色	8.0	8.1	1.0	0	0	0	茶色鉱物	糸切り
	797	D-14	I	-	土師器		口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR6/6 にぶい黄橙色	Hue5YR7/6 にぶい黄橙色		5.6		0		0	木已50.40	糸切り
						-				Hue10YR6/4 橙色	Hue10YR6/4 橙色	7.1		1.5		_			
	798	E-13	I	-	土師器		口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR7/6 褐灰色	Hue7.5YR7/6 褐灰色	6.0	3.5	1.8	0	0	0		糸切り 糸切り。外底
	799	C-15	I	-	土師器	Ш	底部	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR4/1	Hue10YR5/1	-	5.6	-	0	0			まで煤付着。
	800	D · E – 13	Ι	-	須恵器	売	口縁部	格子目タタキ痕	ナデ・ハケメ	灰色 HueN5/	灰色 HueN5/	27.0	-	-	0	0		白色鉱物	
	801	E-12·13	II · II a	1152	須恵器	売	口縁部	格子目タタキ 痕	ナデ	灰色 HueN5/	灰色 HueN5/	35.0	-	-	0	0		白色鉱物	
115	802	E-13	I	-	須恵器	売	口縁部	綾杉状タタキ 痕	ナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y6/1	29.2	-	-	0	0		白色鉱物	
113	803	D-13	Ι	-	須恵器	売	胴部	綾杉状タタキ 痕	ナデ	灰色 Hue7.5Y5/1	灰色 Hue7.5Y4/1	-	-	-	0	0			
	804	C-15	Ι	-	須恵器	甕	胴部	綾杉状タタキ 痕	ナデ	灰色 HueN4/	灰色 HueN5/	-	-	-	0	0		白色鉱物	
	805	D-13	Ι	-	須恵器	甕	底部	綾杉状タタキ 痕	ナデ	灰黄色 Hue2.5Y7/2	黄灰色 Hue2.5Y6/1	-	16.2	-	0	0		白色鉱物	
	806	D-12	I	-	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰白色 Hue5Y7/1	灰白色 Hue5Y7/1	-	-	-	0	0			
	807	D-15	I	-	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰黄色 Hue2.5Y6/2	灰黄色 Hue2.5Y6/2	22.8	-	-	0	0		白色鉱物	
	808	C-14	I	-	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色 Hue2.5Y3/2	灰色 Hue5Y5/1	30.0	-	-	0	0		白色鉱物	
	809	D-13	I	-	須恵器	捏鉢	胴部~底部	ナデ	ナデ	灰色 HueN5/	灰色 HueN5/	-	10.6	_	0	0			
	810	C - 15	I	_	須恵器	捏鉢	底部	ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色	_	8.2	_	0	0		白色鉱物	
116	811	D-13	I	_	瓦質土器	羽釜	胴部	ナデ	ナデ	Hue2.5Y6/1 にぶい黄色	Hue2.5Y6/1 にぶい黄色	_	_	_	0	0		白色鉱物	
	812	E-15	I	_	瓦質土器	火鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ	Hue2.5Y6/4 黄灰色	Hue2.5Y6/4 灰黄色	35.3	_	 	0	0			花文:スタン
				_	瓦質土器	火鉢?		ナデ	ナデ	Hue2.5Y6/1 にぶい黄褐色	Hue2.5Y6/2 にぶい黄橙色	55.5	_	_		0		白色鉱物	プ文
	813	E-14	I				胴部			Hue10YR5/3 灰白色	Hue10YR6/4 灰色				0			口巴鉱物	花文:スタン
	814	D-15	I	-	瓦質土器	火鉢	口縁部	ナデ	ナデ	Hue5Y7/1 黄灰色	Hue5Y5/1 黄灰色	_	-	-	0	0			プ文 格子文:スタ
	815	D-12	I	-	瓦質土器	火鉢	口縁部	ナデ	ナデ	Hue2.5Y4/1 黒褐色	Hue2.5Y4/1	_	-	_	0	0		白色鉱物	ンプ文
	816	E-13	Ι	-	瓦質土器	鉢	底部	ナデ	ナデ	8Hue7.5Y2/2	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	-	14.2	-	0	0		白色·黑 色鉱物	内外煤付着
	875	B-23	I	一括	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	16.4	11.6	3.7	0	0			糸切り
	876	D-20 D-21	低IIc	一括	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	12.0	8.0	4.1	0	0			糸切り
	877	D-22	I	一括	土師器	坏	口縁~底部	回転ヘラケズ リ → 回転ナデ	回転ヘラケズ リ → 回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	10.5	7.0	3.3	0	0			糸切り
110	878	B – 19 · 20	-	-	土師器	坏	口縁~底部	回転ヘラケズ リ → 回転ナデ	回転ヘラケズ リ → 回転ナデ	橙色 Hue5YR7/6	橙色 Hue5YR7/6	10.0	6.6	2.6	0	0			糸切り
119	879	D-22	ΠЬ	一括	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue5YR7/4	にぶい橙色 Hue5YR7/4	11.6	7.8	2.7	0	0			糸切り。煤付 着
	880	D-21	低IIc	一括	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	11.2	8.5	1.6	0	0			糸切り
	881	D-21	低IIc	一括	土師器	ш	口縁~底部	回転ヘラケズリ・ 回転ナデ	回転ヘラケズ リ・回転ナデ	黒褐色 Huel0YR3/1	黒褐色 Huel0YR3/1	8.8	7.0	2.2	0	0		茶色鉱物	糸切り。煤付 着
	882	D-20	低IIc	一括	土師器	ııı	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	8.7	6.5	1.7	0	0	0	茶色鉱物	糸切り
							l	<u> </u>		11uc1.J1R0/4	11uC/.D1R0/4	I				<u> </u>		<u> </u>	

第14表 中世の遺物観察表(2)-3 土師器・須恵器他

	4表			了觀察表	(2) –	.3	工即态	・須思器性	i i調整	色	学田	34-	量 (cm				胎土		T .
挿図 番号	掲載 番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位	外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	備考
	883	D-22	低II c · I c	一括	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	8.8	6.5	1.9	0	0	0	茶色鉱物	糸切り
	884	D-22	低Ⅱc ・Ib	一括	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	8.4	6.4	1.7	0	0	0	茶色・白 色鉱物	糸切り
	885	C-21 C-22	I	-	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	8.0	6.0	1.4	0	0	0	赤色鉱物	糸切り
	886	D-22	Ib· 低Ⅱc ·Ⅱd	一括	土師器	III	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	8.0	5.8	-	0	0	0	茶色・白 色鉱物	糸切り
	887	D-20	I	一括	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	8.2	6.8	1.6	0	0	0	茶色·白 色鉱物	糸切り
	888	D-21	低IId	一括	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	8.2	7.5	1.4	0	0	0	白色鉱物	糸切り
	889	B-21	低IIb	一括	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	橙色 Hue7.5YR7/6	7.6	6.0	1.4	0	0	0	茶色・白 色鉱物	糸切り
	890	D-22	II上b	一括	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色 Huel0YR5/3	灰黄色 Hue2.5Y6/2	7.4	5.5	2.1	0	0	0	茶色·白 色鉱物	糸切り
	891	C – 22	Πa	1351	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	7.2	5.4	2.1	0	0	0	茶色・白 色鉱物	糸切り
	892	D-20	低IIc	一括	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	7.0	4.7	1.8	0	0	0	茶色・白 色鉱物	糸切り
119	893	D-20	低Ⅱc	一括	土師器	III	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 Hue2.5Y7/2	灰黄色 Hue2.5Y7/2	7.0	4.8	1.8	0	0	0	茶色・白 色鉱物	糸切り
	894	D-20	低II c · d	一括	土師器	Ш	口縁~底部	回転ヘラケズ リ・回転ナデ	回転ヘラケズ リ・回転ナデ	にぶい橙色 Huel0YR7/3	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	7.0	6.0	1.4	0	0	0	茶色・白 色鉱物	糸切り
	895	D-21	低IId	一括	土師器	坏	胴部~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	-	10.0	-	0	0	0	茶色・白 色鉱物	糸切り
	896	C-19	ΙΙc	-	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	明黄褐色 Hue10YR7/6	-	8.9	-	0	0	0	白色鉱物	糸切り
	897	D-22	低Ⅱc	一括	土師器	坏	胴部~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	-	7.6	-	0	0	0	茶色·白 色鉱物	糸切り
	898	D-22	II上b	一括	土師器	坏	底部	ヘラケズリ→ 回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色 Hue10YR6/2	灰黄褐色 Hue10YR6/2	-	8.2	-	0	0	0	白色鉱物	糸切り
	899	B-20	I	一括	土師器	ш	底部	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	-	7.8	-	0	0	0	白色鉱物	糸切り
	900	B-22	Πa	1337	土師器	ııı	胴部~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	-	7.8	-	0	0	0	白色鉱物	糸切り
	901	C - 23	低II a · d	一括	土師器	III	胴部~底部	回転ヘラケズ リ・回転ナデ	回転ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	橙色 Hue2.5YR6/6	-	5.6	-	0	0	0	白色鉱物	糸切り
	902	C - 22	I	-	土師器	Ш	底部	ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	橙色 Hue7.5YR7/6	_	4.7	_	0	0	0	白色鉱物	糸切り
	903	D-20	低IIc	一括	土師器	Ш	底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	_	4.5	_	0	0	0	白色鉱物	糸切り
	904	C - 20	I	-	須恵器	売	口縁部	ナデ	ナデ	灰オリーブ色 Hue5Y5/2	灰オリーブ色 Hue5Y5/2	25.1	_	_	0	0	0		
	905	D-20	低Ⅱc	一括	須恵器	売	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 Hue7.5Y7/1	灰色	_	_	_	0	0	0		
	906	D-21	低Ⅱc	一括	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黄灰色 Hue2.5Y5/1	Hue7.5Y6/1 灰色 Hue5Y5/1	20.5	_	_	0	0	0	白色·黒 色鉱物	束幡系
	907	C - 22	I	一括	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰色	灰色	25.6	_	_	0	0	0	E 367.450	束幡系
	908	C - 20	I	-	瓦質土器	捏鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ	Hue10Y6/1 灰色	Hue10Y5/1 灰色	25.2	_	_	0	0	0		束幡系
	909	D-21	低IIc	一括	須恵器	捏鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ→ハケメ	Hue7.5Y5/1 灰オリーブ色	Hue7.5Y5/1 灰オリーブ色	24.0	_	_	0	0	0	白色鉱物	樺万丈系
120	910	D-20	低Ⅱc	一括	瓦質土器	捏鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ→ハケメ	Hue5Y4/2 灰色 HueN5/	Hue5Y4/2 灰色 HueN5/	27.6	_	_	0	0	0	白色鉱物	樺万丈系
	911	D · E - 22	. I	一括	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	灰色 Hue5Y6/1	18.8	_	_	0	0	0	白色鉱物	
	912	D-20	II	一括	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ナデ	ナデ	Hue2.5Y3/1 にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	21.6	_	_	0	0	0	白色鉱物	
	913	D-20	低IIc	一括	瓦質土器	擂鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ	Hue10YR7/4 灰色 HueN6/	Hue10YR7/4 灰色 HueN6/	32.2	_	_	0	0	0	白色鉱物	
	914	D-20	低IIc	一括	瓦質土器	擂鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色	23.6	_	_	0	0	0	白色鉱物	
	915	C - 20	I	-	瓦質土器	描鉢	口縁部	ナデ	ナデ	Hue2.5Y6/1 淡黄色	Hue2.5Y6/1 淡黄色	34.8	_	_	0	0	0	白色鉱物	
	916	D - 22	I	一括	瓦質土器	擂鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ	Hue2.5Y8/4 にぶい黄橙色	Hue2.5Y8/4 にぶい黄橙色	37.0	_	_	0	0	0	白色鉱物	
	917	C - 21	I	一括	瓦質土器	擂鉢	口縁~胴部	ナデ	ナデ	Hue10YR6/3 淡黄色	Hue10YR6/3 淡黄色	-	_	_	0	0	0	白色鉱物	
	918	D-20	I	一括	瓦質土器	描鉢	胴部~底部	ナデ	ナデ	Hue2.5Y8/4 にぶい黄橙色	Hue2.5Y8/4 浅黄橙色	_	17.5	_	0	0	0	白色鉱物	
	919	D = 23	II .La	一括	瓦質土器	描鉢	胴部~底部	ナデ	ナデ	Hue10YR7/4 にぶい黄橙色	Hue10YR8/4 淡黄色	_	10.6	_	0	0	0	白色鉱物	
	920	B - 25	ПЪ	一括	瓦質土器	茶釜	罗部	ナデ	ナデ	Hue10YR7/4 橙色	Hue2.5Y8/3 浅黄色	_	-	_	0	0	0	白色・黒	
	921	C - 22	II a	1347	瓦質土器	羽釜	口縁部	ナデ	ナデ	Hue5YR6/6 にぶい黄橙色	Hue2.5Y7/4 にぶい黄色	21.4	_	_	0	0	0	色鉱物	
	921	C - 23	II 上		瓦質土器	羽釜	口縁部	ナデ	ナデ	Hue10YR6/4 にぶい黄橙色	Hue2.5Y6/3 にぶい黄橙色	21.4		_		0	0		
101	\vdash			一括						Hue10YR6/3 橙色	Hue10YR6/4 橙色				0				
121	923	B - 25	II a	一括	瓦質土器	鉢	底部	ナデ	ナデ	Hue5YR5/6	Hue2.5YR6/8	-	16.0	_	0	0	0	白色鉱物	
	924	D - 20	低IIc	一括	瓦質土器	鉢	胴部~底部	ナデ	ナデ	灰色 HueN5/ にぶい黄橙色	灰色 HueN7/ 褐灰色	-	9.0	_	0	0	0	白色鉱物 白色·黒	
	925	D-22	I	一括	瓦質土器	鉢	胴部~底部	ナデ	ナデ	Hue10YR7/4 にぶい橙色	Hue10YR5/1	-	5.7	_	0	0	0	色鉱物 白色・黒	
	926	D-21	低IIc	一括	瓦質土器	鉢	底部	ナデ	ナデ	Hue5YR6/4 褐灰色	Hue5YR6/4 橙色	_	13.6	-	0	0	0	色鉱物	-
	927	C – 19	I	-	瓦質土器	-	底部	ナデ	ナデ	Hue5YR4/1 橙色	Hue5YR6/6 橙色	-	6.8	_	0	0	0	色鉱物	
	928	C – 23	I下a	一括	焼塩土器	-	胴部	指頭圧痕	布目圧痕	恒巴 Hue7.5YR7/6 浅黄色	Hue7.5YR7/6 淡黄色	-	-	-	0	0	0	物·小礫 白色·黒	
	930	E-20	I	一括	瓦	丸瓦	-	ナデ	布目圧痕	浅黄色 Hue2.5Y7/4 灰色	恢更也 Hue2.5Y8/3 灰色	-	-	-	0	0	0	色鉱物	
	931	C-17 · 18	I	_	土製品	メンコ	-	ナデ	ナデ	Hue7.5Y6/1	Hue7.5Y6/1	3.2	3.0	0.4	0	0	0		

第14表 中世の遺物観察表(2)-4 土師器・須恵器他

挿図	掲載	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位		i調整	色			量(cm				胎土		備考
番号	番号	山土地点	/87	双工钳 5	1生力0	有产1里.	mb.lv.	外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	788 45
	995	C - 28	I	-	土師器	IIIL	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 Huel0YR8/4	黄橙色 Huel0YR8/6	7.8	6.2	1.5		0	0	茶色·白 色鉱物	糸切り
	996	B-27	Ι	-	土師器	Ш	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	6.8	5.0	1.5	0	0	0	茶色·白 色鉱物	糸切り
	997	B-27 · 28	Ι	-	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hu7.5YR6/6	-	9.0	-	0	0			糸切り
	998	C-28	Ι	-	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	-	8.4	-	0	0			糸切り
	999	C-27	Ι	-	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	明赤褐色 Hue5YR5/6	-	8.4	-	0	0			糸切り
	1000	C-28	Ι	-	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐色 Huel0YR7/6	黄橙色 Hue7.5YR7/8	-	7.8	-	0	0		茶色・白 色鉱物	糸切り
124	1001	B-28 · 29	Ι	-	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	-	8.2	-	0	0			糸切り
124	1002	B-28	-	-	土師器	坏	胴部~底部	回転ナデ	回転ナデ	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	暗灰黄色 Hue2.5Y4/2	-	7.6	-	0	0		茶色·白 色鉱物	糸切り
	1003	B-28	I	一括	土師器	IIIL	底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	-	6.8	-	0	0		茶色・白 色鉱物	糸切り
	1004	B-28 · 29	Ι	-	瓦質土器	擂鉢	口縁部	ナデ	ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3	29.6	-	-	0	0			
	1005	C-28	I	-	瓦質土器	擂鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4	-	-	-	0	0			
	1006	C-28	-	-	須恵器	甕	胴部	格子目タタキ 痕	ハケメ	灰色 Hue7.5Y4/1	灰色 Hue7.5Y6/1	-	-	-	0	0		白色・黒 色鉱物	
	1007	C-27	Ι		須恵器	甕	胴部	格子目タタキ 痕	ナデ	灰色 HueN5/	灰色 HueN6/	-	-	-	0	0		白色・黒 色鉱物	
	1012	B-27 · 28			瓦	丸瓦	-	ナデ	布目圧痕	灰色 Hue7.5Y4/1	浅黄色 Hue2.5Y7/3	-	-	-	0	0		白色・黒 色鉱物	
	1013	-	Ι	-	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	16.7	9.8	4.0	0	0		茶色·白 色鉱物	糸切り
	1014	-	I	-	土師器	坏	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	11.1	6.4	3.7	0	0			糸切り
125	1015	-	II	-	土師器	III	口縁~底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR6/8	9.9	8.0	1.2	0	0	0	茶色鉱物	糸切り
	1016	-	I	-	瓦質土器	擂鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐灰色 Huel0YR6/1	褐灰色 Huel0YR6/1	-	-	-	0	0			
	1017	-	-	1426	瓦質土器	鉢	底部	ナデ	ナデ	灰白色 Hue2.5Y8/2	にぶい黄橙色 Huel0YR7/2	-	11.2	-	0	0		白色·黒 色鉱物	糸切り

第15表 中世の遺物観察表(3)-1 陶磁器

挿図	掲載	Of Calabia de	FeZ	1077 L. 1025 ET.	44 mi	RP 56	73.499	dell 64e	1/4 L Zz 988	法	量(cm	1)		釉薬		Atta abd
挿図 番号	掲載 番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	分類	部位	胎土色調	口径		器高	種類	色調	部位	備考
	645	D-5	П	-	青磁	碗	同安碗I類	口縁部	灰白色 Hue5Y7/1	15.2	-	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue10Y5/2	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半
	646	D-5b	I	1102	青磁	碗	同安碗Ⅰ類	口縁部	灰黄色 Hue2.5Y7/2	-	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue5Y6/2	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半
	647	D-5	I	一括	青磁	碗	同安碗Ⅰ類	口縁部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/2	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半
	648	D-4·5	П	-	青磁	砂包	同安碗I類	口縁部	灰白色 Hue5Y7/2	-	-	-	青磁釉	オリープ灰色 Huel0Y6/2	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半
	649	D-5	П	一括	青磁	砂包	同安碗I類	口縁~胴部	灰白色 Hue5Y7/1	-	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半
	650	D-5b	Ι · Π	1002	青磁	碗	同安碗Ⅰ類	胴部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	-	-	青磁釉	オリーブ黄色 Hue7.5Y6/3	残存部全面施釉	12c後半~13c内 面に櫛目の草花 文
	651	D-5	П	-	青磁	碗	同安碗I類	胴部	灰白色 Hue2.5Y8/2	-	-	-	青磁釉	オリープ黄色 Hue5Y6/3	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半 内面点描文
	652	D-5	П	-	青磁	碗	龍泉碗Ⅰ類	口縁~胴部	灰白色 Hue2.5Y8/1	17.8	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/2	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半内面劃花文
	653	D - 5b	I	71?	青磁	碗	龍泉碗Ⅰ類	口縁部	灰黄色 Hue2.5Y7/2	-	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半内面草花文
	654	D-5d	I	360	青磁	碗	龍泉碗Ⅰ類	底部	灰白色 Hue5Y7/1	-	5.6	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/3	高台内外露胎	12c後半~13c前 半
	655	D-5a	I	?043	青磁	碗	龍泉碗Ⅰ類	底部	灰白色 Hue5Y7/1	-	5.8	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/3	畳付~高台内露 胎	12c後半~13c前 半内面見込み片 彫草花文
	656	D-5	П	-	青磁	碗	龍泉碗Ⅰ類	底部	灰色 Hue5Y6/1	-	4.6	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue5Y6/2	畳付~高台内露 胎	12c後半~13c前 半内面に草花 文?あり
	657	D-4b	I	22	青磁	碗	龍泉碗Ⅰ類	口縁部	灰白色 Hue5Y7/2	12.8	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/3	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半
	658	D-5	П	-	青磁	小碗	龍泉碗 I - 1 類	口縁~底部	灰白色 Hue2.5Y8/1	11.3	4.8	5.1	青磁釉	明緑灰色 Hu- e10GY7/1	畳付釉剥ぎ 高 台内露胎	13c中~後半
108	659	D-4 · D-	II	308 · 309	青磁	小碗	龍泉碗Ⅱ-b 類	口縁~底部	オリーブ灰色 Hue5GY6/1	13.0	4.8	5.5	青磁釉	灰オリーブ色 Hue5Y5/2	高台内露胎	13c中~後半
	660	D-5d · D -5 · E-5	Ι · Π	358	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ-b 類	口縁~底部	灰白色 Hue5Y8/1	17.3	4.8	6.6	青磁釉	明褐灰色 Hu- el0GY7/1	畳付~高台内露 胎	13c中~後半
	661	E-5	I	-	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ-b 類	口縁~胴部	灰白色 Hue2.5Y8/1	16.0	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue5Y5/3	残存部全面施釉	13c中~後半
	662	D-5	П	297	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ- b 類	口縁~胴部	灰白色 Hue5Y8/1	15.0	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	残存部全面施釉	13c中~後半
	663	D-5	П	350	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ- b 類	口縁~胴部	灰白色 Hue5Y8/1	15.0	-	-	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10Y5/2	残存部全面施釉	13c中~後半
	664	D-5c	I	428	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ- b 類	口縁~胴部	灰白色 Hue2.5Y8/1	15.2	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/2	残存部全面施釉	13c中~後半
	665	D-4	П	304	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ- b 類	口縁~胴部	灰白色 Hue5Y7/1	17.0	-	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue5Y6/3	残存部全面施釉	13c中~後半
	666	D-5	Ι · Π	912	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ - c 類	底部	灰白色 Hue7.5Y7/1	-	5.4	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	高台内露胎	内面見込み草花 印文
	667	D-5	Ι · Π	1127 · 1100	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ - c 類	胴部~底部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	5.8	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/2	畳付~高台内露 胎	内面見込み草花 印文
	668	D-5c	I	145	青磁	碗	上田C類	口縁~胴部	灰白色 Hue5Y8/1	15.0	-	-	青磁釉	明オリープ灰色 Hue2.5GY7/1	残存部全面施釉	15c中頃
	669	D-5b	I	308	青磁	碗	上田D類	口縁部	灰白色 Hue5Y7/2	15.0	-	-	青磁釉	緑灰色 Hue7.5GY6/1	残存部全面施釉	15c前半~中頃
	670	D-5a	Ι	-	青磁	鉢	-	口縁~底部	灰白色 Hue10YR8/2	11.8	5.0	3.7	青磁釉	オリーブ灰色 Hue2.5GY6/1	腰部露胎 底部 釉剥ぎ	15c前半~中頃 赤色に発色(底 部釉剥ぎ部分)
	671	D-5	П	-	青磁	坏	龍泉坏Ⅲ-3b 類	口縁部	灰白色 Hue.5Y7/1	12.0	-	-	青磁釉	緑灰色 Hue7.5GY6/1	残存部全面施釉	13c中頃~14c 前 半
	672	D-5	П	335	青磁	坏	龍泉坏Ⅲ-3b 類	口縁部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	-	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue5GY6/1	残存部全面施釉	13c中頃~14c 前 半
	673	D-5	П	-	青磁	坏	龍泉坏Ⅲ-3b 類	口縁~胴部	灰白色 Hue5Y8/1	-	-	-	青磁釉	緑灰色 Hu- e10GY6/1	残存部全面施釉	13c中頃~14c 前 半
	674	D-5c	I	516	青磁	Ш	同安ⅢⅠ類	口縁部	灰白色 Hue2.5Y7/1	9.8	-	-	青磁釉	オリーブ黄色 Hue5Y6/4	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半

第15表 中世の遺物観察表(3)-2 陶磁器

第1	5表	中世の遺	量物観察	き表 (3	3) - 2	2 陶品	兹器									
挿図 番号	掲載 番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	分類	部位	胎土色調	上 日径	量(cm 底径	1) 器高	種類	釉薬 色調	部位	備考
	675	D-5	П	-	青磁	Ш	-	底部	浅黄橙色 Hue10YR8/3	-	7.0	-	青磁釉	オリーブ黄色 Hue7.5Y6/3	畳付~高台内露 胎	15c前半~中頃 内面見込み輪状 釉剥ぎ
108	676	E-5	I	-	青磁	香炉	-	胴部~底部	灰白色 Hue7.5Y8/1	-	-	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue10Y6/2	内面露胎	
	677	D-5a	I	452	青磁	花瓶	-	頸部	灰白色 Hue5Y8/2	-	-	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue10Y6/2	残存部全面施釉	14c-外面に浮文
	678	D - 5d	I	968	白磁	碗	碗IV類	口緑部	灰白色 Hue2.5Y8/1	17.5	-	-	透明釉	灰白色 Huel0Y7/1	胴部中位以下露 胎	12c中頃~13c
	679	D-5	Ι · Π	25 · 271	白磁	碗	碗IV類	口緑部	灰白色 Hue7.5Y8/1	14.8	-	-	透明釉	灰白色 Hue5Y7/2	残存部全面施釉	12c中頃~13c
	680	D-5	Ι · Π	319	白磁	碗	碗IV類	口縁部	灰白色 Hue7.5Y8/1	15.6	-	_	透明釉	灰白色 Hue75Y7/1	胴部中位以下露 胎	12c中頃~13c
	681	D-4·5	I	-	白磁	碗	碗Ⅳ類	口縁部	灰白色 Hue2.5Y7/1	16.7	-	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	12c中頃~13c
	682	D-5	I	-	白磁	碗	碗Ⅳ類	口縁部	灰白色 Hue2.5Y8/1	14.0	-	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/1	胴部中位以下露 胎	12c中頃~13c
	683	D-5	-	-	白磁	碗	碗Ⅳ類	口緑部	灰白色 Hue5Y8/1	-	-	-	透明釉	灰白色 Huel0Y7/1	胴部中位以下露 胎	12c中頃~13c
	684	D-5	I	-	白磁	碗	碗Ⅳ類	口縁部	灰白色 Hue2.5Y8/1	-	-	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/1	胴部中位以下露 胎	12c中頃~13c
	685	D-5	П	255	白磁	碗	碗IV類	胴部~底部	淡黄色 Hue2.5Y8/3	-	6.9	-	透明釉	淡黄色 Hue2.5Y8/3	胴部中位~高台 内露胎	12c中頃~13c。 内面に段。
	686	D-5c	I	636	白磁	碗	碗IV類	胴部~底部	灰白色 Hue5Y8/1	-	6.8	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/1	胴部中位~高台 内露胎	12c中頃~13c。 内面に段。
	687	D-5	-	-	白磁	碗	碗Ⅳ類	胴部~底部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	5.8	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/2	腰部~高台内露胎	内面見込み輸状 釉剥ぎ
	688	D - 5d	I	384	白磁	碗	碗IV類	底部	淡黄色 Hue2.5Y8/3	-	7.2	-	透明釉	灰白色 Hue5Y7/1	腰部~高台内露 胎	内面下位に段。 打ち欠き
	689	D-5	П	289	白磁	碗	碗Ⅳ類	底部	灰白色 Hue2.5Y8/1	-	7.0	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/1	腰部~高台内露胎	内面胴部下位段
	690	D-5a	I	1053	白磁	碗	碗Ⅳ類	底部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	7.0	-	透明釉	灰白色 Hue5Y7/2	腰部~高台内露胎	12c中頃~13c
	691	D-5	П	357	白磁	碗	碗Ⅳ類	底部	灰白色 Hue2.5Y8/1	-	7.2	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y8/1	腰部~高台内露胎	12c中頃~13c
	692	D-5b	I	314	白磁	碗	碗Ⅳ類	底部	灰白色 Hue5Y7/1	-	6.0	-	透明釉	灰白色 Hue5Y8/1	腰部~高台内露胎	12c中頃~13c
	693	D-5	П	-	白磁	碗	碗IV類	底部	灰白色	-	6.5	-	透明釉	灰白色 Hue5Y7/1	腰部~高台内露	12c中頃~13c
	694	D-5	-	-	白磁	碗	碗IV類	胴部~底部	Hue5Y7/1 灰白色 Hue2.5Y7/1	_	6.8	-	透明釉	灰白色 Hue5Y7/2	胎 腰部~高台内露 胎	内面胴部下位段
	695	D-5	п	341	白磁	碗	碗V類	口縁部	灰白色	18.0	-	-	透明釉	灰白色 Hue5Y8/1	残存部全面施釉	内面櫛目文
	696	D-5	П	-	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue5Y8/2 灰白色	_	-	_	透明釉	灰白色	残存部全面施釉	内面1条沈線、 櫛目文
109	697	D-5	П	_	白磁	碗	碗V類	底部	Hue5Y8/2 灰白色	_	3.6	_	透明釉	Hue10Y7/1 灰オリーブ色	高台内外露胎	内面櫛目文
	698	D-5	П	_	白磁	碗	碗V類	底部	Hue2.5Y7/1 淡黄色	_	5.0	_	透明釉	Hue5Y6/2 浅黄色 Hue5Y7/3	高台内外露胎	内面見込みに櫛
	699	D-5	_	_	白磁	碗	碗V類	胴部~底部	Hue2.5Y8/3 灰白色 Hue5Y7/1	_	_	_	透明釉	灰白色	腰部~高台内露胎	月 内面胴部下位沈 線、櫛目文
	700	D-5	П	300 · 301	白磁	碗	碗V類	口縁~胴部	淡黄色	14.8	_	_	透明釉	Hue7.5Y7/2 にぶい黄色	腰部以下露胎	線、側日又 内面上位に沈線
	701	D - 5d	I	946	白磁	碗	碗V類	口縁~胴部	Hue2.5Y8/3 にぶい黄橙色	18.0	_	_	透明釉	Hue2.5Y6/3 灰白色 Hue5Y7/2	残存部全面施釉	1 114 12-14-10-14
	702	D-5	П	-	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue10YR7/2 灰白色	10.2	-	_	透明釉	灰白色	残存部全面施釉	
	703	D-5b	I	1125	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue5Y8/1 灰白色	-	-	_	透明釉	Hue7.5Y7/1 灰白色	残存部全面施釉	
	704	D - 5d	I	932	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue5Y7/2 灰白色	17.2	-	_	透明釉	Hue7.5Y7/1 灰白色 Hue5Y7/1	残存部全面施釉	内面上位沈線
	705	D-5	I · II	944	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue5Y7/2 灰白色	13.0	-	_	透明釉	灰白色	残存部全面施釉	内面上位沈線
	706	D-5	п	362	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue5Y8/1 灰白色	16.0	<u> </u>	_	透明釉	Hue2.5GY8/1 灰オリーブ色	残存部全面施釉	内面胴部上位沈
	707	D-5	П	-	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue5Y7/1 灰白色	14.2	-	-	透明釉	Hue5Y6/2 灰白色 HueN8/	残存部全面施釉	線 内面胴部上位沈
	708	D-5	П	_	白磁	碗	碗V類	口縁~胴部	Hue5Y8/1 灰オリーブ色	-	-	_	透明釉	灰オリーブ色		線 内面上位に沈線
	709	D-5	П	302	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue5Y6/2 灰白色				透明釉	Hue5Y6/2 灰白色	残存部全面施釉	内面胴部上位段
	710	D-5c	I	1222	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue5Y7/1 灰白色	15.6	-	_	透明釉	Huel0Y7/1 灰白色	残存部全面施釉	内面上位沈線
	711	D-5	П	-	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue5Y7/1 灰白色	-	-	_	透明釉	Hue10Y7/1 灰白色 Hue5Y7/1	残存部全面施釉	内面上位沈線
	712	D-5	П	_	白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue5Y7/1 灰白色	_	-	_	透明釉	灰白色	残存部全面施釉	12c~13c前半
	713	D-5	П	_	白磁	碗	碗V類	胴部~底部	Hue5Y7/1 淡黄色	_	6.6	_	透明釉	Hue7.5Y7/2 灰白色 Hue5Y7/2	畳付~高台内露	内面胴部下位段
			П						Hue2.5Y8/3 灰白色	_	-	_		灰白色	胎 腰部~高台内露 胎	
	714	D-5		330 · 363	白磁	碗	碗V類	胴部~底部	Hue2.5Y8/2 灰白色	_	6.0	_	透明釉	Hue7.5Y8/1		内面に段。
	715	D-5	П	278	白磁	碗	碗V類	底部	Hue5Y8/1 灰白色		6.6		透明釉	灰白色 Hue5Y8/1	高台内外露胎	打ち欠き 15c~ 内面上位
	716	D-5b	I	1020	白磁	碗	森田D群	口縁部	Hue5Y7/1	14.4	-	_	透明釉	灰白色 Hue5Y7/2 灰白色	残存部全面施釉	沈線
	717	D-5	I		白磁		皿V類	底部	灰白色 HueN7/ 灰白色	-	3.0		透明釉	Hue7.5Y7/2	胴部~底部露胎	12c後半~
	718	D-5	-	-	白磁		皿V類	底部	灰白色 Hue5Y7/1 灰白色	-	3.0	-	透明釉	浅黄色 Hue5Y7/3 灰白色	胴部〜底部露胎 口禿	12c後半~
	719	D-5	I		白磁		皿区類	口縁~底部	Hue2.5Y8/1 灰白色	11.6	6.3	3.3	透明釉	Hue7.5Y8/1 灰白色	底部釉剥ぎ	13c中~14c前後
	720	D-5	П	-	白磁		皿区類	口縁~底部	Hue2.5Y8/1	12.0	7.2	3.2	透明釉	Hue7.5Y8/1 灰白色 Hu-	口禿	13c中~14c前後
110	721	D-5	-	-	白磁		皿区類	口縁~底部	灰白色 Hue2.5Y8/1 灰白色	11.8	7.0	3.6	透明釉	e5GY8/1 灰白色	口禿	13c中~14c前後
	722	D-5	I	372 · 1141	白磁		皿区類	口縁~底部		11.8	6.4	3.2	透明釉	Hue7.5Y7/1 灰白色	ロ元 底部釉剥ぎ 口禿	13c中~14c前後
	723	D-5	П	292	白磁	III.	皿区類	口縁~底部		11.2	5.4	2.9	透明釉	Hue7.5Y7/1	底部釉剥ぎ	13c中~14c前後
	724	D-5	П	312	白磁	Ш	皿IX類	口縁部	灰白色 Hue7.5Y8/1 灰白色	10.4	-	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/1	口禿	13c中~14c前後
	725	D-5	-	-	白磁	Ш	皿IX類	底部	灰日色 Hue5Y7/1 灰白色	-	6.2	-	透明釉	灰白色 Hue5Y7/1 灰白色	底部外面釉のば	13c中~14c前後
	726	D-5	П	-	白磁	Ш	森田D群	口縁部	州ue5Y8/1	12.0	-	-	透明釉	Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉	15 c ~

第15表 中世の遺物観察表(3)-3 陶磁器

第1	5表	中世の遺	物観察	突表 (3	3) -3	3 陶	滋器									
挿図 番号	掲載 番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	分類	部位	胎土色調	上 日径	量(cm 底径	1) 器高	種類	釉薬 色調	部位	備考
	727	D-4	I	一括	白磁	水注	-	突手	灰白色	-	/4X [EE	-	透明釉	灰白色	残存部全面施釉	縦耳形
	728	D - 5d	I	972	青白磁	Ш	_	底部	Hue7.5Y8/1 灰白色	_	4.0	-	青白磁釉	Hue10Y8/1 明緑灰色	底部露胎	12c後半~13c前
	729	D-5	п	286	白磁	四耳壺	_	肩部	Hue2.5Y8/1 灰白色	_	1.0	_	透明釉	Hue7.5GY8/1 明緑灰色 Hu-	残存部全面施釉	半 14c前半~中頃
							_		Hue5Y7/1 灰白色	_		_		e10GY8/1		肩部に横耳
	730	D-4b	I	538	白磁	小壺	_	口縁部	Hue2.5Y8/1 灰白色		<u> </u>		透明釉	灰白色 Hue5Y8/1 灰白色	残存部全面施釉	12c~
	731	D-5	II	_	青白磁	合子蓋	-	天井部~底部	Hue2.5Y8/2 灰白色	4.6	3.4	1.3	青白磁釉	Hue10Y7/1 灰白色	内面露胎	
110	732	D-5	П	-	青白磁	合子蓋	-	天井部~胴部	Hue7.5YR8/1	-	4.6	-	青磁釉	Hue2.5GY8/1 明オリーブ灰色	内面露胎	T.H. W # # Co
	733	D - 5a	I	569	青白磁	合子蓋	-	天井部~底部	灰白色 Hue2.5Y8/1	5.4	4.0	1.5	青磁釉	Hue5GY7/1	内面胴部露胎 天井部施釉	天井部に草花印文
	734	D-5	II	-	青白磁	合子身	-	蓋受け部〜胴 部	灰白色 Hue5Y8/1	4.2	-	-	青白磁釉	灰白色 Hu- e5GY8/1	蓋受け部、胴部 下位露胎	10 00 10 10 10
	735	D-5	Π	374	青白磁	龍首水注	-	注口部	灰白色 Hue2.5Y8/1	-	-	-	青白磁釉	明緑灰色 Hu- e10GY8/1	残存部全面施釉	13c中頃〜後半 目の部分のみ 褐釉
	736	D-5	I	-	青花	碗	小野碗E群	胴部~底部	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	-	5.0	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/1	畳付~高台内露 胎	16c前半~中頃 璋州窯系
	737	D-5	I	118	青花	Ш	小野皿F群	口縁部	灰白色	_	<u> </u>	l _	透明釉	明オリーブ灰色	残存部全面施釉	16c前半~中頃 稜花皿 外面
					_				Hue5Y8/2 にぶい橙色					Hue5GY7/1 灰オリーブ色	口縁部~胴部施	型押し 12c後半~ 表
	738	D-4·5	II	-	中国陶器	売	-	口縁~胴部	Hue7.5YR7/4 褐灰色	49.6	-	-	暗緑色釉	Hue7.5Y5/2	釉	面に砂粒付着表面に砂粒付着
	739	D-5	II	276	中国陶器	売	売Ⅰ類	口縁部	Huel0YR6/1 にぶい橙色	-	-	-	灰黄色釉	浅黄色 Hue5Y7/3	残存部全面施釉	
	740	D-5·6	I	206	中国陶器	売	-	胴部	Hue7.5YR7/4	-	-	-	灰黄色釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/2	残存部全面施釉	内外面ともに砂粒付着
	741	D-4·5	Ι	-	中国陶器	売	-	胴部	にぶい黄橙色 Huel0YR7/4	-	-	-	灰黄色釉	灰オリーブ色 Hue5Y5/2	残存部全面施釉	内外面ともに砂 粒付着
	742	D-5	II	-	中国陶器	遊	-	胴部~底部	にぶい褐色 Hue7.5YR6/3	-	-	-	灰黄色釉	灰黄褐色 Huel0YR4/2	残存部全面施釉	
	743	D-5	II	338	中国陶器	小壺?	-	胴部~底部	浅黄色 Hue2.5Y7/3	-	4.4	-	灰黄色釉	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	内面・畳付~底 部露胎	
	744	D-4b	Ι	537	中国陶器	鉢	-	口縁部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	-	-	灰黄色釉	オリーブ黄色 Hue5Y6/3	残存部全面施?	口縁部?拭き取 り
	745	D-5	П	-	中国陶器	鉢	-	口縁部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	-	-	灰黄色釉	オリーブ黄色 Hue5Y6/3	残存部全面施釉	口縁部に目跡?
	746	D-4·5	П	-	中国陶器	鉢	-	口縁部	灰黄色 Hue2.5Y7/2	-	-	-	褐釉	浅黄色 Hue2.5Y7/3	全面釉剥落	13c前半~中頃
111	747	D-5	II	298	中国陶器	鉢	-	頭部~胴部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	-	-	黄緑色釉	明褐灰色 Hue5YR7/2	外面施釉内面露 胎	13c前半~中頃
	748	D-5c	I	-	中国陶器	盤	-	胴部~底部	灰黄色 Hue2.5Y7/2	-	-	-	黄釉	オリーブ黄色 Hue5Y6/4	外面露胎	内面に鉄絵 (褐?)
	749	D-5	П	-	中国陶器	盤	盤Ⅰ類	胴部	灰白色 Hue10YR7/1	-	-	-	黄釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	外面露胎	内面に鉄絵 (褐?)
	750	D-5	II	_	中国陶器	盤	-	胴部~底部	灰色 Hue5Y6/1	-	-	-	黒釉	にぶい黄褐色 Huel0YR5/3	外面露胎	(1417
	751	D-5	Ι · Π	695 · 1256	中国陶器	盤	-	底部	灰白色 Hue2.5Y7/1	_	-	-	黒釉	灰黄色 Hue2.5Y6/2	外面露胎	内面に鉄絵 (裾?)
	752	D-5·6	I	262	中国陶器	水注	_	頭部~胴部	にぶい黄橙色	-	-	-	黄緑色釉	黄褐色	残存部全面施釉	(TeJ:)
	753	D-5	П	_	中国陶器	水注	_	胴部	Hue10YR7/3 灰白色	_	-	_	黄釉	Hue2.5Y5/4 オリープ黄色	残存部全面施釉	内外面ともに表
	754	D-5	П	_	中国陶器	水注	_	底部	Hue2.5Y8/1 灰黄色	_	9.6	-	黄緑色釉	Hue5Y6/4 オリーブ黄色	底部露胎	面に摩耗
	755	D-5	П	_	中国陶器	莹	_	頸部	Hue2.5Y7/2 灰白色	_	_	_	黄褐釉	Hue5Y6/4 黒色 Hue7.5Y2/1	外面施釉	
	756	D-5		_	国産陶器	菫	_	肩部	Hue5Y7/1 灰白色	_	_	-	緑灰色釉	暗オリーブ色	外面施釉	常滑
		D 15					回体形工術		Hue5Y7/1 灰白色	15.4				Hue7.5Y4/3 オリープ灰色		12c後半~13c前
	817	E-15	I • II	417	青磁	碗	同安碗Ⅰ類	口縁~胴部	Hue5Y7/2	15.4	_	_	青磁釉	Hue10Y6/2	残存部全面施釉	半 内面に櫛目の草花文
	818	D – 12a	Ι	-	青磁	碗	同安碗I類	底部	灰黄色 Hue2.5Y7/2	-	4.7	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	腰部~高台内露 胎	12c後半~13c前 半
	819	D-14	I	-	青磁	碗	龍泉碗Ⅰ類	口縁部	灰白色 Hue5Y7/2	12.6	-	-	青磁釉	浅黄色 Hue5Y7/3	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半
	820	E-13	II	-	青磁	砂	龍泉碗I類	口縁部	灰白色 Hue5Y7/1	-	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	残存部全面施釉	12c後半~13c前 半
	821	E-12	I	-	青磁	碗	龍泉碗Ⅰ類	底部	灰白色 Hue5Y7/1	-	5.5	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	高台内露胎	12c後半〜13c前 半内面見込み片 彫草花文
	822	D-13	I	-	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ-c 類	底部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	5.0	-	青磁釉	明オリーブ灰色 Hue5GY7/1	畳付~高台内露 胎	内面見込み草花印文
	823	E-14	I	_	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ-b	胴部~底部	灰色 Hue5Y6/1	-	5.6	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/2	量付~高台内露 胎	13c中~後半
	824	D-14	I	-	青磁	碗	上田C類	口縁部	灰白色 Hue2.5Y8/1	_	-	-	青磁釉	オリーブ黄色	残存部全面施釉	15c中頃
	825	D-13	I	_	青磁	碗	上田D類	口縁部	灰白色	15.0	-	_	青磁釉	Hue7.5Y6/3 オリープ灰色	残存部全面施釉	14c後半
	826	D-14	I	_	青磁	碗	上田B類	口縁部	Hue5Y7/2 灰白色	_	l _	-	青磁釉	Hue2.5GY6/2 灰オリーブ色	残存部全面施釉	16c~
	827	D-14	I	_	青磁	碗	上田B類	口縁部	Hue5Y7/1 灰白色	_	_	_	青磁釉	Hue7.5Y5/2 オリーブ灰色	残存部全面施釉	16c~
117	828	E-14	I	_	青磁	碗	上田D類	胴部~底部	Hue5Y8/2 浅黄色	_	5.4	-	青磁釉	Hue10Y6/2 オリーブ黄色	畳付~高台内露	14c後半
				_					Hue2.5Y7/3 灰白色	_	J.4	_		Hue7.5Y6/3 明黄褐色	胎	12c後半~13c前
	829	D-14	I		青磁	Ш.	龍泉ⅢⅠ類	口縁部	Hue5Y8/2 灰白色				青磁釉	Hue2.5Y6/4 オリープ灰色	残存部全面施釉	半
	830	E-13	I	-	青磁	盤	-	口縁~胴部	Hue5Y7/1	22.0	-	-	青磁釉	Hue10Y6/2 オリープ灰色	残存部全面施釉	13c中頃~14c前 半 口縁部稜花
	831	C-15	I	-	青磁	水滴	-	注口部	灰色 Hue5Y6/1 灰白色	-	-	-	青磁釉	Hue5GY6/1 オリープ灰色	残存部全面施釉	13c~ 14c中頃~ 外
	832	D-12	I	-	青磁	鉢	-	口縁部	Huel0Y8/1 灰黄色	-	-	-	青磁釉	Hue10Y6/2 灰オリーブ色	残存部全面施釉 内面砂目 底部	面草花印文
	833	D-14	I	-	青磁	並	-	底部	 Hue2.5Y7/2 淡黄色	-	9.0	-	青磁釉	Mue7.5Y6/2 灰白色	露胎	14c中頃~
	834	D-12	Ι		青磁	香炉	-	口縁~胴部	Hue2.5Y8/4	9.9	-	-	青磁釉	灰日色 Hue10Y7/2 オリープ灰色	内面露胎	二次焼成
	835	E-16	I	-	青磁	合子蓋	-	胴部〜身受け 部	灰白色 Hue7.5Y7/1	-	-	-	青磁釉	Hue2.5GY6/2	身受け部露胎	14c中頃~
	836	D · E - 13	I	-	青白磁	合子身	-	蓋受け部〜底 部	灰白色 Hue2.5Y8/2	4.1	3.5	2.0	青磁釉	灰白色 Huel0Y8/2	蓋受け部露胎	13c~中頃
	837	D-13	II	709	白磁	Ш	皿IX類	口縁~底部	灰白色 Hue2.5Y8/1	15.0	10.0	3.4	透明釉	灰白色 Hue10Y8/1	口禿	13c中~14c前後
	838	D-13	Ι	-	白磁	Ш	皿IX類	口縁~底部	灰白色 Hue2.5Y8/1	12.4	8.0	2.9	透明釉	灰白色 Hu- e5GY8/1	口禿 底部釉剥ぎ	13c中~14c前後
	1	D-15	I	_	白磁	IIIL	皿区類	口縁~底部	灰白色 Hue7.5Y8/1	12.2	8.3	3.0	透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/1	口禿	13c中~14c前後

第15表 中世の遺物観察表(3)-4 陶磁器

親 l	5表	中世の遺	量物觀察	表表(ご	3) -2	1 海6	兹器									
挿図 番号	掲載 番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	分類	部位	胎土色調	-	量(cm	-	5.0 am	釉薬	tot I-t-	備考
m -y	840	D-15	п	427	白磁	Ш.	皿区類	口縁~胴部	灰白色	口径	底径	器高	透明釉	色調 灰白色	部位	13c中~14c前後
									Hue7.5Y8/1 灰白色	-	_	_		Hue10Y8/1 にぶい黄色		
	841	E-13	Πa	1115	白磁		皿区類	口縁部	Hue7.5Y8/1 灰白色			_	透明釉	Hue2.5Y6/4 灰白色	口禿	13c中~14c前後
	842	D-14	I		白磁		皿区類	底部	灰白色 Hue7.5Y7/1 灰白色	-	6.0		透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/1 灰白色	底部外面?のばし 腰部~高台内露	13c中~14c前後
	843	D-13	I	-	白磁	Ⅲ	森田D群	底部	Hue2.5Y8/2 淡黄色	-	3.2	_	透明釉	Hue2.5GY8/1 淡黄色	胎	15c~
	844	D-13	I	一括	白磁	Ⅲ	森田D群	底部	Hue2.5Y8/3 灰白色	-	3.4	_	透明釉	Hue2.5Y8/3 灰白色 Hu-	腰部~高台内露 胎	15c~内面見込 み輪状釉剥ぎ
	845	D – 13d	I	-	白磁	並	-	口縁部	Hue5Y8/1	-	-	_	透明釉	e5GY8/1	残存部全面施釉	口緑稜花
	846	D-14	I	-	白磁	馬上坏	-	口縁部	灰白色 Hue5Y8/1	-	-	-	透明釉	明緑灰色 Hu- e10GY8/1	残存部全面施釉	13c中頃~14c前 半 馬上坏 外 面浮文
	847	D-12	I	-	白磁	四耳壺	-	胴部	灰白色 Hue2.5Y7/1	-	-	-	透明釉	灰色 Hue10Y6/1	残存部全面施釉	14c前半~中頃
	848	D-14	I	_	青白磁	水注	-	底部	灰白色	-	6.0	_	青白磁釉	灰白色 Hue2.5Y8/2	外面胴部~底部	
	849	D-12	I	_	青白磁	小壺	_	底部	Hue5Y8/1 灰白色	-	4.0	_	青白磁釉	明緑灰色 Hu-	底部露胎	13c前半~中頃
117	850	D-15	I	_	青白磁	合子蓋	_	天井部~底部	Hue5Y8/1 灰白色	6.0	4.7	1.7	青磁釉	e10GY7/1 明緑灰色 Hu-	内面露胎	
	851	D-12	I	_	青白磁	合子身	_	蓋受け部〜胴	Hue10YR8/1 灰白色	7.6	-		青白磁釉	e10GY8/1 灰白色 HueN8/	蓋受け部露胎	
	852	D-15	I	_	青花	碗	小野碗C群	部口縁部	Hue5Y8/1 灰白色		_	_	透明釉	明緑灰色	残存部全面施釉	15c中頃~後半
						1976			Hue5Y8/1	_		_		Hue7.5GY7/1 明青灰色	全面施?畳付のみ?	15c中頃~後半
	853	D-14	I		青花		小野皿B群	底部	灰白色 HueN8/ 灰白色		6.6		透明釉	Hue5B7/1 明緑灰色 Hu-	剥ぎ取り 畳付釉剥ぎ 高	畳付に砂目付着
	854	E-15	I	-	青花	Ш	小野皿B群	底部	Hue5Y8/1	-	_	_	透明釉	e10GY8/1	台内施釉	15c中頃~後半 15c中頃~後半
	855	D – 12d	I	-	青花	Ш	小野皿C群	底部	灰白色 Hue7.5Y8/1	-	6.6	-	透明釉	明緑灰色 Hue7.5GY8/1	腰部~底部露胎	基笥底 外面渦巻 文
	856	D-15	I	-	青花	Ш	小野皿C群	底部	灰白色 Huel0Y7/1	-	4.8	-	透明釉	明オリープ灰色 Hue2.5GY7/1	腰部~底部露胎	15c中頃~後半 碁笥底
	857	D-14	I	-	青花	Ш	小野皿C群	胴部~底部	灰白色 Hue5Y8/1	-	3.6	-	透明釉	明青灰色 Hue10BG7/1	底部露胎	15c中頃~後半 碁笥底
	858	D-16	I	-	青花	Ш	小野皿F群	口縁部	灰白色 Hue2.5Y8/2	-	-	-	透明釉	明オリーブ灰色 Hue5GY7/1	残存部全面施釉	16c前半~中頃 稜花皿
	859	D-14	I		青花		小野皿B-2群	底部	灰白色	-	8.0	_	透明釉	灰白色	畳付釉剥ぎ 高	16c中頃~17c前 半
	860	E-12	Πa	1141	中国陶器	壺	-	胴部~底部	Hue2.5Y8/1 にぶい橙色	-	9.0	_	灰黄色釉	Hue10Y7/1 灰オリーブ色	台内施釉 残存部全面施釉	17
	861	DE - 13	ī	_	中国陶器	並	-	底部	Hue7.5YR7/3 にぶい赤褐色	-	7.8	_	暗緑黄色釉	Hue7.5Y5/2 暗オリーブ色	外面胴部下位~	
	862	D-14	I	_	中国陶器	並	_	胴部~底部	Hue2.5YR5/3 にぶい赤褐色	_	7.0	_	灰黄色釉	Hue7.5Y4/3 オリープ黒色	底部露胎	
118	002	D-14	1	_	中国网征	32	_	세기 기가 ~ 시조(11)	Hue2.5YR4/4				灰貝巴伽	Hue5Y2/2	残存部全面施釉	
	863	D-11b	I	-	中国陶器	盤	-	口縁部	灰黄色 Hue2.5Y7/2	-	-	-	黄緑色釉	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	(口縁部釉拭き 取り)	
	864	DE - 13	I	-	中国陶器	鉢	-	口縁部	灰色 Huel0Y6/1	-	-	-	無釉	灰褐色 Hue7.5YR5/2	内外面僅かに自 然?	
	934	E-19	I	_	青磁	碗	龍泉碗I類	底部	灰白色 Hue5Y7/1	_	5.6	_	青磁釉	灰オリーブ色 Hue5Y4/2	畳付~高台内露	12c後半~13c前 半内面見込み片
	025	D 05		+1.	wint, 1705.	750	and the refer to any	DEL AND	灰白色	_	_	_	44.7% S.L	明オリーブ灰色	胎	彫草化文
	935	B-25	I	一括	青磁	碗	龍泉碗Ⅰ類	胴部	Hue10Y8/				青磁釉	Hue2.5GY7/1	残存部全面施釉	13c中~後半 メンコ状(打ち
	936	D-21	低IIc	一括	青磁	碗	龍泉碗Ⅱ類	底部	灰白色 Hue5Y7/1	_	5.2	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue10Y5/2	高台内露胎	メンコ状(打ち 欠き) 内面見 込み草花印文
	937	D-20	低Ⅱc· 低Ⅱdcb	一括	青磁	碗	上田B類	口縁~胴部	灰白色 HueN8/	20.0	-	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue10Y5/3	残存部全面施釉	14c中~後半
	938	B-19 · 20	-	-	青磁	碗	上田B類	口縁部	灰白色 Hue5Y8/1	-	-	-	青磁釉	灰オリーブ色 Hue5Y6/2	残存部全面施釉	16c~細線蓮弁 文
	939	D-22	低Ⅱc	一括	青磁	碗	上田B類	底部	灰白色 Hue5Y8/1	-	4.5	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue2.5GY5/1	高台内露胎	
	940	E-20	ПĿ	-	青磁	碗	上田C類	口縁~胴部	灰白色 Hue5Y8/1	-	-	-	青磁釉	明オリープ灰色 Hue2.5GY7/1	残存部全面施釉	15c中頃 口縁 部外面雷文帯
	941	D-20	I	一括	青磁	碗	上田C類	口縁部	灰白色 Huel0Y8/1	-	-	-	青磁釉	緑灰色 Hu- e5GY6/1	残存部全面施釉	15c中頃 口縁 部外面雷文帯
	942	D-21	II .La	一括	青磁	碗	上田D類	口縁部	灰白色 Hue7.5Y7/1	17.6	-	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue10Y5/2	残存部全面施釉	14c後半
	943	B - 25	I · II a	一括	青磁	碗	上田D類	口縁部	灰白色 Hue5Y8/2	-	-	_	青磁釉	緑灰色 Hue7.5GY6/1	残存部全面施釉	14c後半
	944	D-21	低Ⅱa	_	青磁	碗	上田D類	口縁部	灰白色 Hue7.5Y7/1	-	-	-	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10Y6/2	残存部全面施釉	IX
	945	C-23	п · п.ь	一括	青磁	碗	上田D類	口縁部	灰白色	13.4	-	_	青磁釉	緑灰色 Hu-	残存部全面施釉	15c前半~中頃
	946	C-21	I	一括	青磁	碗	上田D類	口縁部	Hue7.5Y8/1 灰白色	-	_	_	青磁釉	e10GY6/1 オリープ灰色	残存部全面施釉	15c前半~中頃
	947	D-21	低Ⅱc上		青磁	碗	上田D類	胴部~底部	Hue10Y7/1 灰白色	_	5.9	_	青磁釉	Hue10Y6/2 灰白色 Hue5Y8/1	高台内露胎	二次焼成により
122	948	D-21	低IIC			碗		胴部~底部	Hue7.5Y7/1 灰白色	_		_	青磁釉	オリーブ灰色	高台内釉剥ぎ	和変色
				一括	青磁		上田D類		Hue7.5Y8/ 灰白色		5.8			Hue10Y6/2 緑灰色	高台内輪状釉剥	14c後半
	949	D-20	I	一括	青磁	碗	上田D類	底部	Hue7.5Y8/1	-	6.9	-	青磁釉	Hue7.5GY6/1 緑灰色	ぎ 高台内輪状釉剥	釉剥ぎ部分赤化 内面見込みに草
	950	D-20	低IIC	一括	青磁	碗	上田D類	胴部~底部	灰白色 HueN8/ 灰白色	-	6.8	_	青磁釉	Hue7.5GY6/1 灰オリーブ色	ž	花文の印文
	951	D-22	I	一括	青磁	碗	高麗青磁?	口縁~胴部	Hue5Y7/1	10.0	-	-	青磁釉	Hue5Y6/2	残存部全面施釉	12c~
	952	D-20	I	一括	青磁	Ш	龍泉皿Ⅰ類	口縁~底部	灰白色 Hue7.5Y7/1	-	-	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue2.5GY6/1	底部露胎	12c後半~13c前 半 内面見込み 櫛描文
	953	D-20	低Ⅱc	一括	青磁	Ш	龍泉皿Ⅰ類	口縁~胴部	灰色 Hue7.5Y6/1	-	-	-	青磁釉	オリープ灰色 Hue2.5GY6/1	残存部全面施釉	
	954	C-23	II上	-	青磁	Ш	-	口縁部	灰白色 Hue7.5Y7/1	11.8	-	_	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	残存部全面施釉	14c中頃~15c前 半
				. 445						_	E.C.			オリーブ灰色	高台内輪状釉剥	14c後半~ メ
	955	D-20	П	一括	青磁		_	底部	灰白色 HueN8/	_	5.6	_	青磁釉	Hue2.5GY5/1	10 11 14 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10	ンコ状 (打ち欠き)
	956	D-20	Ⅱ・低Ⅱ c上	一括	青磁	Ш	-	口縁~底部	灰白色 Hue2.5Y8/2	13.0	5.7	2.9	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5YR6/2	外面腰部以下露 胎	内面輪状釉剥 ぎ。15c前半~ 中頃
	957	D-20	П	一括	青磁	稜花皿	_	口縁部	灰白色	-	_	_	青磁釉	オリープ灰色	残存部全面施釉	中頃 15c前半~中頃
	958	D-19~22	I	-	青磁	秋花皿	_	口縁~胴部	Hue7.5Y8/ 灰白色	_	_	_	青磁釉	Hue5GY6/1 オリープ灰色	残存部全面施釉	15c前半~中頃
	959	E-18	I	_	青磁	秋花皿	_	口縁部	Hue5Y7/2 灰色	_	_	_	青磁釉	Hue10Y5/2 明緑灰色		
	509	17.10	1		F9 100x	12/16/111		口小氷口り	Hue2.5Y8/1	_	<u> </u>		日 1037世	Hue7.5GY7/1	残存部全面施釉	15c~ 13c中頃~14c前 半 二次焼成に
	960	D-24	I	一括	青磁	盤		口縁部	灰白色	30.0	l .	_	青磁釉	灰白色 Hue5Y8/1	残存部全面施釉	

第15表 中世の遺物観察表(3)-5 陶磁器

5表		3700年ルス	察表(ご	, ,	J 1991	滋器									
掲載 番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	分類	部位	胎土色調	-	量(cm	_	£6.499	釉薬 2.20	201 F-1-	備考
961	C - 25	I	一括	青磁	盤	_	口縁部	灰白色	口径	底径	器高	種類 青磁釉	色調 オリーブ灰色	部位 残存部全面施釉	
						_		Hue2.5Y8/2 灰白色	_	-	_		Hue10Y6/2 明オリーブ灰色		14c中頃~後半
								Hue5Y7/1 灰白色					Hue5GY7/1 田オリーブ灰色		内面へラ彫り 内面見込みに砂
963	-							Hue5Y8/1		7.5			Hue2.5GY7/1	胎	目
964	D-21	低IIc	一括	白磁	Ш	皿以類	口縁~胴部		12.0	-	-	透明釉	Hue7.5Y7/1	口禿	13c中~14c前後
965	D-21 · 22	Ι	-	白磁	碗	森田D群	口縁部	Hue2.5Y8/2	14.0	-	-	透明釉	Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	15c∼
966	D-19	I · 低IIc	一括	白磁	III	森田D群	口縁~胴部	灰白色 Hue5Y8/1	9.6	-	-	透明釉	Hue7.5GY8/1	腰部以下露胎	15c∼
967	D-20	低IIc	一括	白磁	IIIL	森田D群	口縁~胴部	灰白色 HueN8/	9.4	-	-	透明釉	灰白色 Hu- e5GY8/1	外面腰部以下露 胎	15c~
968	B-23	I	一括	白磁	Ш	森田D群	口縁~底部	灰白色 Hue10YR8/1	10.0	4.2	2.5	透明釉	灰白色 Hue5Y8/1	腰部~高台内露 胎	15c∼
969	D-21	低IIc	一括	白磁	Ш	森田D群	口縁~胴部	灰白色 HueN8/	9.4	-	-	透明釉	灰白色 Huel0Y8/1	残存部全面施釉	15c~
970	E - 20	I	一括	白磁	Ш	森田D群	口縁~胴部	灰白色 Hue5Y8/1	9.0	-	-	透明釉	灰白色 Hue5Y8/1	外面胴部中位以 下露胎	15c∼
971	D-21	I	一括	白磁	Ш	森田D群	底部	浅黄橙色	-	5.0	-	透明釉	灰白色 Hue5Y8/2	腰部~高台内露	15c 割高台見 込みに目跡
972	B - 25	Πa	一括	白磁	Ш	森田D群	底部	淡黄色	_	4.0	_	透明釉	灰白色 Hue5Y8/2		15c 割高台内
								灰白色	_		_		オリープ灰色		面見込みに目跡 14c前半~中頃
					_										14c前半~中頃
314	D 22	1	10	I HAX	E21-452		नाग लाग					X2:91/m	/κ≧ fide7.513/1		14c前半~中頃
975	C-21	Π	-	白磁	四耳壺	-	胴部~底部	灰目色 Hue2.5Y7/1	-	7.0	-	透明釉	灰色 Hue7.5Y6/1	畳付~高台内露 胎	14c前半〜中頃 内面見込みに 砂粒多く付着
976	D-24	I	一括	白磁	壺・瓶	-	胴部~底部	灰白色 Hue5Y8/1	-	8.0	-	透明釉	灰白色 Hue10Y7/2	内面露胎 畳付 釉剥ぎ	13c前半~
977	C-23	I	一括	白磁	水注	-	底部	灰白色 HueN8/	-	6.0	-	透明釉	灰白色 Hue5Y7/1	内面露胎 畳付	
978	B - 25	I	一括	青花	碗	小野碗B群	口縁部	灰白色	-	-	-	透明釉	明緑灰色	i e	15c中頃~後半 外面草花文
979								灰白色	_	-	_		<u> </u>		外面口縁部波濤
								灰白色					明緑灰色		文带
980	B-24	1	-45	171C	IIIL	小町皿B群	口称的	Hue5Y8/2	_	_	_	返明相	Hue7.5GY7/1		15c~ 16c前半~中頃
981	B-24	I	一括	青花	碗	小野碗C群	底部	灰白色 Hu- e5GY8/1	-	5.0	-	透明釉	明緑灰色 Hue7.5GY8/1	全面施釉畳付のみ釉剥ぎ取り	蓮子碗 内面・ 外面見込み高台 内草花文
982	E-18	I	-	青花	碗	小野碗E群	底部	淡黄色 Hue2.5Y8/4	-	5.5	-	透明釉	灰白色 Hue10Y7/1	畳付~高台内露 胎	16c前半〜中頃 璋州窯系 内面 見込み人物山水
983	C-23	II .La	一括	青花	碗	小野碗C群	胴部~底部	浅黄橙色 Huel0YR8/3	-	4.8	-	透明釉	Hue2.5Y7/3	高台内外露胎	内面見込み輪状 釉剥ぎ。17c~
984	D-20	I	-	青花	Ш	小野皿B群	胴部~底部	灰白色 HueN8/	-	9.5	-	透明釉	明緑灰色 Hue5G7/1		15c中頃~後半
985	E-18	I	-	青花	Ш	小野皿B群	底部	灰白色 Hue5Y8/1	-	5.8	-	透明釉	灰白色 Hue2.5GY8/1	畳付釉剥ぎ 高 台内施釉	15c~
986	D-20	I	一括	青花	Ш	小野皿C群	胴部~底部	灰白色 Hue2.5GY7/1	-	-	-	透明釉	明緑灰色 Hue7.5GY8/1	畳付~底部露胎	15c~ 碁笥底
987	D-19·20	I	-	青花	Ш	小野皿C群	口縁~底部	灰白色 Hue5Y8/1	9.8	4.0	2.2	透明釉	明青灰色 Hue5BG7/1	底部露胎	15c中頃〜後半 碁笥底 底部 に砂目付着
988	C - 25	I	一括	青花	Ш	小野皿C群	口縁~底部	灰白色 Hu2.5Y8/1	10.0	2.4	2.6	透明釉	明青灰 Hue10BG7/1	底部露胎	15c中頃~後半
989	C-23 · D -21 · 22	II ±a·	一括	青花	Ш	小野皿E群	底部	灰白色 HueN8/	-	5.0	-	透明釉	青灰色 Hue10BG6/1	全面施釉畳付のみ釉剥ぎ取り	16c中頃~17c前 半 内面見込み に人物山水 高 台内に小石付着
990	C · D - 23	I	一括	青花	壺・瓶	-	胴部~底部	浅黄橙色 Huel0YR8/4	-	7.2	-	透明釉	淡黄色 Hue5Y8/3	畳付釉かきとり 内面露胎	17c~
991	D-20	低Ⅱc上	-	中国陶器	鉢	-	口縁部	灰黄色 Hue2.5Y7/2	28.2	-	-	無釉	灰黄褐色 Hue10YR5/2	内面に僅かに自 然釉	
992	B-23	I	一括	中国陶器	盤	盤Ⅰ類	底部	灰白色 Hue5Y7/1	-	-	-	黄緑色釉	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	外面胴部~底部 露胎	内面に鉄絵 (褐?)
993	D-22	II上b	一括	中国陶器	水注	-	胴部	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	-	-	-	黄釉	明黄褐色 Hue2.5Y6/6	内面露胎	
994	D-20	低IIc	一括	国産陶器	売	-	胴部	灰白色	-	-	-	灰緑色釉	暗オリーブ色	外面施釉	常滑・外面に押印
1008	C - 28	I	_	青磁	碗	上田C類	口縁部	灰白色	_	-	_	青磁釉	オリーブ灰色	残存部全面施釉	15c中頃 雷文
1009	B-26	I	一括	青磁	碗	上田D類	胴部	灰白色 Huel0Y8/	-		-	青磁釉	オリープ灰色 Huel0Y6/2	残存部全面施釉	15c前半〜中頃 内面に草花文 の陽刻
1010	B-28 · 29	I	-	青磁	碗	上田B類	口縁部	灰白色	14.0	-	-	青磁釉	灰オリーブ色	残存部全面施釉	16c~
1011	C-30	_	-	白磁	四耳壺	=	底部	灰白色	-	7.0	-	透明釉	灰白色	高台内外露胎	14c前半~中頃
1018	_	I	_	青磁	砂包	上田C類	口縁~胴部	灰白色	13.3	_	_	青磁釉	オリープ灰色	残存部全面施釉	15c中頃
1019	_	I	. 1:5	青磁	砂	上田C類	口縁部	Hue5Y7/2 灰白色	-	-	_	青磁釉	Huel0Y5/2 明緑灰色 Hu-	残存部全面施釉	15c中頃 口縁
1019			一括					Hue5Y8/ 灰色					e10GY7/1 オリープ灰色		部外由宙文带
100-	-	I	-	青磁	III	稜花皿	口縁部	Hue7.5Y6/1 灰白色	-	-	-	青磁釉	Hue10Y5/2 灰オリーブ色	残存部全面施釉	15c前半~中頃
1020				白磁	碗	碗V類	口縁部	Hue2.5Y8/2	-	-	-	透明釉	Hue5Y6/2	残存部全面施釉	内面に櫛目文
1020 1021	-	-	-	I=11000									压合在		出る服がでん
	-	- I	-	白磁	碗	碗V類	胴部	淡黄色 Hue2.5Y8/3	-	-	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y7/1	口秃	内面胴部下位 段、櫛目文
1021	- -	- I				碗V類	胴部 完形	淡黄色 Hue2.5Y8/3 灰白色 HueN8/	-	-	-	透明釉透明釉	Hue7.5Y7/1 灰白色 Hue10Y8/1	内面露胎	内面胴部下位 段、櫛目文 13c前半~
1021 1022	- - -	I	-	白磁	碗	碗 V 類 - -		淡黄色 Hue2.5Y8/3		-			Hue7.5Y7/1 灰白色		段、櫛目文
	965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 980 981 982 983 984 985 986 987 998 990 991 992 993 994 1008	963 B-23 964 D-21 965 D-21 · 22 966 D-19 967 D-20 968 B-23 969 D-21 970 E-20 971 D-21 972 B-25 973 D-20 974 D-22 975 C-21 976 D-24 977 C-23 978 B-25 979 D-20 980 B-24 981 B-24 981 B-24 982 E-18 983 C-23 984 D-20 985 E-18 986 D-20 987 D-19 · 20 987 D-19 · 20 988 C-25 989 C-23 · D 981 D-20 989 C-23 · D 991 D-20 992 B-23 991 D-20 992 B-23 993 D-22 994 D-20 1008 C-28 1009 B-26	963 B-23 I 964 D-21 低Ⅱc 965 D-21・22 I 966 D-19 低Ⅱc 967 D-20 低Ⅱc 968 B-23 I 969 D-21 低Ⅱc 970 E-20 I 971 D-21 I 972 B-25 II a 973 D-20 低Ⅱa 974 D-22 I 975 C-21 II 976 D-24 I 977 C-23 I 978 B-25 I 979 D-20 I 980 B-24 I 981 B-24 I 982 E-18 I 983 C-23 II 984 D-20 I 985 E-18 I 986 D-20 I 987 D-19・20 I 988 C-25 I 989 C-21・22 I 990 C・D-23 I 991 D-20 低Ⅱc 992 B-23 I 993 D-22 II 994 D-20 低Ⅱc 1009 B-26 I 1009 B-26 I 1009 B-26 I 1009 B-28・29 I 1009 B-28・20 I 1009 B-28・29 I 1009 B-28 I 1009 B-28	963 B-23 I	963 B-23 I 一括 白磁 964 D-21 低IC 一括 白磁 965 D-21・22 I 一 白磁 966 D-19 低IC 一括 白磁 967 D-20 低IC 一括 白磁 968 B-23 I 一括 白磁 970 E-20 I 一括 白磁 971 D-21 I 一括 白磁 971 D-21 I 一括 白磁 972 B-25 IIa 一括 白磁 973 D-20 低Ia 一 白磁 973 D-20 低Ia 一 白磁 975 C-21 II 一括 白磁 976 D-24 I 一括 白磁 977 C-23 I 一括 青花 978 B-25 I 一括 青花 980 B-24 I 一括 青花 981 B-24 I 一括 青花 98	963 B-23 I 一括 白磁 碗 964 D-21 低 IC 一括 白磁 皿 965 D-21・22 I 一 白磁 元 966 D-19 低 IC 一括 白磁 皿 967 D-20 低 IC 一括 白磁 皿 968 B-23 I 一括 白磁 皿 969 D-21 低 IC 一括 白磁 皿 970 E-20 I 一括 白磁 皿 971 D-21 I 一括 白磁 皿 972 B-25 IIa 一括 白磁 四 973 D-20 低 Ia - 白磁 四 四 要 974 D-22 I 一括 白磁 四 四 要 要 要 要 要 要 要 要 要 要 要 每 每 每 每 每 每 每 每 每 每 每 每 每 每 每<	963 B-23 I 一括 白磁 皿 皿区類 964 D-21 低IC 一括 白磁 皿 皿区類 965 D-21・22 I 一 白磁 碗 森田D評 966 D-19 低IC 一括 白磁 皿 森田D評 967 D-20 低IC 一括 白磁 皿 森田D評 968 B-23 I 一括 白磁 皿 森田D評 969 D-21 低IC 一括 白磁 皿 森田D評 970 E-20 I 一括 白磁 皿 森田D評 971 D-21 I 一括 白磁 皿 森田D評 971 D-21 I 一括 白磁 皿 森田D評 972 B-25 IIa 一括 白磁 四耳 森田D評 973 D-20 I 一括 白磁 四耳 本 975 C-21 I 一括 <td>963 B-23 I 一括 自磁 碗 碗収額 定部 964 D-21 低IC 一括 白磁 皿 四区類 口線 四 日線 項目 日線 四 日線 四 日線 四 日線 四 日線 四 日線 回 日線 四 日線 四 日線 四 日線 四 日線 田 日線 日線</td> <td> 1</td> <td> 19-22</td> <td> D - D - D - D - D - D - D - D - D - D</td> <td> D - 2</td> <td> 10</td> <td> 1</td> <td> 10 10 10 10 10 10 10 10</td>	963 B-23 I 一括 自磁 碗 碗収額 定部 964 D-21 低IC 一括 白磁 皿 四区類 口線 四 日線 項目 日線 四 日線 四 日線 四 日線 四 日線 四 日線 回 日線 四 日線 四 日線 四 日線 四 日線 田 日線 日線	1	19-22	D - D - D - D - D - D - D - D - D - D	D - 2	10	1	10 10 10 10 10 10 10 10

第16表 中世の遺物観察表(4)滑石製品

	挿図	掲載			取上					'n	量 (cm))	
758 D-5 II 277 滑石製品 石鍋 口縁~胴部 楊灰色HueSP(A) 197 - - 房下部・胴部部(内食) 197 - - 外面原体付着 所名製品 石鍋 旧総・側部 灰色HueSP(A) - - - 外面原体位以下銀付着 9 - - 外面原体位以下銀付着 - - - - - - 砂面原体分表 - - - 砂面原体分表 -	番号	番号	出土地点	層	番号	種別	器種	部位	色調	-			備考
759 D-5 I 259 治石製品 石鍋 口縁一胴部 灰色HueN6/ 197 外面附即中位以下媒付着 760 D-5c I 941 常石製品 石鍋 胴部 明紫灰色HueStP4/1 外面に媒付着。補格孔。 761 D-5c I 472 治石製品 石鍋 胴部 明部 明報医HueStP4/2 級耳形 762 D-5c I 526 常石製品 加工品 刷部 明都 明都 明初 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日		757	D-5	П	-	滑石製品	石鍋	口縁部	褐灰色Hue7.5YR6/1	31.0	-	-	外面に煤付着
Page	758	D-5	П	277	滑石製品	石鍋	口縁~胴部	褐灰色Hue5YR5/1	22.8	-	-	鍔下部~胴部煤付着	
761 D-5c I 472 治石製品 研絡 L. AVを登色Hue5YR6/3 - - - 載す形 762 D-5c I 526 治石製品 加工品 開部 明報色Hue75YR7/2 - - - 上下面に削棄が残る。 763 D-5 II - 冷石製品 加工品 開部 灰土リーブ色Hue75Y5/2 - - 内面左端に穿孔、内面中央部に削棄。 764 D-5 II - 冷石製品 石錦 底部 灰色Hue75Y6/1 - 14.3 - 765 D-5 II - 冷石製品 石錦 底部 灰色Hue75Y6/1 - 192 媒付着 767 D-5c I 736 滑石製品 石錦 底部 水色Hue10K2/1 - 126 - 768 D-5 II - 治石製品 加工品 - 灰色Hue78/7 - - - - - - - - - - - - - - - - <td></td> <td>759</td> <td>D-5</td> <td>П</td> <td>259</td> <td>滑石製品</td> <td>石鍋</td> <td>口縁~胴部</td> <td>灰色HueN6/</td> <td>19.7</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>外面胴部中位以下煤付着</td>		759	D-5	П	259	滑石製品	石鍋	口縁~胴部	灰色HueN6/	19.7	-	-	外面胴部中位以下煤付着
Formula Fo		760	D - 5d	I	941	滑石製品	石鍋	胴部	明紫灰色Hue5RP4/1	-	-	-	外面に煤付着。補修孔。
763 D - 5		761	D - 5c	I	472	滑石製品	石鍋	胴部	にぶい橙色Hue5YR6/3	-	-	-	縦耳形
Total D - 5		762	D - 5c	I	526	滑石製品	加工品	胴部	明褐色Hue7.5YR7/2	-	-	-	上下面に削痕が残る。
Test	763	D-5	П	-	滑石製品	加工品	胴部	灰オリーブ色Hue7.5Y5/2	-	-	-	内面左端に穿孔。内面中央部に削痕。	
766 D - 5d I 615 滑石製品 石錦 底部 灰色HueN6/ - 17.6 - 767 D - 5c I 736 滑石製品 石錦 底部 木里色Hue10R2/1 - 12.6 - 768 D - 5 II - 滑石製品 加工品 - 灰色HueN5/ - - - 769 D - 5 II 283 滑石製品 加工品 - 灰色HueN6/ -		764	D-5	П	314	滑石製品	石鍋	底部	褐灰色Huel0YR5/1	-	14.3	-	
767 D-5c I 736 常石製品 石縞 底部	112	765	D-5	П	-	滑石製品	石鍋	底部	灰色Hue7.5Y6/1	-	19.2	-	煤付着
768		766	D - 5d	I	615	滑石製品	石鍋	底部	灰色HueN6/	-	17.6	-	
769 D-5 II 283 滑石製品 加工品 - 灰色HueN5/ -		767	D - 5c	I	736	滑石製品	石鍋	底部	赤黑色Huel0R2/1	-	12.6	-	
770 D-5 I 285 溶石製品 加工品 - 灰色HueN6/ - - - 二次加工品 外面に媒付着 771 D-5 I 296 溶石製品 加工品 - 灰色HueN6/ - - - 772 D-5c I 1280 滑石製品 加工品 - 灰色Hue25Y5/1 - - - 773 D-5 I 305 滑石製品 加工品 馬速形 炭灰色Hue25Y5/1 - - - - 775 D-5 I 306 滑石製品 加工品 馬速形 灰色Hue5Y5/1 - - - 上欠は補修孔か周囲に煤付着 776 D-5 I 306 滑石製品 加工品 馬速形 黄灰色Hue25Y5/1 - - 上欠は補修孔か周囲に煤付着 777 D-5 I 766 滑石製品 加工品 財産形 灰色Hue10Y6/1 - - - - - - - - - - - - - -		768	D-5	П	-	滑石製品	石鍋	底部	オリープ黒色Hue5Y3/1	-	-	-	
771 D-5 I 296 滑石製品 加工品 - 灰色HueN6/ -		769	D-5	П	283	滑石製品	加工品	-	灰色HueN5/	-	-	-	
113 D-5c I 1280 滑石製品 加工品 - 灰白色Hue7.5Y7/1 -		770	D-5	П	285	滑石製品	加工品	-	灰色HueN6/	-	-	-	二次加工品 外面に煤付着
773 D-5 II 370 溶石製品 加工品 馬連形 黄灰色Hue25Y5/1 774 D-5 II 305 溶石製品 加工品 馬連形 にぶい赤褐色Hue25Y5/3 775 D-5 II 354 溶石製品 加工品 馬連形 灰色Hue5Y5/1 776 D-5 II 306 溶石製品 加工品 馬連形 灰色Hue5Y5/1 777 D-5 溶石製品 加工品 馬連形 黄灰色Hue25Y5/1 778 D-5 I 766 溶石製品 加工品 土錐形 明梁灰色Hue5RP7/1 779 D-5 II - 溶石製品 加工品 財部 灰色Hue10Y6/1 779 D-5 II - 溶石製品 加工品 土錐形 栗灰色Hue5RP6/1 長さ35 幅1.7 孔径0.5 865 C-16 I - 溶石製品 石鍋 日線~胴部 黒色Hue5Y2/1 192 - 866 D-15 II - 溶石製品 石鍋 日線~胴部 黒色Hue5Y2/1 192 - 867 E-12 II 1157 溶石製品 加工品 - 876 MHR 黄灰色 Hue25Y6/1 787 MHR		771	D-5	П	296	滑石製品	加工品	-	灰色HueN6/	-	-	-	
774 D-5 II 305 清石製品 加工品 馬連形 にぶい赤褐色Hue25Y85/3 775 D-5 II 354 清石製品 加工品 馬連形 灰色Hue5Y5/1 776 D-5 II 306 清石製品 加工品 馬連形 黄灰色Hue25Y5/1 777 D-5 清石製品 加工品 土錘形 明潔灰色Hue5RP7/1 778 D-5c I 766 清石製品 加工品 加工品 月部 灰色Hue10Y6/1 779 D-5 II - 清石製品 加工品 土錘形 紫灰色Hue5RP6/1 長さ35 幅1.7 孔径0.5 865 C-16 I - 清石製品 石鍋 口縁~胴部 黒色Hue5Y2/1 192 - 外面胴部中位以下煤付着 866 D-15 II - 清石製品 石鍋 扇部 黄灰色 Hue25Y6/1 下部に二次加工痕あり 867 E-12 II II 1157 清石製品 加工品 -		772	D - 5c	I	1280	滑石製品	加工品	-	灰白色Hue7.5Y7/1	-	-	-	
113 175 D-5 II 354 滑石製品 加工品 馬連形 灰色Hue5Y5/1 上穴は補修孔か周囲に媒付着 176 D-5 II 306 滑石製品 加工品 馬連形 黄灰色Hue25Y5/1 上穴は補修孔か周囲に媒付着 1777 D-5 滑石製品 加工品 土錘形 明紫灰色Hue5RP7/1 円		773	D-5	П	370	滑石製品	加工品	馬連形	黄灰色Hue2.5Y5/1	-	-	-	
113 776 D-5 II 306 清石製品 加工品 馬連形 黄灰色Hue25Y5/1 上穴は補修孔か周囲に媒付着 777 D-5		774	D-5	П	305	滑石製品	加工品	馬連形	にぶい赤褐色Hue2.5YR5/3	-	-	-	
113 777 D-5 - - 滞石製品 加工品 土錘形 明業灰色Hue5RP7/1 - - - 778 D-5c I 766 滞石製品 加工品 房部 灰色Hue10Y6/1 - - - 779 D-5 II - 滞石製品 加工品 土錘形 柴灰色Hue5RP6/1 長さ35 幅17 孔径0.5 865 C-16 I - 滞石製品 石鍋 口線~胴部 黒色Hue5Y2/1 192 - - 外面胴部中位以下煤付着 118 866 D-15 II - 滞石製品 石鍋 扇部 黄灰色 Hue25Y6/1 - - - 下部に二次加工痕あり 867 E-12 IIa 1157 滞石製品 加工品 - 略灰色HueN3/ - - - -		775	D-5	П	354	滑石製品	加工品	馬連形	灰色Hue5Y5/1	-	-	-	
777 D-5 - - 清石製品 加工品 土鎌形 明常灰色Hue5kP7/1 - - - 778 D-5c I 766 滑石製品 加工品 財部 灰色Hue10Y6/1 - - - 779 D-5 II - 滑石製品 加工品 土鎌形 紫灰色Hue5RP6/1 長さ35 幅1.7 孔径0.5 865 C-16 I - 滑石製品 石鍋 口縁~刷部 黒色Hue5Y2/1 19.2 - - 外面胴部中位以下煤付着 118 866 D-15 II - 滑石製品 石鍋 刷部 黄灰色 Hue25Y6/1 - - - 下部に二次加工痕あり 867 E-12 IIa 1157 滑石製品 加工品 - 暗灰色HueN3/ - - - - -		776	D-5	П	306	滑石製品	加工品	馬連形	黄灰色Hue2.5Y5/1	-	-	-	上穴は補修孔か周囲に煤付着
779 D-5 II - 滑石製品 加工品 土錘形 紫灰色Hue5RP6/1 長さ35 幅1.7 孔径0.5 865 C-16 I - 滑石製品 石鍋 口縁~胴部 黒色Hue5Y2/1 19.2 - - 外面胴部中位以下煤付着 118 866 D-15 II - 滑石製品 石鍋 胴部 黄灰色 Hue25Y6/1 - - - 下部に二次加工痕あり 867 E-12 IIa 1157 滑石製品 加工品 - 暗灰色HueN3/ - - -	113	777	D-5	-	-	滑石製品	加工品	土錘形	明紫灰色Hue5RP7/1	-	-	-	
Ref Re		778	D -5c	I	766	滑石製品	加工品	胴部	灰色Huel0Y6/1	-	-	-	
118 866 D-15 II - 滑石製品 石鍋 胴部 黄灰色 Hue25Y6/1 - - - 下部に二次加工痕あり 867 E-12 IIa 1157 滑石製品 加工品 - 暗灰色HueN3/ - - -		779	D-5	П	-	滑石製品	加工品	土錘形	紫灰色Hue5RP6/1	長さ3.5	幅1.7	孔径0.5	
867 E-12 II a 1157 滑石製品 加工品 - 暗灰色HueN3/		865	C-16	I	-	滑石製品	石鍋	口縁~胴部	黑色Hue5Y2/1	19.2	-	-	外面胴部中位以下煤付着
OUT DE TO THE TOTAL SHEET MICHINE PROPERTY.	118	866	D-15	П	-	滑石製品	石鍋	胴部	黄灰色 Hue2.5Y6/1	-	-	-	下部に二次加工痕あり
121 929 C-22 I 一括 滑石製品 石鍋 口縁部 オリーブ灰色Hue5GY6/1 - - -		867	E-12	Πa	1157	滑石製品	加工品	-	暗灰色HueN3/	-	-	_	
	121	929	C-22	I	一括	滑石製品	石鍋	口縁部	オリープ灰色Hue5GY6/1	-	-	-	

第17表 中世の遺物観察表(5) 土製品

挿図	掲載	載 出土	層	取上番号	種別	器種	色調	注	量 (cm)	並 (cm)					備考
番号	番号	地点	767	八二田 勺	195.770	to#13E	E pag	長さ	幅	穿孔	石英	長石	角閃	他	PRI *5
	626	D-5d	I	942 • 943	土製品	羽口	黄灰色Hue2.5Y5/1	10.1	9.5	4.6	0	0		白色鉱物	
	627	D-5d	-	117?	土製品	羽口	黄灰色Hue2.5Y5/2	7.9	6.6	3.3	0	0		白色鉱物	
	628	D-5	-	-	土製品	羽口	黄灰色Hue25Y5/3	8.5	8.2	2.8	0	0		白色鉱物	
	629	D-5c	I	755	土製品	土錘	黄灰色Hue2.5Y4/1	4.6	2.1	0.6	0	0			
	630	D-5	П	-	土製品	土錘	黑色Hue7.5YR2/1	4.1	1.9	0.5	0	0			
	631	D-5	П	291	土製品	土錘	灰白色Hue5Y7/1	4.4	1.7	0.5	0	0			
	632	D-5	П	-	土製品	土錘	黑色 Hue5Y2/1	3.8	1.9	0.5	0	0			
	633	D-5	П	375	土製品	土錘	灰黄色Hue2.5Y6/2	3.8	2.1	0.5	0	0		白色鉱物	
107	634	D-5	п	-	土製品	土錘	黑色 Hue5Y2/1	4.5	1.5	0.6	0	0			
107	635	D-5a	I	575	土製品	土錘	浅黄色Hue2.5Y7/3	4.1	1.2	0.3	0	0		白色鉱物	
	636	D-5a	I	563	土製品	土錘	にぶい黄橙色Huel0YR6/3	3.6	1.0	0.3	0	0		白色鉱物	
	637	D-5a	I	917	土製品	土錘	にぶい赤褐色Hue5YR5/4	3.0	1.0	0.2	0	0			
	638	D-5a	I	906	土製品	土錘	にぶい橙色Hue5YR6/3	3.0	0.9	0.3	0	0		白色鉱物	
	639	D-5c	I	669	土製品	土錘	にぶい赤褐色Hue5YR5/4	2.6	0.9	0.3	0	0		白色鉱物	
	640	D-5a	I	1298	土製品	土錘	にぶい赤褐色Hue5YR5/4	2.8	0.9	0.2	0	0		白色鉱物	
	641	D-5b	I	245	土製品	土錘	にぶい橙色Hue7.5YR6/4	2.8	0.9	0.2	0	0		白色鉱物	
	642	D-5a	I	909	土製品	土錘	にぶい橙色Hue7.5YR6/4	2.7	1.0	0.2	0	0		白色鉱物	
	643	D-5a	I	1243	土製品	土錘	橙色 Hue7.5YR6/6	2.8	1.1	0.2	0	0			
	868	C-14	I	-	土製品	土錘	明黄褐色 Huel0YR6/6	4.5	1.1	0.3	0	0		白色鉱物	
118	869	D-12d	I	-	土製品	土錘	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	4.1	2.0	0.4	0	0			
110	870	D-12c	I	-	土製品	土錘	灰黄色Hue2.5Y7/2	6.1	3.4	1.5	0	0			
	871	D-13	Πb	1103	土製品	土錘	黄灰色Hue2.5Y4/1	6.3	2.9	0.9	0	0		白色鉱物	

第18表 中世の遺物観察表(6)石製品

挿図 番号	掲載 番号	出土 地点	層	取上 番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
107	644	D-5	-	-	石製品	碁石	2.9	2.4	0.5	5.50	蛇紋岩	
	872	D-13	Πь	1105	石製品	砥石	8.5	5.8	3.5	230.83	天草石	
118	873	D-12	I	-	石製品	碁石	2.4	1.8	0.6	3.99	砂岩	
	874	D-12	I		石製品	碁石	2.3	1.6	0.6	3.57	砂岩	

第19表 中世の遺物観察表(7) 古銭

挿図 番号	掲載	出土	層	取上番号	種別	古銭名			計測	l値(cm	1)		重量 (g)	備考	
番号	番号地	地点	/er	収上留り	1里力リ		a	b	С	d	е	f	厚さ	-K-EL (B)	pm *5
113	780	D-5	II	239	古銭	政和通寶	2.5	2.5	2.1	2.1	0.5	0.5	0.1	1.48	
121	932	D-20	I	一括	古銭	洪武通寶	2.35	2.4	2.0	2.0	0.6	0.6	0.1	2.79	
121	933	D-20	I	一括	古銭	洪武通寶	2.2	2.2	1.7	1.7	0.5	0.5	0.1	2.91	
128	1062	-	I	一括	古銭	寛永通寶	2.4	2.3	1.9	1.9	0.6	0.6	0.1	2.27	

第20表 中世の遺物観察表(8)鉄製品

挿図 番号	掲載 番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
	1026	D-5	-	一括	鉄製品 刀子?		7.4	1.2	9.3	11.26	
	1027	D-5a	П	552	552 鉄製品		3.9	3.3	2.4	23.83	
	1028	E-12	I	-	鉄製品	鉄鏃	5.4	1.3	0.3	11.99	
	1029	D-19·20	I	一括	鉄製品	刀子	5.2	2.0	0.3	12.13	
126	1030	B-26	Пb	一括	鉄製品	鉄鏃	4.5	2.4	0.6	10.39	
120	1031	-	-	-	鉄製品	刀子?	5.4	1.9	0.2	21.01	木質付着
	1032	D-5	-	一括	鉄製品	刀子?	4.7	1.4	0.7	6.31	
	1033	D-5	П	一括	鉄製品	刀子?	5.8	2.3	0.3	9.07	
	1034	D-12	I	-	鉄製品	煙管?	5.0	1.3	0.2	9.50	
	1035	D-5a	П	一括	鉄製品	煙管?	4.8	0.9	0.2	8.32	

第21表 近世の遺物観察表

A G C C C	40.46	111.1		10's 1 305						法量 (cm)						
挿図 番号	掲載 番号	出土 地点	層	取上番号	種別	器種	分類	部位	胎土色調	口径	底径	器高	種類	色調	釉薬 部位	備考
	1036	D-4·5	II	-	陶磁器	Ш	肥前系	口縁部~底部	灰白色 Hue5GY8/1	9.0	4.4	2.1	透明釉	明緑灰色 Hue7.5GY8/1	内面見込み輪状掻き取り	
	1037	D-4b	I	16	陶磁器	鉢	肥前系	底部	灰黄色 Hue2.5Y7/2	-	11.0	-	灰釉	灰白色 Hue5Y7/2	畳付~高台内露胎	内面目跡
	1038	E-5	I	-	陶磁器	碗	肥前系	口縁~胴部	灰白色 Huel0Y8/1	11.2	-	-	透明釉	灰白色 Huel0Y7/1	残存部全面施釉	
	1039	D-5c	I	346	陶磁器	碗	肥前系	胴部~底部	浅黄色 Hue2.5Y7/3	-	3.6	-	灰釉	灰白色 Hue2.5Y7/1	畳付~高台内露胎	京焼風陶器
127	1040	D-5c	I	-	薩摩焼	碗	龍門司系	胴部~底部	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	-	4.8	-	鉄釉	褐灰色 Hue7.5YR4/1	残存部全面施釉	
121	1041	D-4·5	Ι	-	陶磁器	鉢	肥前系	口縁部~胴部	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	-	-	-	鉄釉	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	残存部全面施釉	白土による刷毛目文
	1042	D-4·5	П	-	陶磁器	擂鉢	肥前系	口縁部~胴部	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	-	-	-	鉄釉	赤灰色 Hue2.5YR5/2	残存部全面施釉	17世紀代 (1650~)
	1043	D-4·5	Ι	-	薩摩焼	鉢	苗代系	口縁部~胴部	にぶい黄橙色 Huel0YR6/3	32.0	-	-	鉄釉	灰色Huel0Y4/1	残存部全面施釉	
	1044	D-5a	I	541 · 542	薩摩焼	摺鉢	苗代系	口縁部~胴部	灰黄色 Hue2.5Y7/2	21.0	-	-	鉄釉	灰黄褐色 Huel0YR6/2	外面無釉	18世紀代
	1045	D-5	Ι	-	薩摩焼	土瓶	-	底部	明赤褐色 Hue5YR5/6	-	10.6	-	鉄釉	灰黄褐色 Huel0YR5/2	外面無釉	
	1046	D-13	Ι	-	薩摩焼	摺鉢	堂平窯系	口縁部	灰黄色 Hue2.5Y6/1	31.0	-	-	鉄釉	灰褐色 Hue7.5YR5/2	残存部全面施釉	堂平Ⅱ期17世紀後半~
	1047	D-15	I	-	陶磁器	擂鉢	肥前系	口縁部~胴部	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	-	-	-	鉄釉	にぶい黄褐色 Huel0YR5/3	口縁~胴部上位施釉	17世紀代(1631~)
	1048	D-12b	I	-	陶磁器	紅皿	-	口縁~胴部	灰白色 Hue5Y8/1				透明釉	明緑灰色 Hue10GY8/1	外面胴部露胎	
	1049	D-21 · 22	I	-	陶磁器	碗	肥前系	底部	にぶい黄橙色 Huel0YR7/3	-	2.2	-	灰釉	灰白色 Hue5Y7/1	高台内露胎	
	1050	D-25	I	一括	陶磁器	鉢	肥前系	胴部~底部	浅黄色 Hue2.5Y7/4	-	11.0	-	透明釉	オリープ灰色 Hue2.5GY6/1	内面、畳付~高台内露胎	
	1051	D-21·22	I	-	陶磁器	鉢	肥前系	口縁部	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	-	-	-	鉄釉	暗オリーブ色 Hue5Y4/3	残存部全面施釉	白土による刷毛目文
	1052	C-23	I	一括	薩摩焼	摺鉢	苗代系	口縁部~胴部	橙色 Hue2.5YR6/6	24.0	-	-	鉄釉	灰黄色 Hue2.5Y6/2	外面施釉	
128	1053	D-21·22	I	-	薩摩焼	土瓶	-	注口部	灰黄褐色 Huel0YR6/2	-	-	-	鉄釉	黒褐色 Huel0YR3/2	残存部全面施釉	
	1054	C-23	Ι	一括	陶磁器	-	関西系	口縁部~底部	浅黄橙色 Hue10YR8/3	8.8	3.8	1.6	透明釉	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6	内外面上位施釉	
	1055	C-23	I	一括	薩摩焼	植木鉢	苗代系	口縁部~胴部	灰黄色 Hue2.5Y6/2	24.0	-	-	鉄釉	灰黄色 Hue2.5Y7/2	残存部全面施釉	
	1056	C-28	Ι	-	陶磁器	Ш	肥前系	口縁部	灰白色 Hue2.5GY8/1	-	-	-	透明釉	灰白色 Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉	
	1057	B-28	Ι	一括	陶磁器	碗	肥前系	口縁部	褐灰色 Huel0YR5/1	-	-	-	鉄釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y4/2	残存部全面施釉	
	1058	C-27	I	-	陶磁器	碗	肥前系	底部	淡黄色 Hue2.5Y8/3	-	4.0	-	透明釉	灰色Hue5Y6/1	内面見込み輪状掻き取り	
	1059	D-1?	Ι	-	陶磁器	碗	肥前系	口縁部	灰白色 Huel0Y8/1	-	-	-	透明釉	灰白色 Huel0Y7/1	残存部全面施釉	
	1060	C-29,30	I	-	陶磁器	油壺	肥前系	胴部	灰白色 Hue7.5Y8/1	-	-	-	透明釉	明緑灰色 Hue7.5GY8/6	内面露胎	
	1061	B-27,28	Ι	-	薩摩焼	擂鉢	-	口縁~胴部	にぶい赤褐色 Hue2.5YR5/4	-	-	-	鉄釉	暗赤灰色 Huel0R3/1	残存部全面施釉	

第4章 自然科学分析

中郡遺跡群における放射性炭素年代(AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

中郡遺跡群は、鹿児島県出水市野田町下名ほかに所在し、出水平野を形成する沖積地(扇状地)西端に立地する。測定対象試料は、4号竪穴建物最下部の炉床出土木炭(No.1:IAAA-121876)、5号竪穴建物炉基底部出土木炭(No.2:IAAA-121877)、同建物貼床下の最下炉床面出土木炭(No.3:IAAA-121878)、土坑7埋土出土木炭(No.4:IAAA-121879)の合計4点である(表22)。

2 測定の意義

遺構の年代を把握する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリー酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により 不純物を化学的に取り除く。その後, 超純水で中性になるまで希釈し, 乾燥させる。AAA 処理における酸処理では, 通常 1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCI) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い, 0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」, 1M 未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で 詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした 14 C - AMS 専用装置(NEC 社製)を使用し, 14 C の計数, 13 C 濃度(13 C/ 12 C), 14 C 濃度(14 C/ 12 C)の測定を行う。測定では,米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(+Ox +II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

第22表 放射性炭素年代測定結果(1)

										δ 13C i	浦正あり		
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 130	(‰)	(AMS)	L	ibby Ag	e		MC (%	`
									(yrBP)		1	DIVIC (%)
IAAA - 121876	No.1	4号竪穴建物 最下部 炉 床	木炭	AAA	-26.21	±	0.57	920	±	30	89.2	±	0.28
IAAA - 121877	No.2	5 号竪穴建物 炉基底部	木炭	AAA	- 25.03	±	0.59	800	±	30	90.57	±	0.28
IAAA - 121878	No.3	5号竪穴建物 貼床下 最 下炉床面	木炭	AAA	- 26.08	±	0.49	830	±	30	90.21	±	0.28
IAAA - 121879	No.4	土坑7 埋土	木炭	AAA	- 26.86	±	0.56	580	±	20	93.07	±	0.28

5 算出方法

- (1) δ ¹³C は,試料炭素の ¹³C 濃度(13 C/ 12 C)を測定し,基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表 22)。 AMS 装置による測定値を用い,表中に「AMS」と注記する。
- (2) 14 C 年代(Libby Age:yrBP)は、過去の大気中 14 C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期(5568 年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 14 C 年代は δ 13 C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 22 に、補正していない値を参考値として表 23 に示した。 14 C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 14 C 年代の誤差(\pm 1 σ)は、試料の 14 C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14 C 濃度の割合である。pMC が小さい(14 C が少ない)ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上(14 C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も δ 13 C によって補正する必要があるため、補正した値を表 22 に、補正していない値を参考値として表 23 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ¹⁴C 濃度を元に描 かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C 濃度変化などを 補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 $(1 \sigma = 68.2\%)$ あるいは 2 標準偏差 $(2 \sigma = 95.4\%)$ で表示 される。グラフの縦軸が ¹⁴C 年代. 横軸が暦年較正年代を表 す。暦年較正プログラムに入力される値は、 δ ¹³C 補正を行 い. 下一桁を丸めない ¹⁴C 年代値である。なお. 較正曲線お よび較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。 また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代 の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要が ある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベー ス (Reimer et al. 2009) を用い, OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、 特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プ ログラムに入力する値とともに参考値として表23に示した。 暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) され

た年代値であることを明示すために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果 (第 22·23 表, 第 129 図)

試料の 14 C 年代は、4 号竪穴建物最下部の炉床出土木炭 No.1 が 920 ± 30yrBP、5 号竪穴建物炉基底部出土木炭 No.2 が 800 ± 30yrBP、同建物貼床下の最下炉床面出土木炭 No.3 が 830 ± 30yrBP、土坑 7 埋土出土木炭 No.4 が 580 ± 20yrBP である。5 号竪穴建物の炉基底部から出土した No.2 と貼床下の最下炉床面から出土した No.3 の値は、誤差(± 1 σ)の範囲で重なり、近い年代を示す。

暦年較正年代(1 σ)は、No.1 が 1045 ~ 1159cal AD の間に 3 つの範囲、No.2 が 1224 ~ 1260cal AD の範囲、No.3 が 1191 ~ 1256cal AD の間に 2 つの範囲、No.4 が 1320 ~ 1408cal AD の間に 2 つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学理、

測定上の問題は認められない。 文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, $Radiocarbon\ 51(1)$, 337 $-\ 360$

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0 – 50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111 – 1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355 – 363

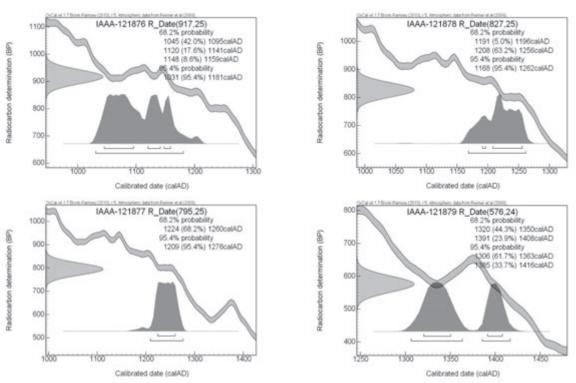
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337 - 360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355 – 363

第23表 放射性炭素年代測定結果(2)

測定			δ 13C $\dot{1}$	補正なし			煌	年較正	用	1 σ 暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
番号	Ag	e (yr	3P)	pN	AC (%)		(yrBP)		1 6 倍平八吨四	2 σ 留平1、靶四
IAAA - 121876	940	±	20	88.98	±	0.26	917	±	25	1045calAD — 1095calAD (42.0%) 1120calAD — 1141calAD (17.6%) 1148calAD — 1159calAD (8.6%)	1031calAD — 1181calAD (95.4%)
IAAA - 121877	800	±	20	90.57	±	0.26	795	±	25	1224calAD - 1260calAD (68.2%)	1209calAD - 1276calAD (95.4%)
IAAA - 121878	850	±	20	90.01	±	0.27	827	±	25	1191calAD — 1196calAD (5.0%) 1208calAD — 1256calAD (63.2%)	1168calAD - 1262calAD (95.4%)
IAAA - 121879	610	±	20	92.72	±	0.26	576	±	24	1320calAD — 1350calAD (44.3%) 1391calAD — 1408calAD (23.9%)	1306calAD — 1363calAD (61.7%) 1385calAD — 1416calAD (33.7%)



第129図 年代測定結果

中郡遺跡群における放射性炭素年代(AMS法) ・樹種同定・種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中郡遺跡群では、縄文時代の集石や落し穴、中世の竪穴建物 跡、掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。中世の遺構には、 島津氏初代忠久の居館跡といわれる「木牟礼城館跡」に関連する と考えられる建物跡もあり、輸入陶磁器が多数出土している。

本報告では、杭列などの出土木材を対象として、年代確認のた めの放射性炭素年代測定と古植生・木材利用を検討するための樹 種同定を実施する。また、遺構内から出土した種実を対象として、 古植生や植物利用を検討するための種実同定を実施する。

I. 放射性炭素年代測定

1. 試料

試料は、SA1を校正する杭2点、低湿地から出土した木製品1 点、D-21Fb 出土の木材 1 点の合計 4 点 (試料番号 9~12) で ある。

2. 分析方法

試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着して いる場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去 する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH に よる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCIによりアルカリ処 理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・ 酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(Ⅱ)と銀箔 (硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、 500℃ (30分) 850℃ (2時間) で加熱する。液体窒素と液体窒 素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO2 を精製 する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO2と鉄・水素 を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファ イト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加

速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C -AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH - 2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供さ れるシュウ酸(HOX - Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定も行う。 また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用い て *δ* 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。 また, 測定年代は1,950年を基点とした年代 (BP) であり, 誤 差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、 暦 年 較 正 は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0 (Copyright 1986 - 2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差(One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5.568年と して算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変 動による大気中の 14C 濃度の変動,及び半減期の違い(14C の半 減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。 暦年較正に関しては、 本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プロ グラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対 応するため、1年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 σ , 2σ (σ は統計的に真の値が 68%. 2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲) 双方の値を示 す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とし た場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したも のである。

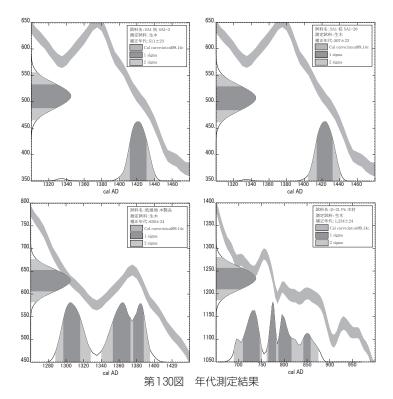
3. 結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表 24 に示す。また、 各試料の暦年較正曲線図を 130 図に示す。同位体効果の補正を 実施した測定結果(補正年代)は、試料番号9(514)と試料番 号 10 (523) が共に 510 ± 20BP. 試料番号 11 (低湿地の木製品) が 630 ± 20BP, 試料番号 12 (第 102 図) が 1,230 ± 20BP である。 また、補正年代に基づく暦年較正結果 (2 σの確率 1) は、試料

第24表 放射性炭素年代測定結果

地区	種類	処理	測定年代	δ 13 C	補正年代		暦年較正結果			C I N
遺構など	性粗	処理 方法	BP	(%)	(暦年較正用) BP	誤差	cal BC/AD cal BI		相対比	Code No.
No. 9 SA1 - 3 杭	生木	AAA	580 ± 20	- 29.23	510 ± 20	σ	cal AD 1,413 - cal AD 1,431 cal BP 537	- 519	1.000	IAAA —
5A1 - 3 11t	生小	AAA	380 ± 20	0.49	(511 ± 23)	2 σ	cal AD 1,402 - cal AD 1,441 cal BP 548	- 509	1.000	130499
No. 10 SA1 - 20 杭	生木	AAA	540 ± 20	- 26.75	510 ± 20	σ	cal AD 1,414 - cal AD 1,432 cal BP 536	- 518	1.000	IAAA —
523	土小	AAA	340 ± 20	0.41	(507 ± 23)	2 σ	cal AD 1,405 - cal AD 1,442 cal BP 545	- 508	1.000	130500
							cal AD 1,297 - cal AD 1,317 cal BP 653	- 633	0.374	
No. 11				- 28.43		σ	cal AD 1,354 - cal AD 1,374 cal BP 596	- 576	0.381	l
低湿地木製品	生木	AAA	690 ± 20	±	630 ± 20 (630 ± 24)		cal AD 1,376 - cal AD 1,389 cal BP 574	- 561	0.245	IAAA — 130501
不製品				0.51	(000 - 21)	2 σ	cal AD 1,288 - cal AD 1,329 cal BP 662	- 621	0.403	100001
						Δ σ	cal AD 1,340 - cal AD 1,386 cal BP 610	- 564	0.597	
							cal AD 710 - cal AD 747 cal BP 1,240	- 1,203	0.405	
N 10						σ	cal AD 766 - cal AD 783 cal BP 1,184	- 1,167	0.205	
№ 12 D – 21 Fb 木材	生木	AAA	1.280 ± 20	- 27.70	1,230 ± 20	0	cal AD 788 - cal AD 817 cal BP 1,162	- 1,133	0.273	IAAA —
木材 (第 102 図)	生不	AAA	1,280 = 20	0.51	$(1,234 \pm 24)$		cal AD 843 - cal AD 859 cal BP 1,107	- 1,091	0.117	130502
(30 102 [2])						2 σ	cal AD 689 - cal AD 751 cal BP 1,261	- 1,199	0.384	
						Δ σ	cal AD 761 - cal AD 876 cal BP 1,189	- 1,074	0.616	

[|] 別型車方法の AAA は、酸処理 アルカリ処理 一酸処理を示す。
2) 年代値の類出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。
3)BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
4) 付記した認識は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
4) 付記した認識は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
6) 付記した認識は、減速認定。(測定値の 688 が入る強囲)を年代値に換算した値。
5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROCRAM CALIB REV60 (Copyright 1986 — 2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
6) 暦年の計算には、補正年代に 0 下暦年較正月年代として示した。不相目を丸める前の値を使用している。
7) 年代値は、1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正単年代として示した。不相目を丸める前の値を使用している。
9) 報針的は真の値が入る確率は oよ 68.3%、2 oよは54.9% である。
9) 相対比は、σ、2 oのそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



番号9がcal AD1,402 - 1,441, 試料番号10がcal AD1,405 - 1,442, 試料番号11がcal AD1,340 - 1,386, 試料番号12がcal AD761 - 876である。

4. 考察

SA1 を構成する杭 2 点は、後述する樹種同定により、SA1 -3 が針葉樹のマツ属複維管束亜属、SA1 -20 が広葉樹のシキミに同定されている。年代測定結果は、補正年代が共に 510 \pm 20BP であり、暦年較正結果(2σ)でも SA1 -3 が cal AD1,402 -1,441、SA1 -20 が cal AD1,405 -1,442で、ほぼ一致する結果となった。この結果から、SA1 の構築時期として、15世紀前半が想定される。低湿地の木製品は、補正年代が 630 \pm 20BP、暦年較正結果(2σ の確率 1)が cal AD1,340 -1,386 であり、SA1 よりも若干古い 14世紀中頃~後半にかけての年代の可能性がある。また、D -21 Fb の木材は、補正年代が 1,230 \pm 20BP、暦年較正結果(2σ の確率 1)が cal AD761 -876 であり、古代の 8世紀後半~9世紀後半まで遡ることが推定される。

各試料の測定結果については、共伴する遺物や層序の情報も含めて検証することが必要である。

Ⅱ.樹種同定

1. 試料

試料は、SA1の杭5点(試料番号 $1\sim5$)、低湿地出土の木製品1点(試料番号6)、D-21Fbの木材1点(試料番号7)の合計7点である。このうち、試料番号 $4\sim7$ の4点は、年代測定を実施した4点と同一個体である。

2. 分析方法

各試料の破損部等から少量の木片を採取する。剃刀を用いて木

片から木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水 クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液) で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で 木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立 行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較し て種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を第25表に示す。木製品は、針葉樹1分類群(マッ属複維管東亜属)と広葉樹5分類群(シキミ・クスノキ・サカキ・エゴノキ属・ハイノキ属ハイノキ節)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属(Pinus subgen. Diploxylon) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材 部から晩材部への移行は急~やや緩やかで,晩材部の幅は広い。 垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は,仮道管,柔細胞,

第25表 樹種同定結果

番号	遺構・層位など	遺物番号等	器種	種類
1	SA1 - 4	518	杭	マツ属複維管束亜属
2	SA1 - 8	516	杭	エゴノキ属
3	SA1 - 12	521	杭	ハイノキ属ハイノキ節
4	SA1 - 3	514	杭	マツ属複維管束亜属
5	SA1 - 20	523	杭	シキミ
6	低温地	-	木製品	サカキ
7	D - 21 Fb	第 102 図	木材	クスノキ

第26表 種実同定結果(1)

第26表	種美	同定結果	 果(I)											
番号	×	層			年月日	分類群	部位	状態	個数	枝番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mn	1)
1	D - 21	低Ⅱc	Hc		24.12.12	モモ	核	破片	1	_	26.4 +	22.8 +	9.4	半分厚,頂部欠損,縫合線残存
2	D - 21	低II d	Eh		24.12.5	ヤマモモ	核	破片	2	_	3.8 +	_	_	
2	D - 21	低IId	Eh		24.12.5	クスノキ	種子	完形	1	_	5.9	5.7	5.4	
2	D - 21	低II d	Eh		24.12.5	クスノキ	種子	破片	2	1	5.1 +	3.7 +	4.0 +	+
2	D - 21	低II d	Eh		24.12.5	クスノキ	種子	破片	_	2	2.0 +	- J.7 +	-	1
-														
3	D — 20	低Ⅱa	Bb		20121109	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	-	40.8	24.9	24.5	
4	D — 20	低II b	Db		24.11.8	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	_	22.9 +	13.3 +		+
5	D - 20	低Ⅱc	Eb	一括	24.12.12	キカラスウリ	種子	完形	1	_	12.9	7.3	2.8	
6	D - 20	低Ⅱc	Dd(小)	一括	24.11.21	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	_	35.9	18.1	15.5	+
7	D - 20	低II d	Сс	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	16	1	6.5	6.6	6.0	
7	D - 20	低II d	Сс	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	_	2	6.4	6.3	5.7	
7	D - 20	低II d	Cc	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	_	3	6.8	6.9	6.5	
7	D - 20	低II d	Сс	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	_	4	6.0	6.2	5.8	+
									_					+
7	D — 20	低II d	Cc	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形		5	7.1	7.0	6.4	
7	D - 20	低II d	Cc	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	-	6	6.4	6.0	5.7	
7	D — 20	低II d	Сс	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	_	7	6.6	6.7	6.3	
7	D — 20	低II d	Сс	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	-	8	6.8	6.3	5.8	
7	D — 20	低II d	Сс	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	-	9	6.1	6.0	5.9	
7	D - 20	低 II d	Сс	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	-	10	6.7	6.5	5.8	
7	D - 20	低II d	Сс	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	-	11	6.6	6.6	6.0	
7	D - 20	低II d	Сс	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	完形	15	_	_	_	_	欠損,3個食痕
7	D - 20	低II d	Сс	樹種集中	.12.12	クスノキ	種子	破片	243	_	-	_	_	5 個食痕
8	D - 20	低II c	Cd	一括	24.12.18	モモ	核	完形	1	_	26.8	21.3	17.5	TO 1875 APPLIANCE
9				10										省並不行
	D - 20	低Ⅱ a	Bo	HH T +c	20121109	モモ	核	完形	1		27.1 +	20.8	14.4	頂部欠損
10	D - 20	SK17	Cd	埋土一括	24.12.12	ウメ	核	完形	1	_	13.4 +	13.9	8.2 -	·
10	D - 20	SK17	Cd	埋土一括	24.12.12	ウメ	核	破片	1	-	11.8 +	_	_	
11	D − 20 ~ 22	低II c		トレンチ	20121025	モモ	核	半分	1	_	28.4	20.2	7.4 +	
12	D - 20	低Ⅱc	Cb	一括	24.12.10	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	-	36.6 +	24.9 +	17.2	-
12	D - 20	低Ⅱc	Cb	一括	24.12.10	££	核	完形	2	1	24.5	18.0	14.6	
12	D - 20	低Ⅱc	Cb	一括	24.12.10	モモ	核	完形	_	2	25.5	17.8 +	14.6	1
-										_				
12	D - 20	低Ⅱ c	Cb	一括	24.12.10	モモ	核	半分	1		23.5 +	18.9 +		+
13	D — 22	低Ⅱc	Ib		24.12.12	モモ	核	破片	1	_	21.2 +	16.8 +		+
14	D — 20	低Ⅱc	Cd		24.12.13	アカガシ亜属	果実	破片	1	_	10.9 +	15.4 *	_	乾燥により裂開, 着点径 6.3mm
14	D - 20	低Ⅱc	Cd		24.12.13	コナラ属	子葉	破片	3	_	7.3	4.8	2.6	+ 半分厚
15	D - 20	低Ⅱc	Cd		24.12.17	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	_	44.1 +	22.6 +	20.3	+
15	D - 20	低Ⅱc	Cd		24.12.17	モモ	核	完形	1	-	29.8	21.7	16.4	
15	D - 20	低Ⅱc	Cd		24.12.17	モモ	核	半分	1	_	23.0 +	17.3	7.6	+
16	D — 22	低Ⅱ	Ic		24.12.13	モモ	核	完形	1	_	21.3	15.1	12.6	
17	D - 21	低Ⅱc	Нс	一括	24.12.12	モモ	核	破片	2	1	26.4 +	21.0 +		+
17	D - 21	低II c	Нс	一括	24.12.12	モモ	核	破片	_	2		18.4 +		
				70			_							+
18	D — 21	低Ⅱc	Нс		24.12.18	モモ	核	完形	1	_	25.0 +	16.0 +	13.5	表面摩耗
19	D — 20	低 II d	Dd		24.11.21	££.	核	破片	1	_	22.4 +	16.6		+
20	D - 20	低II d	Cb		24.12.12	ツブラジイ	果実	完形	1	_	10.0 +	7.3	7.9	
21	D - 20	低Ⅱc	aD		20121120	モモ	核	半分	1	_	27.1 +	21.8	7.8 +	+
22	D - 20	低Ⅱc	Cb	一括	24.12.11	モモ	核	完形	2	1	27.9	22.4	15.7	
22	D - 20	低Ⅱc	Cb	一括	24.12.11	モモ	核	完形	-	2	31.3	21.6	15.8	
23	D - 21	低II d	Eb		24.11.21	t ŧ	核	完形	1	_	23.8	20.8	15.6	
24	D - 20	低 2c	Dg		24.11.28	モモ	核	完形	1	_	24.1	18.2	14.2	
25	D - 20	低Ⅱa	Cb		20121109	モモ	核	破片	1	_	21.8 +	19.3	7.7	
26	D - 20		CD	トレンチ		モモ	核	完形	1		29.8	21.0 +	15.4	+
		II g	0:	・レンナ	20121025					_				
27	D - 20	低Ⅱc	Cd	L-r	24.12.13	モモ	核	破片	1	_	27.5 +	20.8	8.5	
28	D - 21	低II c	Ec	一括	24.12.6	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	_	22.4 +	13.1 +	11.0 +	•
28	D — 21	低Ⅱc	Ec	一括	24.12.6	マツ属複維管束亜属	種子	完形	1	-	3.1	1.8	1.3	
28	D - 21	低Ⅱc	Ec	一括	24.12.6	モモ	核	完形	1	_	25.1	20.0	15.4	·
29	D - 20	低Ⅱc	Db	種実一括	24.11.26	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	-	34.9 +	19.8 +	19.4	+
29	D — 20	低Ⅱc	Db	種実一括	24.11.26	モモ	核	完形	1	_	27.8	21.0	15.6	
29	D — 20	低II c	Db	種実一括	24.11.26	モモ	核	半分	3	1	25.4 +	20.0	7.6	-
29	D - 20	低Ⅱc	Db	種実一括	24.11.26	モモ	核	半分	_	2	27.2 +	20.6		+
29	D - 20	低Ⅱc	Db	種実一括	24.11.26	モモ	核	半分	_	3	25.5 +	20.9		+
29	D - 20	低II c	Db	種実一括	24.11.26	モモ	核	破片	3	1		19.6 +		:
									_					
29	D - 20	低II c	Db	種実一括	24.11.26	モモ	核	破片		2	25.3 +	19.3 +	6.4	
29	D - 20	低Ⅱ c	Db	種実一括	24.11.26	モモ	核	破片	-	3	21.2 +	16.3 +		+
30	D — 20	低Ⅱc	De	堅果類一括	24.11.28	t t	核	完形	1	-	22.9 +	18.3 +	15.2	
30	D - 20	低Ⅱc	De	堅果類一括	24.11.28	モモ	核	破片	1	_	21.1 +	13.6 +	6.6	+
31	D - 20	低Ⅱc	Db		24.11.8	モモ	核	完形	1	_	26.8	19.1	13.8 +	+
32	D — 20	低II c	Dc	_	24.11.8	モモ	核	完形	1	-	22.4	17.2 +	13.3	腹面摩耗
33	D - 21	低Ⅱc	Ea	一括	24.11.2	モモ	核	完形	1	_	25.9	22.1	18.8	
33	D - 21	低II c	Ea	一括	24.11.2	モモ	核	破片	1	_	21.9 +	16.6		+
34	D - 20	低II c	Db	21-4	24.11.8	モモ	核	完形	1	_	26.7	20.1	14.5	+
														+
35	D - 20	低II b	Da	Affirty Let	24.12.20	モモ	核	完形	1	-	26.3	18.8		+ + + + + + + + + + + + + + + + + + +
36	D — 21	低Ⅱ c	Gb	種実一括	24.12.4	モモ	核	破片	3	1	24.9 +	18.7 +		表面摩耗
36	D — 21	低Ⅱc	Gb	種実一括	24.12.4	モモ	核	破片	-	2	19.8 +	16.5 +		+
36	D - 21	低Ⅱc	Gb	種実一括	24.12.4	モモ	核	破片	_	3	21.5 +	16.6 +	6.8	+
37	D — 20	低Ⅱc	De		24.11.28	モモ	核	破片	1	_	20.8 +	17.1	7.2	+

第27表 種実同定結果(2)

カニノン	一生人		(上)											
番号	区	層			年月日	分類群	部位	状態	個数	枝番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	
38	D - 20	低II c	Cb		24.11.8	モモ	核	完形	1	-	26.8 +	19.2 +	16.9 +	表面摩耗
39	D - 20	低II c	Cd		24.12.14	モモ	核	完形	1	-	33.7	21.9 +	15.1	腹面わずかに欠損
40	D - 20	低Ⅱc	Dc	一括	24.12.6	モモ	核	完形	3	1	26.3	19.8	14.8	
40	D - 20	低II c	Dc	一括	24.12.6	モモ	核	完形	-	2	28.8	20.9	15.6	
40	D - 20	低II c	Dc	一括	24.12.6	モモ	核	完形	-	3	22.4	19.3	13.6	
40	D - 20	低II c	Dc	一括	24.12.6	モモ	核	半分	2	1	25.1	21.1	8.9 +	
40	D - 20	低II c	Dc	一括	24.12.6	モモ	核	半分	-	2	20.3	16.4	6.4 +	
40	D - 20	低II c	Dc	一括	24.12.6	モモ	核	破片	1	-	29.2 +	21.0	8.0 +	
41	D - 20	低Ⅱc	Сс	一括	24.12.10	モモ	核	完形	4	1	35.4	20.5	14.9	頂部鋭尖
41	D - 20	低II c	Сс	一括	24.12.10	モモ	核	完形	-	2	27.0	20.9	15.9	
41	D - 20	低II c	Сс	一括	24.12.10	モモ	核	完形	_	3	29.7	18.0	12.8	
41	D - 20	低II c	Сс	一括	24.12.10	モモ	核	完形	-	4	26.2 +	18.3 +	12.8 +	側面食痕
42	D - 20	低II a	Вс		20121109	モモ	核	完形	1	-	23.3 +	21.5	14.7 +	欠損
43	D - 20	低Ⅱ d	Dc	一括	24.12.12	クスノキ	種子	完形	5	1	6.1	6.0	5.1	
43	D - 20	低II d	Dc	一括	24.12.12	クスノキ	種子	完形	-	2	6.1	6.0	5.0	
43	D - 20	低Ⅱ d	Dc	一括	24.12.12	クスノキ	種子	完形	-	3	5.9	5.8	5.0	
43	D - 20	低Ⅱ d	Dc	一括	24.12.12	クスノキ	種子	完形	-	4	6.5	6.6	6.0	
43	D - 20	低Ⅱ d	Dc	一括	24.12.12	クスノキ	種子	完形	-	5	6.6	6.5	5.7	
43	D - 20	低Ⅱ d	Dc	一括	24.12.12	エゴノキ	種子	破片	9	-	7.9	_	_	計 1 個体分
44	D - 20	低II c	Da		24.11.21	マツ属複維管東亜属	球果	破片	2	1	43.5 +	21.1 +	13.6 +	
44	D - 20	低II c	Da		24.11.21	マツ属複維管束亜属	球果	破片	-	2	35.3 +	16.6 +	7.5 +	
44	D - 20	低II c	Da		24.11.21	コナラ属	果実	破片	1	-	16.1 +	_	_	欠損
44	D - 20	低II c	Da		24.11.21	種実ではない	不明	破片	1	-	_	_	_	植物片 (木材?)
合計														
栽培種						ウメ	核		2					
						モモ	核		56					
その他の)木本種実					マツ属複維管束亜属	球果		9					
							種子		1					
						ヤマモモ	核		2					
						アカガシ亜属	果実		1					
						コナラ属	果実 子葉		1					
						ツブラジイ	ナ来 果実		3					
						クスノキ	来夫 種子		282					
						エゴノキ	種子		9					
草本種ま	3					キカラスウリ	種子		1					
, F-1352	•					1.4.7.74.7.7	1.42.3							

水平樹脂道,エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列, $1\sim10$ 細胞高。

・シキミ (Illicium anisatum L.) シキミ科シキミ属

散孔材で、道管壁は中庸~薄く、横断面では多角形、単独または2~4個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状~対列状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。

・クスノキ (Cinnamomum camphora (L.) Presl) クスノキ科ニッケイ属

散孔材で、道管径は比較的大径、道管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2~3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状~翼状。柔細胞には油細胞が認められる。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2~3個が複合して散在 し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。 道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組 織は異性、単列、1~20細胞高。

・エゴノキ属 (Styrax) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2~4個が複合して 散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有

- し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、 $1 \sim 3$ 細胞幅、 $1 \sim 20$ 細胞高。
- ・ハイノキ属ハイノキ節 (Symplocos sect. Lodhra)

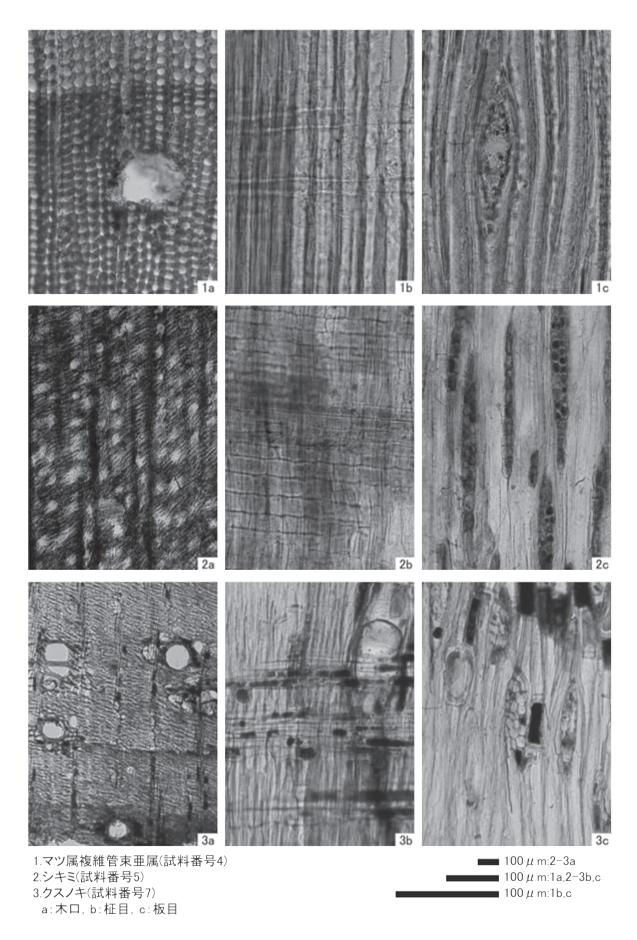
ハイノキ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では多角形〜角張った楕円形、単独および $2\sim5$ 個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、 $1\sim3$ 細胞幅、 $1\sim20$ 細胞高で、時に上下に連結する。

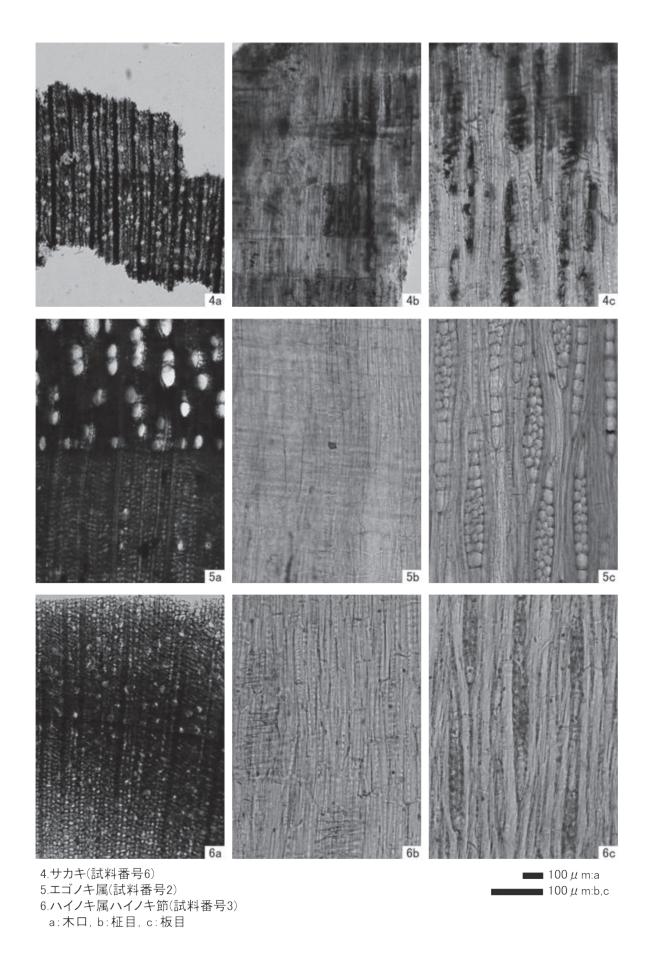
4. 考察

木製品・杭材・木材には、合計7種類が認められた。各種類の 材質についてみると、針葉樹のマツ属複維管束属は、軽軟である が、強度と保存性は比較的高い。スギは、木理が通直で割裂性・ 耐水性が比較的高い。広葉樹のシキミ、サカキ、エゴノキ属、ハ イノキ節は、比較的重硬で強度が高い。クスノキは、やや軽軟~ 中庸で、強度も低いが、耐朽性・耐虫性は極めて高い。

SA1を構成する杭5点には、針葉樹の複維管束亜属、広葉樹のシキミ、エゴノキ属、ハイノキ節が認められ、多くの樹種で構成されている。材質的には、水湿に強い木材や、強度の高い木材が利用される傾向がある。このうち、複維管束亜属とシキミの年代測定結果は、補正年代が共に510 ± 20BPであり、構築時に複数の種類を用いて作られたことが推定される。このうち、複維管束亜属やエゴノキ属については、低湿地の種実でも確認されている。多少時期が異なる可能性があるが、SA1の構築時にも周辺に生育



第131図 樹種同定 木材(1)



第132図 樹種同定 木材(2)

バラ科サクラ属

しており、その木材を杭に利用したことが推定される。

低湿地の木製品はサカキであり、強度を要する器種・部位であったことが推定される。一方、D - 21 Fb の木材は、クスノキであった。クスノキは、主に西日本の沿海地を中心に分布しており、巨木になることから、大型の木材を得やすい。耐朽性・耐虫性が高く、樟脳成分により芳香性もある。クスノキについては、後述する種実でも確認されており、遺跡周辺に生育していた樹木を利用した可能性がある。

木製品については、今後用途などの情報も含めて木材利用を検 討する必要がある。

Ⅲ. 種実同定

1. 試料

試料は、低湿地の各層(試料番号 $1\sim9$, $11\sim44$)と、SK17(試料番号 10) から出土した種実遺体 44 点約 100 個とされる。各試料は、湿った状態で容器に入っている。詳細は、結果とともに表 $26\cdot27$ に示す。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体の同定は、現生標本と石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑類を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表に示す。また、主に栽培種を対象として、デジタルノギスを用いて、種実遺体の長さ、幅、厚さを計測し、結果を一覧表に併記する。分析後は、種実遺体を容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸し、保管する。

3. 結果

〈栽培種〉

裸子植物1分類群(針葉樹のマツ属複維管束亜属)10個,被 子植物8分類群(広葉樹のヤマモモ、アカガシ亜属、コナラ属、 ツブラジイ、クスノキ、ウメ、モモ、エゴノキ、草本のキカラス ウリ属) 358 個, 計 368 の種実が抽出・同定された (表 26・27)。 1個(試料番号44)は種実ではなく,植物片(木材?)であった。 栽培種は、ウメの核が2個(SK17: 試料番号10)、モモの核が 56 個(試料番号2~7.10.14.20.43.44を除く全試料)の. 計58 個 が確認された。栽培種を除いた分類群は、常緑高木のマツ属複維 管東亜属の球果が9個(試料番号3.4.6.12.15.28.29.44). 種子が1 個 (試料番号 28). ヤマモモの核が 2 個 (試料番号 2). アカガシ 亜属の果実が1個(試料番号14),ツブラジイの果実が1個(試 料番号 20), クスノキの種子が 282 個 (試料番号 2,7,43), 常緑ま たは落葉高木のコナラ属の果実が1個(試料番号44),子葉が3 個(試料番号14), 落葉小高木のエゴノキの種子が9個(試料番 号 43), つる性多年草のキカラスウリの種子が1個(試料番号 5) の、計310個が確認された。クスノキが最多で全体の76.6%を占 めるが、そのうち 245 個 (86.9%) が破片である。各分類群の写 真を133図に示し、形態的特徴等を以下に述べる。

・ウメ (Prunus mume (Sieb.) Sieb. et Zucc.)

核(内果皮)は灰黒褐色,残存長13.4mm,幅13.9mm,残存厚8.2 mmのやや偏平な広楕円体。頂部はやや尖り,基部は切形で中央部に湾入した臍がある。背面正中線上に細い縦隆条が,腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く,表面には円形の小凹点が分布する。

・モモ (Prunus persica Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)は灰褐色,やや偏平な広楕円体で頂部が尖る。最小の核の大きさは長さ21.3mm,幅15.1mm,厚さ12.6mm(試料番号16)を測る。最大の核の大きさは、長さ35.4mm,幅20.5mm,厚さ14.9mm(試料番号41)を測り,頂部が鋭く尖る。核の基部は切形で、中央部に湾入した臍がある。背面正中線上に細い縦隆条が,腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。縫合線に沿って割れた半分以下の破片や,側面にネズミ類による食痕と考えられる円形の孔(試料番号41)がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。核内面は平滑で、1個の種子が入る楕円状の窪みがある。

〈その他〉

・マツ属複維管東亜属 (Pinus subgen. Diploxylon) マツ科

球果は灰黒褐色, 残存長 22.4 ~ 44.1mm, 最大径 24.9mmの円錐状 広卵形体。径 3 ~ 4cm程度。球果は木質で, 長楕円状で矩形の種 鱗が覆瓦状, 螺旋状に密着する。種鱗の外部露出部分は不規則な四~五角形で肥厚し, 横の稜線とその中央部に短く突起する臍点 がみられる。

種鱗内部に1~2個入る種子は灰褐色,長さ3.1mm,幅1.8mm,厚さ1.3mmのやや偏平な非対称倒狭卵体。側面は稜をなし,頂部や基部はやや尖る。頂部に付く倒三角形で膜質の翼を欠損する。種皮は木質で表面は粗面。

・ヤマモモ (Myrica rubra Sieb. et Zucc.)

ヤマモモ科ヤマモモ属

核(内果皮)は灰褐色。完形ならば径6~9mm,厚さ5~7mmの歪でやや偏平な非対称広楕円体。内果皮は硬く緻密で,表面には微細な網目模様があり粗面。破片は残存径3.8mmを測る。

・アカガシ亜属 (Quercus subgen. Cyclobalanopsis)

ブナ科コナラ属

果実は黒褐色, 残存長 10.9mm, 残存径 15.4mmの卵状楕円体。果皮表面はやや平滑で, 微細な溝が縦列する。頂部は尖り, 殻斗の圧痕である輪状紋がみられる。先端部は花柱が長さ 1.5mm残存し, 柱頭を欠損する。花柱基部付近(肩)がやや尖ることから, イチイガシに似る。基部は切形で, 果皮とは別組織の着点がある。着点は灰褐色, 径 6.3mmの円形を呈し, 表面は粗面で維管束の穴が輪状に並ぶ。

なお, 亜属の判別根拠となる果実頂部の輪状紋を欠損している 果実をコナラ属としている。

・コナラ属 (Quercus) ブナ科

子葉は灰黒褐色,2枚からなる子葉の合わせ目に沿って割れた 半分で、長さ7.3mm,幅48mm,半分厚2.6mmの半楕円体,完形な らば楕円体。子葉は乾燥により収縮しており、表面には縦方向に 走る維管束の圧痕が顕著にみられる。合わせ目の表面はやや平滑 で、正中線上は僅かに窪み、頂部には長さ0.5mm程度の小さな孔 (主根)がある。なお、出土子葉は、同試料から共に出土したア カガシ亜属に由来すると考えられる。

・ツブラジイ(Castanopsis cuspidata(Thunb. ex Murray) Schottky) ブナ科シイ属

果実は黒褐色, 残存長 10.0mm, 径 7.9mmの広卵体。スダジイより小型で丸い。頂部は尖り, 基部を占める灰褐色, 円状不定形で維管束の穴が不規則な輪状に並ぶ着点を欠損する。果皮表面には細くやや深い溝が縦列する。

・クスノキ (Cinnamomum camphora (L.) Presl)

クスノキ科ニッケイ属

種子は灰黒褐色、長さ $5.9 \sim 7.1$ mm,幅 $5.7 \sim 7.0$ mm,厚さ $5.0 \sim 6.5$ mmの球体。頂部にやや突出する臍からはじまる低い稜があり,側面の途中で終わる。種皮は薄く硬く,断面は柵状,表面は粗面で,一部に最大径 1.0mmの円形の食痕がみられる(試料番

・エゴノキ(*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.) エゴノキ科エゴノ キ属

種子は灰黒褐色, 完形ならば長さ0.8~1.1cm, 径0.7~0.8cm 程度の卵体。頂部から基部にかけて3本程度の縦溝と縦隆条がある。基部は斜切形で, 灰黄褐色, 径3.5mm程度で粗面の着点がある。種皮は厚く表面にはやや粗い粒状網目模様があり, 断面は柵状。種皮内面は灰褐色で粗面。出土種子は全て破片で, 残存長は7.9mmを測り,計1個体分である。

・キカラスウリ(*Trichosanthes Kirilowii* Maxim. var. japonica (Mig.) Kitam.) ウリ科カラスウリ属

種子は黄灰褐色,長さ12.9mm,幅7.3mm,厚さ2.8mmの偏平な非対称倒卵体。基部は切形で、倒「ハ」の字状の臍と円形の発芽孔がある。縁を浅い帯状の溝が一周する。種皮表面は粗面。

4. 考察

低湿地より出土した種実遺体には、栽培種のウメ、モモが確認された。ウメ、モモは、栽培のために持ち込まれた渡来種とされ、 果実や種子が食用、薬用、祭祀等に、花が観賞用に利用される。 ウメ、モモが周辺で栽培されていたか、近辺より持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆される。

栽培種を除く分類群は、木本は高木になる常緑針葉樹のマツ属 複維管束亜属、常緑広葉樹のヤマモモ、コナラ属アカガシ亜属、 ツブラジイ、クスノキ、落葉小高木のエゴノキ、つる性草本のキ カラスウリが確認された。これらの分類群は、本地域に分布する 常緑照葉樹(照葉樹)林内や、その林縁部などに生育していた植 物に由来すると考えられる。

なお、堅果類のツブラジイは、子葉が生食可能である。コナラ属アカガシ亜属の一部はアク抜きが必要であるが子葉が食用可能である。この他に、ヤマモモは果実が食用可能である。これらの出土種実には、人間による直接の利用の痕跡は認められないが、上記の栽培種とともに当時利用された可能性も考えられる。

引用文献

林 昭三.1991. 日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所,

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 I.木材研究・資料,31,京都大学木質 科学研究所.81 - 181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質 科学研究所.66 - 176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質 科学研究所.83 - 201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所、30 - 166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料,35,京都大学木質 科学研究所,47 - 216.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志、2000、日本植物種子図鑑. 東北大学出版会、642p.

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別

IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].

島地 謙・伊東 隆夫,1982, 図説木材組織. 地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998, 広葉樹材の識別 IAWA による 光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修),海青社, 122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



第133図 種実遺体

中郡遺跡群における花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、 $D-21 \boxtimes$ (低湿地) から採取された 13 点および $C-23 \boxtimes$ から採取された 8 点の計21 点である。試料は以下に示す。

試料No	グリッド	層位	層相	備考
1	D - 21 ①		褐色土	
2	D - 21 ②		褐色土	
3	D - 21 3		(灰) 褐色土	
4	D - 21 4		(灰) 褐色土	
5	D - 21 5		(灰) 褐色土	
6	D - 21 6		褐色土	
7	D - 21 ⑦		褐色土	
8	D - 21 ®		(灰) 褐色土	
9	D - 21 9	低Ⅱa層	暗茶褐色土	
10	D - 21 10	低Ⅱb層	(黒褐色土)	
11	D - 21 (1)	低Ⅱc層	褐色土	
12	D - 21 12	低IId層	黒褐色土	
13	D - 21 🕄	VII 層	シラス	
14	C - 23 ①	表土I層	黄褐色微砂	
15	C - 23 ②	旧表土I層	黄褐色微砂	
16	C - 23 ③	Ⅱ上a層	茶褐色土	
17	C - 23 (4)	II上b層	茶褐色土	
18	C - 23 (5)	II a層	暗褐色土	
19	C - 23 6	II b層	(黒褐色土)	
20	C - 23 7	II c層	暗褐色土	
21	C - 23 ®	VI ME	シラス	

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を秤量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12水) 溶液を加えて 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後, 0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き, 沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後, 氷酢酸によって脱水し, アセトリシス処理 (無水酢酸9: 濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで 封入してプレパラート作成

8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって $300\sim1000$ 倍で行った。花粉の同定は、鳥倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。イネ属については、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きされ、表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの6、草本花粉30、シダ植物胞子2形態の計68である。また、寄生虫卵2分類群が認められた。分析結果を表28に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した(図134、図135)。また、花粉分帯が設定されたD-21区については、花粉の散布形態と生育環境を分類解析した(図134)。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

「樹木花粉〕

マキ属、ツガ属、マツ属複維管東亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、サンショウ属、ウルシ属、ニシキギ科、カエデ属、ブドウ属、ツバキ属、グミ属、カキ属、ハイノキ属、モクセイ科、トネリコ属、イスノキ属、スイカズラ属「樹木花粉と草本花粉を含むもの」

クワ科 – イラクサ科, ユキノシタ科, バラ科, マメ科, ウコギ科, ニワトコ属 – ガマズミ属

[草本花粉]

ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、クロモ、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ノアズキ属、ゲンゲ属-ミヤコグサ属、キカシグサ属、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、アサザ属、ナス科、キツネノマゴ、オミナエシ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、[シダ植物胞子]

単条溝胞子, 三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵, 異形吸虫類卵

(2) 花粉群集の特徴

1) D - 21区(図134,図135)

花粉組成の変化から、下位よりI帯~V帯の花粉分帯を設定した。以下に、各分帯における花粉群集の特徴を記載する。

I帯: Ⅲ層(試料13:シラス)では、花粉密度が極めて低く、マツ属複維管束亜属、クマシデ属-アサダ、コナラ属アカガシ亜属、カヤツリグサ科、アリノトウグサ属-フサモ属、ヨモギ属がわずかに認められた。

II帯:低II d層~低II a層(試料 $12 \sim 9$:中世の包含層)では、草本花粉の占める割合が $55\% \sim 60\%$ と高く、樹木花粉は $30\% \sim 20\%$ である。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)が優勢で、カヤツリグサ科、ヨモギ属も比較的多く、ソバ属、タンポポ亜科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属 - マテバシイ属、クリ、マツ属複維管束亜属などが認められた。このうち、クリとシイ属 - マテバシイ属は虫媒花植物、コ

ナラ属アカガシ亜属とマツ属複維管束亜属は花粉の生産量の多い 風媒花植物である。なお、試料9では回虫卵がわずかに検出され た。

Ⅲ帯(試料8~5)では、草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)が増加し、ヨモギ属は減少している。また、ソバ属、アブラナ科がやや増加している。アブラナ科やソバ属は虫媒花であり、風媒花と比較して現地性が高く花粉の生産量も少ないことから、他の分類群と比較して過大に評価する必要がある。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属 – マテバシイ属、クリが減少している。なお、試料8では回虫卵がわずかに検出された。

Ⅳ帯 (試料4~2) では、イネ科 (イネ属型を含む) が優勢で、アブラナ科が特徴的に増加し、集塊も認められた。また、試料2ではゲンゲ属-ミヤコグサ属が増加している。樹木花粉では、スギがやや増加し、マツ属複維管東亜属は減少傾向を示している。

V帯(試料1:表土)では、草本花粉では、ヨモギ属が増加し、アプラナ科、ゲンゲ属-ミヤコグサ属は減少している。樹木花粉では、シイ属-マテバシイ属がやや増加している。なお、異形吸虫類卵がわずかに検出された。

2) C-23区(図136)

下位のW層(試料21:シラス)では花粉密度が極めて低く、ハシバミ属、クリ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、セリ亜科、ヨモギ属がわずかに認められた。

IIc = II

Ⅱ上 b 層(試料 17) から表土 I 層(試料 14) にかけては、花粉がほとんど検出されなかった。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

(1) D-21区(低湿地)

I期(I帯)の™層(シラス)では、花粉がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、1)植生が希薄であったこと、2)乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、3)土層の堆積速度が速かったこと、4)水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。

Ⅱ期(Ⅱ帯)の低Ⅱ d層~低Ⅱ a層(中世の包含層)では、おもに水田稲作が行われていたと考えられ、周囲にはカヤツリグサ科や水田雑草のミズアオイ属なども生育していたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところではソバなどの栽培が行われており、その周囲にはヨモギ属をはじめタンポポ亜科、キク亜科などの草本類が生育していたと考えられる。森林植生としては、周辺に二次林性のクリや照葉樹のシイ類(シイ属 - マテバシイ属)などが分布し、周辺地域にはカシ類(コナラ属アカガシ亜属)を主とする照葉樹林やマツ林(マツ属複維管東亜属)が分布していたと推定される。

Ⅲ期(Ⅲ帯)では、水田稲作が本格化したと考えられ、ソバや アブラナ科などを栽培する畑作も行われていたと推定される。ア ブラナ科には、アブラナ(ナタネ)、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれている。この時期には、樹木のクリ、シイ類、カシ類などが減少していることから、これらの林が拓かれて耕作地化された可能性が考えられる。なお、低 II a 層では寄生虫卵(回虫卵)が検出された。人糞施肥の影響も示唆されるが、低密度であることから、集落周辺などの人為環境における通常の生活汚染に由来するものと考えられる。回虫は中間宿主を必要とせず、糞便とともに排泄された寄生虫卵が付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。

Ⅳ期(Ⅳ帯)でも、おおむね同様の状況であったと考えられるが、アブラナ科が多量に検出され、花粉の集塊も認められることから、アブラナ科の栽培が本格化したと推定される。また、試料2ではゲンゲ属-ミヤコグサ属が多量に検出されることから、レンゲの栽培も行われていたと考えられる。森林植生としては、周辺地域でスギの造林(植林)が行われていたと推定される。

V期(V帯)の表土では、集約的な水田稲作が行われていたと考えられ、ソバやアプラナ科などを栽培する畑作は縮小したと推定される。表土では寄生虫卵(異形吸虫類卵)が検出されたが、低密度であることから、集落周辺などの人為環境における通常の生活汚染に由来するものと考えられる。異形吸虫類(横川吸虫を含む)は、沿岸性の魚類やコイ科の魚を補食することによって感染する。

(2) C-23区

Ⅲ層(シラス)では、花粉がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

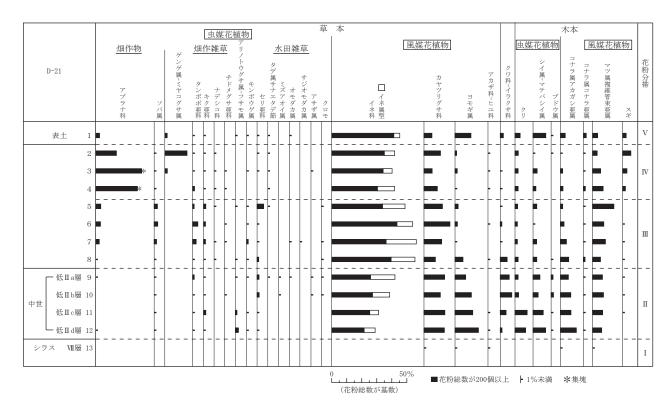
Ⅱ c 層~Ⅱ a 層(中世包含層)の堆積当時は、ヨモギ属を主体としてイネ科なども生育する比較的乾燥した草原的な状況であったと考えられ、周辺にはクリ、シイ属 - マテバシイ属が疎林ないし二次林として分布していたと推定される。

II上 b 層から表土 I 層にかけては、花粉がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては前述のようなことが考えられるが、ここでは乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解された要因が大きいと考えられる。

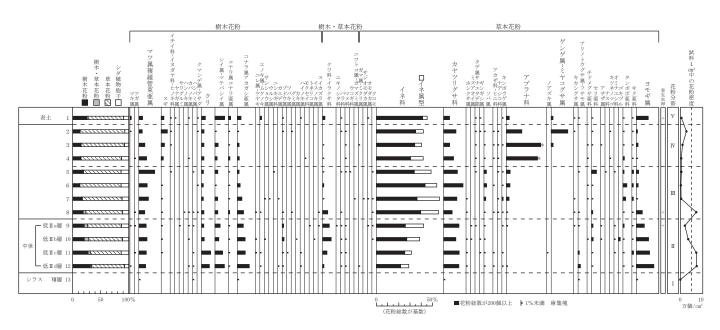
6. まとめ

花粉分析の結果から、植生や環境、農耕について下位より I 期 ~ V 期の変遷が認められた(図 137)。 I 期(W 層: シラス)では、花粉がほとんど検出されなかった。 I 期(中世)では、水田稲作をはじめソバなどの栽培も行われており、周辺の比較的乾燥したところにはヨモギ属をはじめタンポポ亜科、キク亜科などの草本類が生育していたと考えられる。森林植生としては、近隣に二次林性のクリ林やシイ林などが分布し、周辺地域にはカシ類を主とする照葉樹林やマツの二次林が分布していたと推定される。 II 期(中世以降、近世、近代)では、水田稲作が本格化し、ソバやアブラナ科(アブラナ等)などを栽培する畑作も行われていたと考えられる。 IV 期(中世以降、近世、近代)では、アブラナ科の栽培が本格化し、レンゲの栽培も行われていたと推定される。 また、周辺地域ではスギの造林(植林)が行われていたと考えられる。

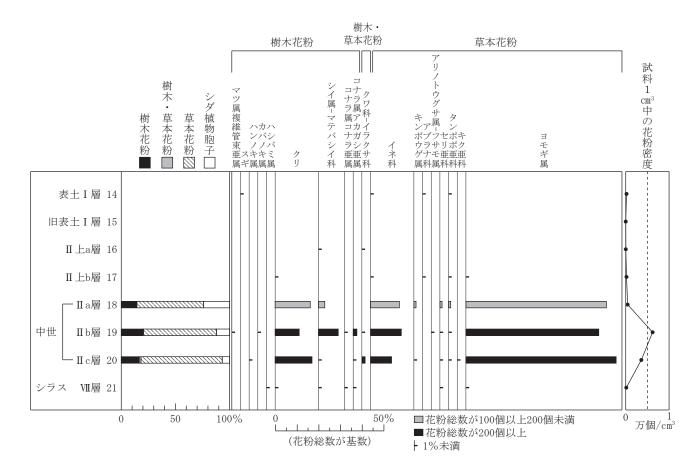
a sa sa e a - si lo t a x a x e a e - si lo t a x a x e a e - si lanus; si	7,0 7,84,6	和名	П	2	3	4	2	9	7	3	10	11	12	13	14	15	16	C - 23 X	8	9 20	0
	n . <i>Diploxylon japonica</i> : – Cephalotaxaxeae –	四本化粉 四本属 ッガ属 マン属複雑管東亜属 ス+ イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	2 6 G	2882	26 14 2	9 33 1	1 28	1 28					1 47		73						
Start		キャナヤ マンインヤテ派 シンベル年 フンベル年 フンベル・ フンベル・ フンベル・ フンベル・ フンベル・ フンベル・ フンベル・ フェー フェー フェー フェー フェー フェー フェー フェー	2 1 13 32 32	2 2 11 1	10	1 10 9	1 7 7 10	0.00					37 37				-				. 8 .
100 100		レナル (カイン・リール (カイン・リール) 原列 (カイン・ア (カイン・ア (カイン・ア (カイン・ア (カイン・ア (カイン・ア (カイン・ア (カイン・ア・デル・ア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	12 9	0101	ω <i>ι</i> ~	9 &	- 9 -	87.6					8 83 1	ო							
The control of the co		センジグセン エアンジャン ボッチャ原属 開展展展 原語																			
The contraction of the contracti		トナイン マート イン								2 1											
The control of the co		樹木・草本花粉 クワ科 – イラクサ科 ユキノシタ科	∞		2	-	က	4					6				-		-4	rc.	
Column C		バウ巻 マメ瀬 ウレンド暦 - コントゴ暦 - ギンズ:原	-	75 7	23	23	2		-				m m								
The column		草本花粉 ガマ属 - ミクリ属 サジオーダカ属 - ナッキーダカ属	-		2								2								
### WANTER THE PROPERTY OF T		4 ホッタカ クロホ イネ科 ・1 ア 型	156	178	164	144	- 28:	161					166		55					0 32	2
## 1		ム・本語 労 カナショング 中巻 ホッシケ 中原 ニカット・カード	 812	828	78 78 78	424	20.	8 29					105 2	1	7			⊣		_	
## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ##	Persicaria	ケンプーをアンドルを上げたナートを上げた。オンボン原ンボン原ンボン原ンボン原ンボン	7 2		es -	es e	- 0	a					-								
10	- Amaranthaceae	/ / / / / / / / / / / / / / / / / / /	en	741	2-	7	p 61-1	- 52					7 2						1	1	
The following of the following of the following with the following of the following with the following w		アプラナ科 ノアズキ属 ゲンケ属・ミヤコグキ属	0 9	8 K	. 147 *	132	14	12				2			62			1			
+ アメ科	lum	キカングサ属 アリノトウグサ属 – フサモ属 チドメグサ亜科 セリ亜科	2	- 2	നന	1	1 18	€	n				16	23							
中央が正確 は本であります。 は、大の面がのでは、できます。 は、大の面がのでは、できます。 は、大の面がのでは、できます。 は、大の面がのでは、できます。 は、大ののでは、できます。 は、大ののでは、できまます。 は、大ののでは、できまますます。 は、大ののでは、できままます。 は、大ののでは、できまますます。 は、大ののでは、できままますますますますますますますますますますますますますますますますますます		アナギ ドンタ キッシーマエ オ・ナートンタ		-	П	2															
大大学	ш	ゴキッル ケンボ光用 キケーボ 田本 コンド 上面	m m €	01011	2115	920	4.90	13					17	-	П						
Pollen 樹木で華本花香 105 69 75 78 85 51 70 118 172 284 5 2 1 7 20 1		シダ補物胞子 単条溝胞子 三条溝脂子	21.5	. 02 <u>«</u>	, 15 24	s 894	o 55	23.5					18 45	-	4 66						
10 10 10 10 10 10 10 10	al pollen	棚木花粉 樹木・草本花粉 草本花粉 ************************************	105 9 9 5 264	69 436 436	44 401	393	85 7 316	316 316					264 491 15	10 40	38 2					62 575 575	2 13
大田 大田 大田 大田 大田 大田 大田 大田	lcm3	- 15が転み - 試料 1cm3 中の花粉密度	3/8 50 × 10³	2.7 ×10 ⁴	9.6 9.6 × 10³	× 4.74 × 10³	408 × 10 ³	× 23 × 10 ³		. ^			× 7.3	5.4 × 10	× 10°		^	01			
大手	Unknown pollen Fern spore	未同完花粉 シダ植物胞子 <u>ギルエ部</u>	37	9 88	39	6.69	×4	28 10					9 83	-	56						
1	Hemnth eggs Ascaris(lumbricoides) Metagonimus — Heterophyes	合生 共界 回虫 邪 異形吸虫類卵																			
石織胞 (一)	ies of	訂 試料 1cm中の寄生虫卵密度	× 0.5						×		. so										
とのが発出し発出	Stone cell Digestion rimeins	石細胞 明らかな消化残渣					(- (- ()						-)	-	-	(-)) (-)	-	-)	- (



第134図 D-21区における花粉ダイヤグラム



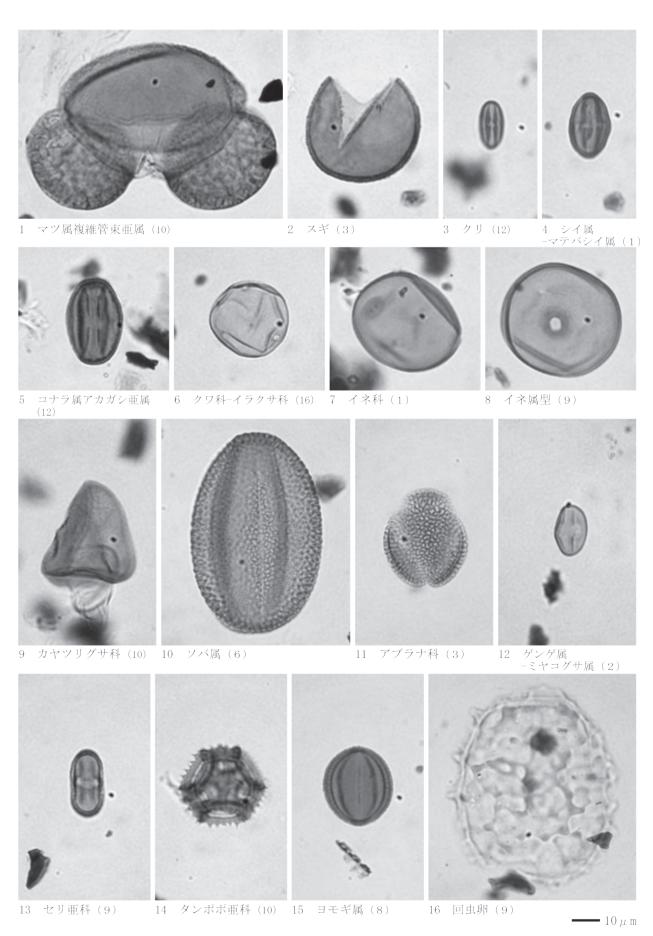
第135図 D-21区における花粉分類解析ダイヤグラム



第136図 C-23区における花粉ダイヤグラム

時期	時代		D-21	区 (低湿地)		C-23⊠	周辺地域の森林
时期	H417	層序・試料	花粉帯	植生・環境・農耕	層序・試料	植生・環境・農耕	同辺地域の森林
V期	現代	表土 (試料1)	V帯	水田稲作 アブラナ科栽培	表土I層		スギの造林 マツ・クリ・シイ類の二次林
IV期	近代近世	(試料2~3)	IV帯	水田稲作・レンゲ栽培 アブラナ科栽培の盛行 ソバ栽培	旧表土I層II上a層	乾燥した堆積環境	スギの造林 マツ林減少
Ⅲ期	(中世以降)	(試料4~8)	Ⅲ帯	水田稲作・ソバ栽培の盛行 アブラナ科栽培 近隣の森林減少	Ⅱ 上b層 (試料14~17)		マツの二次林ないし里山林 カシなどの照葉樹林減少
Ⅱ期	中世	低 II a層 低 II b層 低 II c層 低 II d層 (試料9~10)	Ⅱ帯	水田稲作 ソバ栽培 近隣にクリ、シイ類の二次林	Ⅱ a層 Ⅱ b層 Ⅱ c層 (試料18~20)	ヨモギ属などの乾燥した草原 クリ、シイ類の疎林や二次林	マツの二次林 カシなどの照葉樹林
I期	基盤	Ⅷ層シラス (試料13)	I帯	植生希薄	VII層シラス (試料21)	植生希薄	-

第137図 中郡遺跡群における植生・環境・農耕



第138図 中郡遺跡群の花粉・寄生虫卵

V期 (表土) では、集約的な水田稲作が行われており、ソバやア ブラナ科などを栽培する畑作は縮小したと推定される。

文献

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第 10 巻古代資料研究 の方法、角川書店、p.248 - 262.

金原正明 (2004) 寄生虫卵分析. 環境考古学ハンドブック, 朝倉書店, p.419 - 429. 島倉已三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5 集, 60p. 中村純 (1967) 花粉分析. 古今書院. p.82 - 110.

中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (Oryza sativa) を中心として. 第四 紀研究 13 p.187 - 193.

中村純(1977)稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学,第10号, p.21 - 30.

中村純(1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

中郡遺跡群における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

I. 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO 2)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山、2000)。

2. 試料

分析試料は、D-21 区(低湿地)から採取された試料 1 \sim 試料 13 および C-23 区から採取された試料 14 \sim 試料 21 の計 21 点である。試料の詳細を分析結果 $139\cdot 140$ 図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原、1976)を 用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約 $1\,\mathrm{g}$ に対し直径約 $40\,\mu$ m のガラスビーズを約 $0.02\mathrm{g}$ 添加 $(0.1\mathrm{mg}$ の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10 分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット) 中に分散してプレパラート作成

7)検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0 と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山、2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1、図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ, イネ (穎の表皮細胞由来), ムギ類 (穎の表皮細胞), ヨシ属, シバ属型, キビ族型, ススキ属型 (おもにススキ属), ウシクサ族A (チガヤ属など), ジュズダマ属型

〔イネ科 - タケ亜科〕

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、マダケ属型(マダケ属、ホウライチク属)、未分類等

[イネ科 - その他]

表皮毛起源, 棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来), 茎部起源, 未分類等

[カヤツリグサ科]

〔樹木〕ブナ科(シイ属), ブナ科(アカガシ亜属), クスノキ科, マンサク科(イスノキ属), アワブキ科, その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) D-21区(低湿地)

下位のⅧ層(試料13:シラス)では、植物珪酸体がほとんど 検出されなかった。中世とされる低Ⅱ d層(試料12)では、イ ネ科ではイネ,ススキ属型,ウシクサ族Aが比較的多く検出さ れ、シバ属型、キビ族型、ジュズダマ属型、チマキザサ節型、ミ ヤコザサ節型なども認められた。樹木ではブナ科(シイ属)、樹 木 (その他) が比較的多く, ブナ科 (アカガシ亜属), クスノキ 科,マンサク科(イスノキ属)なども検出された。イネの密度は 4.600 個 /g と比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場 合の判断基準としている 5,000 個 /g (状況により 3,000 個 /g と する場合もある) に近い値である。低 II c 層(試料 11) から低 Ⅱ a層(試料9) にかけては、イネが増加し、ススキ属型はやや 減少している。また、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヨシ属、メダケ 節型が出現している。イネの密度は5,600~6,900個/gと高い値 であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準を上回ってい る。ムギ類(穎の表皮細胞)の密度は700個/gと低い値であるが、 穎(籾殻)が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出 された場合でもかなり過大に評価する必要がある。試料8から表 土 (試料1) にかけても、おおむね同様の結果であり、ネザサ節 型、マダケ属型なども認められた。イネの密度はおおむね5,000 ~ 10,000 個 /g 程度と高い値である。ムギ類(穎の表皮細胞)の 密度は試料8~試料2では600~700個/gと低い値であり、表 土 (試料1) では1,300 個/gである。おもな分類群の推定生産 量によると、低Ⅱ d層より上位ではイネが優勢であり、部分的に ススキ属型も比較的多くなっている。

2) C-23区

下位の™層(試料21:シラス)では、イネ科ではススキ属型、

ウシクサ族A. ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少 量である。樹木ではブナ科(シイ属)、樹木(その他)が比較的 多く, ブナ科 (アカガシ亜属), クスノキ科, マンサク科 (イス ノキ属) なども検出された。中世とされるⅡc層(試料20)では、 イネ科ではススキ属型、ウシクサ族Aが比較的多く検出され、シ バ属型、ミヤコザサ節型なども認められた。樹木ではブナ科(シ イ属), 樹木(その他)が比較的多く, ブナ科(アカガシ亜属), クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)なども検出された。Ⅱ b 層(試料19)からⅡa層(試料18)にかけては、イネ、ムギ類 (穎の表皮細胞)、ヨシ属、ネザサ節型、チマキザサ節型が出現し、 ススキ属型, ウシクサ族A, ブナ科 (シイ属) はやや減少している。 イネの密度は700~2.000個/gと比較的低い値であり、ムギ類(穎 の表皮細胞) は700個/gと低い値である(試料18)。近世以降 とされる II 上 b 層 (試料 17) から II 上 a 層 (試料 16) にかけて は、イネが増加し、ススキ属型、ウシクサ族A、ブナ科(シイ属)、 樹木(その他)は減少している。また、メダケ節型、マダケ属型 が出現している。イネの密度は 4.100 ~ 4.800 個 /g と比較的高い 値であり、ムギ類(穎の表皮細胞)は700個/gと低い値である。 I層(試料 14, 15)では、イネが増加し、ムギ類(穎の表皮細胞) もやや増加している。イネの密度は7.100~10.800個/gと高い 値であり、ムギ類(穎の表皮細胞)は2,500個/gと比較的高い 値である。おもな分類群の推定生産量によると、 Ⅱ c 層~ Ⅱ a 層 ではススキ属型が優勢であり、Ⅱ上り層より上位ではイネが優勢 となっている。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

下位の \mbox{W} 層(シラス)については、D-21区(低湿地)では植物珪酸体がほとんど検出されなかった。植物珪酸体が検出されない原因としては、1)植物珪酸体を形成する植物群の生育に適さない環境であったこと、2)土層の堆積速度が速かったこと、3)水流の影響で粒径による淘汰・選別を受けたこと、4)風化作用などによって植物珪酸体が分解・消失したことなどが考えられる。なお、C-23区の \mbox{W} 層(シラス)ではススキ属型、ブナ科(シイ属)、クスノキ科などが検出されたが、これらの植物珪酸体については何らかの形で上層から混入した可能性が考えられる。

中世とされる D -21 区(低地部)の低 II d II

中世とされる土層の堆積当時は、部分的にヨシ属やジュズダマ 属が生育するような比較的湿潤な環境であったと考えられ、そこ を利用して D - 21 区 (低地部) などで水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やウシクサ族 (チガヤ属など)、シバ属、キビ族などの草本類が生育していたと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、カシ類、イスノキ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

その後、D-21 区(低地部)の中世以降~表土および C-23 区の II 上 a 層・II 上 b 層(近世以降)~I 層(現表土)では、継続的に水田稲作やムギ類の栽培が行われていたと考えられ、農耕地の拡大に伴ってススキ属やウシクサ族などの草本類およびシイ属などの照葉樹林は減少したと推定される。また、この頃からマダケ属が見られるようになったと考えられる。タケ亜科のうち、マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。

文献

杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-. 考古学と自然科学, 19, p.69 - 84.

杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究, 38(2), p.109 - 123.

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189 - 213.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科植物の珪酸 体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9, p.15 - 29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 - . 考古学と自然科学, 17, p.73 - 85.

中郡遺跡群における種実同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く, 堆積物や遺構内 などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実 を検出し, その種類や構成を調べることで, 過去の植生や植物利 用の実態を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、D-20 区、 $D\cdot C-2$ 区、D-21 区から採取された選別済みの種実類 235 粒(破片含む)である。試料の詳細を分析結果表 30 に示す。

3. 方法

種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特 徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レ ベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

(1) 分類群

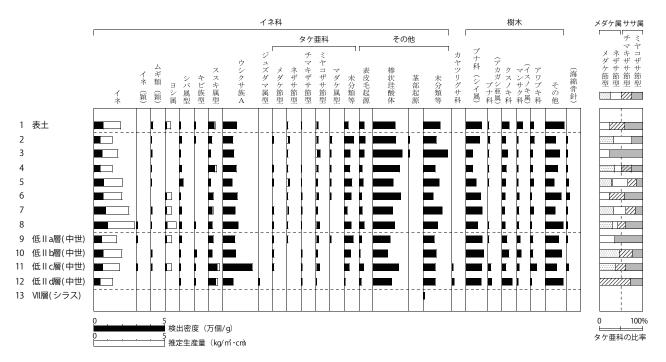
種実同定の結果、樹木10、樹木・草本を含むもの1、草本12の計23分類群が同定された。表30に分析結果を示し、表31にオオムギのサイズを示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し、主要な分類群について写真を示す。

〔樹木〕

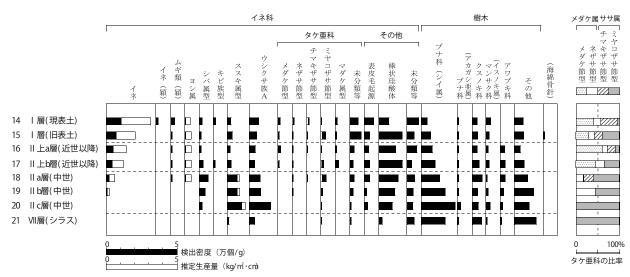
ヤマグワ *Morus australis* Poir. 種子 クワ科 長さ×幅:2.02×1.44mm

茶褐色で広倒卵形を呈し, 基部に突起がある。表面はやや粗い。

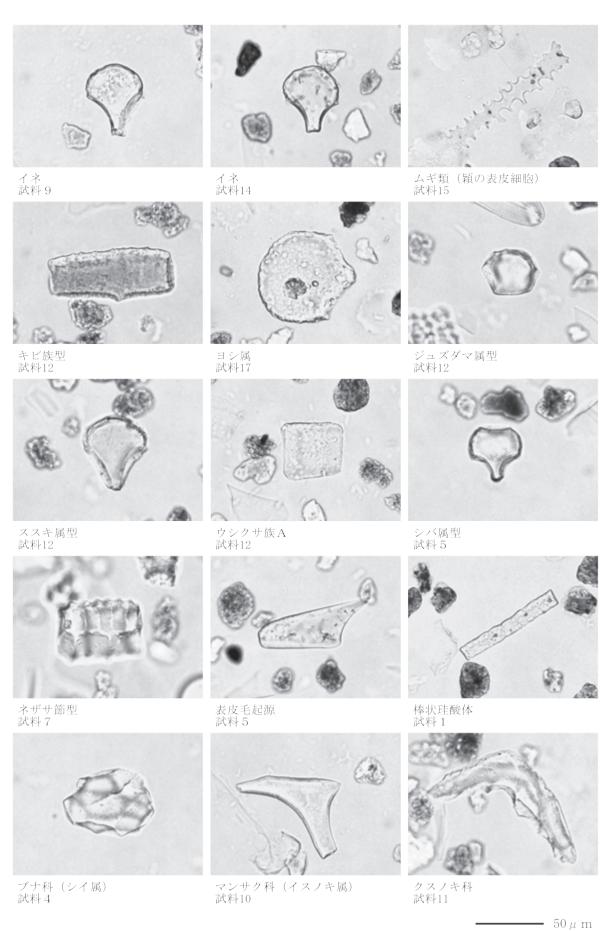
	地点・戦権						D -	21 🗵									C23 🗵	1 -21			
分類群	华名	П	2	က	4	2	9	7	∞	9 10	11	1 12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
イネ巻	Gramineae		!			i									i						
/ 永 / 4 哲地 (昭 / 井中留居)	Oryza sativa	65	45	29	42	71	69)I 88		56 69	63	3 46		108	77	48	41	20	7		
4 本物版(親の女及神池)	Oryza sativa (nusk Phytolith)								0	,				13							
ムギ類(穎の表皮細胞)	Irticum - Hordeum (nusk Phytolith)	13	9	7	9	9		7	9			7		25	7	7	7	7			
コツ属	Phragmites	9					7	7		7				9	7	7	7	7			
シバ属型	Zoysia type	9	13	7	13	56	7					7 7		19	14	14	28	09	42	20	
キビ族型	Paniceae type	9	9						9	14		7 7		13			7				
ススキ属型	Miscanthus type	39	19	13	45	13	28	76	24 2	28 2.	1 63			19	88	14	21	29	70 1	101	7
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	26	71	79	96	65	103							63	20	41	34	74			36
ジュズダマ属型	Coix type											7									
タケ亜科	Bambusoideae																				
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		9		9	9			9			7		13	7	14	7				
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	9	19	7	9	19	7	13	9	7				13	7	7	7	7	7		
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	9			9	9	7		9					19	7	7		7			
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	19	19	33	19	13	21		29 21	_	1 28	3 7		9	32	7	21	40	14	7	7
マダケ属型	Phyllostachys		13	7	9	9	7			7				13	7	7	21				
未分類等	Others	26	64	40	38	52	48	20	47 6	63 42	2 35	5 7		57	78	28	21	27	21	7	7
その他のイネ科	Others																				
表皮毛起源	Husk hair origin	32	33	33	19	56	14				7 2			63	35	28	34		14	20	
棒状珪酸体	Rodshaped	156	161	204	185	142	193	138 15	153 119	\simeq	181	1 130		70	163	117	165	134	112	95	22
茎部起源	Stem origin		9	7																	
未分類等	Others	117	06	171	83	110	69	132 10	100 7	77 90			∞	82	20	69	34	25	42	41	51
カヤツリグサ科(スゲ属など)	Cyperaceae (Carex etc.)										7	7 13									
樹木起源	Arboreal																				
ブナ科(シイ属)	Castanopsis	110	96	46	45	71	103	112 8	82 112	2 125	_			38	64	92	96		167 2		99
ブナ科 (アカガシ亜属)	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	9	13	7	9	9			9	7	2			9	7	7	7	7			7
クスノキ科	Lauraceae	52	26	40	32	26	21		24 3	35 48	3 28	3 72		32	35	34	48	29	35	41	92
マンサク科(イスノキ属)	Distylium	39	9	7	9	9	14							32	21	14	21	7			7
アワブキ科	Sabiaceae	19	26	13	13	19	7									28	34	34			7
から街	Others	130	71	66	83	28	110	66 12	124 9			7 124		63	64	41	69	24			52
(海綿骨針)	Sponge spicules		9	7	9	13	21			7	Ĺ	1			7						
植物珪酸体総数	Total	954	816	877	759	751	834 8	804 90	907 783	3 803	3 1037	7 789	∞	773	759	614	730	872	781 8	878 5	534
おもな分類群の推定生産量(単化	おきな分類群の推定生産量(単位:kg/㎡;cm): 試料の仮比重を 1.0 と仮定して算	定して象	H																		
*	Oryza sativa	1.91	1.32	1.74	1.31	2.09	2.03	2.52 2.94	34 1.65	5 2.04	1.84	1.34		3.17	2.09	1.42	1.21	0.59	0.21		
コン属	Phragmites	0.41								4	0.44	+		0.40	0.45	0.44		0.42			
ススキ属型	Miscanthus type	0.48	0.24	0.16	0.55		0.34 (0.33 0.2	0.29 0.35	5 0.26	5 0.78	3 0.65		0.24	0.35	0.17		0.83	0.87	1.26 0.	60.0
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		0.07		0.07	80.0		_	20.0	0.08		~		0.15	0.08	0.16	80.0				
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.03	0.09	0.03	0.03			_	0.03 0.03	3				90.0	0.03	0.03			0.03		
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.05			0.05		0.05		7.04	0.05		5 0.05		0.14	0.05	0.05		0.05			
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	90:0	90.0	0.10	90:0	0.04		0.04 0.0	90:0 60:0	6 0.04	1 0.08			0.02	0.11	0.02	90:0	0.12	0.04 0	0.02 0.	0.02
タケ亜科の比率 (%)																					
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		33		32	59			08	46	37			40	30	09	46				
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	23	41	24	15	36	23	28	12 3	35				16	12	12	19	16	44		
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	35			23	19	35			30) 24	1 71		39	19	19		25			
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	42	56	92	27	15	42							2	33	∞	35	59			100
メダケ率	Medake ratio	23	74	24	20	99	23	7 [19	42 3	35 46	37	0 /		26	42	73	65	16	44	0	0



第139図 D-21区における植物珪酸体分析結果



第140図 C-23区における植物珪酸体分析結果



第141図 中郡遺跡群の植物珪酸体(プラント・オパール)

第30表 中郡遺跡群における種実同定結果

			66	93	9.4	75	96	2.6	8	96	30	31	39	33	34
分類群		部位	3		- 20	3	3	ŲΫ́		3	3	5	D - 21	3	
华	和名	I	Cb ①	Cb ©	Cb 3	Cb 4	Ic ①	Ic ②	Ic ③	Ic 5	Fa ①	Fa ②	Fa ③	Ge ①	Ge ②
Arbor	 														
Morus australis Poir.	ヤマゲワ	種子	1		1	1									
Cinnamomum camphora S.	クスノキ	種子			1										
Prunus persica Batsch	t t	核(完形)				1									
		(半形)		1											
		(破片)				1									
Rubus	キイチゴ属	桱	8		9	П									
Zanthoxylum ailanthoides S. et Z.	カラスザンショウ	種子				1									
Mallotus japonicus Muell. et Arg.	アカメガシワ	種子				1									
Ampelopsis brevipedunculata var. Heterophylla Hara	ノブドウ	種子	П												
Vitis	ブドウ属	種子	5	7	5	15					1				
Cornus brachypoda C.A. Mey.	クマノミズキ	核(破片)										П			
Sambucus	ニワトコ属	颒										П			
Arbor·Herb	樹木・草木														
Araliaceae	ウコギ科	種子	7	2	1										
Herb	草本														
Oryza sativa L.	*	炭化果実			1	2									
		(破片)													2
Hordeum vulgare L.	オオムギ	炭化果実	3	2	2	2									
		(破片)		1											
Hordeum vulgare L Triticum aestivum L.	ムギ類	炭化果実												1	
Fimbristylis	テンツキ属	果実	4												
Scirpus	ホタルイ属	果実	7		12		13	22	7		3		16		
		(破片)				П		က	1				9		
Carex	スゲ属	果実			1	П	4	2	က	4					
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	2		33	13	1								
		(破片)									1				
Humulus scandens Merr.	カナムグラ	種子	1	1	1										
Leguminosae	マメ科	子		-											
Ajuga	キランソウ属	果実	1												
Trichosanthes kirilowii Maxim. var. japonica Kitam	キカラスウリ	種子				1									
Compositae	キク科	果実		2	1	1									
Total	合計		40	20	38	42	18	27	11	4	2	2	22	1	2
Unknown seeds	不明種実		1			1									
Unknown	不明	(破片)										1			

クスノキ *Cinnamomum camphora* S. 種子 クスノキ科 長さ×幅:6.33 × 5.85mm

黒褐色で球形を呈す。一条の稜線が走りその中央が突起する。 モモ *Prunus persica* Batsch 核(完形・半形・破片) バラ 科 長さ×幅×厚さ:21.76 × 18.82 × 13.96mm

黄褐色〜黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

キイチゴ属 Rubus 核 バラ科 長さ×幅: 2.14×1.43 mm 淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面に大きな網目模様がある。カラスザンショウ Zanthoxylum ailanthoides S. et Z. 種子ミカン科 長さ×幅: 2.81×2.49 mm

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 トウダイグサ科 長さ×幅:3.44 × 3.31mm

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

ノブドウ Ampelopsis brevipedunculata var. heterophylla Hara 種子 ブドウ科 長さ×幅:3.58×4.04mm

茶褐色で広卵形を呈す。腹面に「ハ」字状の孔が2つあり、背面のカラザは長く伸びる。

ブドウ属 Vitis 種子 ブドウ科 長さ \times 幅: 3.63×2.89 mm 茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

クマノミズキ *Cornus brachypoda* C. A. Mey. 核(破片) ミズキ科 長さ×幅: 2.33 × 2.95mm

淡褐色で球形を呈す。表面に一本の広い溝がめぐり、数本の細い縦筋が走る。

ニワトコ属 Sambucus 核 スイカズラ科 長さ×幅:2.31×172mm

黄褐色~茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には 横方向の隆起がある。

[樹木・草本を含むもの]

ウコギ科 Araliaceae 種子 長さ×幅: 2.30 × 1.37mm, 2.15 ×

第31表 中郡遺跡群出土オオムギ炭化果実の計測値

試料		長さ (mm)	幅 (mm)
		4.14	1.78
22	D - 20 - Cb ①	4.39	2.12
		3.80	2.07
		5.52	2.54
		4.09	2.01
23	D - 20 - Cb 2	3.88	1.67
		3.67	1.91
		4.28	2.38
		2.99	1.99
		3.80	2.69
24	D - 20 - Cb ③	5.16	2.69
		3.85	2.70
		5.26	2.29
25	D - 20 - Cb (4)	5.71	2.68
	D 20 - CD 4	4.39	1.54

	長さ (mm)	幅 (mm)
平均値	4.33	2.20
最大値	5.52	2.70
最小值	2.99	1.67

1.42mm

淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、肺軸側には浅い溝が2~3本走る。表面はざらつく。

〔草本〕

イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実(完形・破片) イネ科 長さ ×幅: 3.94 × 2.51mm, 5.19 × 2.85mm

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がく ほむ。表面には数本の筋が走る。

オオムギ Hordeum vulgare L. 炭化果実 (完形・破片) イネ科 炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

ムギ類(オオムギーコムギ)Hordeum - Triticum 炭化果実イネ科

オオムギもしくはコムギと思われるが、形態が細く未成熟のためムギ類とした。

テンツキ属 Fimbristylis 果実 カヤツリグサ科 長さ×幅: 1.69×1.23 mm

淡褐色で広倒卵形でレンズ形を呈し、隆起する横長楕円形の格 子紋がある。

ホタルイ属 Scirpus 果実(完形・破片) カヤツリグサ科 長 $\mathbf{z} \times \mathbf{u} : 2.42 \times 2.01 \, \mathrm{mm}$

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。

スゲ属 Carex果実カヤツリグサ科長さ×幅: 1.43 × 1.02mm茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 *Cyperaseae* 果実 長さ×幅:1.63 × 1.25mm 黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 種子 クワ科 長さ×幅: 3.74 × 3.77mm

黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心 形を呈するへそがある。

マメ科 Leguminosae 子葉 マメ科 長さ×幅×厚さ: $2.68 \times 2.64 \times 2.53$ mm

黒色で楕円形を呈し、縦に一本の溝状の筋が走る。内部の細胞の形態はササゲ属と一致するが、破片であるためマメ科の同定に留めた。

キランソウ属 Ajuga 果実 シソ科長さ×幅:1.63×1.08mm 卵形や狭卵形で側面は横狭卵形を呈す。着点は広卵形や広楕円形,腹面の一端(卵の細い方)から中央までを占め、幅広い隆条状の縁で囲まれる。大型の網目模様がある。

キカラスウリ *Trichosanthes kirilowii* Maxim. var. japonica Kitam 種子 ウリ科 長さ×幅:12.16×6.13mm

淡褐色で扁平楕円形を呈す。中央部がやや膨らみ、周辺はざらつく。

キク科 Compositae 果実 キク科 長さ×幅:3.52×1.46mm 茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に 8本程度の筋が走る。 不明種実: 種実ではあるが、炭化して表面模様が欠落しているため不明種実とした。

不明:種実かどうか不明。

(2) 種実群集の特徴

1) D-20-Cb(1)

樹木種実のキイチゴ属8,ブドウ属5,ヤマグワ1,ノブドウ1,樹木・草本を含むウコギ科7,草本種実のホタルイ属7,テンツキ属4,オオムギ3,カヤツリグサ科2,カナムグラ1,キランソウ属1が同定された。樹木種実のキイチゴ属,ブドウ属,ヤマグワは食用となる有用植物である。草本種実のホタルイ属,テンツキ属,カヤツリグサ科は湿地から浅い水域に生育する水生植物,カナムグラ,キランソウ属は畑や集落のやや乾燥した人為地に生育する耕地雑草,オオムギは栽培植物である。

2) D-20-Cb(2)

樹木種実のブドウ属7, モモ1, 樹木・草本を含むウコギ科2, 草本種実のオオムギ6, キク科2, カナムグラ1, マメ科1が同定された。樹木種実のブドウ属は食用となる有用植物, モモは栽培植物である。草本種実のオオムギは栽培植物であり, キク科, カナムグラは畑や集落のやや乾燥した人為地に生育する耕地雑草である。

3) D-20-Cb (3)

樹木種実のキイチゴ属6,ブドウ属5,ヤマグワ1,クスノキ1,樹木・草本を含むウコギ科1,草本種実のホタルイ属12,オオムギ5,カヤツリグサ科3,イネ1,スゲ属1,カナムグラ1,キク科1が同定された。樹木種実のキイチゴ属,ブドウ属,ヤマグワは食用となる有用植物である。クスノキは照葉樹林の主要構成要素であり,温暖な地域に生育する。草本種実のホタルイ属,カヤツリグサ科,スゲ属は湿地から浅い(1 mまで)水域に生育する水生植物であり,カナムグラ,キク科は畑や集落のやや乾燥した人為地に生育する耕地雑草である。オオムギ,イネは栽培植物である。

4) D-20-Cb 4

樹木種実のブドウ属 15, モモ2, ヤマグワ1, キイチゴ属1, カラスザンショウ1, アカメガシワ1, 草本種実のカヤツリグサ科 13, イネ2, オオムギ2, ホタルイ属1, スゲ属1, キカラスウリ1, キク科1が同定された。樹木種実のブドウ属, ヤマグワ, キイチゴ属は食用となる有用植物であり, モモは栽培植物である。カラスザンショウ, アカメガシワは落葉広葉樹であり, 二次林種でもある。草本種実のカヤツリグサ科, ホタルイ属, スゲ属は湿地から浅い水域に生育する水生植物であり, イネ, オオムギは栽培植物である。キカラスウリ, キク科は畑や集落のやや乾燥した人為地に生育する耕地雑草である。

5) D·C-2-Ic①

草本種実のホタルイ属13, スゲ属4, カヤツリグサ科1が同定された。ホタルイ属, スゲ属, カヤツリグサ科は湿地から浅い水域に生育する水生植物である。

6) D·C-2-Ic 2

草本種実のホタルイ属25,スゲ属2が同定された。ホタルイ属,スゲ属は湿地から浅い水域に生育する水生植物である。

7) D·C - 2 - Ic (3)

草本種実のホタルイ属 8, スゲ属 3 が同定された。ホタルイ属, スゲ属は湿地から浅い水域に生育する水生植物である。

8) $D \cdot C - 2 - Ic$ (5)

草本種実のスゲ属4が同定された。スゲ属は湿地から浅い水域 に生育する水生植物である。

9) D-21-Fa(1)

樹木種実のブドウ属1,草本種実のホタルイ属3,カヤツリグサ科1が同定された。樹木種実のブドウ属は食用となる有用植物である。草本種実のホタルイ属、カヤツリグサ科は湿地から浅い水域に生育する水生植物である。

10) D - 21 - Fa (2)

樹木種実のクマノミズキ1,二ワトコ属1が同定された。クマノミズキはやや湿気のある肥沃な緩傾斜地や谷間などに生育する落葉高木であり,二ワトコ属は低地と山地のやぶや林縁に生育する。

11) D-21-Fa (3)

草本種実のホタルイ属 24 が同定された。ホタルイ属は湿地から浅い水域に生育する水生植物である。

12) D – 21 – Ge (1)

草本種実のムギ類1が同定された。ムギ類は栽培植物である。 13) D-21-Ge②

草本種実のイネ2が同定された。イネは栽培植物である。

5. 種実同定から推定される植生と農耕

種実同定の結果、樹木種実のヤマグワ、クスノキ、モモ、キイチゴ属、カラスザンショウ、アカメガシワ、ノブドウ、ブドウ属、クマノミズキ、ニワトコ属、樹木・草本を含むウコギ科、草本種実のイネ、オオムギ、ムギ類、テンツキ属、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、カナムグラ、マメ科、キランソウ属、キカラスウリ、キク科が同定された。

このうち、モモ、イネ、オオムギ、ムギ類は栽培植物であり、ヤマグワ、キイチゴ属、ブドウ属は食用となる有用植物である。草本のテンツキ属、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科は湿地から浅い水域に生育し、水田雑草でもあることから、周囲に水田の分布が想定される。また、カナムグラ、マメ科、キランソウ属、キカラスウリ、キク科は乾燥した人為地に生育し、畑作雑草でもあることから、周囲に畑の分布が想定される。樹木のクマノミズキ、ニワトコ属は二次林種である。

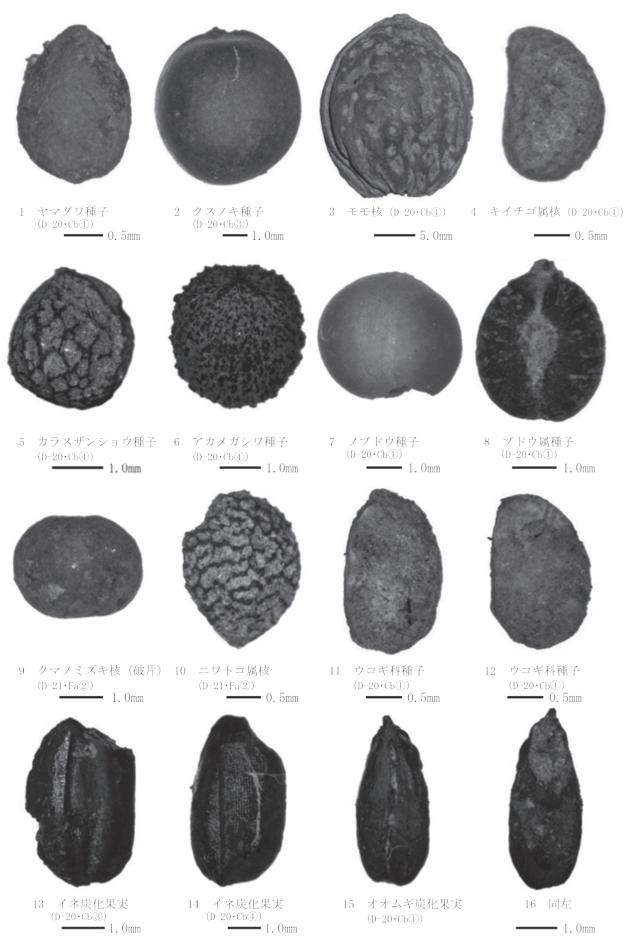
文献

笠原安夫(1985)日本雑草図説,養賢堂, 494p.

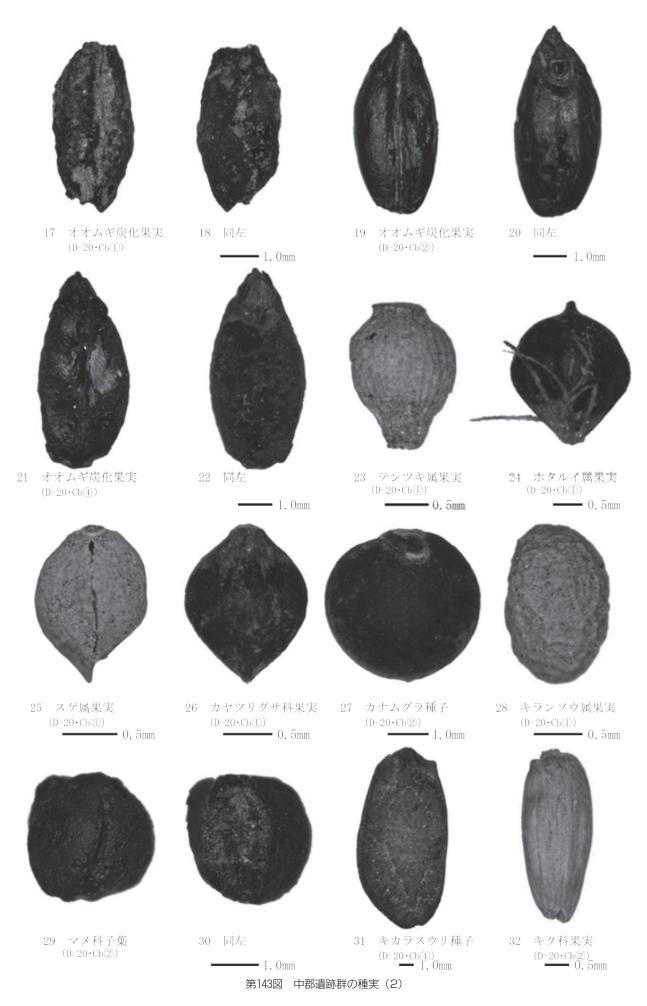
笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣出版, p.131 - 139.

南木睦彦(1993)葉・果実・種子. 日本第四紀学会編 第四紀試料分析法, 東京大学出版会. p.276 - 283.

吉崎昌一(1992)古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナル No. 355, ニューサイエンス社, p.2 – 14.



第142図 中郡遺跡群の種実(1)



第5章 総 括

はじめに

遺跡の基本層序は、III層に点在する黄橙の軽石が鬼界カルデラ起源に比定され、IV層及びV層が縄文時代早期の遺物包含層とされている。加えて、中世以降の屋形建物等や堀や溝構築に伴う造成が実施されており、これらの構築物を含め竪穴建物跡や掘立柱建物跡等の遺構の多くがVI層面で検出されていることが実情である。したがって、III層以上はもちろんのこと、縄文時代早期の遺物包含層とされるIV層及びV層についても、中世以降の人為的な撹乱の影響が大きく作用しているものと推測され、安定的な層順や原位置を保つものは少ないと判断される。

第1節 縄文時代

(1) 土器

縄文時代の土器は14類に細分した。特に3類の中原式 土器と5類の下菅生B式土器が顕著に出土する。中原式土 器は長崎県から熊本県を中心に、下菅生B式土器は大分県 から熊本県を中心に分布することが知られ、本遺跡が八代 海沿岸や中九州地域との関わりの中で存在していたことが 読み取れる。なお、このことは、後述する黒曜石石材の供 給行為とも重複する。

中原式土器は,近年の調査の増加に伴い,資料数が確保され,分布域が拡大している。中原式土器がまとまって出土した鹿児島県旧郡山町湯屋原遺跡等では,南九州貝殻文円筒土器との関連について検討が始められている。一方,下菅生B式土器については,検討資料を中九州に求めざるを得ない。

本遺跡での出土位置については、中原式・下菅生B式土器が $C \cdot D - 24 \boxtimes C \cdot D - 27 \cdot 28 \boxtimes C$ 、塞ノ神B式土器が $C \cdot D - 23 \cdot 24 \boxtimes C$ に集中する傾向がみられた。

(2) 石器

本報告で掲載した石器の 150 点中 88 点がIV層以下からの出土で、18 点がIII層以上から、44 点は I 層出土である。

一方,本遺跡での石鏃等の剥片石器の使用石材は,針尾産黒曜石が最も多く,腰岳産黒曜石が続き,それらを補完するように桑ノ木津留産・日東産黒曜石が使用されている。すなわち,入手しやすい在地の石材より,遠隔地でも良質の黒曜石を選択した実態が看取される。

II層出土の2点($256 \cdot 257$)、IV層出土の2点($197 \cdot 198$)の正三角形U脚鏃は同時期と見られる。 $197 \cdot 257$ は針尾産黒曜石、198 は桑ノ木津留産黒曜石、256 は腰岳産黒曜石で、いずれも遠隔地石材が使用される。なお、出土位置がC-23 区であることを $D \cdot E - 23 \cdot 24$ 区に集中することも同一文化期の所産と支持する要素といえる。

また、正三角形U脚属に形状が類似する 200 は、桑ノ木津留産黒曜石、203 が針尾産黒曜石、II層の 258 が針尾産黒曜石であり、他の剥片類を含めても、 $C\sim E-18\sim 25$ 区では遠隔地からの石材供給交流の実態が見えてくる。

176 のチャート製のトロトロ石器自体は搬入品と見られ.

周知の資料から判断して下菅生B式土器に付随したと判断 される。

この石材の遠隔地供給については、遠隔地の石材を求めた結果であるのか、それともそれぞれの石材を持つ集団がこの地に立ち寄ったことに起因するかについては、明らかにする材料を持ち合わせていない。なお、調査で採取された資料からは、この地で石鏃製作や狩猟具の製作を行った痕跡は確認できていない。

第2節 弥生・古墳時代

弥生・古墳時代の遺構は検出されておらず、その生活痕跡について遺物で知るのみとなる。弥生時代に相当する遺物は1点のみで、肥後系の弥生終末期の複合口縁壺(308)がある。搬入品か在地生産かは判別し難いが、中九州(肥後地域)との関連性を示す良好な資料である。

古墳時代は、在地土器の成川式土器や須恵器が主体となる。その中でも叩き目痕をもつ成川式土器(314, 315)や在地の成川式土器とは製作技法が異なる肥後系の古式土師器の長胴甕(330)が特徴的である。弥生~古墳時代の土器には中九州地域の要素が散見されることから、その影響や交流関係をもっていたと考えられる。

第3節 古代

(1) 埋納土器

土坑7号内出土の土師器甕(332), 坏(333), 埦(334) の3点はいずれも10世紀後半段階に相当する。

坏は埦に被さるような状態で,小型の土師器甕はそれと並列するように甕は逆位の状態で出土した。このような配置状況や土坑の大きさも遺物が入る程度の小規模なものであることから,意図的な埋納行為が考えられる。

また、土師甕の口縁部の一部を打ち欠いている。これについては、肥後地域では古代後半相当の火葬土壙墓に伴う土師器や須恵器・瓦などは必ず破片や一部を欠損させたものが用いられるとの指摘がある(網田 1997)。しかし、本遺構の埋土からは、焼土や骨片等が確認されなかったこと、約45×21cmの小規模な土坑であることから、墓としての機能は考え難い。本遺構の性格・位置づけに関しては、今後類例との検討が必要である。

(2) 楠葉型黒色土器B

本遺跡では、古代の土師器・須恵器等が出土しているが、黒色土器に関しては概ね古代末~中世前期に相当するものが多い傾向にある。その中で、瓦器碗出現直前の10世紀後半~11世紀中頃のいわゆる黒色土器Bが2点(359・360)している。焼成が瓦器に近く、高台が台形状を呈し、低いという特徴をもち、形態的特徴から11世紀により近いものと判断した。鹿児島県内での畿内系瓦器の出土は、稀少ながら数例確認されているが、楠葉型の黒色土器Bは県内初の出土例である。南九州における古代~中世前期の広域流通等を解釈する上で、稀少な事例となるであろう。

第4節 中世

(1) D·E-4·5区

本遺跡は、在地の土師器等の他に貿易陶磁器の出土が他の集落遺跡と比して圧倒的に多い。特に本区域の出土は顕著であり、その最たるものとして青白磁龍首水注がある。

D・E-4・5区では、2×3間の掘立柱建物跡1基、そして土坑9基が検出されている。土坑2号は、副葬品が出土していないが、木質が付着した鉄製釘が出土しており、木棺墓の可能性が高いと思われる。また掘立柱建物跡1号との位置関係から、屋敷墓が想定される。

遺物全体としては、12世紀後半~14世紀の遺物が主であり、土師器や須恵器もその範疇に収まる。貿易陶磁器は白磁碗W・V類、龍泉窯系青磁碗I類が主となる12世紀後半~13世紀前半と、龍泉窯系青磁碗I類・白磁皿IX類を主とする13世紀後半~14世紀の2時期に分かれる。景徳鎮産の青白磁龍首水注は13世紀後半~14世紀に相当する。

これらの中には先述の龍首水注をはじめ、白磁四耳壺・青磁花生・黄褐釉盤・中国陶器等の稀少品・優品も多い。これらは"威信財"としての機能をもつものであり、鎌倉モデル(小野 2003・2006)に相当するが、本遺跡ではモデルに相当する遺構は検出されていない。県内では中世の有力者の館跡とされる馬場田遺跡、市頭A・B・C遺跡などが鎌倉モデルに相当する遺物をもつ。

滑石製品は他の区域でも出土するが、石鍋や二次加工品 含めて、この区域の出土量は群を抜いており、時期的にも 12世紀後半~14世紀と、石鍋の流通拡大期と一致する。

以上のことから、本区域は、貿易陶磁器や滑石製品の交

易流通品が圧倒的に多く、他区域と出土遺物の様相が異なることが分かる。

(2) B~E-11~17区

B~E-11~17区では、全体としては 13世紀後半~14世紀代に相当する遺物が主体である。青磁香炉や水滴、水注等の稀少な陶磁器も出土するが、 $D \cdot E - 4 \cdot 5 \boxtimes$ と比して質・量は劣る。

本区域は、東西・南北に延びる2条の堀に区画された空間に、掘立柱建物跡が竪穴建物跡に伴う位置関係で検出され、堀跡1号を境として土地空間が東西に分断される。

竪穴建物跡4・5号は、半地下の二段構造の特徴的な形態をもつ。5号竪穴建物跡の年代測定結果では、下段と上段には時期差はなく、短期的に使用されたものと想定できる。なお、野田川の対岸に位置する「荘」地区の外畠遺跡でも方形竪穴建物跡が見つかっている。

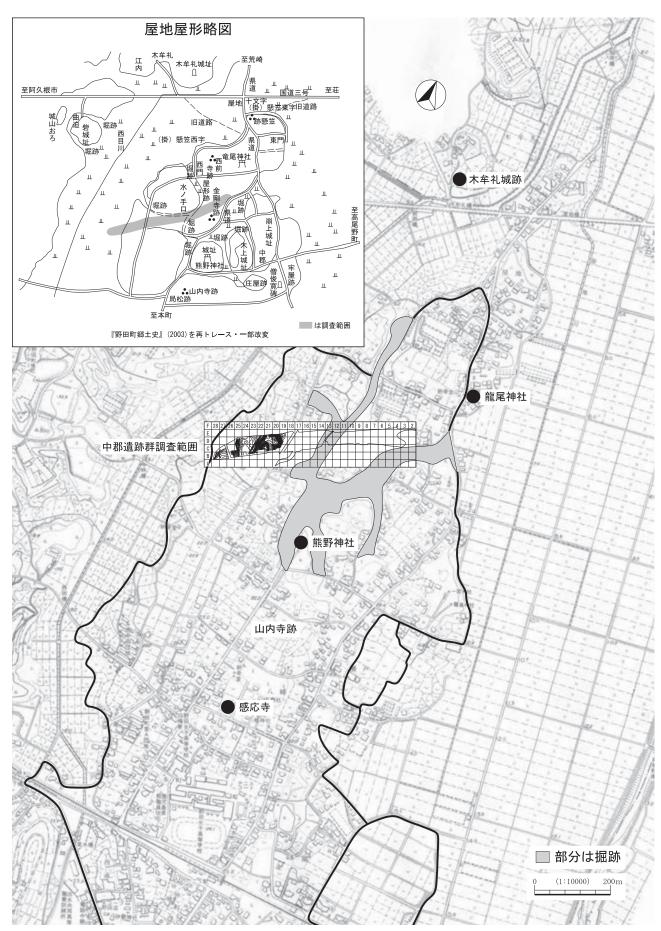
竪穴建物跡は、①一辺2~4mの方形を基調とすること、②人為的な埋め戻しがあること、③長期的に使用されない、④共伴遺物がない(少ない)などの特徴があり(飯村1994)、それらと本遺跡の竪穴建物群の特徴は一致する。

本遺跡の竪穴建物跡の性格や機能については、竪穴建物跡2・3・5・6号に鉄滓や鞴の羽口が出土していることから、鍛冶関連の工房または倉庫を想定させる。

伊佐市新平田遺跡の竪穴建物跡は、工房跡もしくは一時保管場所としての穴蔵であることが指摘されている(堂込1999, 2003)。二段構造ではないが、規模や床面の炉跡など類似しており、本遺跡の建物群も同様の施設であったと考えられる。



第 144 図 中郡遺跡群と掘跡の関係



第145図 屋地屋形略図との対応関係

(3) C~E-18~25区

 $C\sim E-18\sim 25$ 区は、土坑・溝状遺構が検出され、低湿地では、杭列及び土坑状遺構が検出された。溝状遺構は丘陵部・傾斜地に東西・南北方向に延びており、近世以降の溝状遺構とも概ね主軸は同じである。遺構・遺物は、14世紀~16世紀に相当するものが主体で、 $D\cdot E-4\cdot 5$ 区と $B\sim E-11\sim 17$ 区より新しく、時期差がある。

(4) 低湿地

低湿地ではモモ・ウメの種実が多く出土し、クスノキやエゴノキ等の照葉樹の生育が確認されている。花粉分析・植物珪酸体分析の結果では、水田稲作・農耕による土地利用が明らかになっている。また、杭列跡の年代測定結果でも、構築時期が15世紀前半という結果が得られている。

なお、近世以降に相当する溝状遺構がB~D-22・23区の傾斜地から検出されている。土層堆積状況や科学分析の結果から、近世以降は、水田地として利用されていたようである。

(5) 中世における中郡遺跡群

中郡遺跡群は、12世紀後半~16世紀まで途切れることなく存続し、その一つの画期が $D \cdot E - 4 \cdot 5$ 区を主体とした 12世紀後半~13世紀にあったと推測される。

さらに在地生産・流通の土師器等と加え、多量の交易流通品の両者を所有し、兼ね備えている。これは、中世における領主居館がもつ2重のネットワークの結節(広瀬1986)として捉えることができ、交易流通網を掌握できるほどの有力者の存在を考えざるを得ない。よって、屋敷墓(土坑2号)や堀跡などを考慮すると、多くの威信財を所有した有力者の居館・屋形跡と想定される。

また、調査区中心部に南北に延びる大規模な堀跡 1 号は、それを境として東・西で空間が分断される(第 144 図)。 B・D $-6 \sim 11$ 区が削平のため不明瞭だが、概ね D・E -4 ・5 区が堀の内側、15 区以西は堀外側と推測される。

 $D \cdot E - 4 \cdot 5$ 区と $B \cdot D - 6 \sim 11$ 区は、堀を境とした一連の「場」であり、堀が巡る周辺も含めて屋形であったと考えられる。また、堀の「内/外」では、内側が居館等の主体部で、 $B \cdot D - 6 \sim 11$ 区の竪穴建物跡群が工房・倉庫といった機能分担が読み取れる。

竪穴建物跡については、その性格や立地等から周縁の「場」として位置づけられている(馬淵 1991)。さらに南九州では、東国御家人の権力における象徴的な施設として位置づけられており、その背景の一つとして交易流通体系の整備が関連するとの見解もある(堂込 1999)。竪穴建物跡のような倉庫などをもつことは社会的ステータスであったとも考えられる。

以上のことから、堀の内側の $D \cdot E - 4 \cdot 5$ 区は有力者の屋形跡が想定され、外側の $B \cdot D - 6 \sim 11$ 区は、工房・倉庫といった役割をもっており、堀を含めて屋形に付属した施設として捉えることができる。

なお、 $C \sim E - 18 \sim 25$ 区の低湿地では、 $14 \sim 16$ 世紀に相当する遺構・遺物構成や地形との関係を踏まえると、屋形の一部ではなく、屋形とは分断された「外の場」であったと考えられる。

(6) 屋地屋形跡との関係

遺跡周辺には、木牟礼城跡や熊野神社、感応寺といった要所が位置しており、遺跡周辺一帯が中世における本地域の中心的役割を果たした要所であったと想定できる(図145)。

『野田町郷土誌』によると、本遺跡は「屋地屋形跡」と 想定されており、島津家発祥の有力地とされる。自然地形 (谷)を利用したと思われる堀が現在も確認でき、調査で検 出された堀跡もこれに重複すると推測される。

『屋地屋形略図』では、龍尾神社、熊野神社、金剛寺跡、西門・東門・屋形跡、木牟礼城跡のほか、それを取り囲むように堀跡が記載され、現在の地図と照らしても半径 1.5km 圏内に収まる範囲内で、位置関係も概ね一致する。本遺跡の調査成果では、初代忠久から五代貞久までに相応する遺構・遺物がみてとれるが、五代以降(14世紀中頃以降)は、徐々に遺物・遺構の減少・衰退する傾向にあったと考えられる。前述したように、一つの画期である 12世紀後半~13世紀前半は、初代忠久の時期と一致する。

留意すべき点として、本遺跡の調査成果で得られた有力者を想定させる遺構・遺物は、島津氏五代の時期と概ね一致するが、島津氏との関係を結びつける積極的な証拠は得られなかった。伝承や現存する堀跡、調査成果はそれを想起させるものだが、島津氏との関連性については、周辺遺跡も踏まえ、文献史学等との総合的な検討が必要である。今後の資料の蓄積や研究を待ちたい。

第5節 遺跡の残存状況等

中郡遺跡群は、層堆積の状況が不安定であり、また、造成や攪乱等が地山であるシラスにまで至っている地点が多く、遺物包含層が残存しない箇所が多い。しかし、今回の調査では、包含層の残存しない地点でも遺構の残存が確認されており、今後も十分に注意する必要がある。

また、本遺跡の堀跡などは、自然地形を利用し造成されている。特に、第145図に示した堀跡の範囲(アミの範囲)は、現在も旧地形・堀跡の痕跡を明確に残している。したがって、取り扱いに十分に注意しなければならない。

〔主要引用文献〕

網田龍生 1997「肥後における古代後半期の墳墓」『先史学・考古学論究』 II ,龍田考 古学会 .

飯村 均1994「中世の『宿』『市』『津』」『中世都市研究』3

大口市教育委員会 1997『新平田遺跡・辻町 B 遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告 曹 (20)

小野正敏 2003 「威信財としての貿易陶磁器と場」 『戦国時代の考古学』, 高志書院.

小野正敏 2006「武家にみる唐物威信財の創出と変容についての素描」『前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義』、国立歴史民俗博物館.

鹿児島県郡山町教育委員会 2003『湯屋原遺跡』郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『外島遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財センター

鈴木康之 2006「滑石製石鍋の流通と消費」『鎌倉時代の考古学』,高志書院.

野田町郷土誌編さん委員会 2003 『野田町郷土誌』、(株) ぎょうせい. 広瀬和雄 1986 「中世への胎動」 『岩波講座日本考古学』 6, 岩波書店

堂込秀人 1999「中世南九州の竪穴建物跡」『南九州城郭研究』 創刊号,南九州城郭談 話会

堂込秀人 2003「竪穴建物跡」『季刊考古学』85, 雄山閣。

馬淵和雄 1991「都市の周縁、または周縁の都市-いわゆる方形竪穴建物址による中世 都市論の試み|『青山考古』9

南九州市教育委員会 2009『馬場田遺跡』南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)



中郡遺跡群遠景(南から)



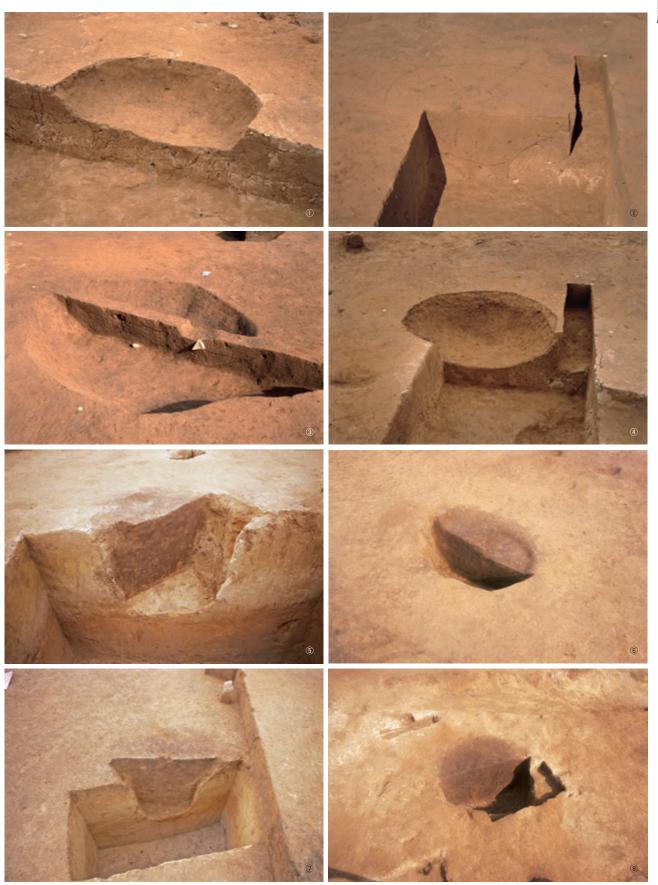
①~⑥土層堆積状況(①:C - 23・24 区,②:B - 27 区,③:C - 23 区,④:E - 19 区,⑤:D - 20 区,⑥:E - 20・21 区)⑦VI層遺物出土状況(C・D - 24 区),⑧礫群



②集石 10 号(右),集石9号(左)検出状況 ⑤集石9号と横転



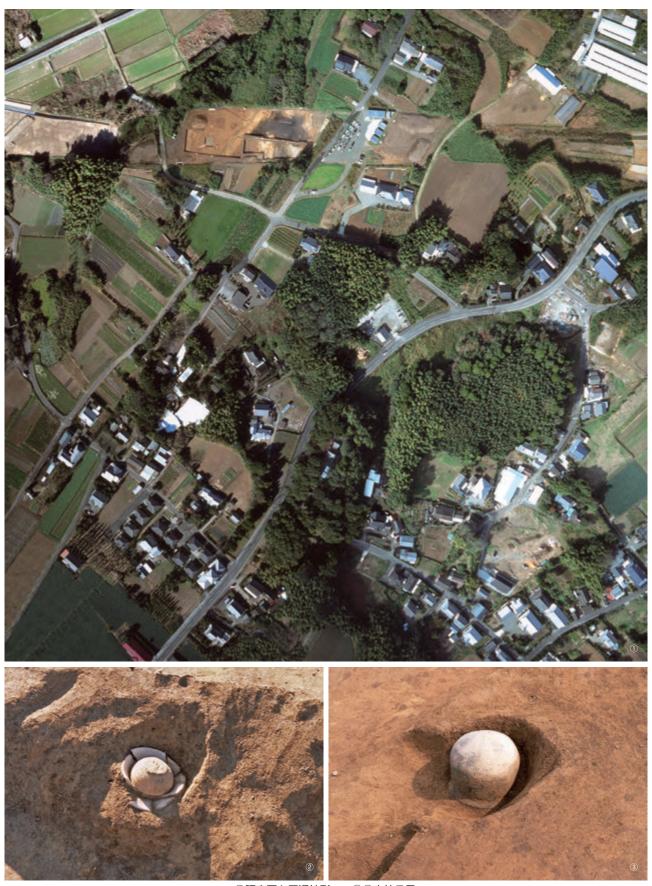
− 198 **−**



①土坑4号 ②土坑6号 ③④土坑5号 ⑤落とし穴状遺構1号 ⑥落とし穴状遺構2号 ⑦落とし穴状遺構3号 ⑧落とし穴状遺構4号



①~⑥横転内礫集中 ⑦谷地形の基盤礫 (B·C-26区) ⑧調査終了 (C·D-23·24区)



①調査区と周辺地形 ②③土坑7号



①~③中世の造成 (D-4·5区) ④掘立柱建物跡 1号 ⑤土坑 10号 ⑥⑦土坑 9号



①土坑 12·13·14号 ②土坑9号(左)·8号(右) ③土坑 15号土師器出土状況 ④調査風景 ⑤C~E-12~16区 近景(東から)



①C~E-12~16区 中世の遺構 ②C·D~15·16区 中世遺構検出状況 ③~⑤竪穴建物跡1号



①~④竪穴建物跡2号 ⑤~⑧竪穴建物跡3号



①~④竪穴建物跡4号 ⑤~⑧竪穴建物跡5号



①~③竪穴状遺構 ④中世の調査状況 ⑤掘立柱建物跡3号 ⑥掘立柱建物跡2号 ⑦土坑17号 ⑧土坑22号



①大型土坑状遺構2号 ②大型土坑状遺構1号 ③大型土坑状遺構3号 ④堀跡1号(底面) ⑤⑥堀跡2号 ⑦溝状遺構1号 ⑧溝状遺構3号



①~③土坑 23 号 ④土坑 26 号 ⑤⑥土坑 24 号 ⑦土坑 27 号 ⑧土坑 27 号 (左), 28 号 (右)



①③満状遺構 13号(左), 7号(右) ②⑥満状遺構 7号(左), 13号(右) ④⑤満状遺構 7号 埋土堆積状況

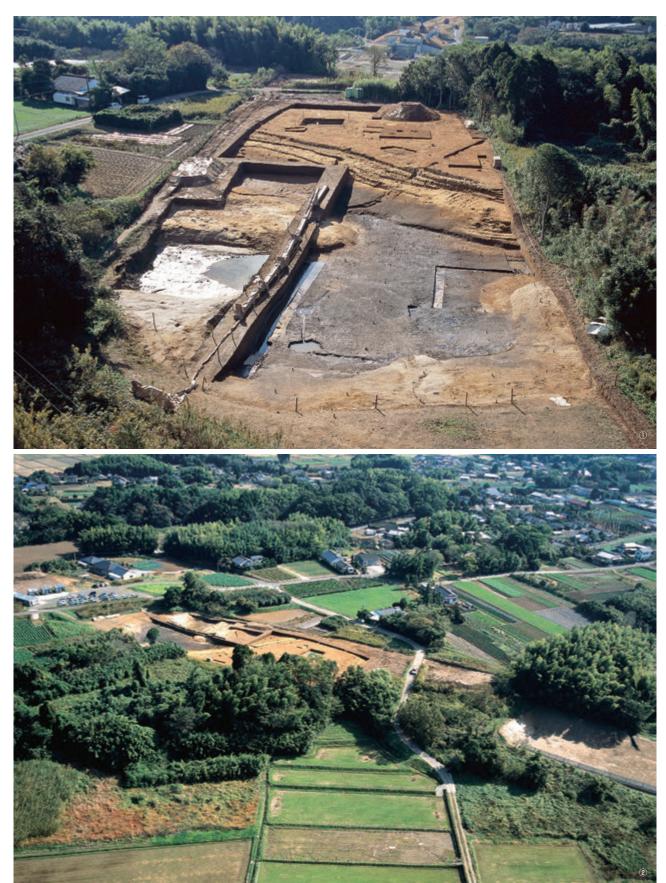


①溝状遺構5号 (手前), 6号 (奥) ④溝状遺構5号 ⑤溝状遺構6号

②溝状遺構6号(手前),8号(奥) ③溝状遺構5号·6号·8号 ⑥溝状遺構8号 ⑦溝状遺構9号(右),11号(中),10号(左)



①~⑤道状遺構 ⑥ C - 22 区谷状地形 ⑦ VII層上面横転の様子 (C - 23 区)



①低湿地 (C~E-19~22区) 近景 (東から) ②調査区近景 (B~E-26·27区付近の谷)



①~⑤低湿地の調査状況





①杭列跡 ②杭列跡(西から) ③~⑤杭出土状況



①土坑状遺構2号 ②土坑状遺構2号(右), 1号(左) ③④自然遺物出土状況 ⑤⑥土坑状遺構6・7号 ⑦竹を用いた遺構 ⑧木製椀出土状況



旧石器・縄文時代の遺物



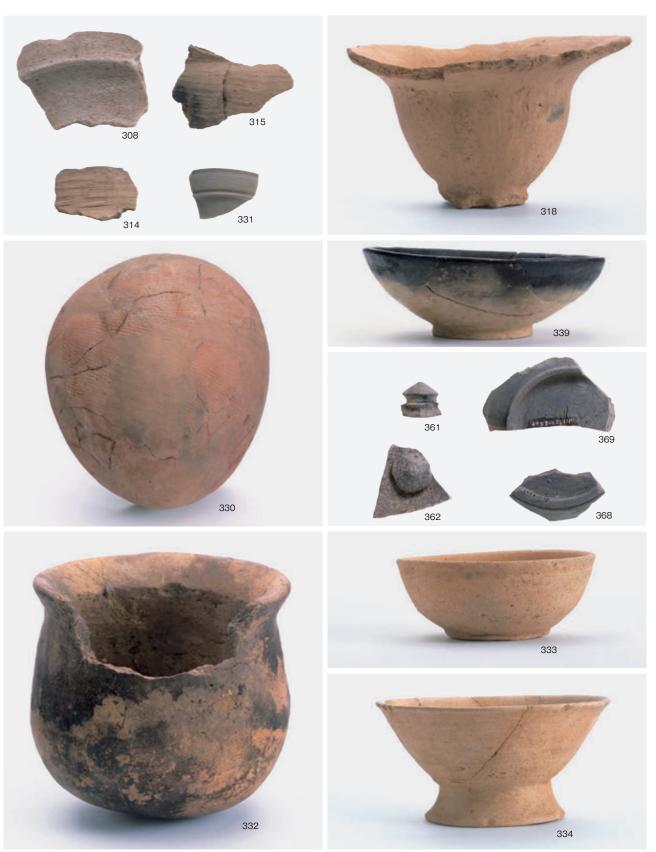
縄文時代の遺物(1)



縄文時代の遺物(2)



縄文時代の遺物(3)



弥生・古墳時代、古代の遺物



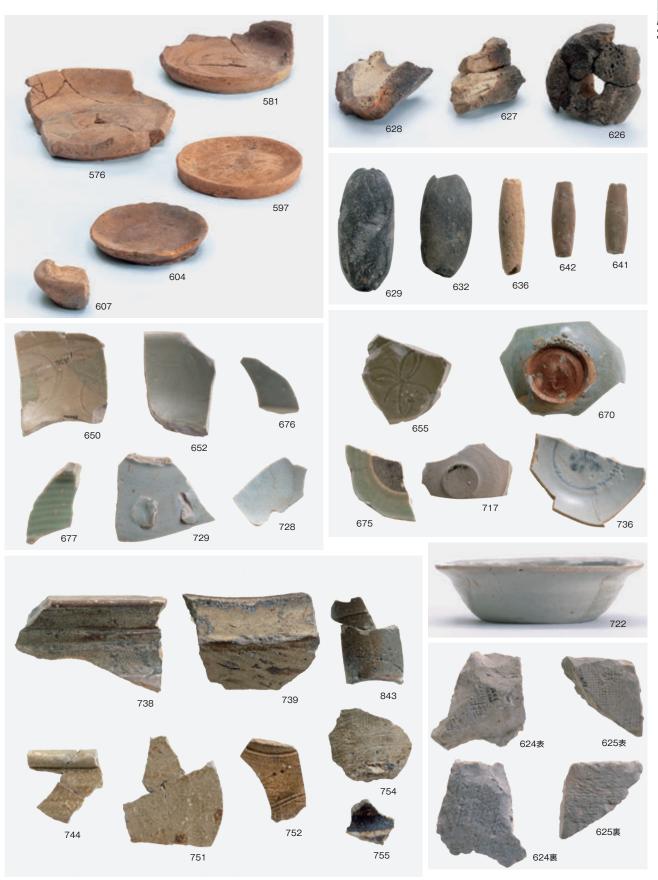
古代・中世の遺物



中世の遺物(1)



中世の遺物(2)



中世の遺物(3)



中世の遺物(4)



中世の遺物(5)



中世・近世の遺物

あとがき

報告書作成の最中の平成25年11月17日, 感応禅寺で三十七世から三十八世和尚への晋山式が行われた。感応禅寺は、栄西禅師創建の我が国最古の禅寺であるとともに、島津初代忠久から五代貞久の御廟所を祀る寺でもある。

祥三和尚の「山門之偈」で始まり,

鎭國山歴 鎭國の山歴 **八百余秋** 八百余秋

元無関鎖 元と関鎖無し

樹下悠悠 樹下悠悠

島津の紋所の法衣を纏い、仏祖の御恩と仏法の流布を誓いする「晋山之偈」の

名郷出水碧天清 名郷出水碧天清 感應禪林響鶴蹄 感応禅林鶴啼き響く 祖塔真前承法徳 祖塔真前法徳をつぎ

乾坤独立一心平 乾坤に独立して一心平かなりは、脳幹を刺激しその凜とした空間は、最古の禅寺に触れ、島津氏発祥の地を彷彿とさせるに充分であった。

発掘調査では、この時期の龍首水注や輸入陶磁器が発見され、堀や溝跡等屋形群を彷彿させる遺構や造成の痕跡も発見されたが、悔しいかな時の流れは建物の基盤を大きく削平し、栄枯衰勢を直視することとなった。

冬の鶴はこの地の優しさを知り、飛来し続けている。この地に、鎌倉武士団が闊歩する姿を描ききれなかったが、機会あるごとに追い続けることとなる。

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (1) 南九州西回り自動車道建設(出水阿久根道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中郡遺跡群

発行年月日 2014年3月

編集・発行 鹿児島県教育委員会

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印 刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久 627-1 TEL 0995-45-4880 FAX 0995-45-6979